

下総町名木大台遺跡

— 主要地方道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書VI —

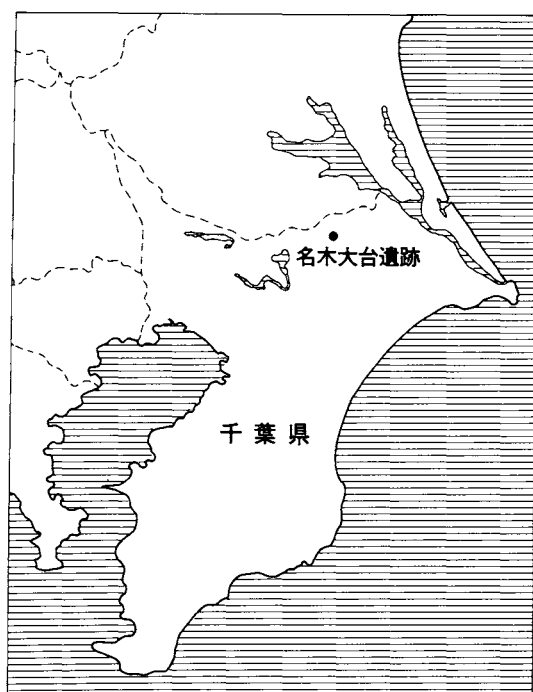
平成10年3月

千葉県土木部

財団法人 千葉県文化財センター

しも ふさ な ぎ おお だい
下 総 町 名 木 大 台 遺 跡

— 主要地方道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書VI —



序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告書第319集として、千葉県土木部の一般県道成田下総線建設事業に伴って実施した香取郡下総町名木大台遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、和鏡や土鈴が出土するなど、この地域の古代の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また生涯学習の資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成 10年 3月 31日

財団法人千葉県文化財センター
理事長 中村好成

凡 例

- 1 本書は、千葉県土木部による主要地方道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県香取郡下総町名木字大台1,045ほかに所在する名木大台遺跡(遺跡コード341-004)である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県土木部の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業は、調査研究部長堀部昭夫(昭和62～平成元)、同西山太郎(平成6～平成8)、班長矢戸三男(昭和62～昭和63)、成田調査事務所長矢戸三男(平成5～平成6)、東部調査事務所長石田廣美(平成7～平成8)の指導のもと、発掘調査は主任調査研究員宮重行、同鳴田浩司、同永沼律朗が、整理作業は副所長宮重行、同雨宮龍太郎が下記の期間に実施した。
発掘調査 昭和62年6月15日～昭和63年11月4日
整理作業 平成6年6月9日～平成8年3月31日
- 5 本書の執筆は、副所長雨宮龍太郎が行った。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、千葉県土木部道路建設課、下総町教育委員会の御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は下記のとおりである。
第1図 国土地理院発行 1/25,000地形図「佐原西部」(N-54-19-9-2)
- 8 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。
- 9 本書で使用した遺構番号の一部は、編集の都合上調査時の番号と異なる。
- 10 挿図に使用したスクリーントーンの利用例は、次のとおりである。



本文目次

| | |
|--------------------|-----|
| 第1章 はじめに | 1 |
| 第1節 調査の経緯と経過 | 1 |
| 第2節 遺跡の位置と環境 | 1 |
| 第3節 調査の概要 | 4 |
| 第2章 竪穴住居跡と出土遺物 | 6 |
| 第1節 SI 1～SI 9 | 6 |
| 第2節 SI 10～SI 24 | 22 |
| 第3節 SI 25～SI 30 | 46 |
| 第4節 SI 31～SI 33 | 56 |
| 第5節 SI 34～SI 37 | 63 |
| 第6節 SI 38～SI 40C | 68 |
| 第7節 SI 41～SI 47 | 77 |
| 第8節 SI 48～SI 51 | 87 |
| 第9節 SI 52～SI 58 | 97 |
| 第10節 SI 59～SI 68 | 107 |
| 第3章 土坑類と出土遺物 | 125 |
| 第4章 道路跡・溝跡・柵跡と出土遺物 | 134 |
| 第1節 遺構 | 134 |
| 第2節 出土遺物 | 139 |
| 第5章 グリッド出土遺物 | 146 |
| 第6章 まとめ | 150 |
| 第1節 土器の編年 | 150 |
| 第2節 集落の変遷と生活の変化 | 155 |
| 報告書抄録 | 巻末 |

挿図目次

| | | | | | |
|------|------------------|----|------|------------------------|----|
| 第1図 | 名木大台遺跡周辺の遺跡分布図 | 2 | 第35図 | SI 17遺構実測図 | 37 |
| 第2図 | 名木大台遺跡遺構配置図 | 5 | 第36図 | SI 17出土遺物実測図 | 37 |
| 第3図 | 竪穴住居跡配置図 | 7 | 第37図 | SI 18・SI 19遺構実測図 | 38 |
| 第4図 | SI 1遺構実測図 | 8 | 第38図 | SI 18・SI 19出土遺物実測図 | 38 |
| 第5図 | SI 1出土遺物実測図(1) | 9 | 第39図 | SI 20遺構実測図 | 39 |
| 第6図 | SI 1出土遺物実測図(2) | 10 | 第40図 | SI 21遺構・出土遺物実測図 | 41 |
| 第7図 | SI 2・SI 6遺構実測図 | 11 | 第41図 | SI 22A・SI 22B遺構実測図 | 42 |
| 第8図 | SI 2・SI 6出土遺物実測図 | 11 | 第42図 | SI 22A・SI 22B出土遺物実測図 | 43 |
| 第9図 | SI 3遺構実測図 | 13 | 第43図 | SI 23遺構実測図 | 44 |
| 第10図 | SI 3出土遺物実測図 | 14 | 第44図 | SI 23出土遺物実測図 | 44 |
| 第11図 | SI 4・SI 5遺構実測図 | 15 | 第45図 | SI 24遺構実測図 | 45 |
| 第12図 | SI 4出土遺物実測図 | 15 | 第46図 | SI 24出土遺物実測図 | 45 |
| 第13図 | SI 7遺構実測図 | 13 | 第47図 | 新旧関係と柱穴の帰属(2) | 47 |
| 第14図 | SI 7出土遺物実測図 | 17 | 第48図 | SI 25遺構実測図 | 48 |
| 第15図 | SI 8遺構実測図 | 19 | 第49図 | SI 25出土遺物実測図 | 48 |
| 第16図 | SI 8出土遺物実測図(1) | 20 | 第50図 | SI 26遺構実測図 | 50 |
| 第17図 | SI 8出土遺物実測図(2) | 21 | 第51図 | SI 26出土遺物実測図 | 50 |
| 第18図 | SI 9遺構実測図 | 21 | 第52図 | SI 27遺構実測図 | 51 |
| 第19図 | SI 9出土遺物実測図 | 21 | 第53図 | SI 27出土遺物実測図 | 52 |
| 第20図 | 新旧関係と柱穴の帰属(1) | 23 | 第54図 | SI 28・SI 29・SI 30遺構実測図 | 54 |
| 第21図 | SI 10遺構実測図 | 24 | 第55図 | SI 28出土遺物実測図(1) | 54 |
| 第22図 | SI 10出土遺物実測図 | 25 | 第56図 | SI 28出土遺物実測図(2) | 55 |
| 第23図 | SI 11遺構実測図 | 27 | 第57図 | SI 29出土遺物実測図 | 55 |
| 第24図 | SI 11出土遺物実測図 | 27 | 第58図 | 新旧関係と柱穴の帰属(3) | 57 |
| 第25図 | SI 12遺構実測図 | 29 | 第59図 | SI 31遺構実測図 | 59 |
| 第26図 | SI 12出土遺物実測図 | 30 | 第60図 | SI 31出土遺物実測図 | 59 |
| 第27図 | SI 13遺構実測図 | 31 | 第61図 | SI 32遺構実測図 | 60 |
| 第28図 | SI 13出土遺物実測図 | 31 | 第62図 | SI 32出土遺物実測図 | 61 |
| 第29図 | SI 14遺構実測図 | 32 | 第63図 | SI 33遺構実測図 | 62 |
| 第30図 | SI 14出土遺物実測図 | 33 | 第64図 | SI 33出土遺物実測図 | 63 |
| 第31図 | SI 15出土遺物実測図 | 34 | 第65図 | 新旧関係と柱穴の帰属(4) | 64 |
| 第32図 | SI 15出土遺物実測図 | 34 | 第66図 | SI 34・SI 35出土遺物実測図 | 65 |
| 第33図 | SI 16遺構実測図 | 36 | 第67図 | SI 34・SI 35出土遺物実測図 | 65 |
| 第34図 | SI 16出土遺物実測図 | 36 | 第68図 | SI 36遺構実測図 | 66 |

| | | | | | |
|-------|--------------------|-----|-------|------------------|-----|
| 第69図 | SI 36出土遺物実測図 | 66 | 第106図 | SI 54・SI 55遺構実測図 | 101 |
| 第70図 | SI 37遺構実測図 | 67 | 第107図 | SI 54出土遺物実測図 | 101 |
| 第71図 | SI 37出土遺物実測図 | 67 | 第108図 | SI 55出土遺物実測図 | 102 |
| 第72図 | 新旧関係と柱穴の帰属（5） | 69 | 第109図 | SI 56遺構実測図 | 103 |
| 第73図 | SI 38遺構実測図 | 70 | 第110図 | SI 56出土遺物実測図 | 110 |
| 第74図 | SI 38出土遺物実測図 | 71 | 第111図 | SI 57遺構・出土遺物実測図 | 105 |
| 第75図 | SI 39遺構実測図 | 73 | 第112図 | SI 58遺構実測図 | 106 |
| 第76図 | SI 39出土遺物実測図 | 76 | 第113図 | SI 58出土遺物実測図 | 106 |
| 第77図 | SI 40A遺構実測図 | 74 | 第114図 | SI 59遺構実測図 | 108 |
| 第78図 | SI 40A出土遺物実測図 | 74 | 第115図 | SI 59出土遺物実測図（1） | 109 |
| 第79図 | SI 40B遺構実測図 | 75 | 第116図 | SI 59出土遺物実測図（2） | 109 |
| 第80図 | SI 40C出土遺物実測図 | 76 | 第117図 | 新旧関係と柱穴の帰属（9） | 110 |
| 第81図 | SI 40C出土遺物実測図 | 76 | 第118図 | SI 60遺構実測図 | 112 |
| 第82図 | 新旧関係と柱穴の帰属（6） | 78 | 第119図 | SI 60出土遺物実測図 | 113 |
| 第83図 | SI 41遺構実測図 | 80 | 第120図 | SI 61遺構実測図 | 114 |
| 第84図 | SI 41出土遺物実測図 | 80 | 第121図 | SI 61出土遺物実測図 | 114 |
| 第85図 | SI 42遺構実測図 | 81 | 第122図 | SI 62遺構実測図 | 116 |
| 第86図 | SI 42出土遺物実測図 | 82 | 第123図 | SI 62出土遺物実測図 | 123 |
| 第87図 | SI 43遺構実測図 | 83 | 第124図 | SI 63遺構実測図 | 118 |
| 第88図 | SI 44遺構実測図 | 84 | 第125図 | SI 63出土遺物実測図（1） | 119 |
| 第89図 | SI 44出土遺物実測図 | 84 | 第126図 | SI 63出土遺物実測図（2） | 120 |
| 第90図 | SI 45・SI 46遺構実測図 | 85 | 第127図 | SI 64遺構実測図 | 120 |
| 第91図 | SI 45・SI 46出土遺物実測図 | 85 | 第128図 | SI 64出土遺物実測図 | 120 |
| 第92図 | SI 47遺構・出土遺物実測図 | 86 | 第129図 | SI 65遺構・出土遺物実測図 | 121 |
| 第93図 | 新旧関係と柱穴の帰属（7） | 88 | 第130図 | SI 66遺構・出土遺物実測図 | 122 |
| 第94図 | SI 48遺構実測図 | 89 | 第131図 | SI 67遺構実測図 | 123 |
| 第95図 | SI 48出土遺物実測図（1） | 89 | 第132図 | SI 67出土遺物実測図 | 123 |
| 第96図 | SI 48出土遺物実測図（2） | 90 | 第133図 | SI 68遺構実測図 | 124 |
| 第97図 | SI 49遺構実測図 | 91 | 第134図 | 土坑類配置図 | 126 |
| 第98図 | SI 49出土遺物実測図（1） | 92 | 第135図 | SK 1遺構実測図 | 127 |
| 第99図 | SI 49出土遺物実測図（2） | 93 | 第136図 | SK 4遺構・出土遺物実測図 | 128 |
| 第100図 | SI 50・SI 51遺構実測図 | 95 | 第137図 | SK 7遺構・出土遺物実測図 | 128 |
| 第101図 | SI 50・SI 51出土遺物実測図 | 96 | 第138図 | SK 9遺構・出土遺物実測図 | 129 |
| 第102図 | 新旧関係と柱穴の帰属（8） | 98 | 第139図 | SK 10遺構・出土遺物実測図 | 129 |
| 第103図 | SI 52遺構実測図 | 99 | 第140図 | SK 11遺構・出土遺物実測図 | 130 |
| 第104図 | SI 53遺構実測図 | 100 | 第141図 | SK 12遺構実測図 | 131 |
| 第105図 | SI 53出土遺物実測図 | 100 | 第142図 | SK 15遺構・出土遺物実測図 | 132 |

| | | | |
|-------|-------------------------|-------|-----------------------|
| 第143図 | SK 16遺構・出土遺物実測図……………132 | 第150図 | 道路跡・溝跡・柵跡遺物実測図(2) 143 |
| 第144図 | SK 17遺構・出土遺物実測図……………133 | 第151図 | 道路跡・溝跡・柵跡遺物実測図(3) 144 |
| 第145図 | SK 19遺構実測図……………134 | 第152図 | 道路跡・溝跡・柵跡遺物実測図(4) 145 |
| 第146図 | 道路跡・溝跡・柵跡配置図……………135 | 第153図 | グリッド出土遺物実測図(1) ……147 |
| 第147図 | 道路跡・溝跡・柵跡断面図(1) ……136 | 第154図 | グリッド出土遺物実測図(2) ……148 |
| 第148図 | 道路跡・溝跡・柵跡断面図(2) ……137 | 第155図 | 主要器種編年図……………152 |
| 第149図 | 道路跡・溝跡・柵跡遺物実測図(1) 142 | 第156図 | 竪穴住居跡群の変遷……………157 |

表 目 次

| | | | |
|-----|--------------------|-----|----------------------|
| 第1表 | 竪穴住居跡重複関係一覧表 ……151 | 第3表 | 土器以外の竪穴住居跡出土遺物 ……156 |
| 第2表 | 竪穴住居跡の帰属時期 ……156 | | |

図 版 目 次

| | | | |
|------|--|------|-----------------|
| 図版1 | 遺跡遠景、確認調査グリッド | 図版18 | SI 7～SI 9出土土器 |
| 図版2 | 北西部遺構群、南部遺構群 | 図版19 | SI 9～SI 13出土土器 |
| 図版3 | SI 1・SI 2、SI 3、SI 4・SI 5 | 図版20 | SI 13～SI 15出土土器 |
| 図版4 | SI 9、SI 10・SI 22A、SI 22A出土遺物 | 図版21 | SI 16～SI 24出土土器 |
| 図版5 | SI 15、SI 16、SI 17 | 図版22 | SI 24～SI 27出土土器 |
| 図版6 | SI 18、SI 19、SI 24 | 図版23 | SI 28～SI 32出土土器 |
| 図版7 | SI 24出土遺物、SI 27、SI 27出土遺物(1) | 図版24 | SI 33～SI 40出土土器 |
| 図版8 | SI 27出土遺物(2)、SI 31、SI 31～SI 34 | 図版25 | SI 40～SI 48出土土器 |
| 図版9 | SI 36、SI 38、SI 38～SI 40C | 図版26 | SI 48～SI 50出土土器 |
| 図版10 | SI 41、SI 42～SI 44、SI 42出土遺物 | 図版27 | SI 50～SI 59出土土器 |
| 図版11 | SI 45・SI 46、SI 47、SI 48～SI 51 | 図版28 | SI 59出土土器 |
| 図版12 | SI 55出土遺物、SI 56出土遺物、SI 53～SI 58 | 図版29 | SI 59～SI 63出土土器 |
| 図版13 | SI 59、SI 59出土遺物、SI 62 | 図版30 | SI 63～SK 11出土土器 |
| 図版14 | SI 63、SI 63出土遺物、SI 64 | 図版31 | 旧石器・石鏃、縄文石器 |
| 図版15 | SI 65、SD 1・SD 2・SD 5・SD 8、SD 23 | 図版32 | 縄文土器、転用砥具 |
| 図版16 | SK 9出土遺物、SK 10出土遺物、SK 11出土遺物、SK 15出土遺物、SK 16出土遺物、SK 21出土遺物 | 図版33 | 土製勾玉・石製品 |
| 図版17 | SI 1～SI 7出土土器 | 図版34 | 土玉 |
| | | 図版35 | 鉄製品 |
| | | 図版36 | SD 5—10・SK 10—1 |

第1章 はじめに

第1節 調査の経緯と経過

千葉県土木部は、主要地方道成田下総線建設事業の実施に当たり、千葉県教育委員会に対して、計画路線内に所在する埋蔵文化財の有無について照会を行った。現地踏査の結果、名木大台遺跡を初めとして、数多くの遺跡の所在が確認された。このため県教育委員会文化課は、県土木部道路建設課と埋蔵文化財の取り扱いについて協議し、記録保存の措置を講ずることとなり、財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施することとなった。

名木大台遺跡の調査は、昭和62年度は、6月15日から6月19日まで上層確認調査を実施し、昭和63年度は、6月1日から11月4日まで上層本調査を実施した。また期間中、10月14日から10月31日まで下層確認調査を実施した。

第2節 遺跡の位置と環境（第1図）

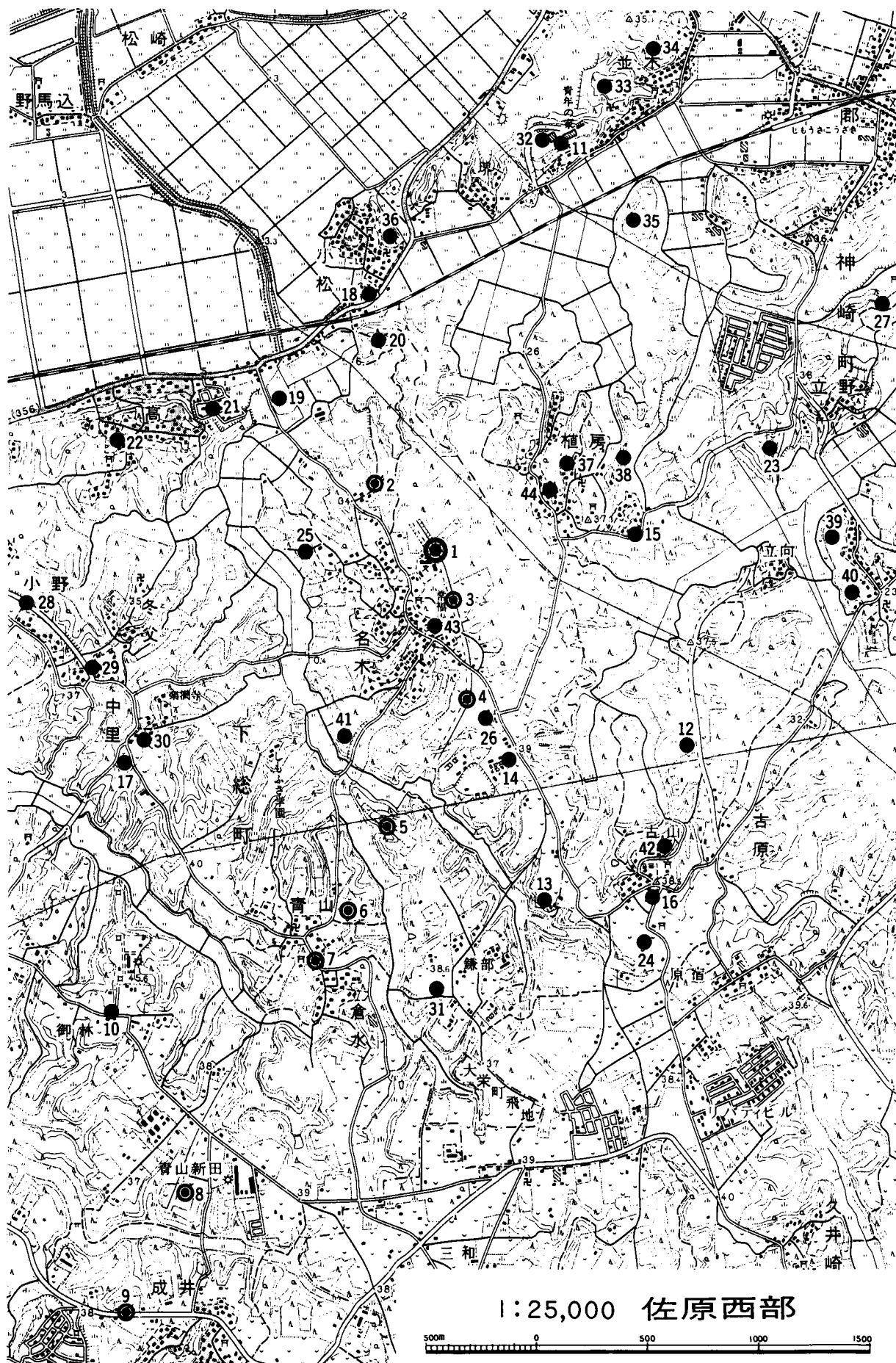
名木大台遺跡は香取郡下総町名木字大台1,045ほかに所在する。下総町は香取郡の西辺に属し、北に利根川を望み、東は印旛郡と境を接している。遺跡は、神崎の台地が利根川に向かって角状に突出する付け根に当たり、利根川から3kmの地点で、海拔39mの洪積台地上に位置する。台地の地形は、各所に入り組んだ小谷に開析されて、舌状を呈している。

本事業関連の下総町内分の遺跡調査は、平成5年度をもってすべて終了している。

名木大台遺跡¹⁾は、本調査以前にも別地点が下総町教育委員会及び香取郡市文化財センターによって発掘調査が実施され、いずれも今回同様に古墳時代後期から奈良時代に至る集落跡が主体的に検出されている。本事業関連遺跡中最北端の長稲葉遺跡²⁾は、古墳時代後期の集落跡を中心に、縄文時代早期沈線文土器包含層や当地では僅少な弥生時代後期竪穴住居跡が2軒出土した。名木大台遺跡の200m南方の名木不光寺遺跡³⁾では、香取郡市文化財センター調査分と合わせて、古墳時代後期から平安時代にわたる集落跡の存在が明らかになった。その南方の天神台遺跡⁴⁾からは、掘立柱建物跡を含む古墳時代後期から平安時代の集落跡のほか、旧石器時代石器ブロックが発見された。以上の諸遺跡は、現在の名木集落を中心に、同一支台上にある遺跡群として一括することができる。

鎌部集落ののる支台の最北端に位置する鎌部長峯遺跡⁵⁾では、香取郡市文化財センター調査分と合わせて、縄文時代早期撚糸文・沈線文土器の包含層やピット群が検出されている。隣接する青山・倉水集落ののる支台上の青山富ノ木遺跡⁶⁾は、香取郡市文化財センター調査分と合わせて、掘立柱建物跡を含む奈良平安時代の集落跡である。同じく青山宮脇遺跡⁷⁾からは、旧石器時代石器ブロックが報告された。さらに内陸の青山中峰遺跡⁸⁾では、平安時代集落跡が調査された。また成井地区の新シ山・柳和田台遺跡⁹⁾は、掘立柱建物跡を主体とする平安時代集落跡だが、ここからは貴重な弥生時代中期の土器棺墓が発見された。

以上の調査成果によって、当地域における考古学的諸事実を解明することを通して、小支台ごとの歴史的な特徴も明らかになってきた。すなわち、名木支台では古墳時代後期から奈良時代にかけての集落跡が卓越し、鎌部支台では1地点のみではあるが縄文時代遺跡が存在し、青山支台以南の内陸部に入ると、旧石器時代遺跡及び奈良平安時代集落跡が増加するという基本的傾向が一連の調査成果から読みとれるので



第1図 名木大台遺跡周辺の遺跡分布図

ある。この傾向が、周辺諸遺跡といかなる関係にあるのか、次に周辺諸遺跡の概況を紹介する。

旧石器時代の調査例はまだ少ないが、青山集落の西方、青新岩作台遺跡¹⁰⁾は立川ロームVII・VIII層の石器包含層である。

縄文時代を主体とする遺跡は、現在までのところ神崎町寄りに目立っている。神崎町並木の西ノ城貝塚¹¹⁾は、早期撚糸文期の貝塚で、同期の竪穴住居跡が発見されたことで知られている。神崎町古原甲の台阿らく¹²⁾遺跡では、早期沈線文・条痕文系土器が出土している。名木の前原遺跡¹³⁾は早期包蔵地である。同じく臼作山散布地¹⁴⁾では、早・前・後期の土器片が確認されている。神崎町植房の植房貝塚¹⁵⁾は、前期の標式遺跡として有名である。神崎町古原の古原遺跡¹⁶⁾には中・後期の古原貝塚が存在する。以上、縄文時代遺跡は図示範囲の限り、早期を中心として神崎町古原の古原支台・名木支台の南部・鎌部支台の小範囲に比較的集中する傾向が認められよう。

当該地域の弥生時代は遺跡が乏しい。僅かに中里の中里原の台遺跡¹⁷⁾から奈良平安時代集落跡とともに、弥生時代後期集落跡の一部が検出され、神崎町大貫の仲台遺跡²⁷⁾から1軒の後期住居跡が発見されているだけである。

遺跡の僅少性は古墳時代前半まで継続され、集落が台地上に展開されるのは古墳時代後期からである。前掲仲台遺跡及び小野の小野女台遺跡²⁸⁾はいずれも50軒を上回る規模で、古墳時代後期を主体にして平安時代にまで至る。中里の中里西口遺跡²⁹⁾では、古墳時代後期から奈良時代にかけての集落跡の一部が検出された。同じく中里原遺跡³⁰⁾からは、奈良時代を主体とする25軒の住居跡が発見されている。これらの遺跡は、仲台遺跡を除きいずれも小野・中里支台上にあり、尾根続きで青山富ノ木遺跡に達している。なお、奈良時代には鎌部支台に名木廃寺³¹⁾が建立されている。

古墳時代には古墳の造営も活発に行われた。神崎町小松の小松古墳¹⁸⁾からは6個の石枕が出土したと伝えられている。また、高の大日山古墳¹⁹⁾は、木炭槨を伴う全長54mの前方後円墳で、この2古墳が比較的古色を示している。神崎町小松の向田古墳群²⁰⁾は前方後円墳を含む4基から構成される。高の高台古墳群²¹⁾も前方後円墳を含む7基の古墳群である。同じく宮作古墳群²²⁾中には前方後円墳と前方後方墳が含まれている。このほか前方後円墳は神崎町立野の堀込1号墳²³⁾や同古山甲の浅間古墳²⁴⁾等が知られており、名木不光寺遺跡内には1基の未調査墳が存在する。名木支台上にはほかに、媛宮古墳群²⁵⁾や前原古墳群²⁶⁾等の円墳群が確認されている。上記古墳の分布状況からは、北方の広大な氾濫原に面する台地や自然堤防上に、主要古墳が集中する傾向が明瞭に看取できる。また、同じく古墳時代後期集落をのせる名木支台と小野・中里支台とを比較すると、古墳分布は前者が密で、後者が粗であることも判然と認められる。

平安時代後期以降になると、洪積台地上からは考古学的対象となる集落跡は再び消失し、集落立地の大きな変化を暗示する。このことと、現在も台地上に占拠する名木・小野・中里・青山等諸集落の成立といかなる関係にあるかは、今後に残された課題となる。

中世の周辺遺跡は、比較的多数の城郭に代表される。神崎町の神崎城^{32~35)}は、並木地区の台地上を中心に築営された城郭群の総称である。西の城³²⁾は土塁が残存し、中の城³³⁾、東の城³⁴⁾は、単郭構造であることが判明しているが、田向城³⁵⁾については不明である。この西方の小松砦跡³⁶⁾は、複郭で腰曲輪を備えている。植房には植房館跡³⁷⁾と植房砦跡³⁸⁾が併存するが、詳細は不明である。武田の武田砦跡³⁹⁾は、香取郡市文化財センターによって調査され、複郭式で腰曲輪が巡り、4棟の掘立柱建物跡が検出された。この南方には千葉氏館跡⁴⁰⁾とされる遺構がある。名木大台遺跡の最寄りの遺構としては、単郭式で二段曲輪を備えた名木砦

跡⁴¹⁾が知られている。また、古山には古原砦跡⁴²⁾が存在する。これら城郭の多くは戦国時代に築造されたものと考えられる。その立地は、神崎本宿の後背台地に集中する感があり、神崎津へ出る路と香取神宮へ至る路との分岐点に相当する当地域の重要性がうかがえる。

このほかの中世遺構として、現存寺院も無視できない。名木の常福寺(真言宗)⁴³⁾は、江戸時代に再興された寺だが、延応元年(1239)に僧湛導が開基したと伝えられる。また、植房の世尊寺には⁴⁴⁾応安4年(1371)銘の板碑が現存する。

以上、周辺遺跡の分布概況から、次の3点を指摘しておく。

1. 対象とした地域では、顕著な弥生時代集落は存在せず、本格的な農耕文化が定着・発展するのは古墳時代後期以降である。
2. 古墳時代後期から平安時代(おそらく中葉)までは、集落は内陸に向かって進出していくが、それらはすべて鎌倉時代を迎えるまでに廃絶している。このことから平安時代後期に集落立地の変換期を想定することができる。
3. 中世のある時期、名木砦、常福寺、そしておそらく現在の名木集落は並立していて、眼下に展開する谷津田とともに、まとまりある歴史的景観を現出していたと考えられる。

第3節 調査の概要

名木大台遺跡の発掘調査対象面積は1,800㎡である。調査対象区には、公共座標に基づいて20mピッチで基準杭を打ち込み、グリッドを設定した。

上層確認調査は昭和62年6月15日から同年6月19日まで実施した。試掘グリッドは2m×4mの規模で、総面積の10%分を調査対象区全域に均等に配置した。調査の結果、対象面積の全域が本調査範囲に指定された。

上層本調査は昭和63年6月1日から同年11月4日まで実施した。本調査では、竪穴住居跡68軒、土坑(塙)11基、道路跡・溝跡・柵跡19条が検出された(第2図)。

下層確認調査は、上層本調査中の昭和63年10月14日から同年10月31日まで実施した。試掘グリッドは2m×2mの規模で、総面積の4%分を調査対象区全域に均等に配置した。調査の結果、遺物は全く検出されず、本調査の必要性は認められなかった。



第2図 名木大台遺跡遺構配置図

第2章 竪穴住居跡と出土遺物

検出された竪穴住居跡は68軒で、発掘調査区の南北軸に沿って密集している(第3図)。台地の傾斜面にかかる調査区の北西辺と南東辺では、分布が粗になっている。また、調査区中央部から西部にかけても、竪穴住居跡が存在していないが、この部分は後世の道路や溝の造成による攪乱が最も著しく、壊滅したために検出できなかった住居跡もかつて存在していたかも知れない。道路跡・溝跡・柵跡との重複関係は、すべての場合、竪穴住居跡が攪乱されていた。

なお、名木大台遺跡では遺構間の重複関係が著しいので、まとまりのある住居跡群ごとに取り上げて、構成住居跡の新旧関係や柱穴の帰属を明示した上で、個々の遺構について記述していく。

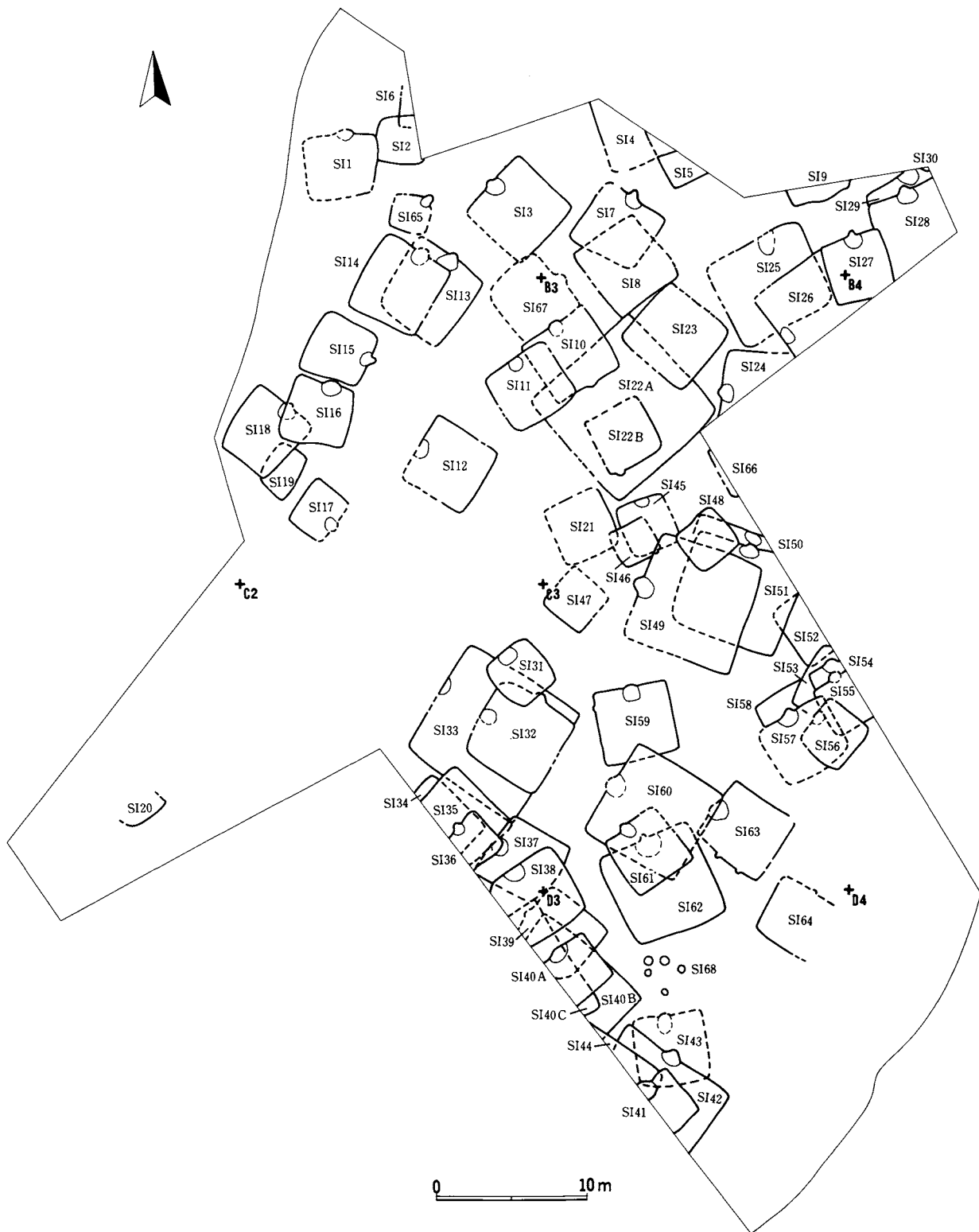
第1節 SI1～SI9

SI1 (第4図、第5図、第6図、図版3、図版17、図版33)

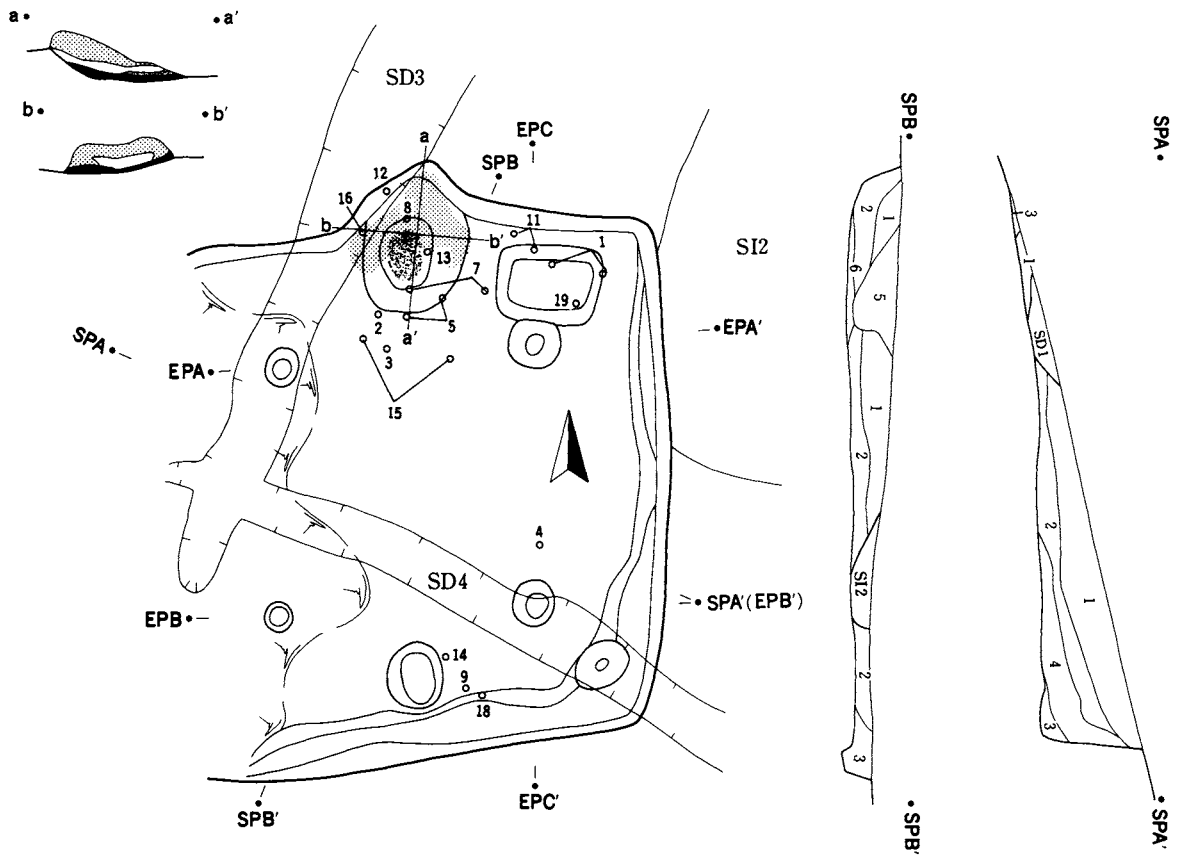
遺構 調査区域北端に位置する住居跡である。遺構の西壁は台地傾斜面にかかり、検出できなかった。北西部でSI2を切っている。一辺約4mの方形プランで、北壁中央に竈を設け、四本柱の浅い柱穴は完存する。周溝は南東側のみ認められた。このほかに、北東隅に貯蔵穴が、南壁中央に接近して梯子穴が設置されている。また、南東隅にはピットが存在する。床面は通常のロームよりもやや粘質で、西側3分の1程が遺存状態が悪い。覆土は人為的埋土で、上層にロームブロック包含層が堆積していた。竈の遺存状態は良好である。

遺物 遺物は主として、竈周辺及び梯子穴周辺から出土した。土師器、支脚、切子玉等がある。

1～5は甕上半部である。1は北東隅及び貯蔵穴中から出土した。口径24.2cm、現高20.4cmを測る。色調は灰褐色を呈し、胴部はヘラミガキされる。胎土には石英、長石が含まれる。2は竈前面覆土中から出土した。口径22.5cm、現高17.5cmを測る。土器の特徴は1とほぼ等しい。3は竈前面覆土中から出土した。口径26.4cm、現高15.1cmを測る。1、2に似るが、口縁は立ち上がり、胴部のヘラミガキは見られない。4は南東寄りの覆土中から出土した。口径17.5cm、現高10.5cmを測る。胴部は肩が張らず、ヘラナデされる。赤褐色を呈し、胎土には細砂粒が含まれる。5は竈前面から出土した。口径12.4cm、現高5.5cmを測る。胴部はヘラナデされ、赤褐色を呈する。6は甕の頸部で、東壁中央付近の覆土中から出土した。ヘラナデが施され、赤褐色を呈する。7、8は甕下半部である。7は竈内及び竈東脇より出土した。縦のヘラケズリを主とし、刃物の研ぎ跡がある。明褐色を呈する。8は竈上から出土した。斜めのヘラミガキを主とし、灰褐色を呈する。9、10は甕である。9は梯子穴付近の覆土から出土した。口径27.2cm、器高26.0cmを測る。胴部は縦のヘラナデを用い、底部周辺は横のヘラケズリで調整している。赤褐色を呈し、黒斑が見られる。10は覆土中から出土した。現高18.3cm、暗褐色を呈し、主に縦のヘラケズリで調整している。11は短頸壺で、竈東脇の覆土から出土した。口径10.2cm、器高15.8cmで、暗褐色を呈する。胴部は横のヘラケズリを多用し、底部外面には木葉圧痕が見られる。12は鉢で、竈上面から出土した。口径11.6cm、器高10.0cmを測る。ヘラナデを多用し、外面赤褐色、内面暗褐色を呈する。13～16は杯である。13～15は器形・技法がよく似ている。13は竈内から出土した。口径14.5cm、器高4.3cmで、暗褐色を呈する。太く短い口縁は横ナデされ、体部は外縁円周に沿ってヘラケズリされる。14は梯子穴脇の覆土中から出土した。口径14.2

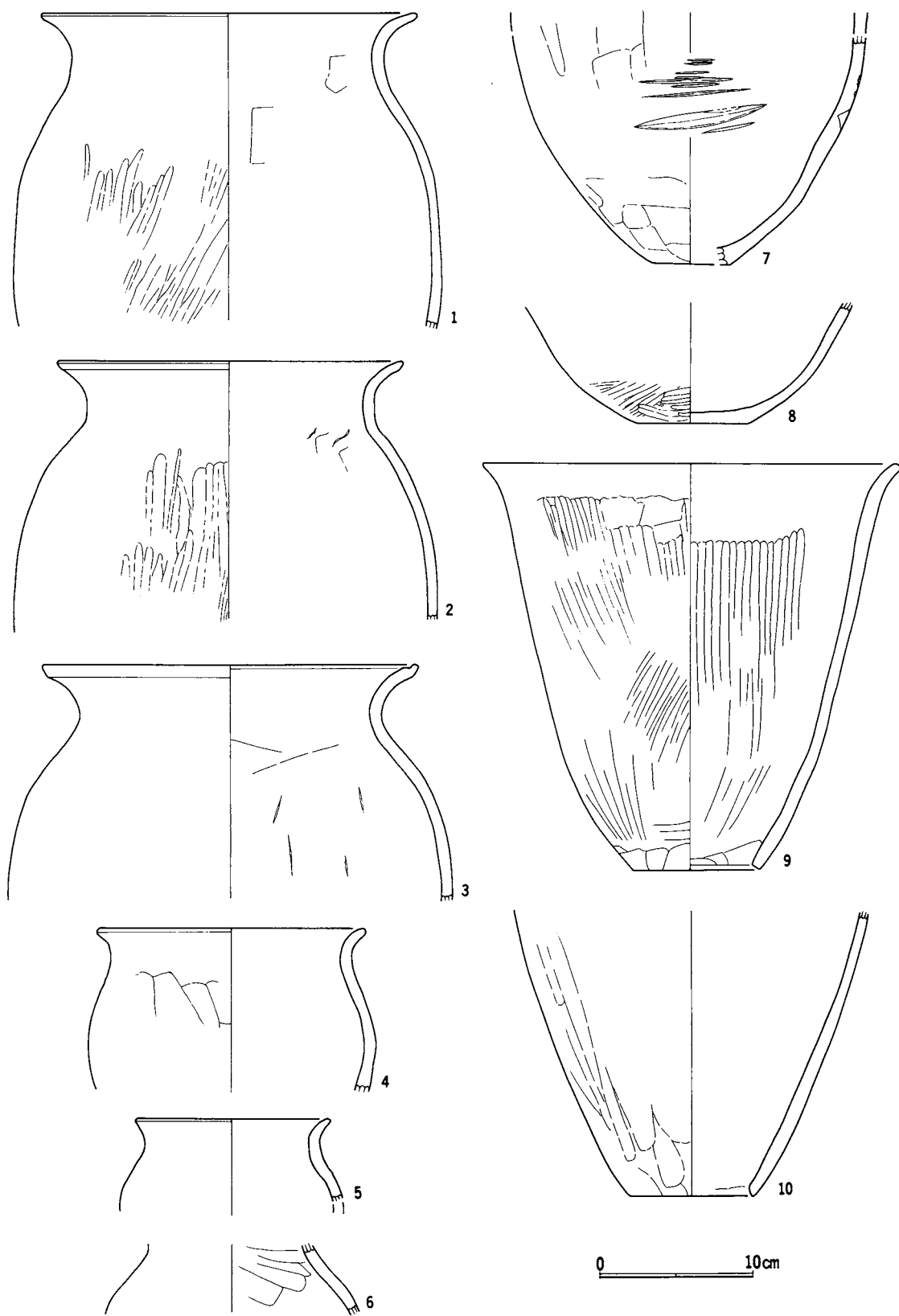


第3図 竪穴住居跡配置図

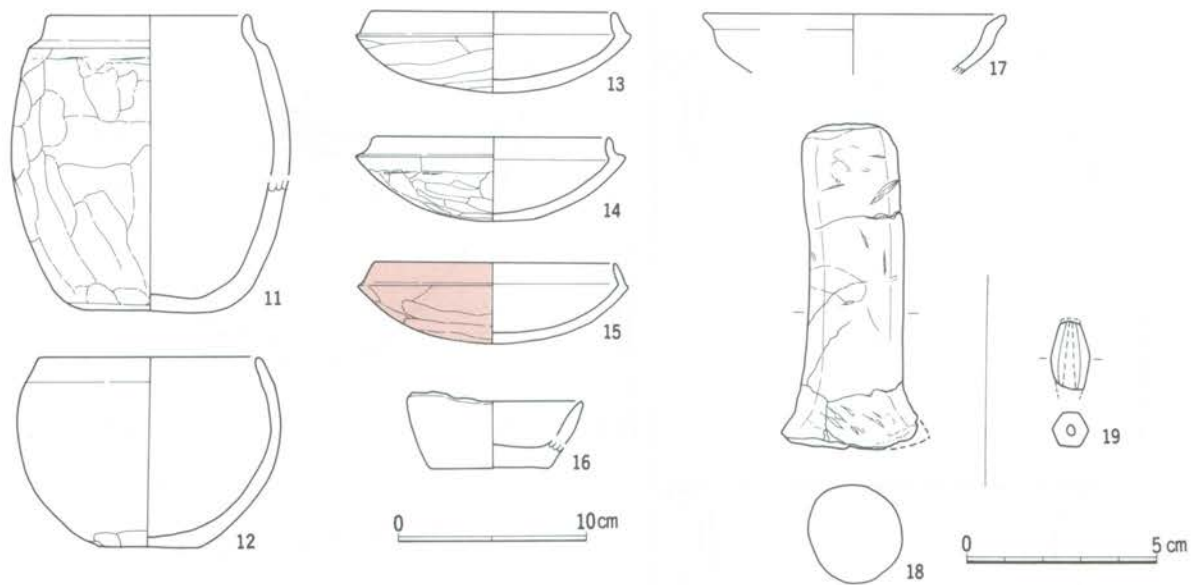


0 1m

第4図 SI1遺構実測図



第5図 SI1出土遺物実測図(1)



第6図 SI 1 出土遺物実測図 (2)

cm、器高4.4cmで、暗褐色を呈する。口縁は13よりも直立する。15は竈前面から出土した。口径14.2cm、器高4.4cmで、外面は赤彩される。16は竈上面から出土した。口径7.4cm、器高4.0cmだが、口縁の凹凸が目立つ。暗褐色を呈し、ヘラナデされている。底部外面には木葉圧痕が見られる。17は高杯で、覆土中から発見された。茶褐色を呈し、口縁直下の器肉が肥大している。体部はヘラケズリされている。

18は土製支脚で、梯子穴脇の覆土中から出土した。器高17.0cmで、褐色を呈し、ヘラによる面取りを行い、円筒形に調整している。火を受けた形跡があり、処々に刃物の研ぎ跡が見られる。

19は水晶製切子玉で、貯蔵穴の覆土中から出土した。両端を欠損しており、現長1.8cm、重量2.0gを測る。中心を穿孔し、断面は六角形で、中央部は厚みを増すが稜は形成しない。

SI 2・SI 6 (第7図、第8図、図版3、図版17)

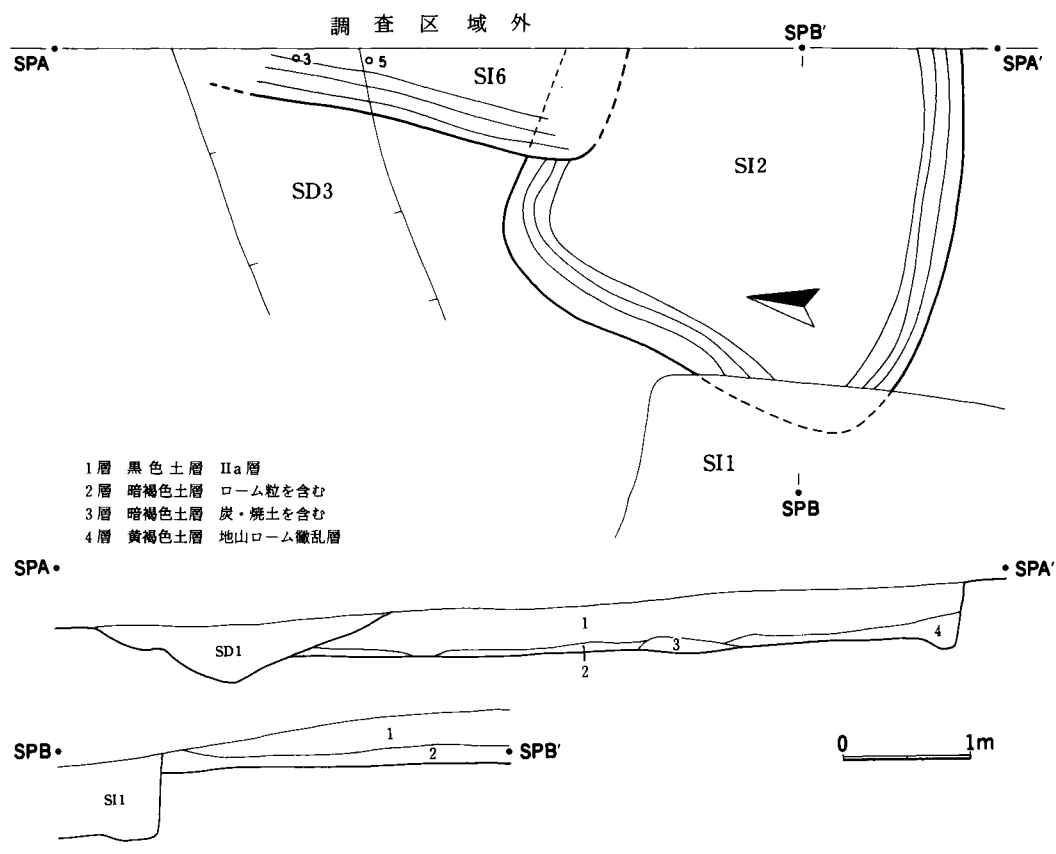
遺構 SI 2はSI 1によって西隅を、SI 6によって北壁を切られている。またSI 2、SI 6はその一部が調査区域外にかかり、完掘できなかった。

SI 2は一辺推定3m程の不整形な住居跡である。竈はSI 6に攪乱されたためか、調査区域外に存在するために検出できなかった。柱穴その他のピット類は、全く見られない。床面はあまり硬化していない。周溝は完周するものと思われる。覆土は上層にII a層が堆積する自然埋土である。SI 6の攪乱部に残存する炭・焼土(3層)は、本住居跡の竈に伴うものであろう。

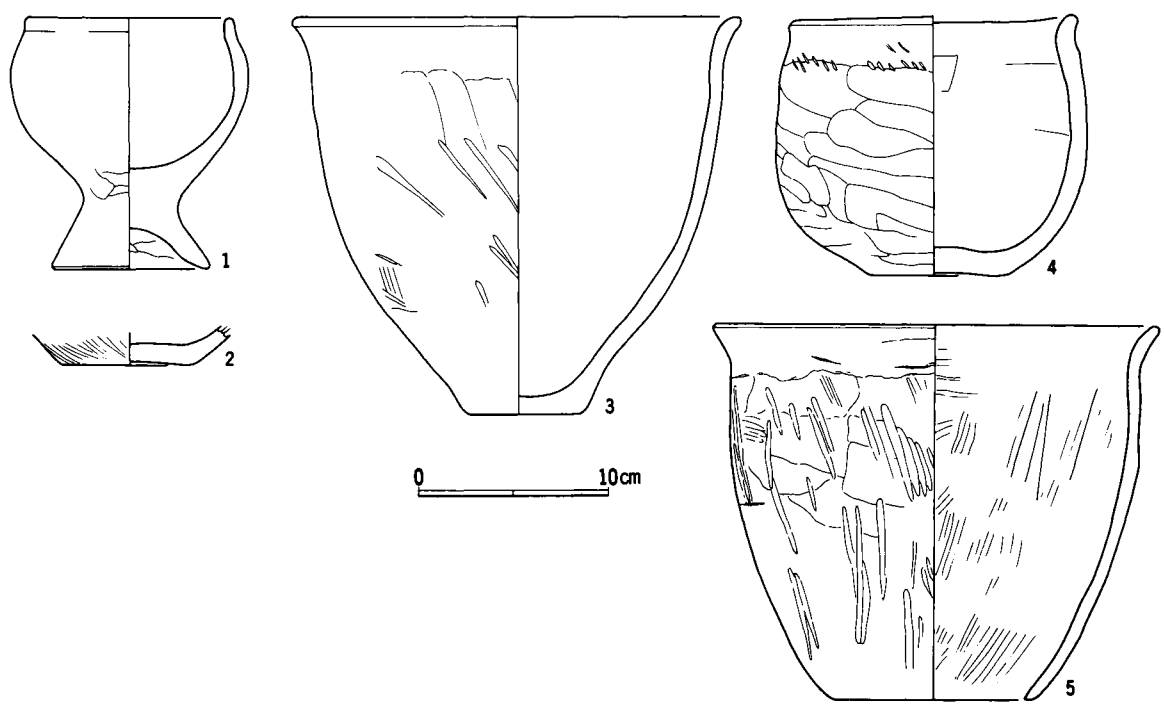
SI 6は大部分が調査区域外にあり、なおかつ北部をSD 1が攪乱しているために不明点が多い。周溝を伴う西壁付近を確認し得たにすぎない。

遺物 両住居跡合わせて、土師器が出土している。SI 2からは1・2が、SI 6からは3・4・5が出土した。

1は南寄りの覆土中から発見された小型台付甕である。口径11.0cm、器高13.1cmを測る。赤褐色で、胎土の砂粒は少ない。胴部から台部にかけてヘラナデ調整される。2は覆土中から発見された甕底部である。外面には斜めのヘラケズリが残る。3は大きく開いた口縁と小さな底部を持つ大鉢である。SD 1の攪乱を免れて、周溝際から出土した。口径23.6cm、器高20.8cmで、縦のヘラナデが器面を周回する。赤褐色を呈



第7図 SI2・SI6遺構実測図



第8図 SI2・SI6出土遺物実測図

し、底部には木葉圧痕がある。4の甕は覆土から発見された。赤褐色で、口径14.7cm、器高13.7cmを測る。胴部は横のヘラケズリを多用し、底部には木葉圧痕が残る。5は3の60cm南側で出土した甕である。口径29.0cm、器高24.2cmで、赤褐色を呈する。胴部は横のヘラケズリの後に、疎らなヘラミガキが入る。

SI 3 (第9図、第10図、図版3、図版17、図版33)

遺構 ほかの竪穴住居跡との重複関係はない。一辺5mの均整な方形プランで、北西壁中央に竈を備える。周溝は全周し、四本柱穴は完備している。床面は、四本柱穴の内側が硬化している。このほかに北隅に貯蔵穴、竈に対面して梯子穴が付属する。柱穴エレベーションの観察から、北側の2本の柱穴は浅く、南側の2本は深いので、この住居の上屋構造は、南から北に傾く片流れ式であると想定される。火災を受けて、床面には広範に炭や焼土が散乱している。覆土上層には、人為的埋没を示すロームブロック包含層が厚く堆積している。竈の遺存状況が悪いのも、埋土圧によって破壊されたためであろう。

遺物 土師器、支脚、白玉等が出土した。

1～3は杯である。1は西隅近くの覆土から出土した。黒色処理され、口径13.8cm、器高5.2cmを測る。体部は周縁に沿ってヘラケズリされ、内面は浅いヘラミガキが施される。2は南西部の覆土中から発見された。口径12.6cm、器高4.1cmを測る。体部は周縁に沿ってヘラケズリされ、内面は放射状にヘラミガキされる。3は北隅から出土した。口径14.4cm、器高4.2cmを測る。体部はヘラケズリの後粗いヘラミガキが入り、内面はヘラミガキされる。4は高杯の杯部で、竈前面から出土した。口径10.4cmを計り、内外面とも赤彩される。稜線以上は横ナデ、以下はヘラナデ、内面は放射状にヘラミガキされる。

5は土製支脚で、中央東寄りから出土した。頂部は若干破損しており、現高19.3cmを測る。円筒形を呈し、所々に指圧痕が残る。

6～9は滑石製白玉で、中央西寄りの小範囲からまとまって出土した。直径14mm前後、厚さ4～6mmである。7は一部破損している。重量1.2～1.6gを量る。

SI 4・SI 5 (第11図、第12図、図版3、図版34)

遺構 SI 4がSI 5・SK 1を攪乱し、両住居跡の半ば以上が調査区域の外に広がっている。

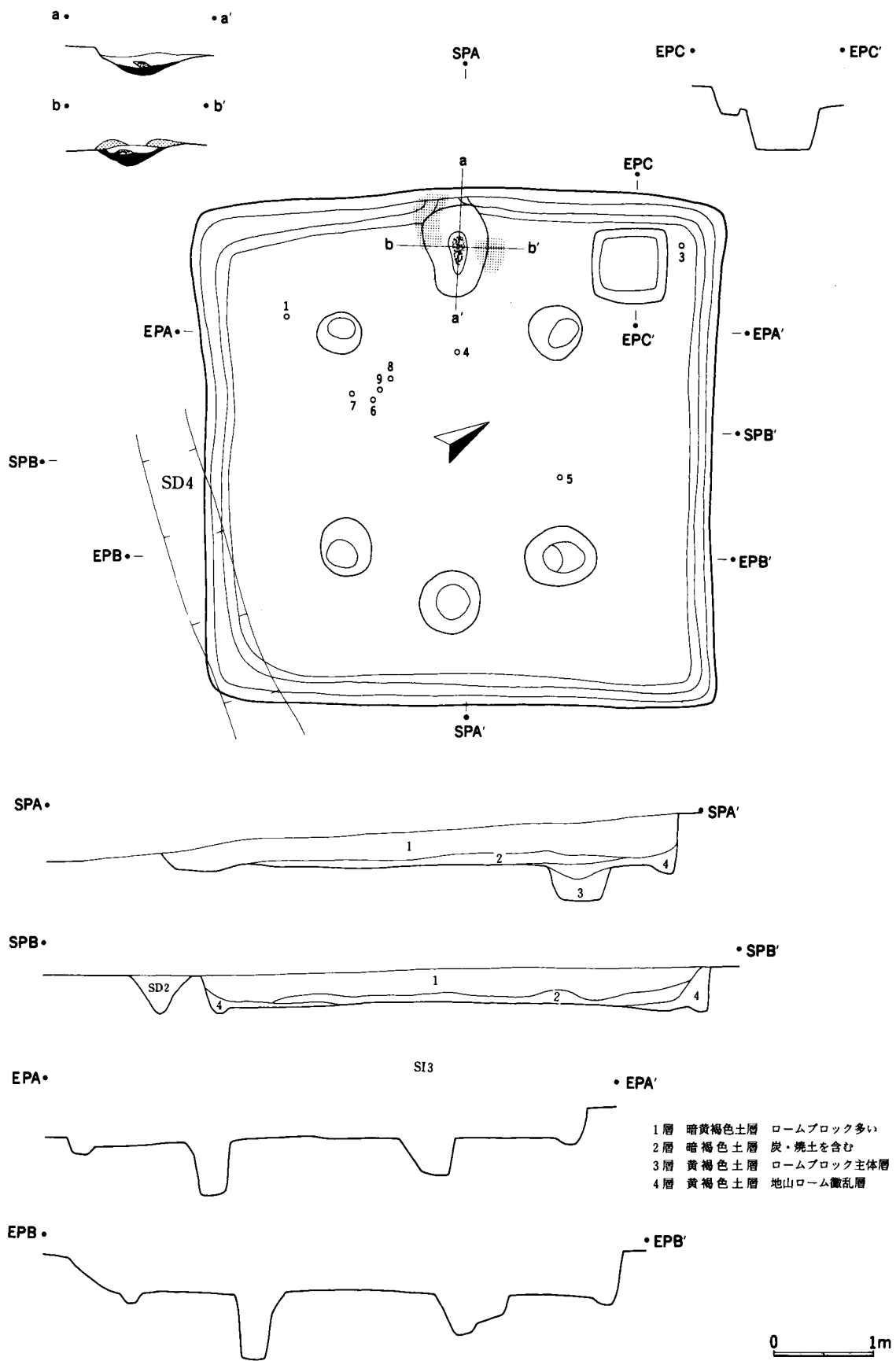
SI 4は一辺5m以上の方形プランで、周溝と四本柱穴の1基が確認された。床面は広範囲に硬化している。覆土の堆積状況は、人為的に浅く埋められた後に自然埋没したことを示している。

SI 5は南隅付近のみ調査できた。周溝と四本柱穴の1基(一部)が検出された。

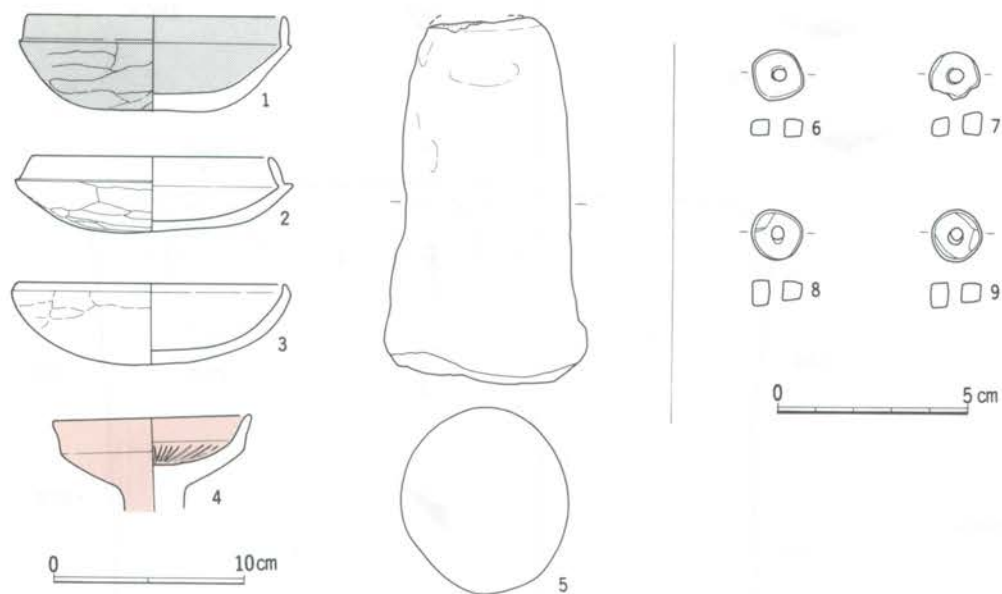
遺物 遺物が出土したのはSI 4で、SI 5は無遺物であった。SI 4からは土師器、土玉が出土した。

1～4は甕底部である。1は覆土中から発見された。赤褐色を呈し、胴部には横のヘラケズリが見られる。2は南壁際の覆土中から出土した。赤褐色を呈し、横ヘラケズリを多用する。3は西壁付近の覆土中から出土した。茶褐色を呈し、胴部は縦ヘラケズリで調整される。4は覆土中から発見された。赤褐色で、底部周囲は横ヘラケズリされる。

5は土玉で、住居跡中央寄りの覆土中から出土した。茶褐色を呈し、最大径2.4cm、重量11.5gを量る。上下両端は面取りされ、ナデ仕上げである。



第9図 SI3遺構実測図



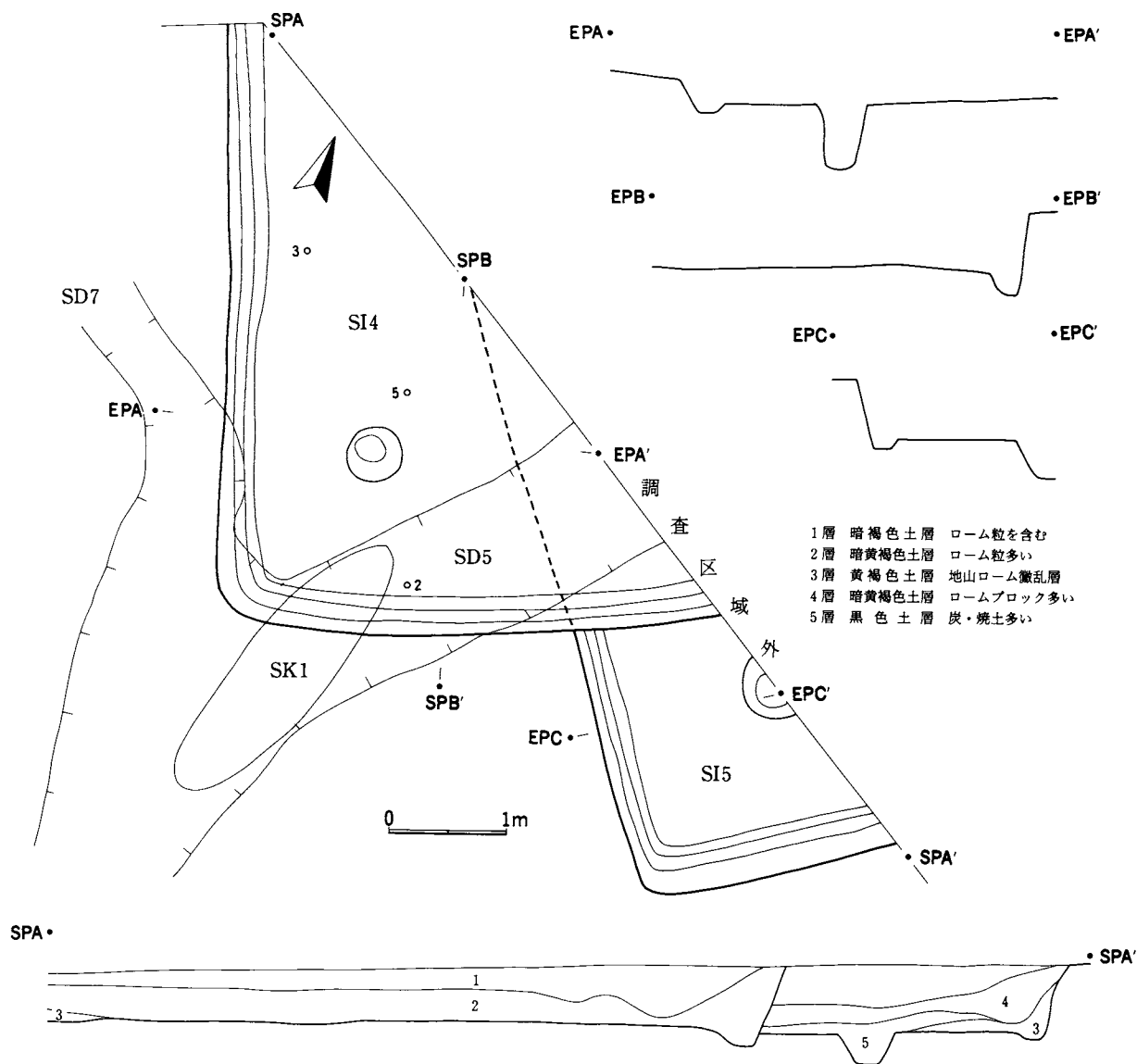
第10図 SI 3 出土遺物実測図

SI 7 (第13図、第14図、図版17、図版18)

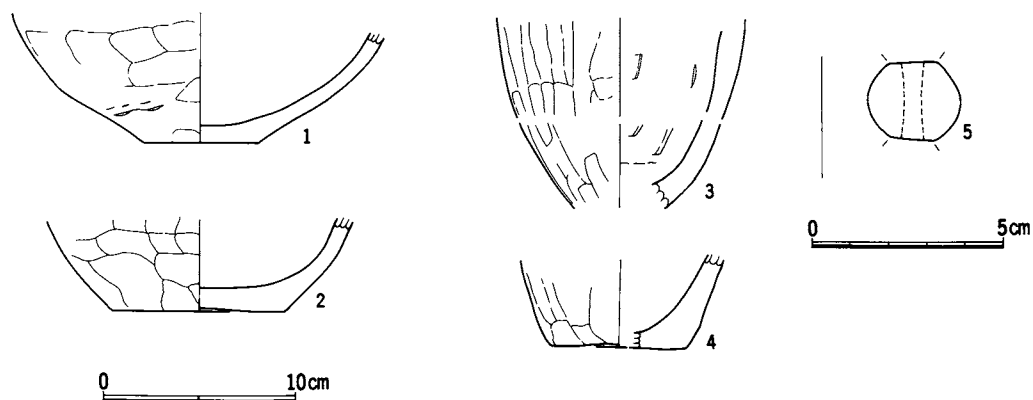
遺構 南半分をSI 8 に攪乱されている。4.5m×4.7mの方形プランである。北西壁中央に竈が作られ、周溝は存在しない。四本柱穴は完備し、そのほか北東隅には貯蔵穴を備えている。竈の遺存状況は良好である。

遺物 遺物は竈周辺と西側小範囲に集中している。すべて土師器である。

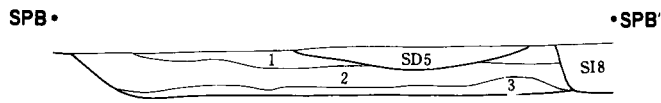
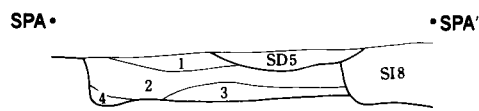
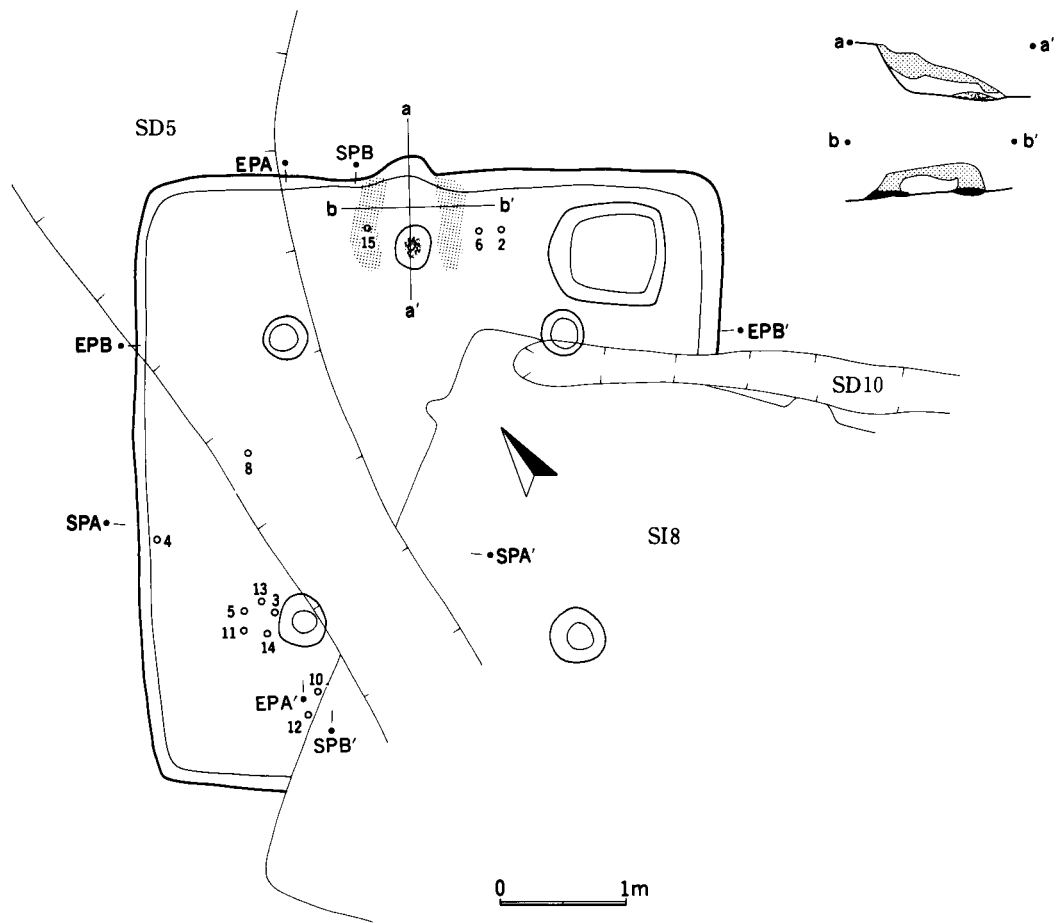
1～5は甕である。1は北西部覆土中から発見された。口径25.8cmを測り、灰褐色で、胎土には石英・長石を多く含む。2は竈東脇から出土した。暗灰褐色で、現高23.8cm、胎土には石英・長石を含む。胴部は縦方向のミガキに近い、細いヘラナデが施され、底部には木葉圧痕が見られる。3は西側柱穴脇から出土した。2とよく似た土器で、明灰褐色を呈する。4は西壁際の覆土中から発見された。明褐色を呈し、縦ヘラケズリが多用される。5は西側柱穴脇の覆土中から出土した。明褐色で、縦ヘラケズリ調整である。6・7は甕である。6は竈東脇から出土した。口径22.0cm、現高11.7cmで、暗褐色を呈する。胴部には幅広い縦ヘラケズリが施される。7は覆土中から発見された。赤褐色で、斜めヘラミガキされる。8～11は小型甕である。8は中央西寄りから出土した。赤褐色で、口径9.2cm、器高9.9cmを測る。胴部調整は上半部がナデ、下半部が横ヘラケズリである。底部には木葉圧痕が見られる。9は本住居跡検出作業中に、西壁沿いの遺構外から発見された。口径11.3cm、器高9.9cmで、暗褐色である。胴部はナデ調整が多用される。10は西側柱穴の南側から出土した。暗褐色で、口径8.9cm、現高9.8cmを測る。胴部には粗雑なヘラケズリが施される。11は西側柱穴脇の覆土中から出土した。胴部は横ヘラナデが多用される。12～14は杯である。12は10の西側覆土中から出土した。口径12.9cm、器高4.3cmで、茶褐色を呈し、内面は黒色処理されている。体部調整は周縁に沿ったヘラケズリ、内面は底部が放射状、体部が横方向の緻密なヘラミガキである。13は西側柱穴脇の覆土中から出土した。暗褐色を呈し、体部は周縁に沿ってヘラケズリされる。14も同じく、西側柱穴脇の覆土中から出土した。ヘラケズリ調整である。15・16は高杯である。15は竈西袖上から出土した。赤褐色を呈し、体部外面はヘラナデ、内面は疎らなヘラミガキが施される。16は西寄り覆土中から



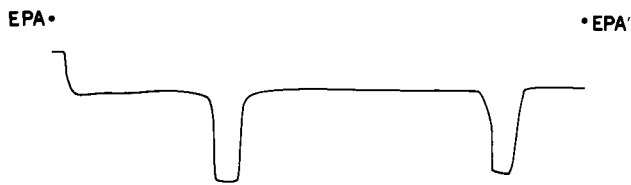
第11図 SI4・SI5遺構実測図



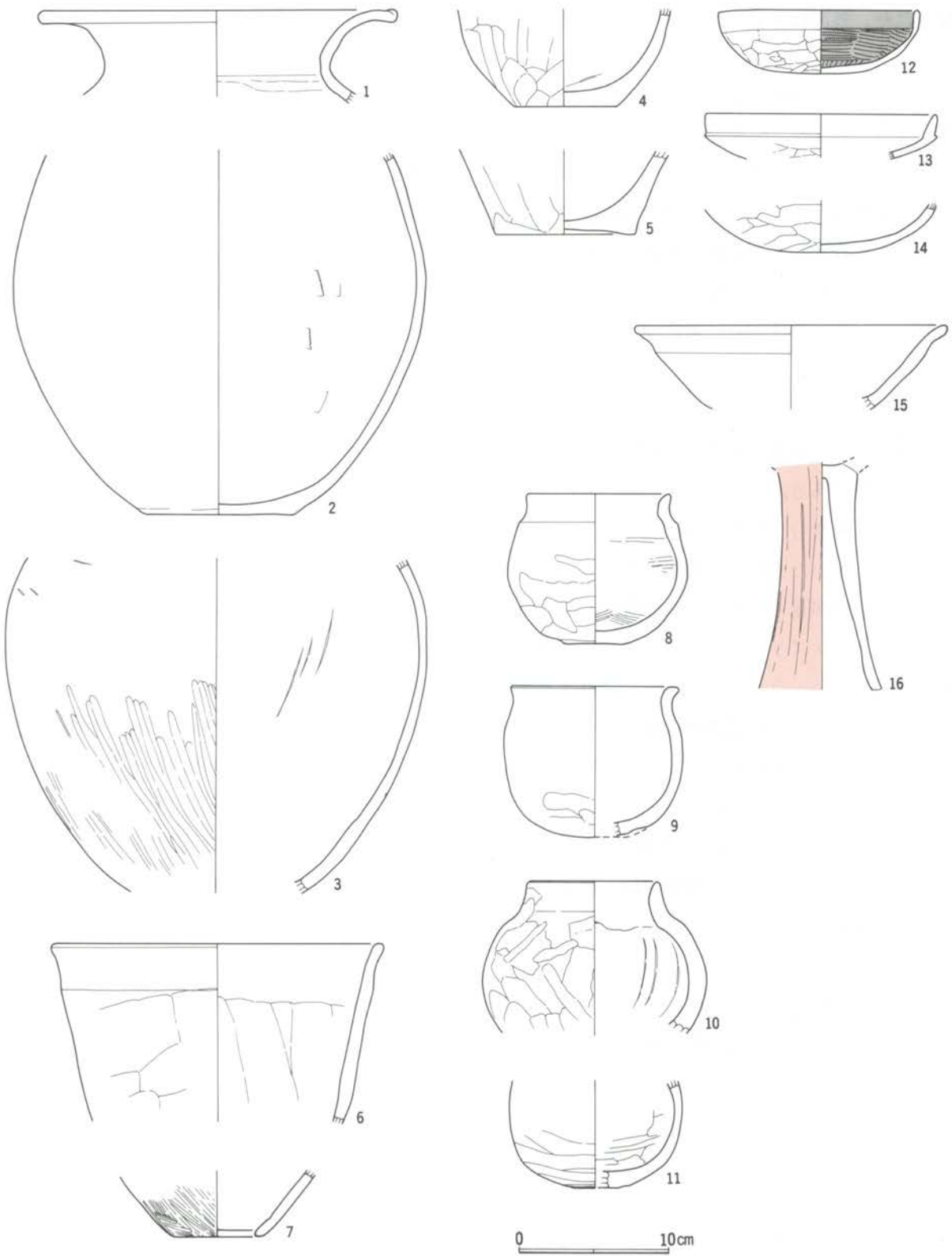
第12図 SI4出土遺物実測図



- 1層 暗褐色土層 ローム粒を含む
- 2層 暗褐色土層 炭・焼土を含む
- 3層 暗黄褐色土層 ローム粒多い
- 4層 黄褐色土層 地山ローム微乱層



第13図 SI 7 遺構実測図



第14图 SI7 出土遺物実測図

発見された。外面は赤彩され、縦ヘラケズリされる。

SI 8 (第15図、第16図、第17図、図版18、図版31)

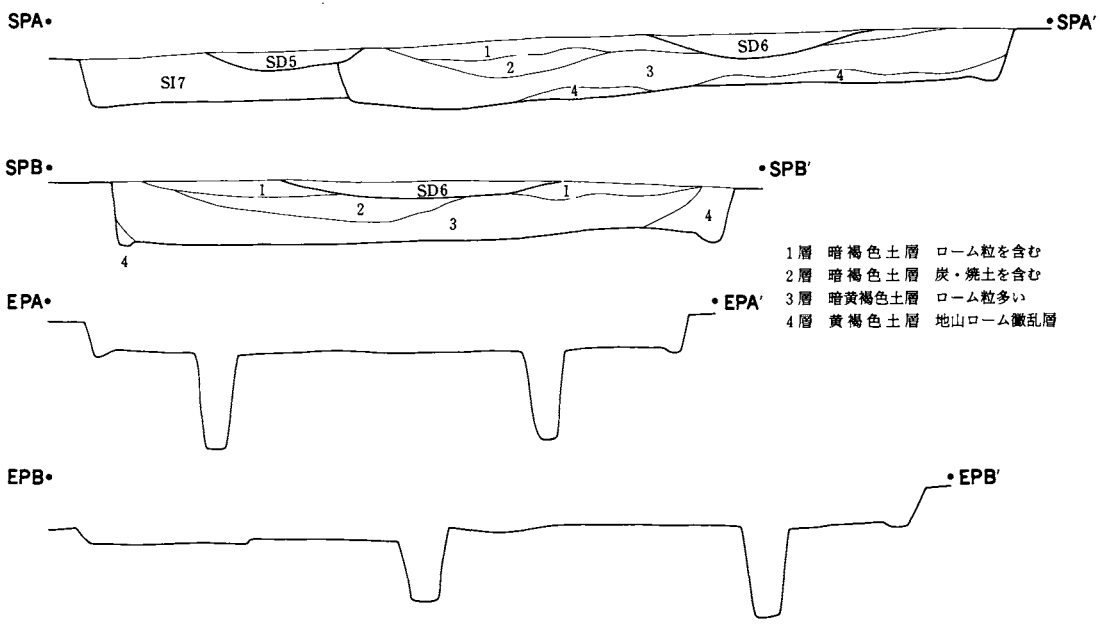
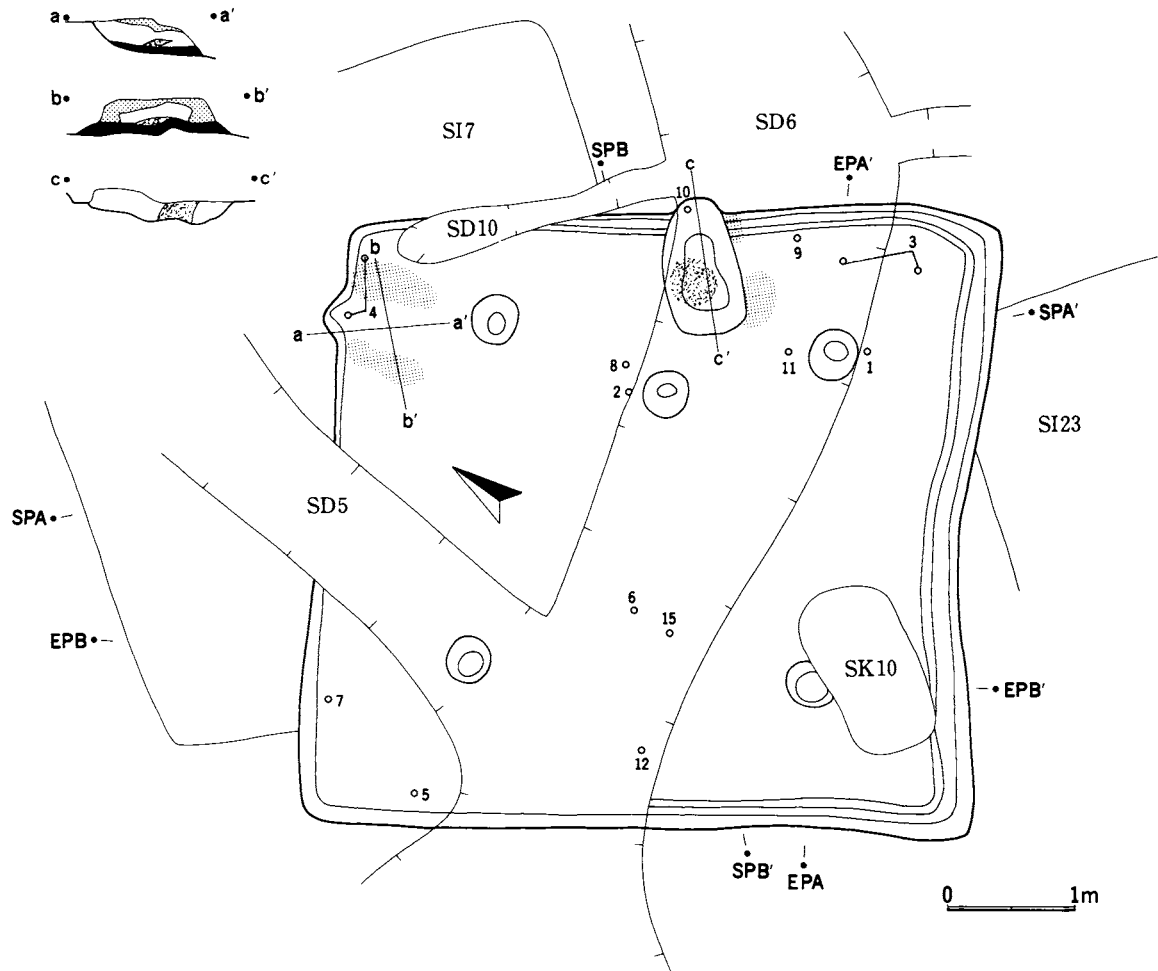
遺構 北側でSI 7を、南側でSI 23を攪乱し、南隅付近でSK 10の攪乱を受ける。5.0m×5.3mのやや歪んだ方形プランを示す。竈は北東壁南寄り(第1竈)と、北隅付近(第2竈)の2か所に設けられている。周溝は南東側は存在するが、北側では確認できなかった。四本柱穴は完備している。このほかに第1竈前面にピットが存在する。床面は北部の重複部分が補填され、広範な硬化面が確認された。第1竈はSD 6の造営時に破壊されている。第2竈は遺構検出の際に、上部を若干削平された。この竈は火床に船形ピットを伴わないが、その代わりに、竈断面に観察されるように、竈基層のロームブロック主体層を高く盛り上げて、中央に浅いピットを掘り込んで火床としていたと考えられる。火床にあたる床面が焼けていないのはそのためであろう。

遺物 各所から土師器、土製品、石器等が出土した。

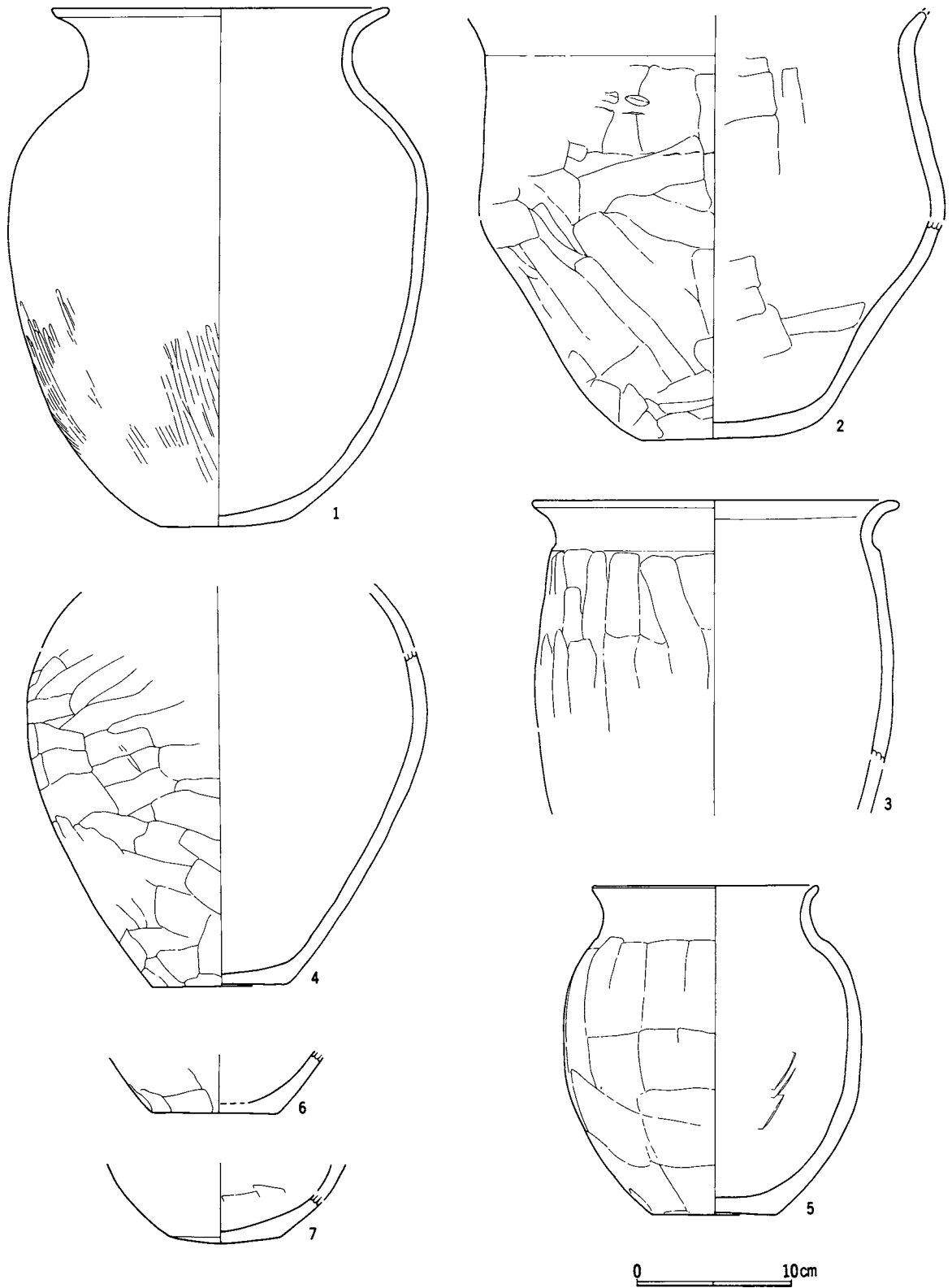
1～7は甕である。1は東側柱穴脇から出土した。口径11.8cm、器高33.4cmを測り、暗灰褐色で、胎土に石英・長石を含む。胴部は縦の細いヘラケズリが施される。2は第1竈前面のピット脇から出土した。口縁を僅かに欠いた土器で、赤褐色を呈し、現高27.5cmを測る。胴部調整は粗雑な斜めヘラケズリで、底部には木葉圧痕が見られる。3は東隅付近から出土した。口径23.8cm、現高20.0cmを測る。茶褐色を呈し、胴部には縦ヘラケズリが周回する。4は第2竈内外から出土した。明褐色で、現高25.2cmである。胴部は横から斜めの短いヘラケズリによって調整される。5は西隅付近から出土した。口径15.0cm、器高20.0cmで、赤褐色を呈する。胴部調整は縦ヘラケズリが多用され、底部には木葉圧痕が残る。6は中央南寄りの地点から出土した。赤褐色を呈し、底部周囲に横ヘラケズリ調整が見られる。7は西隅付近から出土した。赤褐色で、ヘラナデ調整されている。8～14は杯である。8は第1竈前面のピット脇覆土中から出土した。口径14.1cm、器高4.3cmを測り、茶褐色を呈する。体部調整は周縁ヘラナデの後、器底を中心に二引両紋のような平行ヘラナデを施す。内面は細く緻密なヘラミガキ調整である。9は第1竈東脇覆土中から出土した。口径13.6cm、器高4.1cmを測り、外面が黒色処理される。体部調整は8と同じである。10は第1竈煙道内から出土した。茶褐色を呈し、体部は周縁に沿ってヘラナデされ、内面はヘラミガキされる。11は東側柱穴脇覆土中から出土した。口径12.1cm、器高4.0cmで、赤褐色を呈し、体部は不規則なヘラナデ、内面はヘラミガキされる。12は南西壁中央付近から出土した。口径12.1cm、器高4.3cmを測り、暗褐色を呈する。体部調整は11と同じである。13は中央南寄りの覆土中から発見された。暗褐色を呈し、体部は周縁に沿ってヘラナデされ、内面は緻密にヘラミガキされる。14は覆土中から発見された。暗褐色を呈し、体部はヘラナデ、内面は放射状にヘラミガキされる。15は手捏ね土器で、中央南寄りから出土した。赤褐色で、現高3.4cmを測る。

16は土製品の破片である。北側覆土中から発見された。中空状で、平坦な底面に焼成前に穿孔されている。上端は現存部分で内屈し、内面にはヘラ押し痕が明瞭に残る。現高2.3cmで、赤褐色を呈する。

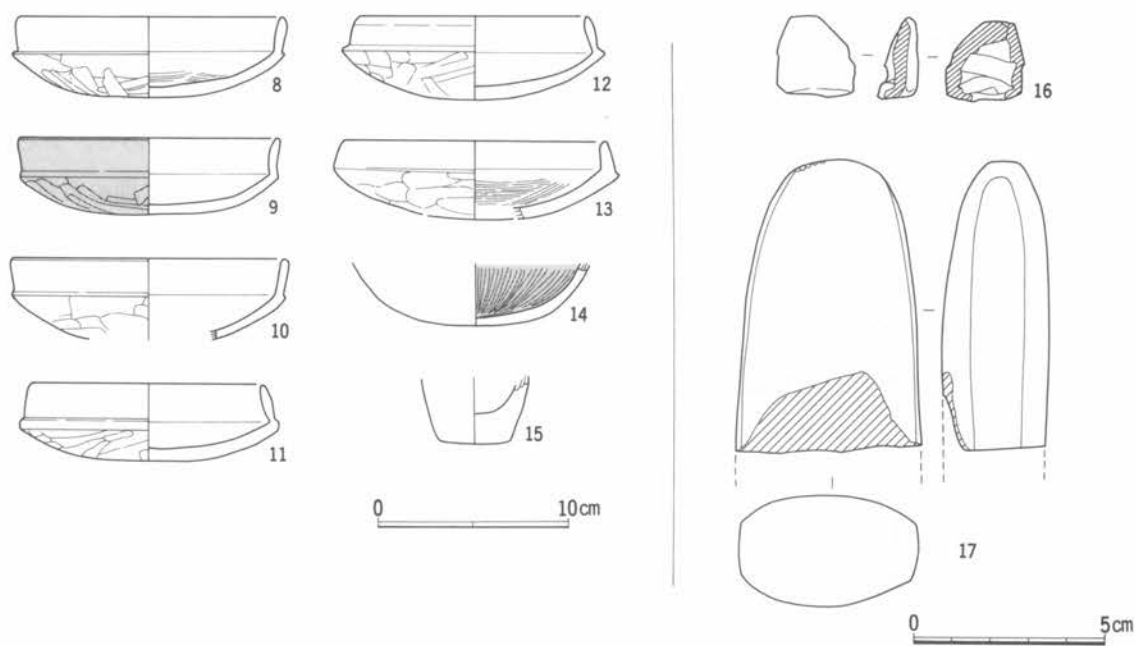
17は磨製石斧で、北側覆土中から発見された。上半部の破片で、各面はよく磨かれている。上端には微細な敲打痕が見られる。硬質砂岩製で、163.7gを量る。



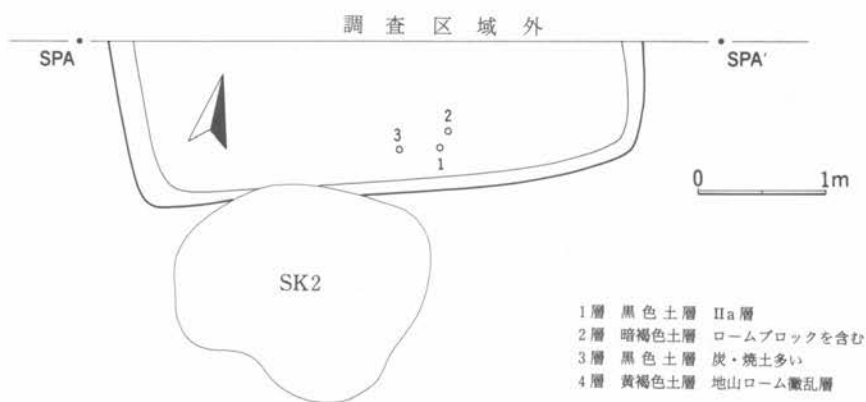
第15図 SI 8 遺構実測図



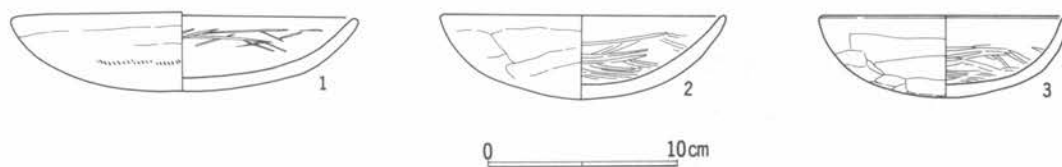
第16図 SI 8 出土遺物実測図 (1)



第17図 SI8 出土遺物実測図 (2)



第18図 SI9 遺構実測図



第19図 SI9 出土遺物実測図

SI 9 (第18図、第19図、図版4、図版18、図版19)

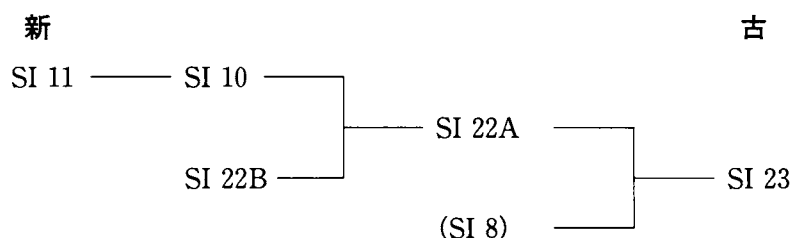
遺構 本遺構の大半は調査区域外にあり、全貌を把握できない。調査範囲は方形プランの一部で、周溝は伴わない。南縁をSK 2が切っている。床面には炭や焼土が散乱し、火災を受けた形跡がある。また、明瞭な硬化面は認められない。この住居跡はロームブロック混合土(2層)によって人為的に埋められていた。
遺物 土師器3点が出土した。

1～3は杯で、南壁中央付近からまとまって出土した。1は口径17.9cm、器高4.1cmで、明褐色を呈する。体部はヘラナデ、内面は疎らなヘラミガキが入る。2は口径15.2cm、器高4.5cmで、赤褐色を呈する。体部は周縁に沿ってヘラナデされ、内面には細かいヘラミガキが入る。3は口径12.8cm、器高4.3cmで、赤褐色を呈する。体部は疎らにヘラナデされ、内面はヘラミガキが入る。

第2節 SI 10～SI 24

SI 10～SI 24のうち重複関係にあるSI 10・SI 11・SI 22A・SI 22B・SI 23の5軒について述べる(20図)。

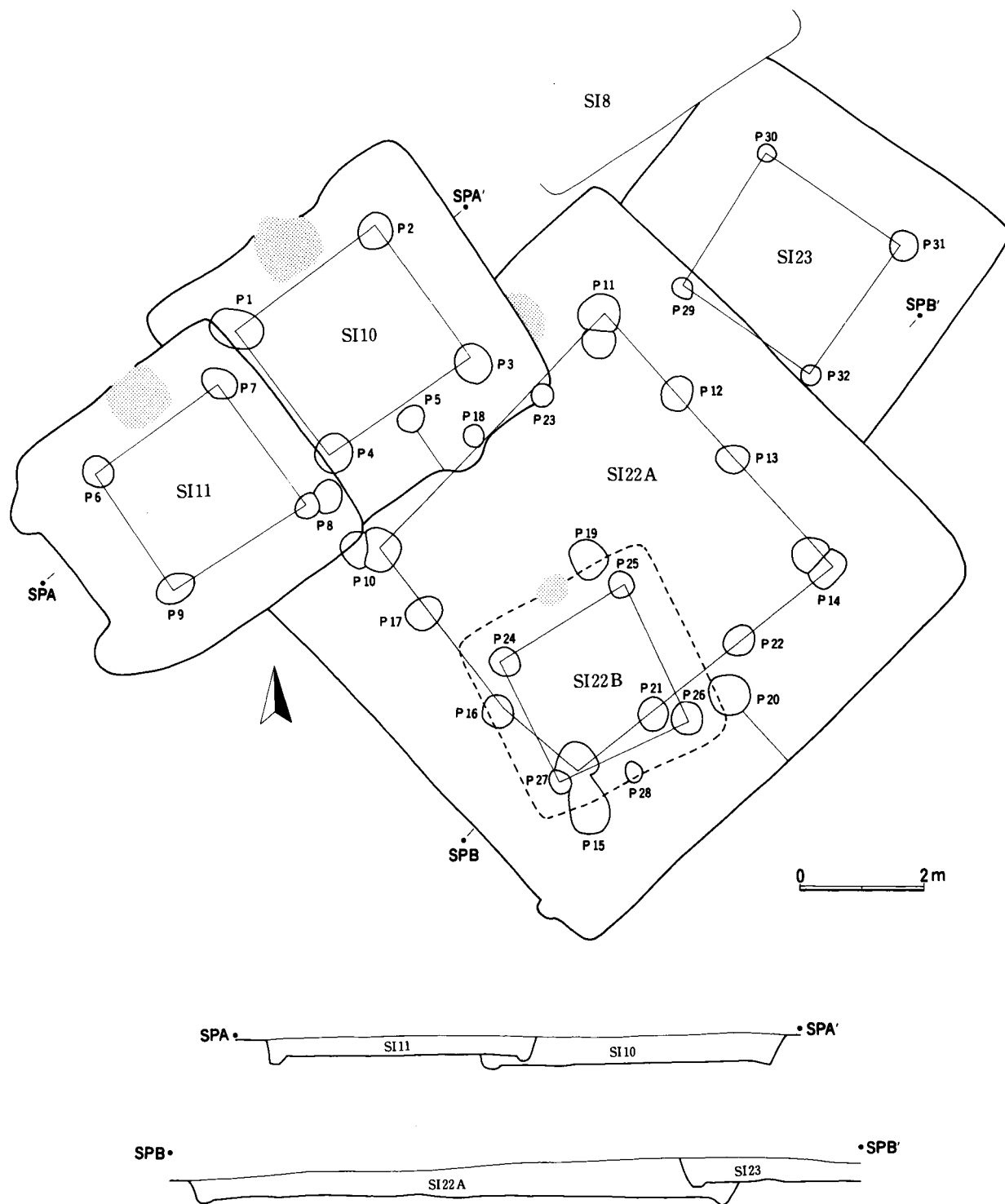
新旧関係 断面図SPA—SPA'からSI 11がSI 10を攪乱しているのがわかる。また、断面図SPB—SPB'からSI 23がSI 22Aを攪乱しているのがわかる。さらに調査過程で、SI 10・SI 11がSI 22Aを攪乱していることが判明した。なお、SI 22Bは断面観察の際には見逃されたが、SI 22Aの覆土中にSI 22Bの竈が遺存していることから、SI 22Aの埋没後にSI 22Bが掘り込まれたことがわかる。SI 23の北隅はSI 8により破壊されていた。以上の関係を図式的に示せば、次のようになる。



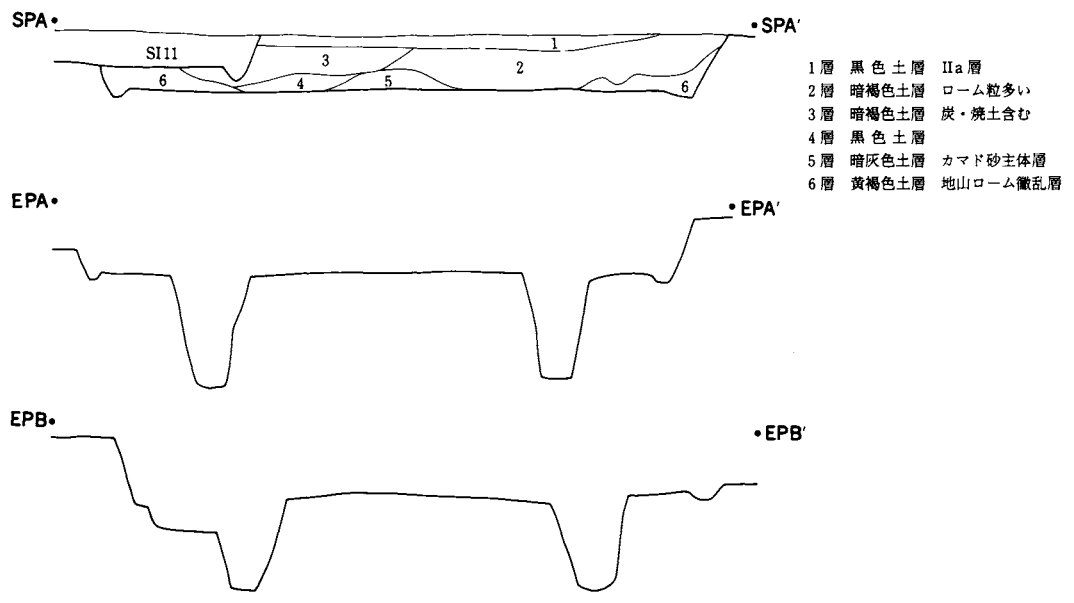
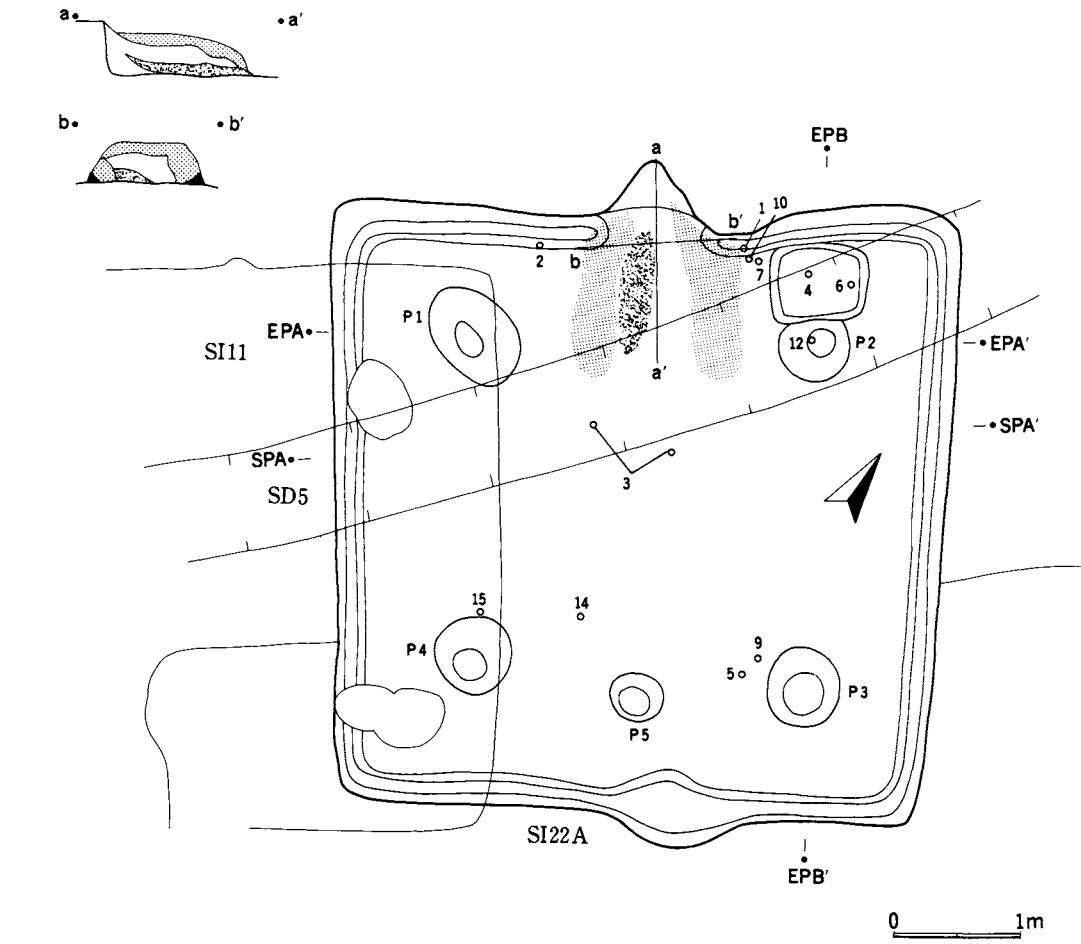
柱穴の帰属 SI 10はP1・P2・P3・P4で四本柱穴を構成し、P5が梯子穴となる。SI 11はP6・P7・P8・P9で四本柱穴を構成する。大型住居跡のSI 22AはP10・P11・P14・P15で四本支柱穴を構成し、P11・P14間にP12・P13、P15・P14間にP21・P22、P10・P15間にP17・P16の間柱穴が入り、基本構成は3間×3間となるが、竈側の柱列がはっきりしない。P10・P11間にはP18とP23が確認できたが、これらはほかの柱穴に比べて小規模かつ不揃いなので、上屋を支える柱穴とは見なしがたい。中央に位置するP19は、床面下約90cmの深さがあり、四本支柱穴のどれよりも深いので、この住居跡の中心柱と見なすことができる。SI 22BはP24・P25・P26・P27の四本柱穴とP28の梯子穴で構成される。SI 23はP29・P30・P31・P32の四本柱穴で構成される。

SI 10 (第21図、第22図、図版4、図版19、図版34)

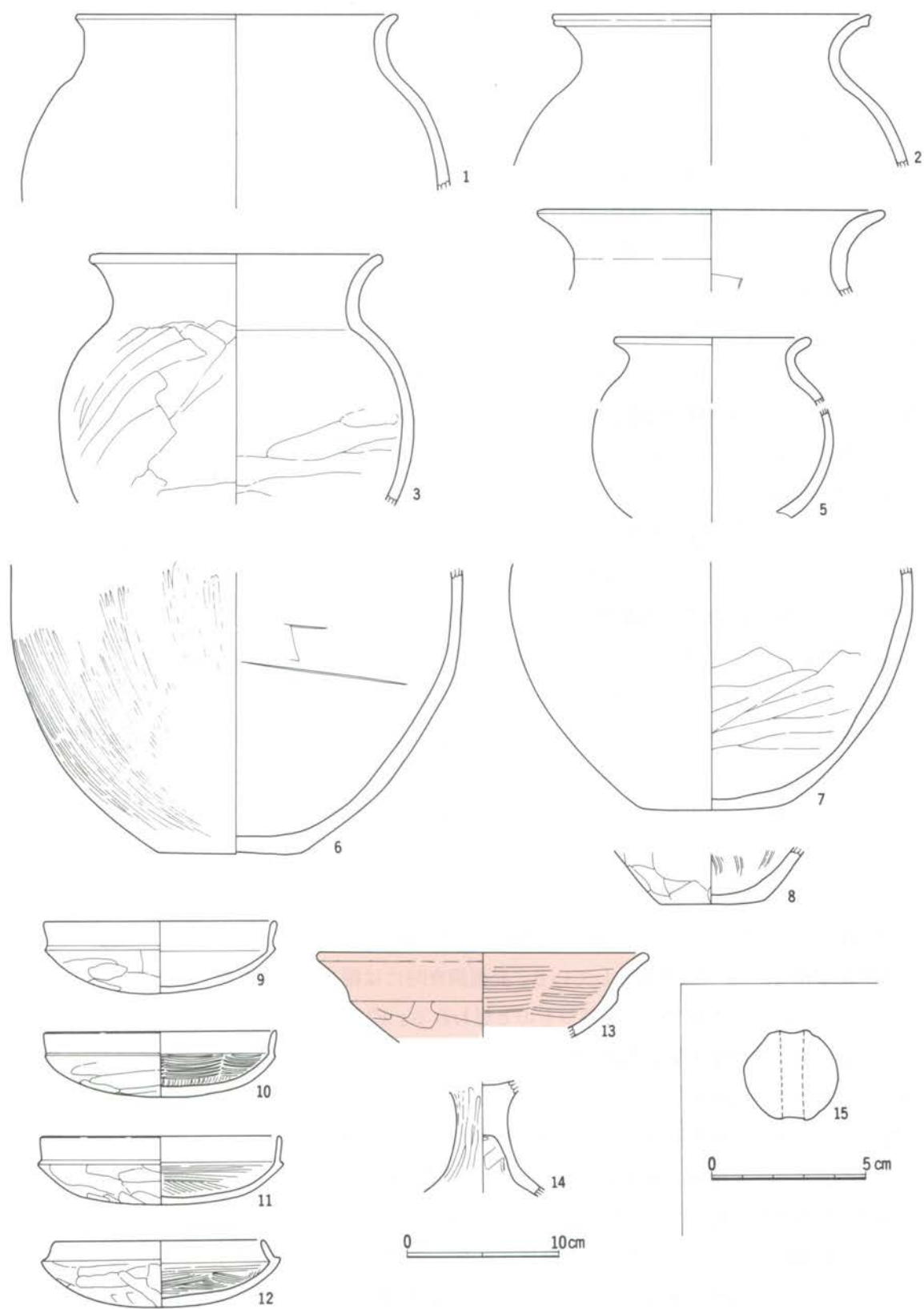
遺構 南東部でSI 22Aを攪乱し、南西部でSI 11に攪乱されている。4.7m×4.5mの方形プランを呈する。北西壁中央に竈が設置され、周溝が全周する。南東壁で壁共々膨らむ部分がある。四本柱穴と梯子穴を伴う。このほか竈北脇に貯蔵穴がある。床面は硬化面が四本柱穴まで広がっている。竈の遺存状況は良好である。船形ピットは掘り込められていない。この住居跡は、人為的に2・3層土が投棄されて埋め戻され



第20図 新旧関係と柱穴の帰属 (1)



第21図 SI10遺構実測図



第22図 SI10出土遺物実測図

ある。船形ピットは掘り込められていない。この住居跡は、人為的に2・3層土が投棄されて埋め戻されている。

遺物 各所から土師器、土玉等が出土した。

1～8は甕である。1は竈北脇から出土した。口径21.0cm、現高12.3cmで、明褐色を呈する。胴部は浅いヘラナデ調整される。2は竈南脇から出土した。口径20.8cm、現高10.0cmで、明褐色を呈する。胎土には石英・長石・雲母が含まれる。胴部調整は細いヘラナデである。3は竈前面から出土した。口径19.6cm、現高16.2cmで、赤褐色を呈する。胴部には斜めヘラケズリが多用される。4は貯蔵穴から出土した。口径22.6cmで、明灰褐色を呈する。胎土には石英・長石が含まれる。5の小型甕はP3西脇覆土中から出土した。口径12.8cm、現高12.6cmで、暗褐色を呈する。胴部はヘラナデされる。6は貯蔵穴内から出土した。現高18.4cmで、灰褐色を呈し、胎土には石英・長石が多い。胴部には縦方向の細いヘラナデが施される。7は竈北脇から出土した。現高16.0cmで、赤褐色を呈する。胴部には縦方向のヘラナデが多用される。8はP3付近の覆土中から発見された。暗褐色を呈し、底部周辺は横ヘラケズリされる。9～12は杯である。9はP3脇の覆土中から出土した。口径14.6cm、器高4.7cmで、暗褐色を呈する。体部は周縁に沿ってヘラケズリされ、内面はヘラミガキが施される。10は竈北脇から出土した。口径15.1cm、器高4.3cmで、赤褐色を呈する。体部は周縁に沿ってヘラケズリされ、内面は細かい単位でヘラミガキされる。11は覆土中から発見された。口径15.7cm、器高4.5cmで、暗褐色を呈する。調整技法は10と等しい。12はP2覆土中から出土した。口径14.0cm、器高4.3cmで、暗褐色を呈する。体部は疎らにヘラケズリされ、内面には細かい単位のヘラミガキが見られる。13・14は高杯である。13は覆土中から発見された。復元口径21.8cmで、内外面とも赤彩される。体部は周縁に沿って疎らにヘラナデされ、内面は細かい単位でヘラミガキされる。14は中央南寄りの覆土中から出土した。現高7.4cmで、赤褐色を呈する。脚部は縦ヘラナデ調整である。

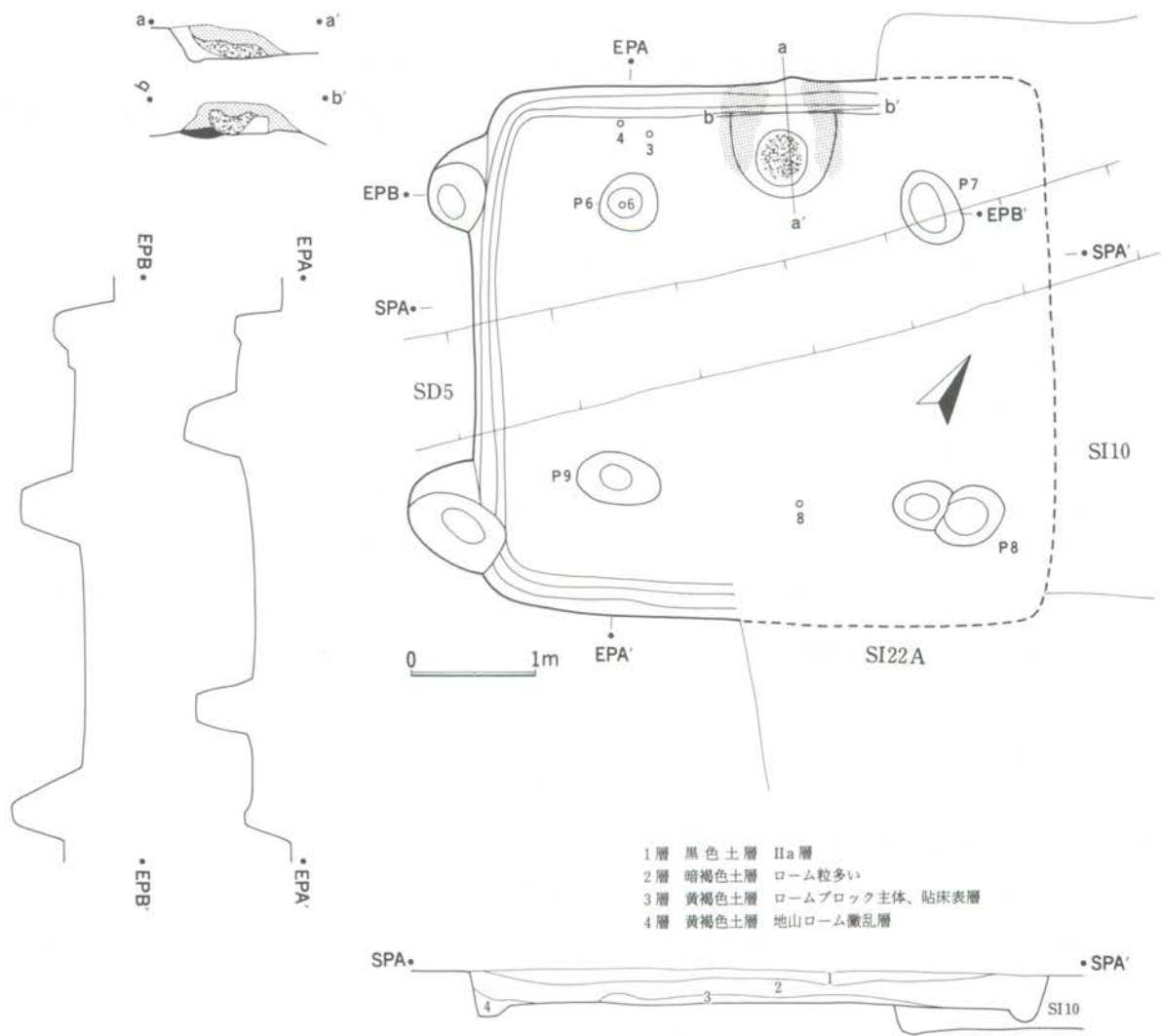
15は土玉で、P4脇から出土した。茶褐色を呈し、全面がナデられている。最大径3.1cm、重量25.1gを量る。

SI 11 (第23図、第24図、図版19、図版31、図版34、図版35)

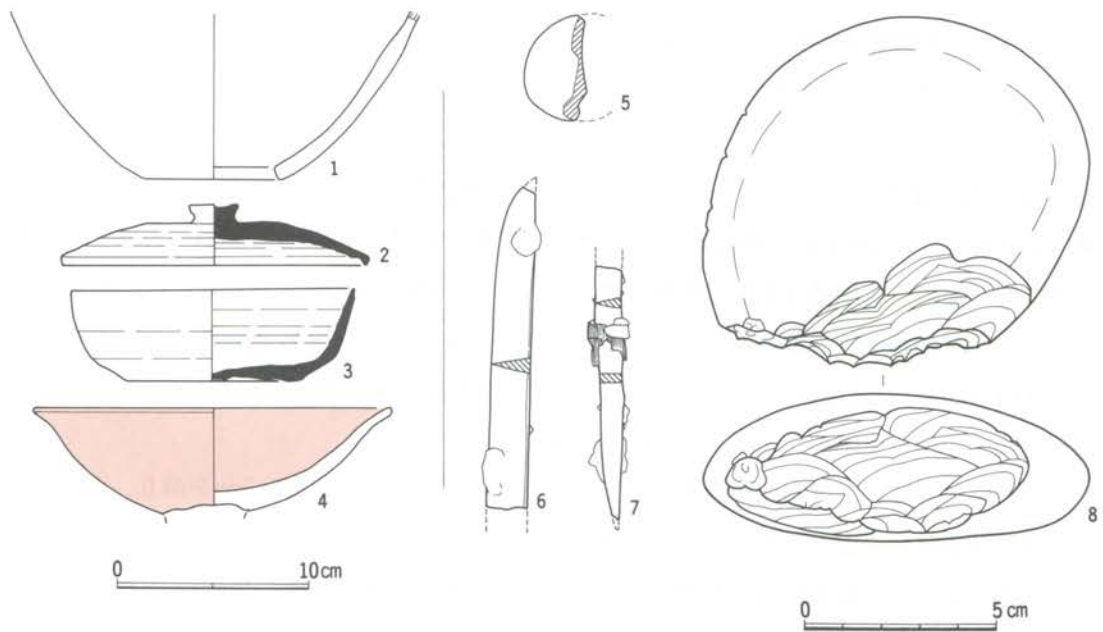
遺構 北東部でSI 10・SI 22Aを攪乱している。発掘調査時には掘りすぎのため、東南側の壁を検出できなかったが、一辺4m強の方形プランを持つものと思われる。四本柱穴は完備している。周溝は全周していたのであろう。竈は北西壁中央に設けられており、遺存状態は良好である。ピットは四本柱穴のほか、南西壁外に、2基の浅い張り出しピットを伴っている。四本柱穴との位置関係からみて、補助柱穴を構成する可能性がある。床面の硬化部分の広がりには、四本柱穴にまで達している。

遺物 主に西側から、土師器、須恵器、土玉、鉄器、石器等が出土した。

1は甗で、東南寄りの覆土中から発見された。現高8.5cmで、明褐色を呈する。胴部は縦ヘラナデされている。2は須恵器杯蓋で、中央覆土中から発見された。口径15.8cm、器高3.2cmで、明灰色である。つまみ周辺は回転ヘラケズリ調整である。3は須恵器杯で、北西壁際から出土した。口径14.8cm、器高4.7cmを測り、明灰色を呈する。底部を回転ヘラ切りし、底部周辺は回転ヘラケズリで面取りされる。4は高杯で、3とともに北西壁際から出土した。口径18.8cm、現高5.4cmで、内外面赤彩され、体部はヘラナデ、内面はヘラミガキされている。



第23図 SI11遺構実測図



第24図 SI11出土遺物実測図

5は土玉で、東側覆土中から発見された。明褐色を呈し、ナデ仕上げされる。重量6.8gを量る。

6・7は刀子である。6はP6の覆土中から出土した。鋒を欠いた刃部破片で、現長8.3cm、重量6.6gを量る。7は北側覆土中から発見された。茎部破片で、関には柄木の木片が残存する。現長6.8cm、重量4.5gを量る。

8は礫器で、東側覆土中から出土した。粗い剝離で、不揃いな刃部を形成している。流紋岩製で、463.3gを量る。

SI 12 (第25図、第26図、図版19、図版34)

遺構 ほかの竪穴住居跡とは重複していないが、床面が浅いために西隅から竈にかけてSD 2に攪乱されている。4.8m×4.7mの方形プランを持ち、北西壁中央に竈を備えて、周溝は全周する。四本柱穴は完備し、貯蔵穴と梯子穴が付属する。竈はロームブロック層を基盤とせず、袖材の砂質粘土を直接積み上げている。煙道側はSD 2による攪乱を受けて破壊されている。床の硬化面は四本柱穴まで達している。この住居跡はII a層が厚く堆積した自然埋没遺構である。

遺物 北隅周辺を中心に、土師器、土玉が出土した。

1～4は甕である。1は貯蔵穴脇から散乱して出土した。口径19.0cm、器高32.0cmで、灰褐色を呈する。胎土には石英、長石を含む。胴部には縦のヘラナデが施される。2は北側柱穴脇から出土した。口径15.3cm、器高14.2cmで、赤褐色を呈する。胴部はヘラナデされ、内面には煤が付着する。3は竈北脇から出土した。口径10.7cm、器高13.0cmを測り、赤褐色である。胴部調整は縦ヘラケズリが多用される。外面は加熱されて、剝落する部分がある。4は北側周溝上から出土した。口径15.4cmで、明褐色を呈する。胴部はヘラケズリされている。5・6は杯である。5は竈北脇の周溝上から出土した。口径13.2cmで、茶褐色を呈する。体部にはヘラケズリの後、粗いヘラミガキが入り、内面はヘラミガキされる。6は2とともに、北側柱穴脇から出土した。復元口径15.6cmを測り、内外面とも赤彩されている。調整は内外面ともヘラナデである。

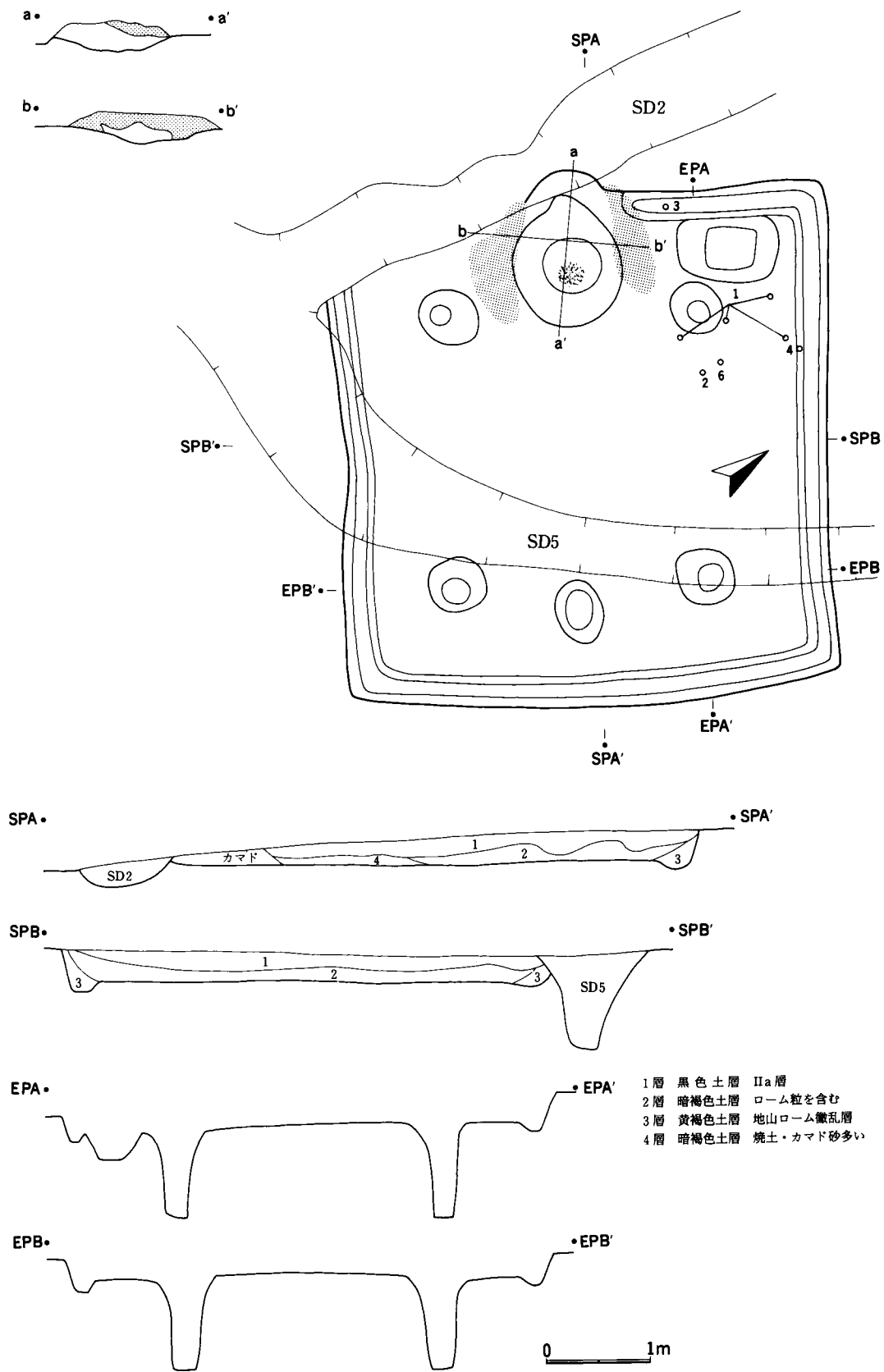
7は土玉で、南側覆土中から発見された。紐通し面の一面が面取りされている。ナデ仕上げで、明褐色を呈する。最大径3.6cm、重量30.1gを量る。

SI 13 (第27図、第28図、図版19、図版20、図版31、図版34)

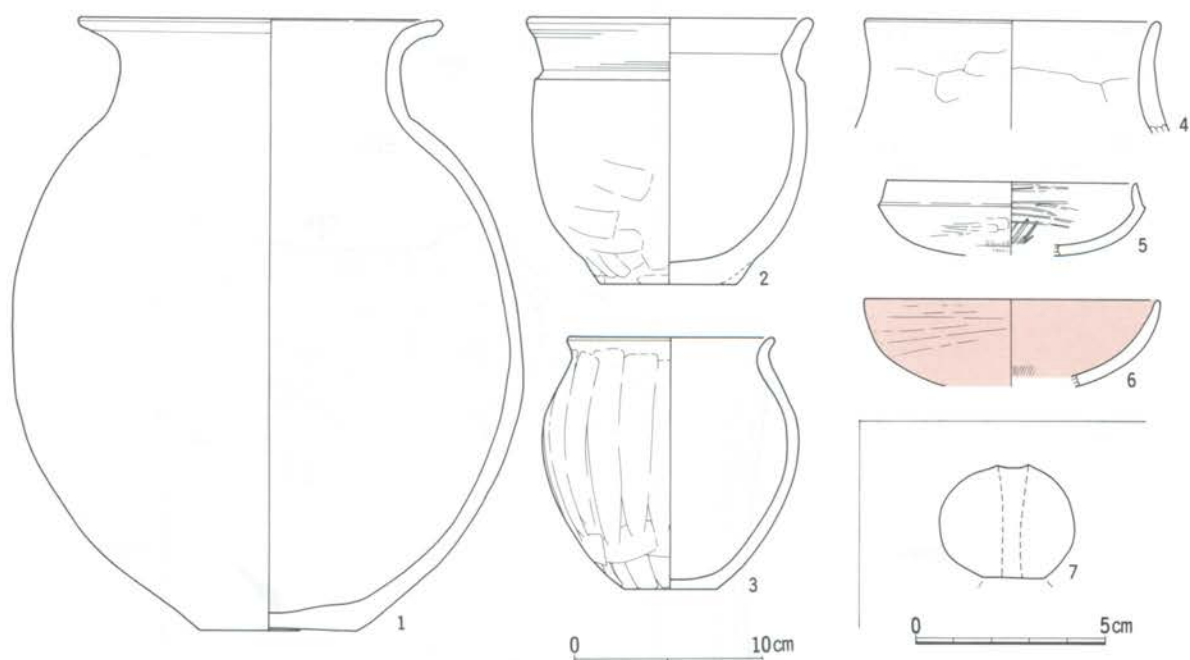
遺構 SI 14によって西半を、SD 2によって北隅を攪乱されている。一辺5.2mの方形プランを持ち、北東壁中央に竈を備える。周溝は東側は明瞭に確認できるが、西側ははっきりしない。四本柱穴は完備し、東隅には貯蔵穴が付属する。竈は船形ピットの上にローム小ブロックを敷き詰めて基盤層としている。焚き口付近はSI 14のため破壊されている。床の硬化面は四本柱穴まで達している。

遺物 北隅周辺から土師器、土玉、軽石等が出土した。

1～9は杯である。1は南西周溝上から出土した。口径11.0cm、器高5.7cmを測り、赤褐色を呈する。平底で口縁が開く鉢形をとり、底部には木葉圧痕が残っている。体部はナデ調整されるが、輪積痕が消えきらずに残存する。2は竈と貯蔵穴の間から出土した。口径12.8cm、器高4.4cmで、内外面とも黒色処理されている。体部調整は周縁に沿ったヘラナデで、内面は緻密なヘラミガキが施される。3は覆土中から発見された。赤褐色で、体部調整はナデ、内面はヘラミガキである。4は東側柱穴内覆土中から出土した。口



第25図 SI12遺構実測図



第26図 SI12出土遺物実測図

径14.0cm、器高3.8cmで、赤褐色を呈する。口縁には粗いヘラミガキが見られ、体部は周縁に沿ってヘラナデされる。内面は緻密にヘラミガキされる。この調整法は5～9まで共通する。5は東側柱穴脇から出土した。口径14.0cm、器高4.6cmで、内外面とも黒色処理されている。6は2と同様、竈と貯蔵穴の間から出土した。復元口径13.3cm、現高4.7cmで、赤褐色を呈する。7は覆土中から発見された。現高4.8cmで、赤褐色を呈する。8は覆土中から発見された。復元口径11.6cm、現高4.0cmで、内外面とも黒色処理されている。9は東隅壁際から出土した。口径13.2cm、器高4.6cmで、赤褐色を呈する。10は高杯脚部で、現高7.3cmを測り、赤褐色である。ヘラナデ仕上げされる。

11は土玉で、南隅付近の覆土中から発見された。ナデ仕上げされ、紐通し面は両面にわたり面取りされている。明褐色で、最大径3.0cm、重量27.4gを量る。

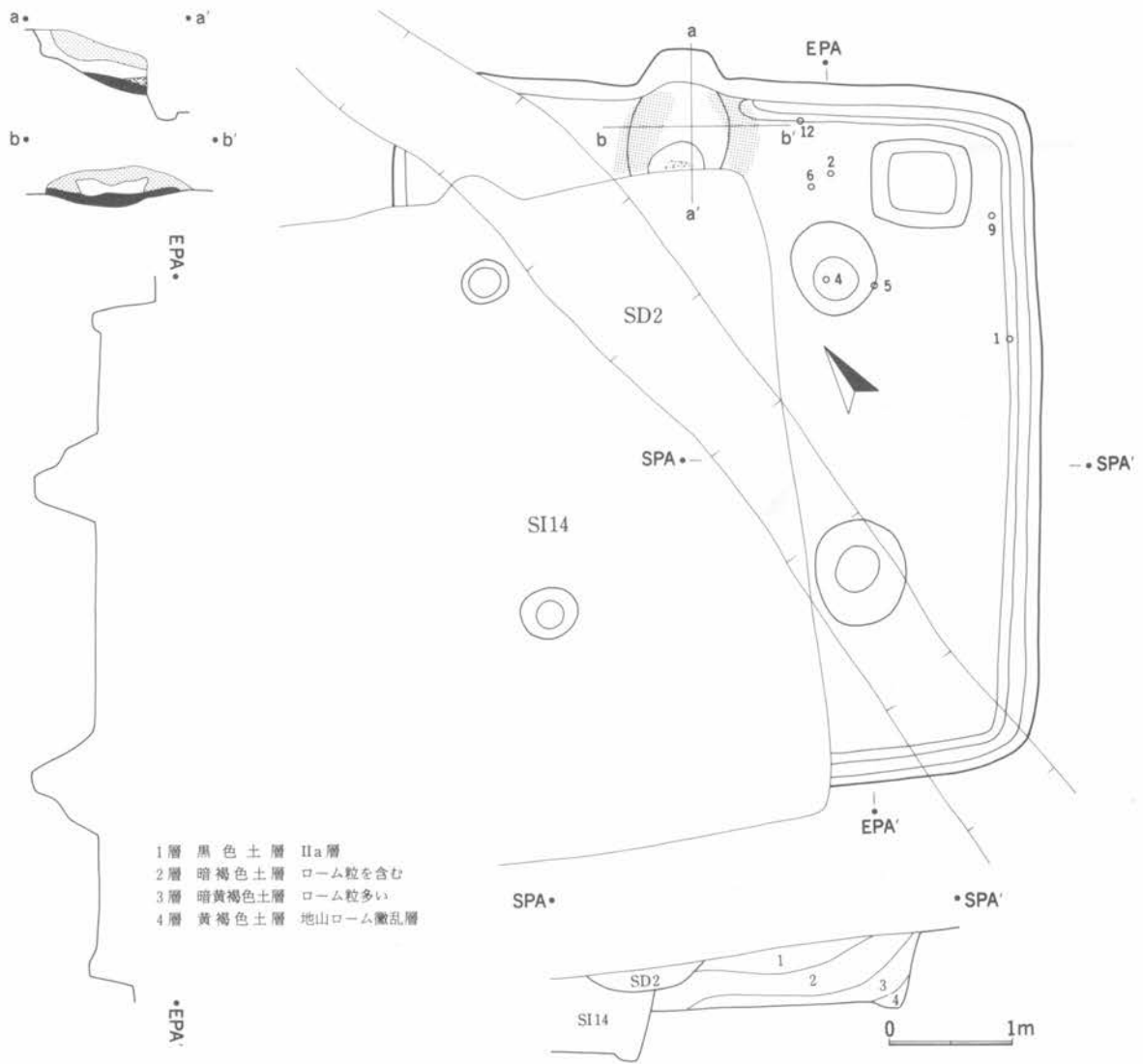
12は軽石で、竈東脇の覆土中から出土した。明灰褐色を呈し、各面はよく磨られて磨滅している。重量50.3gを量る。

SI 14 (第29図、第30図、図版20、図版33)

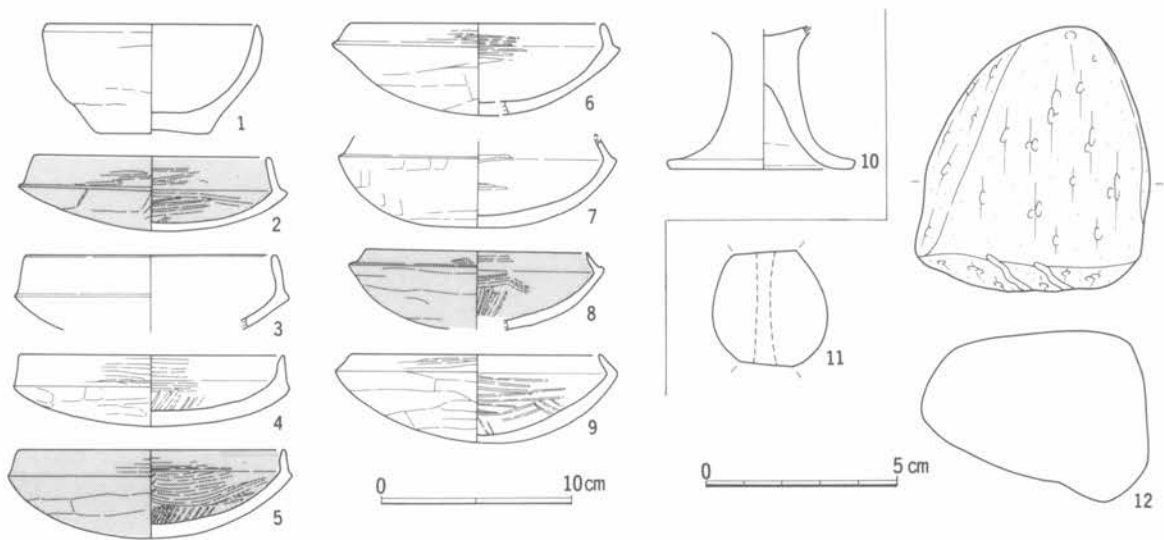
遺構 SI 13の西半を攪乱している。4.8m×5.0mの方形プランで、北東壁中央に竈がある。周溝は確認できない部分があった。四本柱穴は完備し、そのほかに梯子穴がある。竈は煙道部がSD2によって破壊されている。床の硬化面は、四本柱穴付近にまで達している。

遺物 土師器、滑石母岩が出土した。

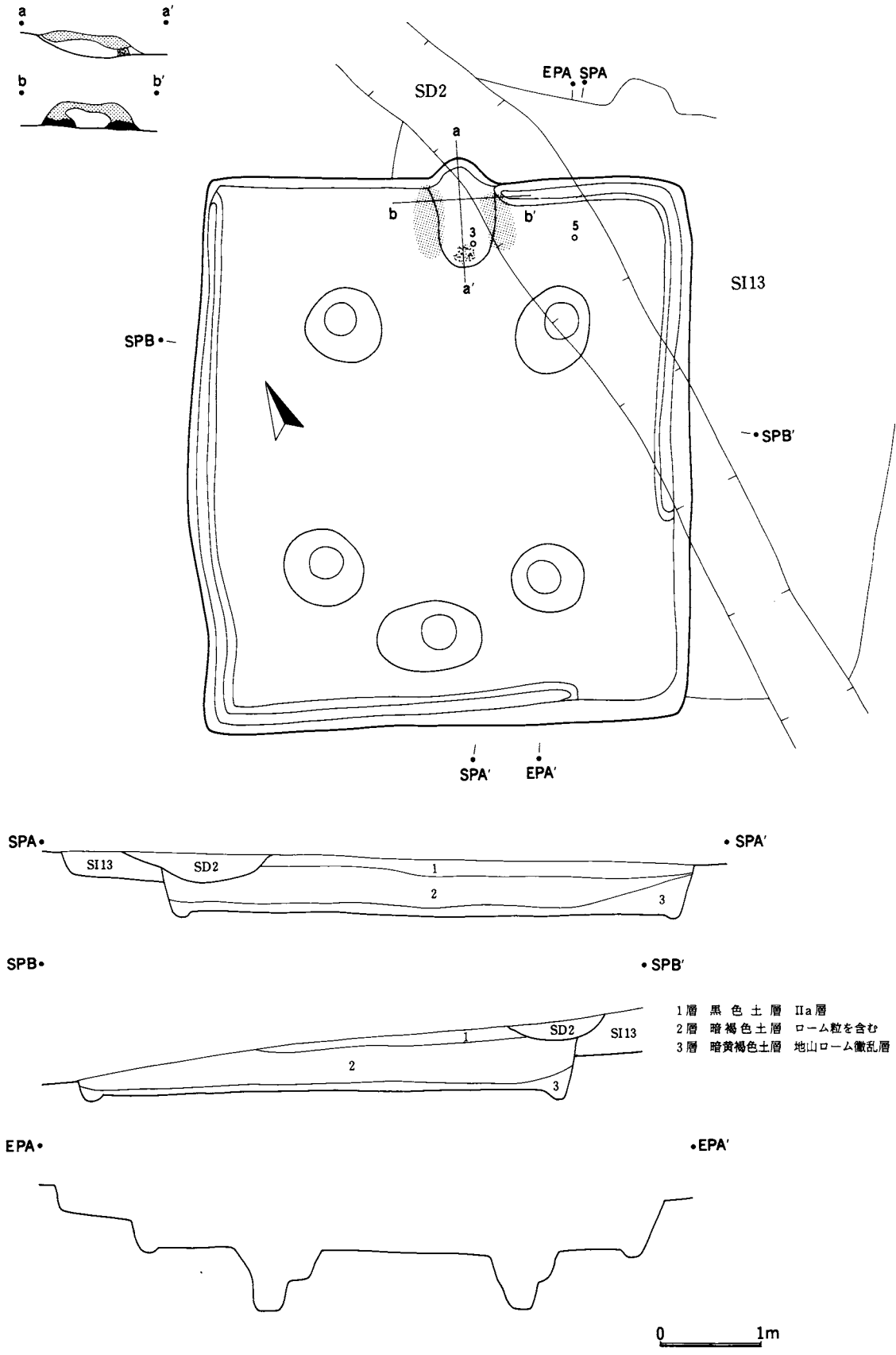
1～3は甕である。1は覆土中から発見された。胴が張り、口縁がすぼまる特異な形状で、口径11.2cm、器高17.9cmを測り、赤褐色を呈する。胴部には粗い横のヘラナデが見られる。なお、胴下部には粘土板を張り付けて補強した形跡がある。2は南西側の覆土中から発見された。現高10.0cmで、赤褐色を呈する。胴部には縦ヘラケズリが多用される。3は竈内から出土した。暗褐色で、ヘラナデが見られる。4・5は杯である。4は覆土中から発見された。口径10.7cm、器高3.8cmで、内外面とも黒色処理されている。体部



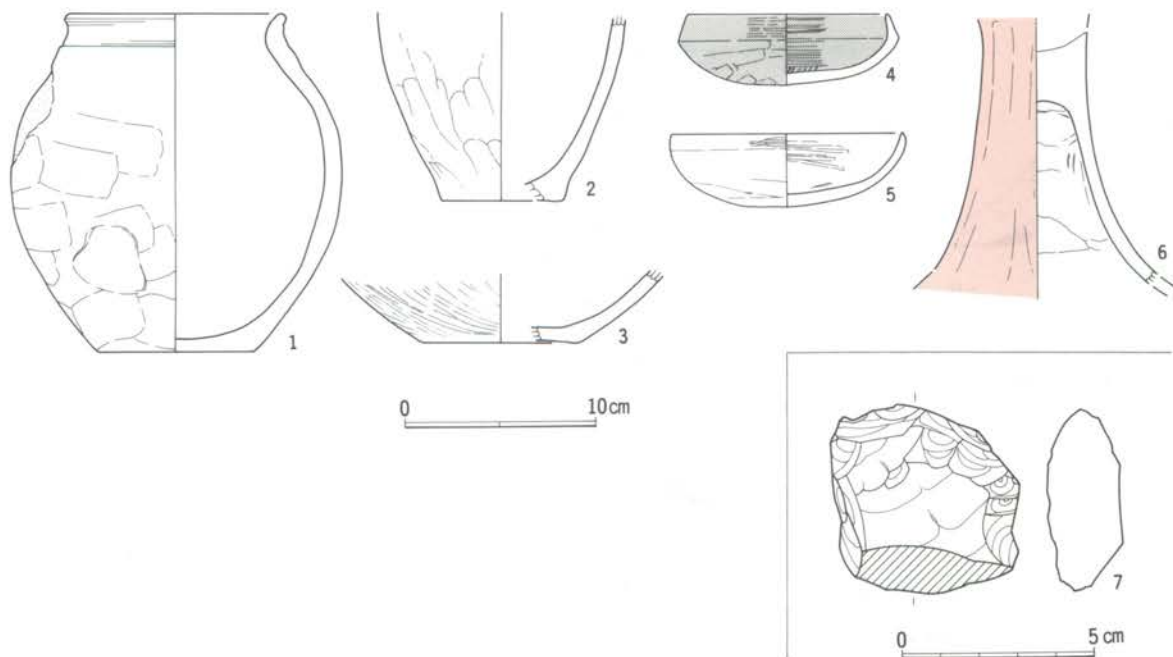
第27図 SI13遺構実測図



第28図 SI13出土遺物実測図



第29図 SI14遺構実測図



第30図 SI14出土遺物実測図

は周縁に沿った粗いヘラナデ、内面は緻密なヘラミガキが施される。5は東隅付近の覆土中から出土した。口径12.4cm、器高3.9cmで、赤褐色を呈する。体部はヘラナデされ、内面には粗いヘラミガキが見られる。6は高杯脚部である。現高14.8cmで、外面が赤彩されている。縦のヘラナデで仕上げ、内面には輪積痕が残る。

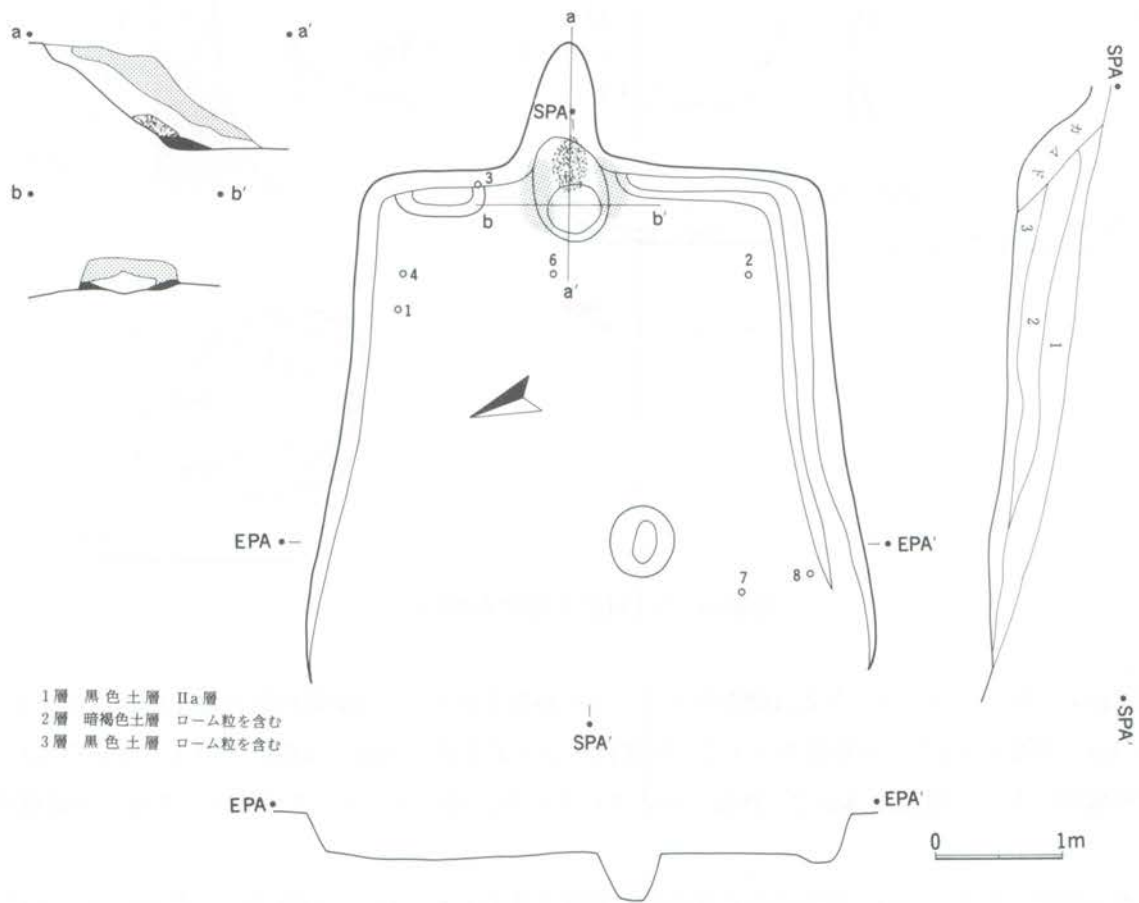
7は滑石母岩である。図の上部方向から集中的に剝離を重ねられている。緑灰色で、重量62.0gを量る。

SI 15 (第31図、第32図、図版5、図版20)

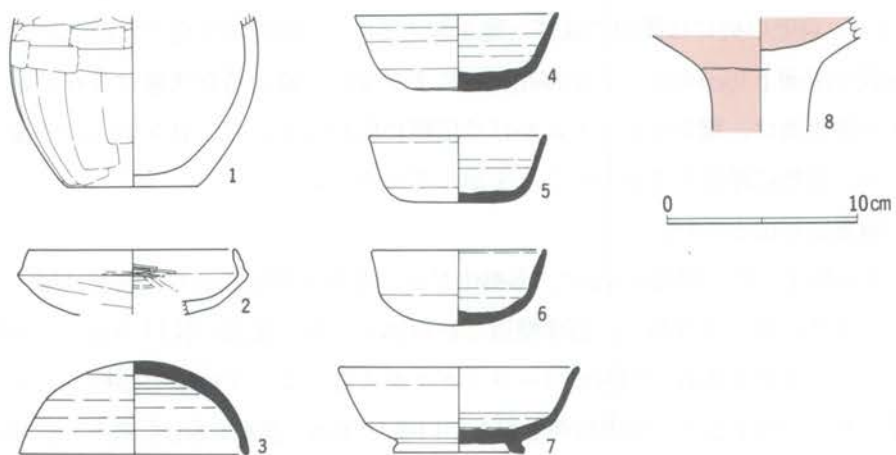
遺構 ほかの住居跡とは重複していない。西壁は台地斜面にかかり、検出できなかった。現況では3.6m×3.8mの台形プランを呈する。東壁中央には煙道の延びた竈を備えている。周溝は北壁では確認できなかった。四本柱穴はなく、西側に床面下35cmのピットが存在するにすぎない。竈の遺存状態は良好だが、北側袖を少し掘りすぎた。床の硬化面は、竈からピットにかけて広範に広がっている。II a層ののる覆土層位は台地傾斜と平行しており、自然に埋没していったことを示している。

遺物 各所から土師器、須恵器が出土した。

1は甕で、北東壁近くから出土した。現高8.8cmで、赤褐色だが、内面は黒色である。胴部は縦ヘラケズリの後、上部は横ヘラケズリされる。2は杯で、南東壁近くから出土した。復元口径11.0cmで、赤褐色を呈する。体部は周縁に沿ってヘラナデされ、内面にはヘラミガキが入る。3～7は須恵器杯である。3は杯蓋で、竈北脇の壁際覆土中から出土した。暗青灰色を呈し、口径11.8cm、器高4.8cmを測る。頂部は手持ちヘラケズリで調整する。4は北東壁近くの覆土中から出土した。口径10.9cm、器高3.8cmで、明灰色を呈する。胎土には微小有機物が混入し、焼きは甘い。ロクロ目は弱く、底部は手持ちヘラケズリ、その周囲は回転ヘラケズリで調整する。5は北側覆土中から発見された。復元口径9.4cm、器高3.5cmで、青灰色を呈する。ロクロ目は弱く、底部は手持ちヘラケズリ、その周囲は回転ヘラケズリで調整する。6は竈前面の覆土中から出土した。口径9.3cm、器高3.8cmで、暗青灰色を呈し、器形が歪んでいる。底部は広い面積を手持ちヘラケズリしている。7は高台付きの杯で、西側覆土中から出土した。暗青灰色で、口径12.8cm、



第31図 SI15遺構実測図



第32図 SI15出土遺物実測図

器高4.5cmを測る。底部は回転ヘラケズリして、台部を貼り付けてから、接合部を篋先で締めている。8は高杯で、南西壁際から出土した。内外面とも赤彩され、外面はヘラナデ、内面はヘラミガキで調整される。

SI 16 (第33図、第34図、図版5、図版33、図版34)

遺構 南西部でSI 18を浅く攪乱している。4.0m×4.4mの不整形プランを持ち、北壁東寄りに竈を備える。周溝、四本柱穴は存在しない。南壁に近く、竈と対面する位置に、床面下20cmの小ピットがある。竈の遺存状態は東袖部が若干破壊されており、その構造は顕著な船形ピットを掘り込まず、床面から直接袖材の砂質粘土を積み上げている。床面の状態は、台地傾斜面にかかり始めるため、西側が傾斜している。硬化面は竈から小ピットまで広範に広がっている。覆土層序は台地傾斜面に平行する自然埋積を示している。

遺物 遺物量は少なく、土師器、土玉、砥石等が覆土中から検出された。

1は甗で、現高11.3cm、灰褐色を呈する。胴部には縦ヘラケズリが多用される。2は高杯で、赤彩されている。縦のヘラナデで調整される。3はミニチュア土器で、現高3.1cm、赤褐色を呈する。口縁は強く横ナデされ、稜を形成して体部と画される。底部の周囲はヘラナデ調整されている。

4は土玉で、ナデ仕上げで、赤褐色を呈する。

5は砥石で、黄灰色の直方体状の破片である。一角には小磨滅痕が連続している。

SI 17 (第35図、第36図、図版5、図版21)

遺構 ほかの住居跡とは重複していない。2.6m×3.4mの長方形プランで、東壁南寄りに竈が付属する。周溝、四本柱穴は見られない。竈は煙道部の一部がSD2によって破壊されている。床面は中央の小範囲のみ硬化していた。住居跡の覆土層序は、炭、ロームブロックを含む土(1層)によって、人為的に埋められたことを示している。

遺物 遺物量は少ない。土師器が出土した。

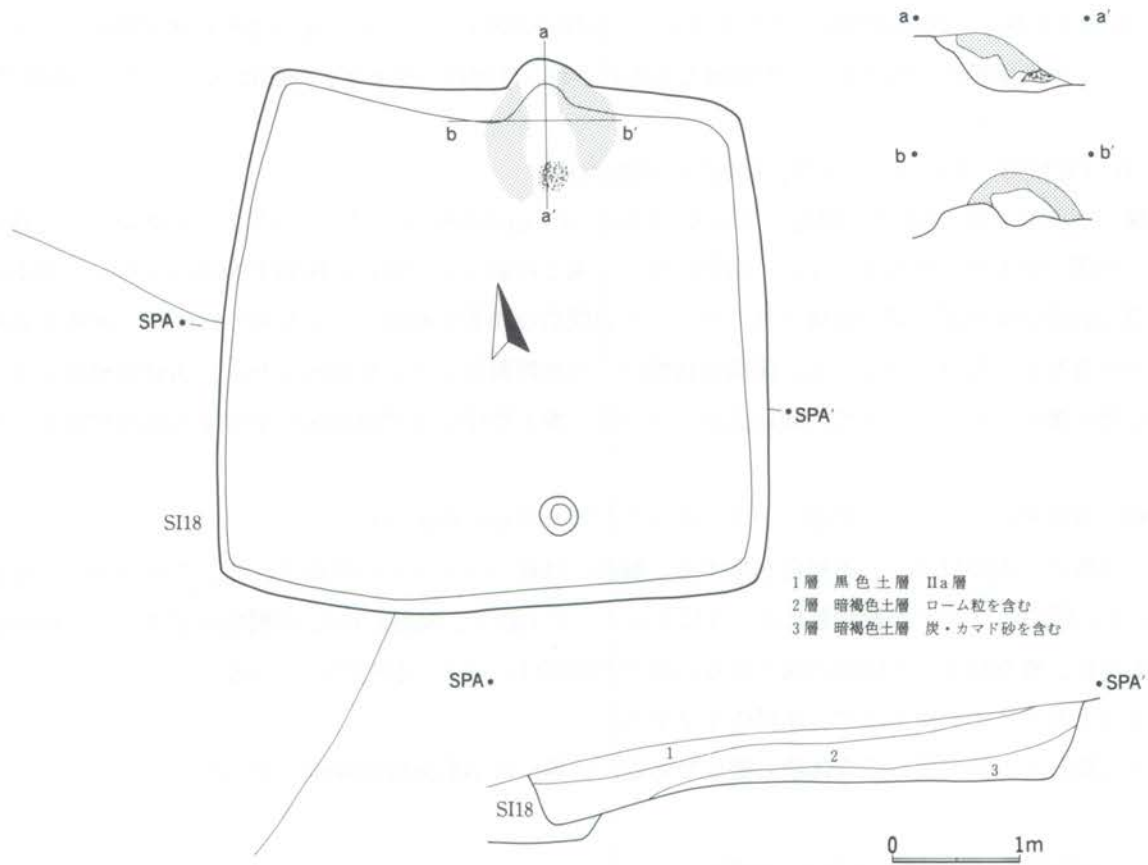
1・2は甗である。1は南西側から出土した。口径13.8cm、器高14.7cmで、茶褐色を呈する。胴部には粗いヘラナデが施される。2は覆土中から発見された。暗褐色で、胴部には横のヘラケズリが見られる。3～5は杯である。いずれも覆土中から発見された。3は暗褐色で、体部はヘラナデされている。4は口径10.0cm、器高2.9で、赤褐色である。体部は周縁に沿ってヘラナデされる。口縁内面には煤が付着している部分がある。5は現高2.6cmで、暗褐色を呈する。体部調整はヘラナデで、底部周囲はヘラケズリされる。

SI 18・SI 19 (第37図、第38図、図版6、図版21、図版33、図版34)

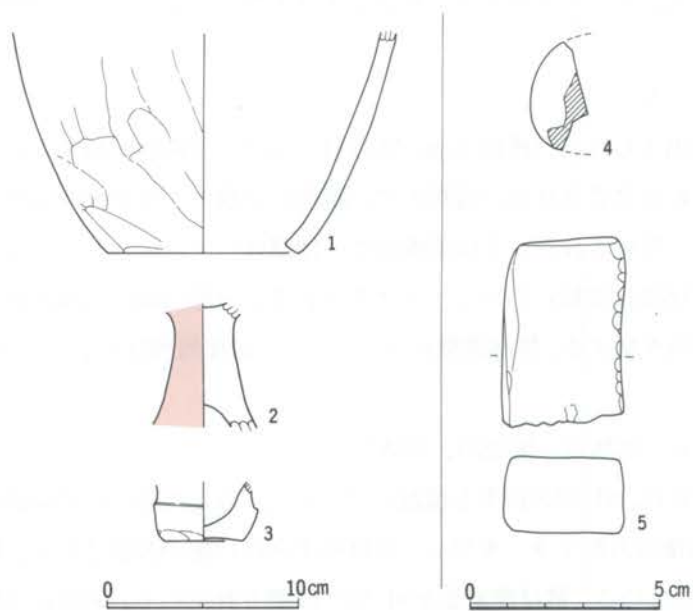
遺構 SI 18はSI 16に東部を浅く攪乱され、SI 19の西半を攪乱している。その北西壁は台地斜面にかかるため、検出できなかった。一辺4.5m前後の方形プランを呈し、北東壁中央には竈が設置される。周溝は西側がはっきりしない。四本柱穴が完備している。竈は煙道部がSI 16に破壊されている。床面から直接袖材の砂質粘土を積み上げている。床面はハードロームではなく、暗褐色粘質土である。

SI 19はSI 18に攪乱されているが、残存部分の一辺は3.2mを測る。竈が本来存在したかどうかは不明である。周溝は伴わず、柱穴も調査範囲では検出できなかった。床面には顕著な硬化面は見られない。

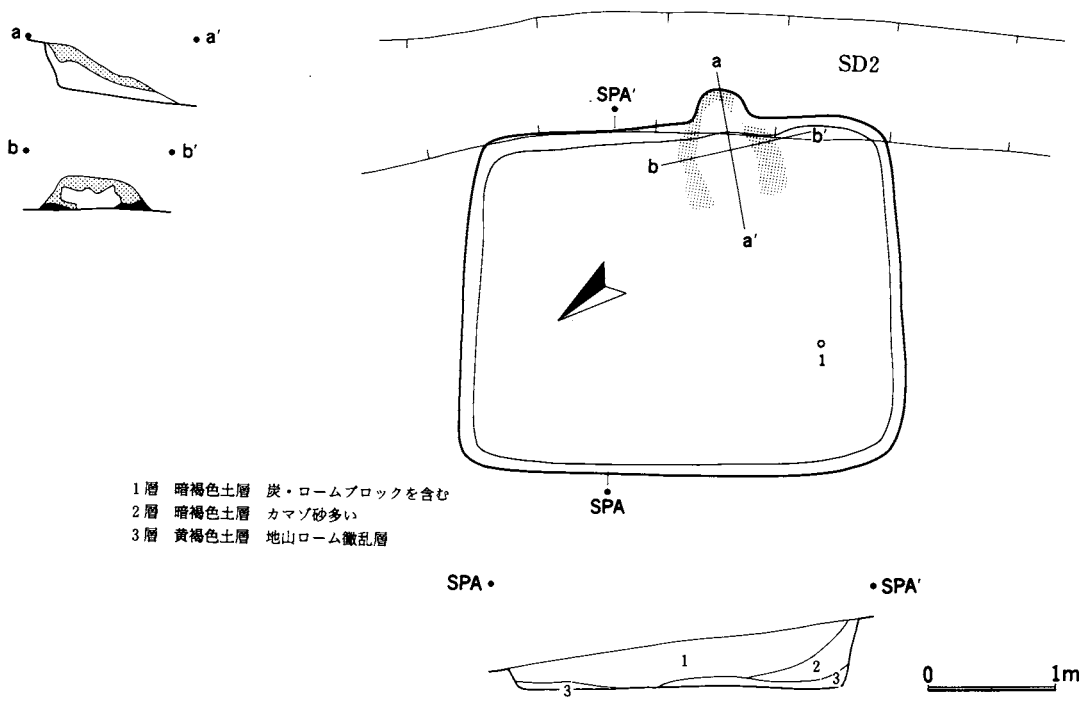
遺物 遺物の帰属は9がSI 19、そのほかはSI 18である。



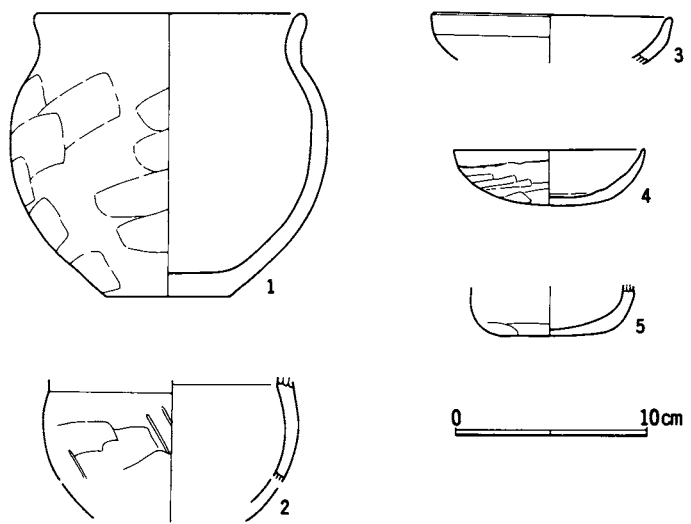
第33図 SI16遺構実測図



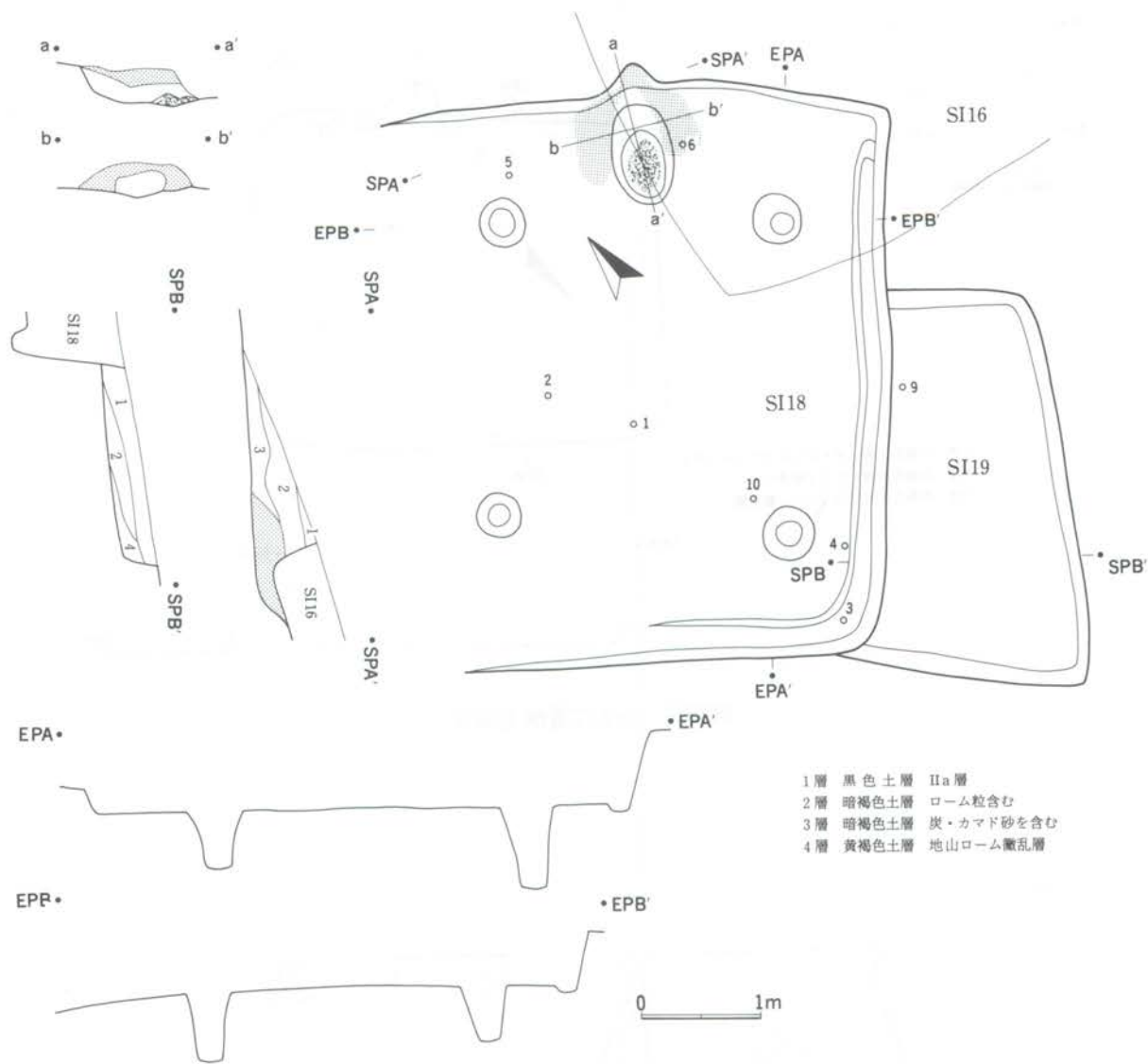
第34図 SI16出土遺物実測図



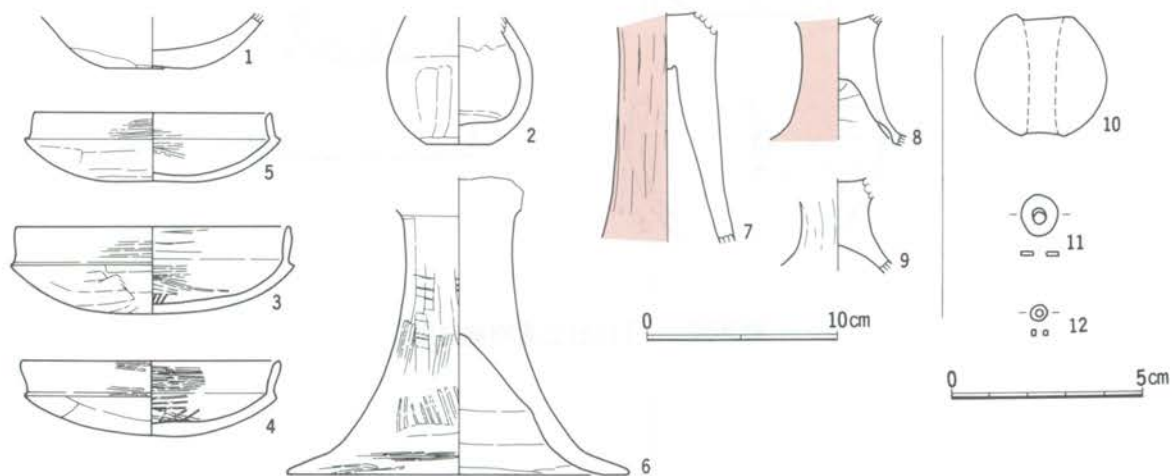
第35図 SI17遺構実測図



第36図 SI17出土遺物実測図



第37図 SI18・SI19遺構実測図



第38図 SI18・SI19出土遺物実測図

SI 18からは土師器、土玉、白玉等が出土した。

1は甕で、中央覆土中から出土した。赤褐色を呈し、胴部はヘラケズリされている。2はミニチュア土器で、中央部から出土した。現高6.7cmで、赤褐色を呈する。胴部は縦ヘラケズリが多用される。3～5は杯である。3は南隅周溝上から出土した。口径14.4cm、器高4.5cmで、赤褐色を呈する。体部は周縁に沿ってヘラナデされ、内面は緻密なヘラミガキが施される。なお、口縁部内外面にも疎らなヘラミガキが見られる。上記調整技法は、4・5にも共通して観察される。4は南隅付近から出土した。口径13.5cm、器高4.0cmで、赤褐色を呈する。5は北側柱穴脇の覆土中から出土した。口径12.4cm、器高4.2cmで、赤褐色を呈する。器表面は荒れている。6～8は高杯である。6は竈南袖上から出土した。現高15.5cmを測り、赤褐色を呈する。縦ヘラケズリ調整である。7は覆土中から発見された。頂部に残存する杯部内面は黒色でヘラミガキされている。脚部外面は赤彩され、縦ヘラケズリされる。8は覆土中から発見された。外面と残存する杯部内面は赤彩され、前者はヘラナデ、後者はヘラミガキされる。

10は土玉で、南側柱穴脇から出土した。茶褐色、ナデ仕上げである。最大径3.5cm、重量35.1gを量る。

11・12は滑石製白玉で、いずれも覆土中から発見された。11は直径9mm、厚さ1.8mm、重量0.2gを量る。12は直径5.0mm、厚さ1.9mm、重量0.01gを量る。

SI 19からは9の高杯が、北西壁寄りから出土した。赤褐色で、ヘラケズリ調整が見られる。

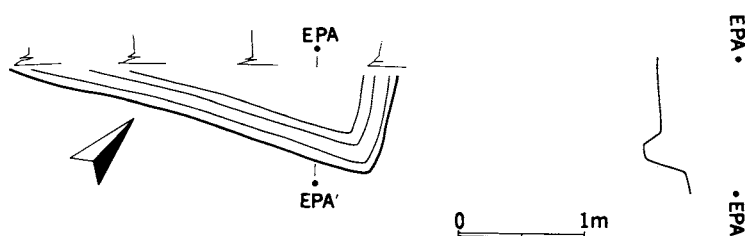
SI 20 (第39図)

遺構 遺構の大半が台地傾斜面にかかり、方形プランの一角しか検出できなかった。周溝が伴い、床面は西側に緩く傾斜している。遺物は出土しなかった。

SI 21 (第40図)

遺構 北東隅をSI 22Aに、南西から北東にかけてSD 1・SD 9・SD 18に攪乱されている。方形プランを呈するが、規模は不明である。竈はSD 9によって破壊されている。周溝は東壁に伴っている。四本柱穴は完備している。四本柱穴内側の床面は硬化している。

遺物 中央部覆土中から、1の土師器杯が出土した。外面は赤彩され、体部はヘラナデされる。



第39図 SI20遺構実測図

SI 22A・SI 22B (第41図、第42図、図版4、図版21、図版32、図版34、図版35)

遺構 SI 22Aは北東部でSI 23を攪乱し、北西辺でSI 10・SI 11に攪乱され、その埋没後に、南部をSI 22Bに掘り込まれている。

SI 22Aは8.6m×8.8mの方形プランを呈する大型住居跡である。北西壁北寄りに竈の一部が残存するが、大方はSI 10に破壊されている。しかし、床面には焼成硬化面が2か所見られ、複式竈であったことを想定させる。竈前面のP18・P23はちょうど各焼成硬化面の正面に位置しているため、両ピットは竈関連施設の一部と考えられる。支柱穴はP10・P11・P14・P15と中央のP19である。前者は一度立て替えられており、その間にP12・P13、P21・P22、P16・P17の間柱穴が配置される。周溝は全周し、その内壁には、土止め用の多数の小ピットが掘り込まれている。また、北東壁と南西壁からは、3条ずつの仕切り溝が、最寄りの柱穴にまで延びている。このほか北隅には貯蔵穴が、南東壁中央付近には梯子穴(P20)が付属する。床面は周囲の柱穴付近まで硬化面が広がっている。

SI 22BはSI 22Aの覆土中に営まれた住居跡である。一部残存していた竈と、東側の貼床硬化面の存在から、竪穴住居跡と認定し、SI 22Aの調査過程で検出された諸ピットの位置関係を考慮して、図示した遺構規模を想定した。一辺約3.3mの方形プランで、周溝の存在は不明である。北西壁中央には、SD1に破壊された竈の一部が残っている。P24・P25・P26・P27の四本柱穴を持ち、P28の梯子穴が伴う。東側貼床にはP26付近まで硬化面が広がっている。

遺物 土師器、土玉、転用砥具、鎌、刀子等が出土した。遺物のほとんどはSI 22Aからのものである。確実にSI 22Bから出土したのは8だけである。

1～4は甕である。1と2はSI 22Aの竈北脇から出土した。1は口径12.7cm、現高12.6cmで、赤褐色を呈する。胴部は縦ヘラケズリを多用するが、器面が荒れている。2は壺に近い器形で、口径10.0cm、器高11.0cmを測り、赤褐色を呈する。胴部は粗くヘラナデされ、底部には木葉圧痕が見られる。内面には煤が付着している。3・4は覆土中から発見された。3は口径9.3cm、現高9.0cmで、赤褐色を呈する。胴部は縦にヘラナデされる。4は赤褐色で、底部の周囲を横にヘラケズリされる。

5・6は土玉である。5はSI 22Aの北側覆土から発見された破片で、紐通し穴が僅かに残っている。赤褐色でナデ仕上げされている。6は覆土中から発見された。ナデ仕上げで、茶褐色を呈する。

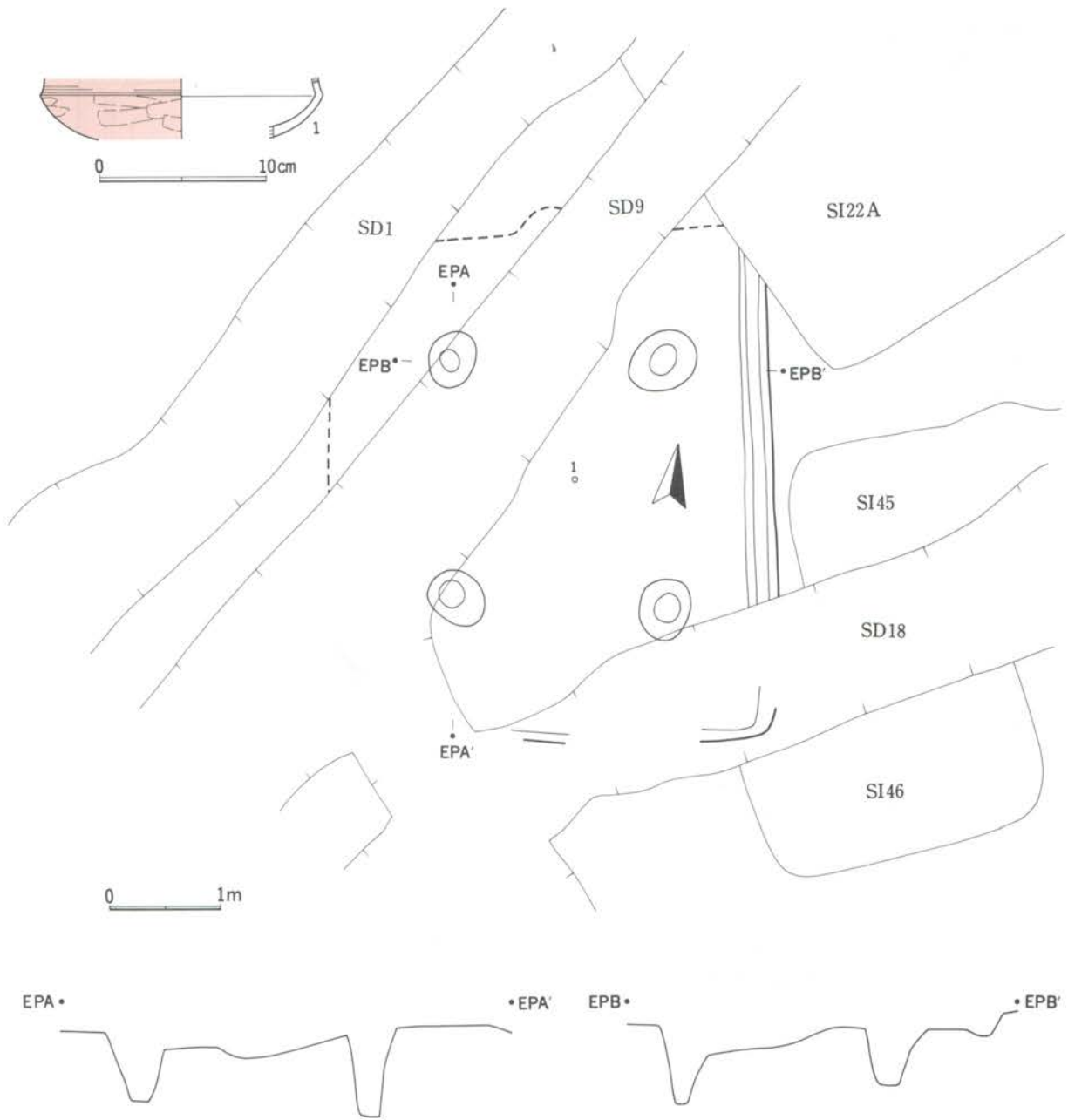
7は土器破片を転用した砥具で、覆土中から発見された。表面側のみに金属利子の擦痕が見られる。明褐色を呈し、裏面は赤彩されている。胎土には雲母を含む。

8・9は鎌である。8はSI 22Bの南隅覆土から出土した。基部は1cm程直角に折り曲げられ、鋒を僅かに欠く。現長12.3cmを測る。9に比べて、余り摩耗していない。9は覆土中から発見された。基部は7mm程直角に折り曲げられ、鋒を欠いている。刃部は基部近くまで摩耗が激しい。表面は錆化が進行し、錆膨れが多い。

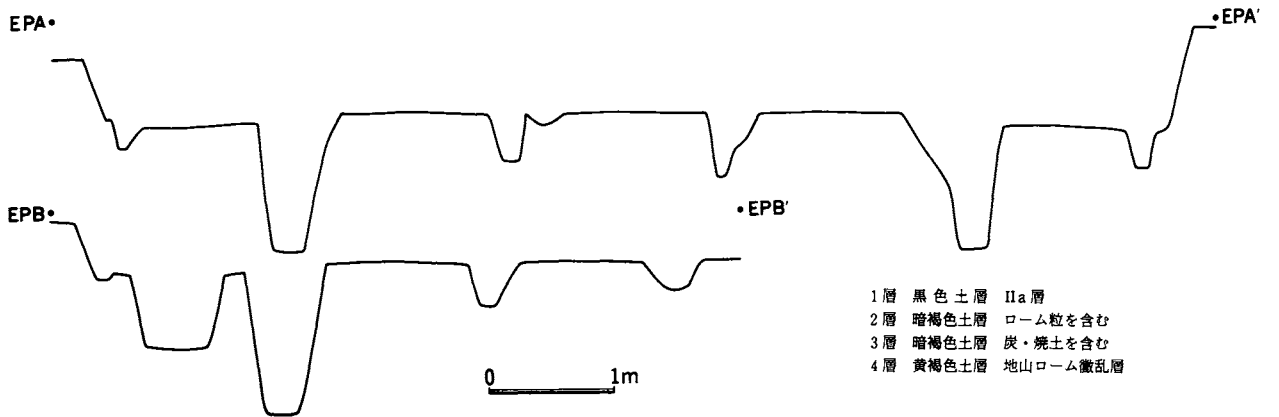
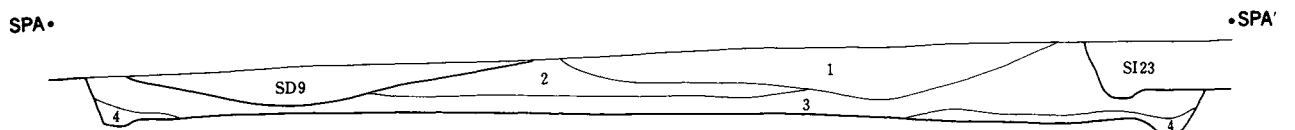
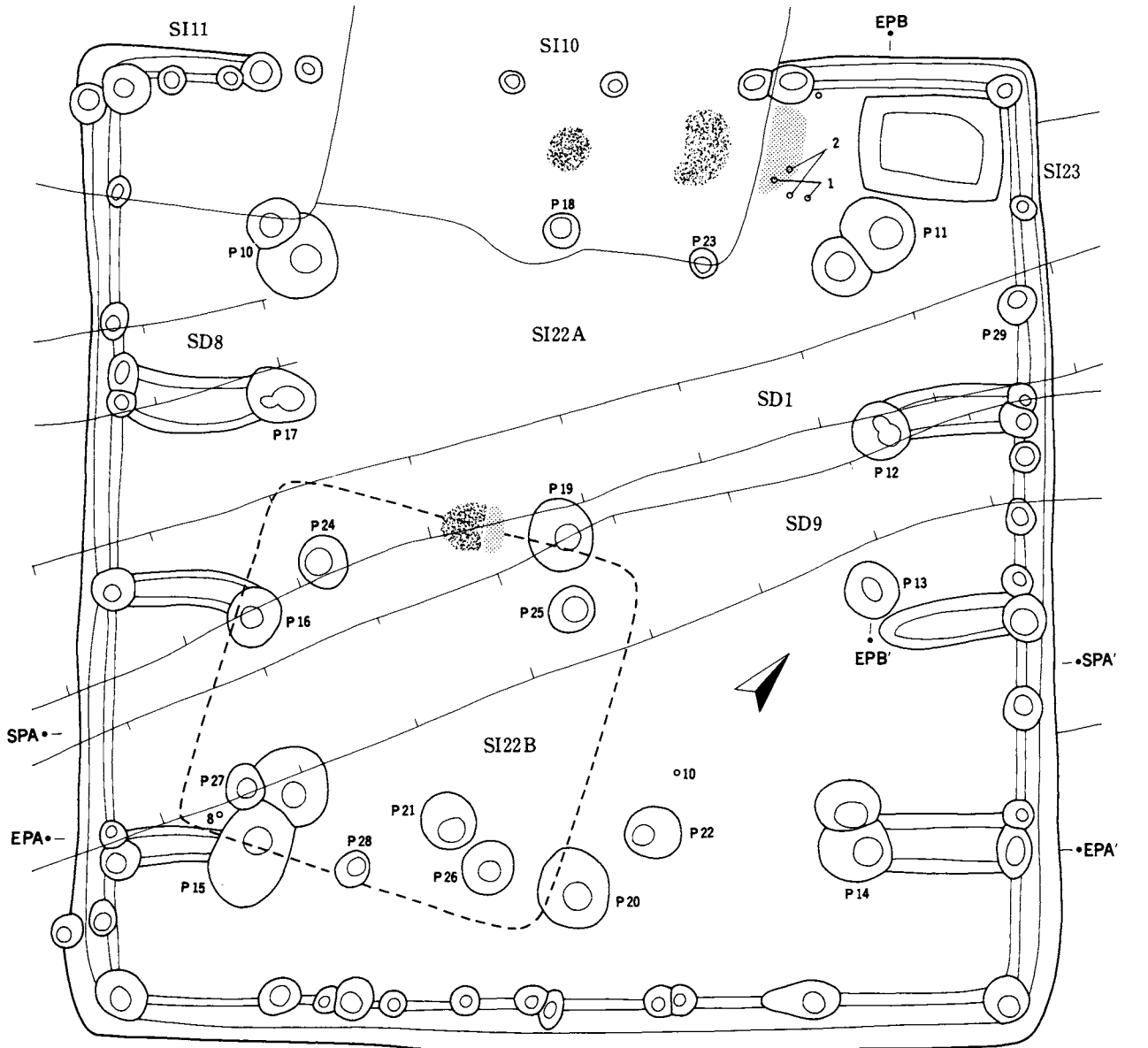
10は刀子で、SI 22Aの中央東寄りから出土した。刃部の半分を失っており、現長6.5cmを測る。棟関は段を作らず、緩く屈折している。錆化が著しい。

SI 23 (第43図、第44図、図版21)

遺構 北隅をSI 8に、南西側をSI 22Aに攪乱されている。また、東隅付近も近時の攪乱を受けていた。一辺約5mの方形プランを持つと思われる。北東壁中央に竈を備え、四本柱穴は完備する。調査範囲内で周

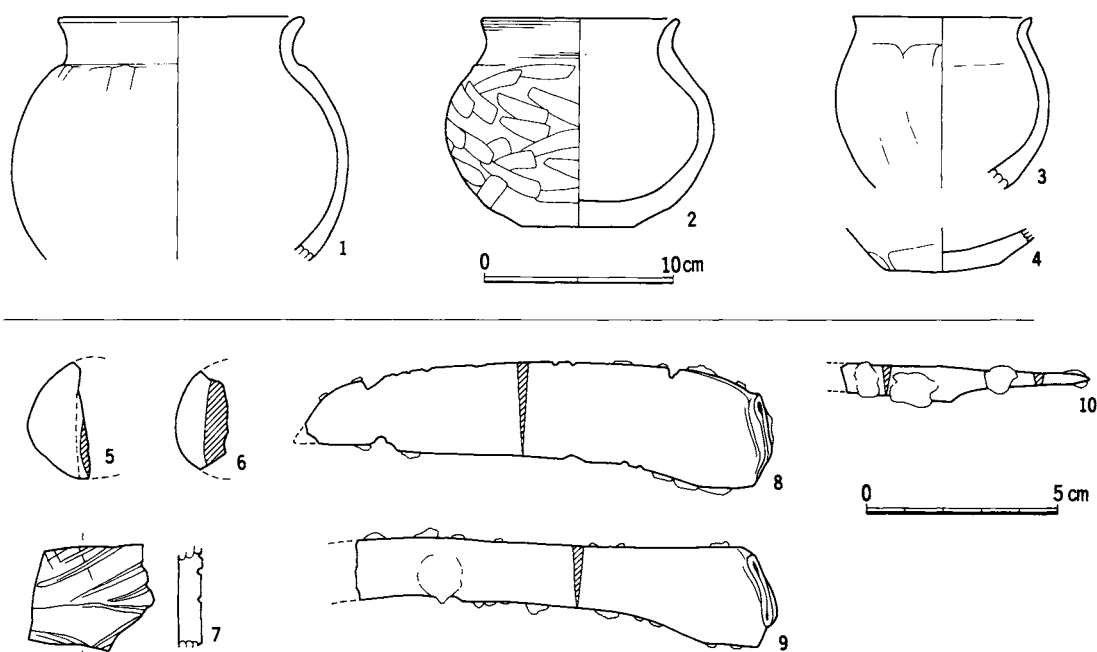


第40図 SI21遺構・出土遺物実測図



- 1層 黒色土層 IIa層
- 2層 暗褐色土層 ローム粒を含む
- 3層 暗褐色土層 炭・焼土を含む
- 4層 黄褐色土層 地山ローム攪乱層

第41図 SI22A・SI22B遺構実測図



第42図 SI22A・SI22B出土遺物実測図

溝は全周している。竈はSD 1 とSD 9 に上屋を完全に破壊されている。床面は中央付近に硬化面を持つ。

遺物 土師器が出土した。

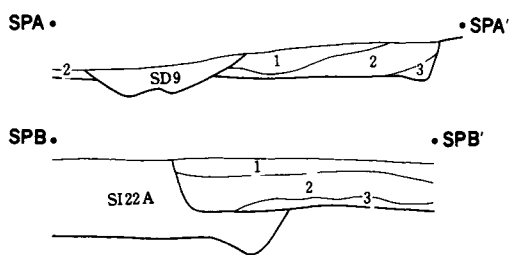
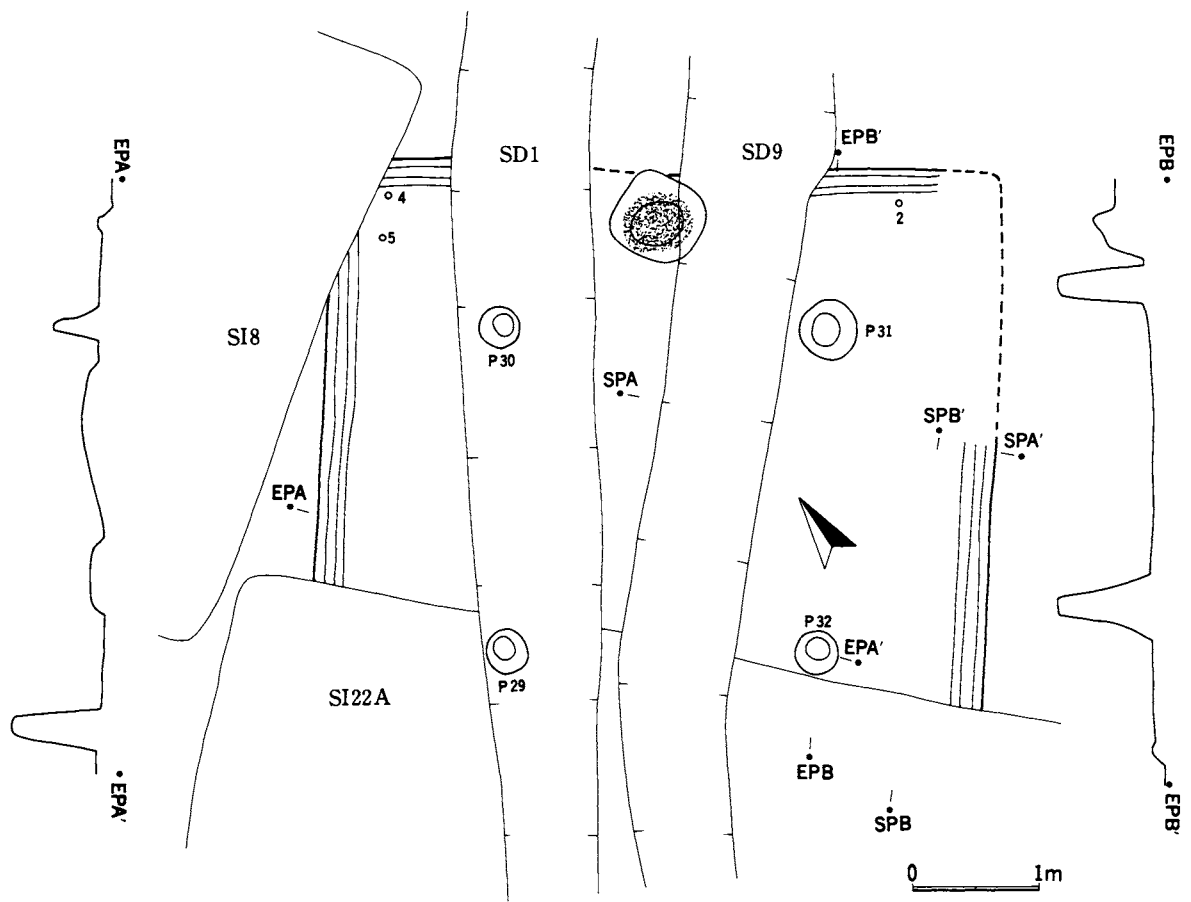
1は甗で、覆土中から発見された。口径22.0cm、現高11.6cmで、明褐色を呈する。頸部は横方向、胴部は下から上へのヘラナデが見られる。2・3は杯である。2は東隅付近から出土した。暗褐色を呈し、体部は周縁に沿ってヘラナデされる。3は覆土中から発見された。赤褐色を呈し、体部はヘラナデされ、内面は細い単位のヘラミガキが見られる。4は甗で、北隅付近から出土した。暗褐色を呈し、縦にヘラケズリされる。5は手捏ね土器で、北隅付近から出土した。現高3.5cmで、赤褐色を呈する。

SI 24 (第45図、第46図、図版6、図版7、図版21、図版22、図版34)

遺構 南東部は調査区域外に属し、調査不能であった。遺構の規模は不明である。西壁中央に竈が設けられ、周溝は全周する。四本柱穴中の1基のみが検出できた。竈は上部が遺構検出時に削平されている。床面は中央付近に硬化面がある。住居跡内には、人為的に投棄されたローム包含土が厚く堆積していた。

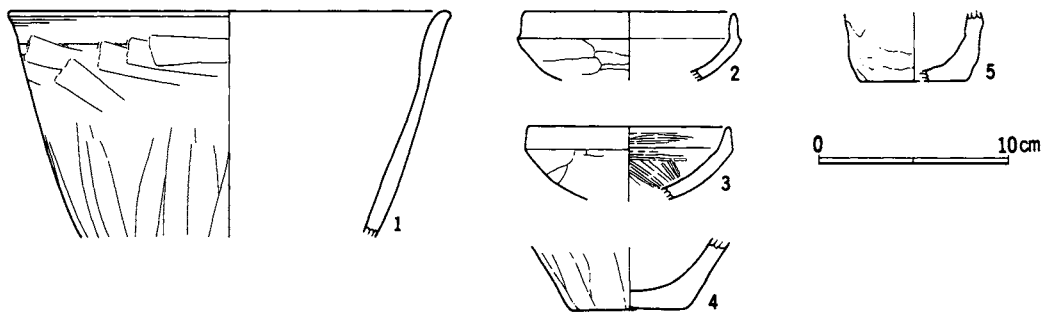
遺物 土師器、土玉が出土した。

1・2は甗である。1は3とともに、北壁際から伏せられた状態で出土した。口径15.3cm、器高18.8cmで、外面は褐色、内面は黒色を呈する。胴部はヘラケズリの後、粗い横方向のヘラミガキを施す。2は竈前面から出土した。現高6.6cmで、灰褐色を呈する。胴部にはヘラナデが見られる。3は甗で、1とともに北壁際から出土した。口径21.3cm、器高20.9cmで、明褐色を呈する。胴部はヘラケズリの後、粗いヘラミガキ、内面はヘラミガキ調整される。4～6は杯である。4は竈北脇の覆土から出土した。4は口径13.4cm、器高4.6cmで、内外面とも黒色処理され、胎土には雲母が混入している。口縁は疎らなヘラミガキが入り、体部は周縁に沿ってヘラナデされる。内面は放射状にヘラミガキされている。5は覆土中から発見された。

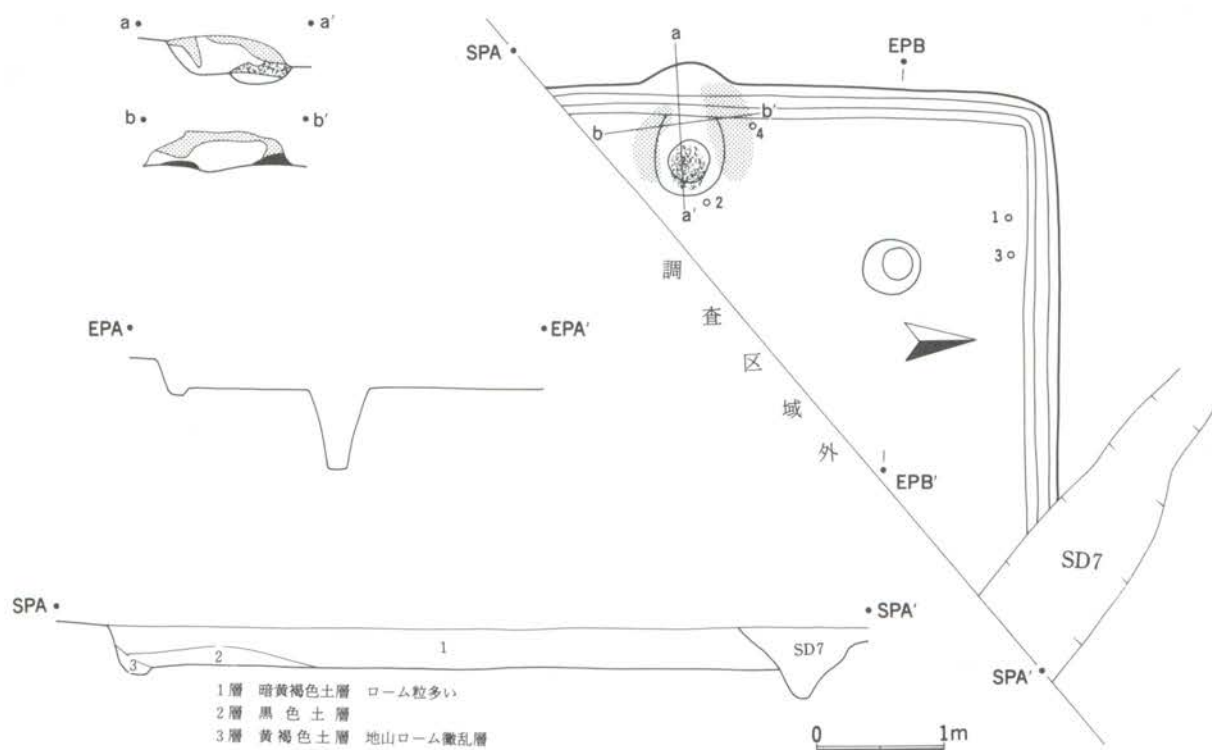


- 1層 黑色土層 IIa層
- 2層 暗褐色土層 炭を含む
- 3層 黄褐色土層 地山ローム微乱層

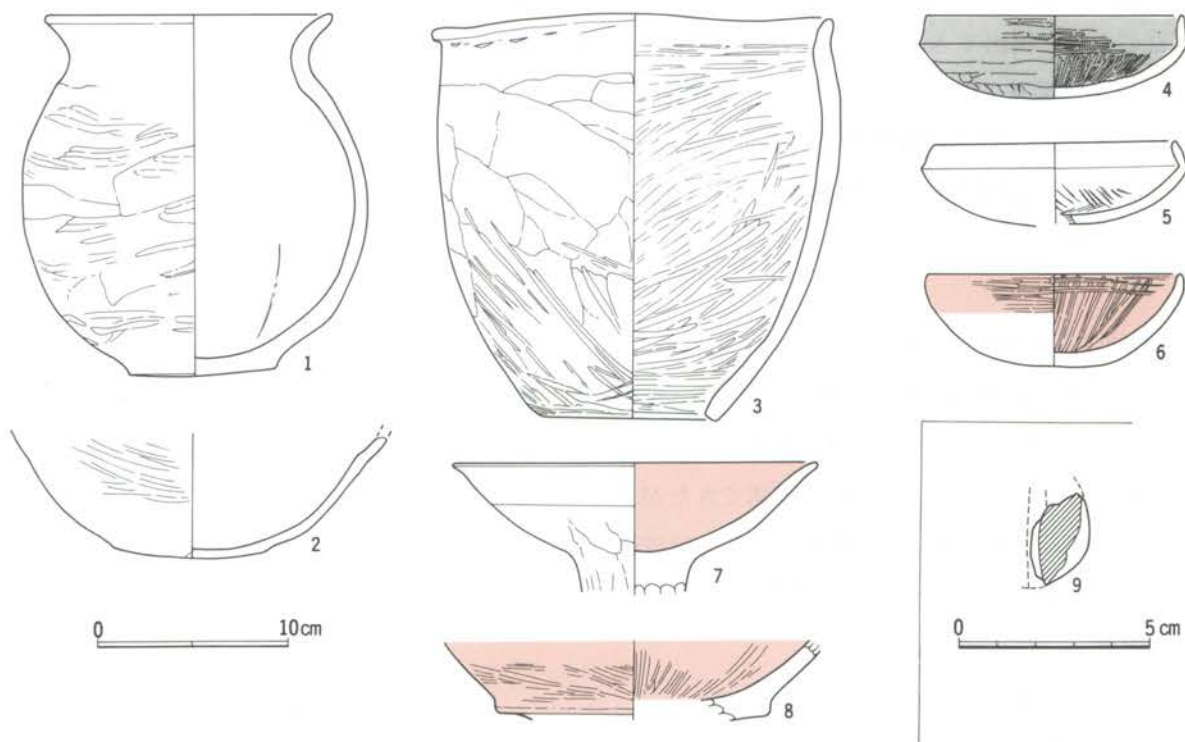
第43図 SI23遺構実測図



第44図 SI23出土遺物実測図



第45図 SI24遺構実測図



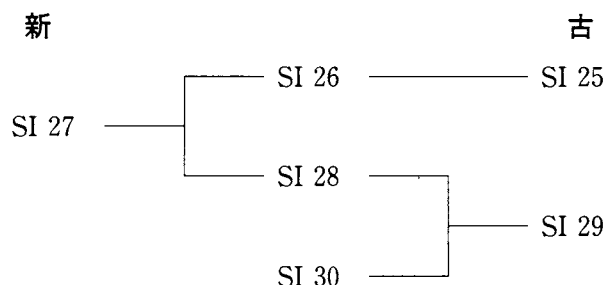
第46図 SI24出土遺物実測図

口径12.8cm、現高4.2cmで、暗褐色を呈する。体部はヘラナデ、内面はヘラミガキされている。6は覆土中から発見された。口径13.2cm、器高4.9cmで、外面上半と内面が赤彩されている。胎土には雲母を含む。体部はヘラナデの後、上半がヘラミガキされ、内面は粗く放射状にヘラミガキされている。7・8は高杯である。7は覆土中から発見された。口径19.3cm、現高6.6cmで、内面が赤彩される。体部はヘラナデ、脚部は縦にヘラケズリされる。8は覆土中から発見された。内外面とも赤彩されている。調整は内外面ともヘラミガキである。

9は土玉で、覆土中から発見された。赤褐色で、紐通し穴の一部が残存する。

第3節 SI 25～SI 30

新旧関係 SI 25～SI 30は一連の重複関係にある（第47図）。断面図SPA—SPA'から、SI 27はSI 26とSI 28を攪乱しているのがわかる。またSI 26はSI 25を攪乱している。断面図SPB—SPB'からはSI 28がSI 29を攪乱しているのがわかる。さらにSI 29の調査過程で、SI 30がSI 29を攪乱していることが判明した。以上の関係を図式的に示せば、次のようになる。



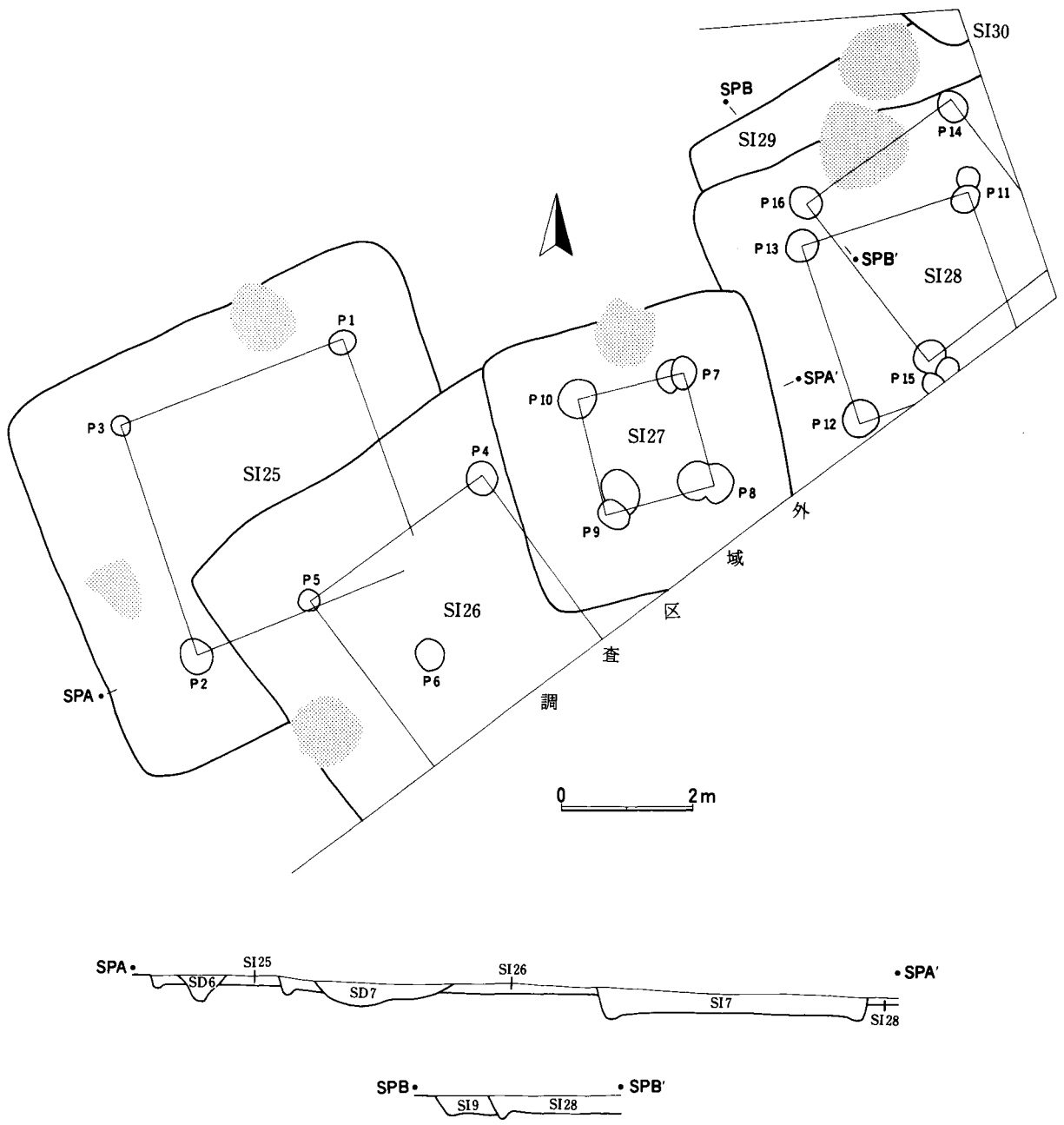
柱穴の帰属 SI 25はP1・P2・P3で四本柱穴を構成する。本来P1・P2間には柱穴が存在したはずだが、近時の攪乱のために検出できなかった。SI 26はP4・P5で四本柱穴を構成する。ほかの2基は調査区域外である。P6はほかの2基よりも浅く、柱穴の可能性は少ない。SI 27はP7・P8・P9・P10で四本柱穴を構成する。SI 28はP11・P12・P13で四本柱穴を構成する。P11・P12間の1基は調査区域外にある。SI 29の四本柱穴はP14・P15・P16で構成される。P14・P15間の1基は調査区域外である。SI 30はすべての柱穴が調査区域外である。

SI 25（第48図、第49図、図版22）

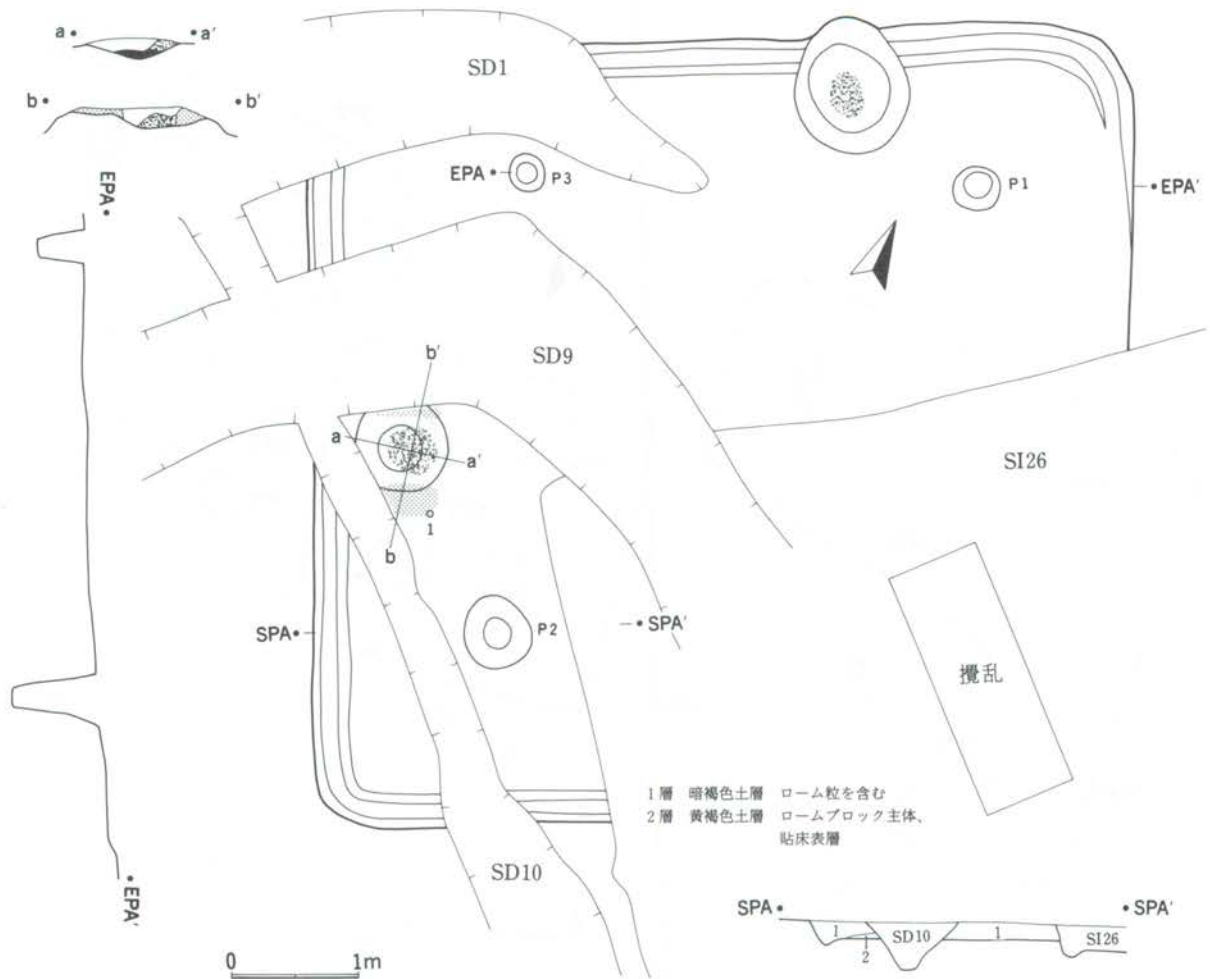
遺構 東側をSI 26に攪乱されている。一辺約5.6mの方形プランを持つ、掘り込みの浅い住居跡である。北西壁北寄りに旧竈が、南西壁中央に新竈が設置される。周溝を伴っているが、北東壁については不明である。四本柱穴のうち、P1・P2・P3が確認できたが、残る1基は近時の攪乱で破壊されていた。旧竈は上屋材が完全に撤去されていたが、船形ピットと焼成硬化面が残存している。新竈はSD9・SD10に攪乱されている。この竈は床面から直接、上屋材の砂質粘土を積み上げている。床面の状態は、四本柱穴まで硬化面が広がっている。

遺物 少量の土師器が出土した。

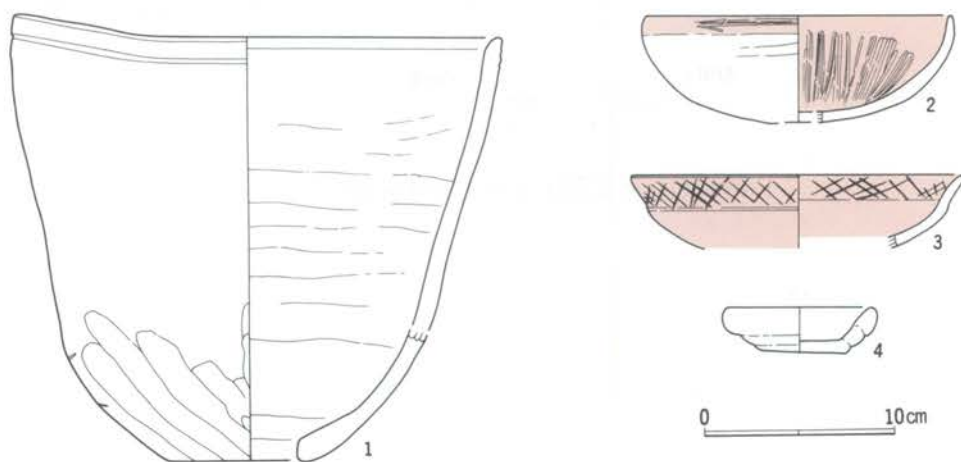
1は甗で、竈南脇から出土した。口径25.7cm、器高23.2cmで、赤褐色を呈する。胴部はヘラナデ、底部付近はヘラケズリされる。内面には粘土紐接合痕が随所に残る。2は杯で、覆土中から発見された。口径16.2cm、器高5.5cmで、口縁と内面が赤彩されている。体部はヘラナデ調整し、内面は放射状にヘラミガキ



第47図 新旧関係と柱穴の帰属 (2)



第48図 SI25遺構実測図



第49図 SI25出土遺物実測図

が入る。3は高杯で、覆土中から発見された。内外面とも赤彩されている。内外面ともに、口縁は斜格子状に陰刻され、体部はヘラミガキされている。4は手捏ね土器で、覆土中から発見された。口径8.0cm、器高2.4cmで、赤褐色を呈する。ナデ調整で仕上げられ、底部には木葉圧痕が見られる。

SI 26 (第50図、第51図、図版22、図版31)

遺構 南側3分の1程が調査区域外に属し、西側でSI 25を攪乱し、東側でSI 27に攪乱されている。この住居跡は火災を被っており、覆土が炭・焼土の包含層で、床面中央に焼土が散布していた。方形プランを持つが、規模は不明である。竈は南西壁中央に設置される。また北西壁中央の壁際床面には、砂質粘土の堆積と円形の焼成硬化面が検出された。円形の焼成硬化面付近の床面レベルは、周囲より30cm程下がっている。竈に伴う船形ピットの可能性がある。壁外に延びる煙道部の掘り込みの有無は不明である。周溝は調査範囲内では全周している。四本柱穴のうち、P4・P5の2基が確認された。中央竈寄りに存在するP6は、床面下25cmと、四本柱穴に比べて浅いので、柱穴となる可能性は少ない。残存する床面は、硬化面が広範に確認された。

遺物 東南壁際を中心に、土師器、尖頭器がすべて覆土中から出土した。

1・2は甕である。1は西隅付近から出土した。赤褐色で、胴部はヘラナデされる。内面には輪積痕が残る。2は竈北脇から出土した。口径12.2cm、現高7.3cmで、赤褐色を呈する。胴部は縦ヘラケズリが周回し、内面には煤が付着している。3は杯で、2とともに竈北脇から出土した。口径14.8cm、器高5.2cmで、内外面とも赤彩されている。口縁は内外面ともヘラミガキされ、体部は外面ヘラナデ、内面ヘラミガキである。

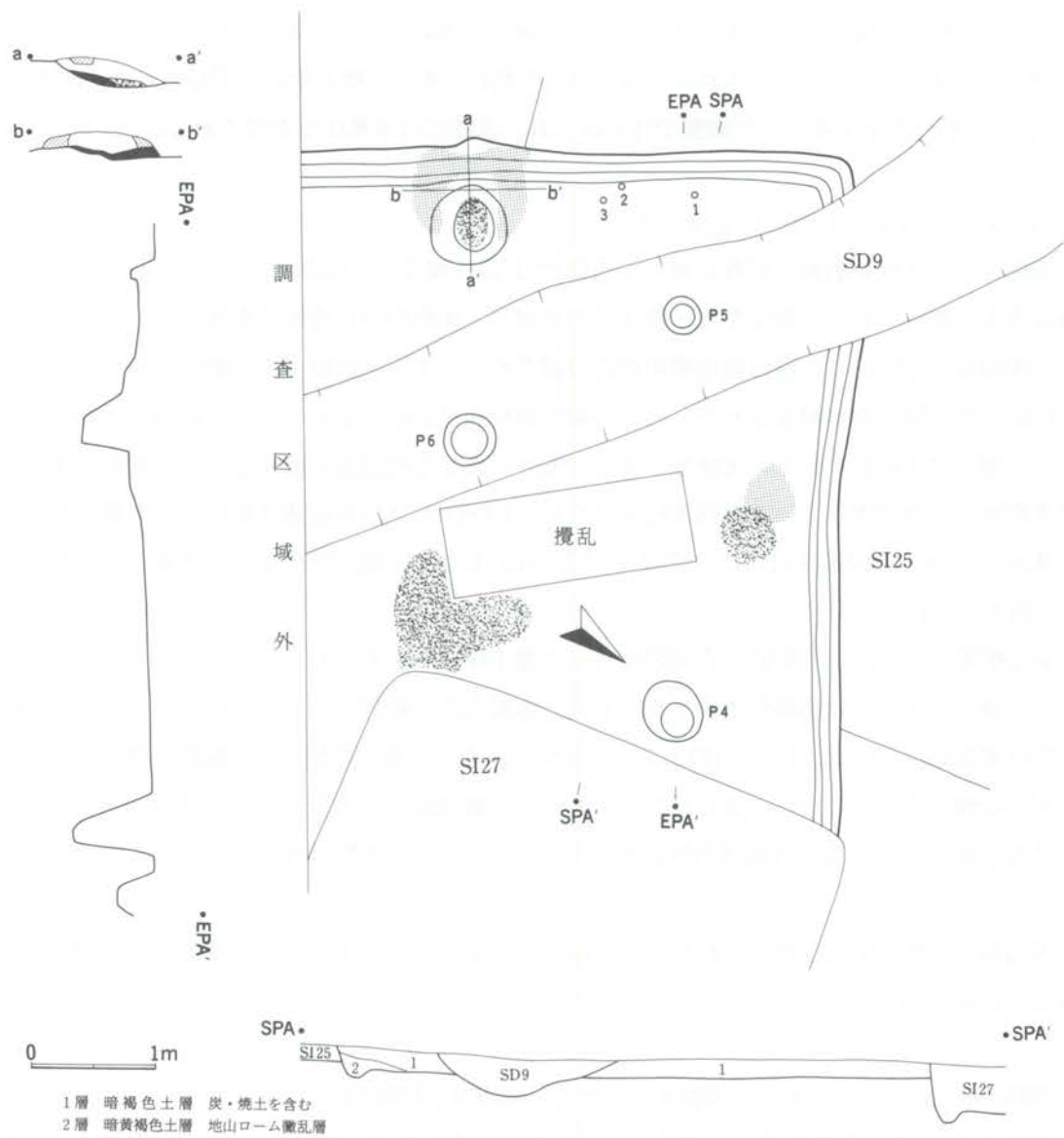
4は尖頭器で、覆土中から発見された。安山岩製で、重量3.1gを量る。片面両側から剝離されて、刃部を形成している。

SI 27 (第52図、第53図、図版7、図版8、図版22、図版31、図版33)

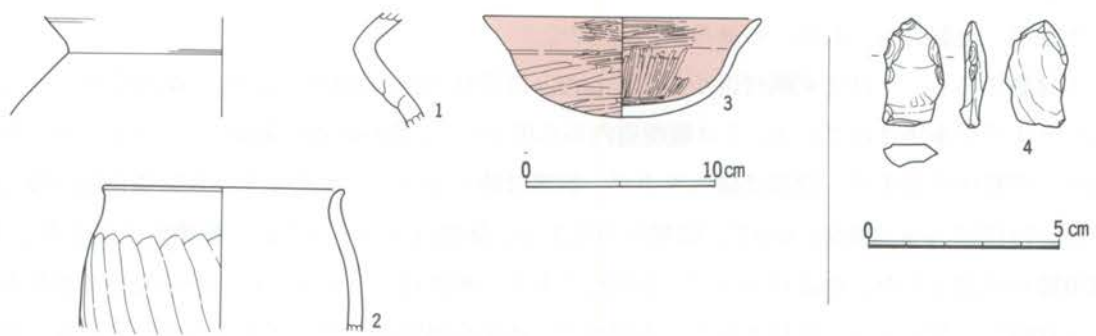
遺構 西側でSI 26を、東側でSI 28を攪乱し、南東端は調査区域外に属している。一辺4.1mの方形プランを呈し、北壁中央に竈を備える。周溝は南西隅付近は確認できなかった。四本柱穴は完備している。P7の南脇床面上には、焼土塊があった。竈の遺存状況は良好である。床面は硬化面が広範に広がっている。自然埋没住居と考えられる。

遺物 土師器、土製勾玉、石核、石鏃等が出土した。

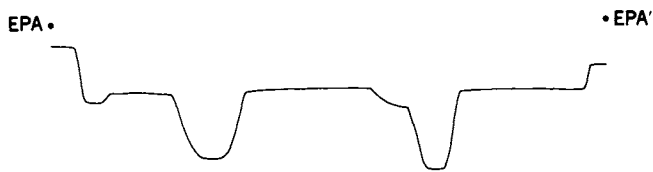
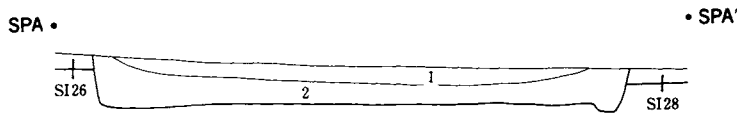
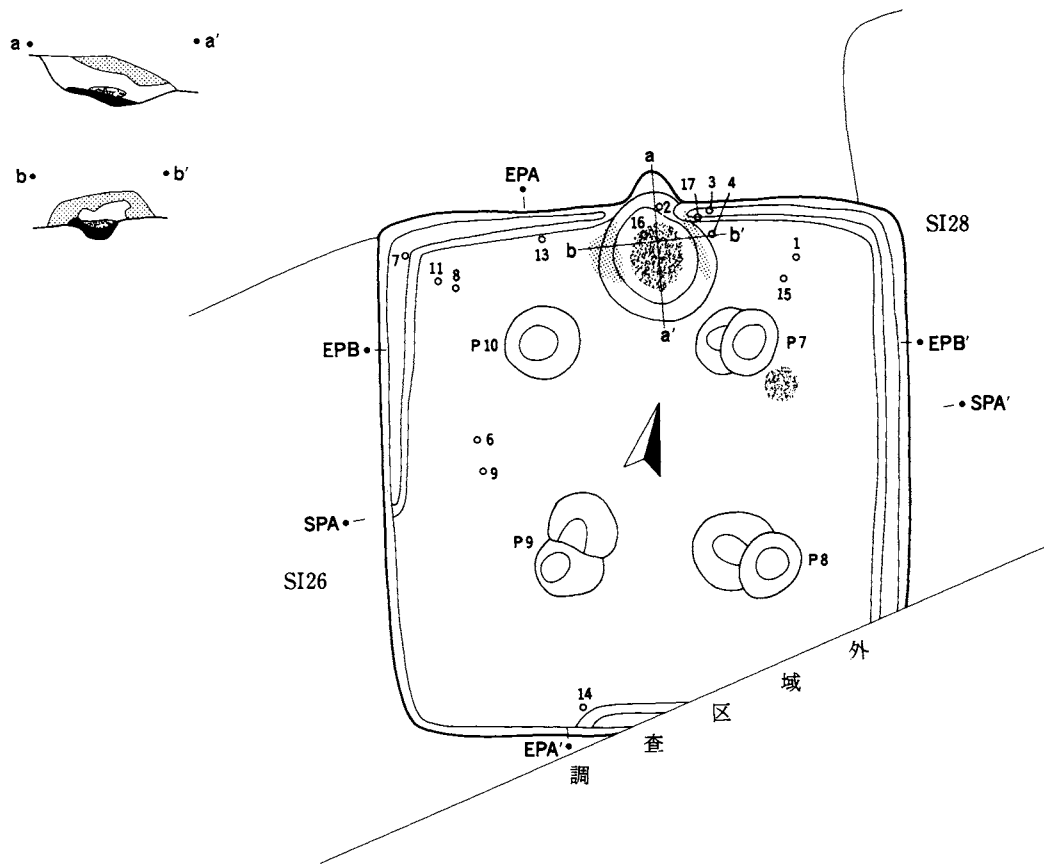
1～4は甕である。1は北東隅付近から出土した。口径16.0cm、器高23.5cmで、暗褐色を呈する。胴部は縦のヘラナデが多用されている。2は竈煙道内から出土した。壺形に近い器形で、口径11.7cm、現高12.3cmを測り、明褐色を呈する。肩部は横ヘラナデ、胴部は疎らなヘラナデを施す。3は竈東脇の覆土中から出土した。口径12.4cm、現高8.6cmで、暗褐色を呈する。体部はヘラナデされ、輪積痕をよく残している。4は竈東脇から出土した。現高11.0cmで、赤褐色である。胴部はヘラナデされ、熱を受けて器面が荒れている。5は甗で、覆土中から発見された。赤褐色で、底部の周囲はヘラケズリされている。6～9は杯である。6は中央西寄りから出土した。口縁と内面は赤彩されている。体部はヘラミガキされ、内面は全体がヘラミガキされる。7は北西隅から出土した。口径11.4cm、器高4.2cmで、暗褐色を呈する。口縁はヘラミガキ、体部はヘラナデされ、内面は全面に緻密なヘラミガキが施される。8は北西隅付近から出土した。



第50図 SI26遺構実測図

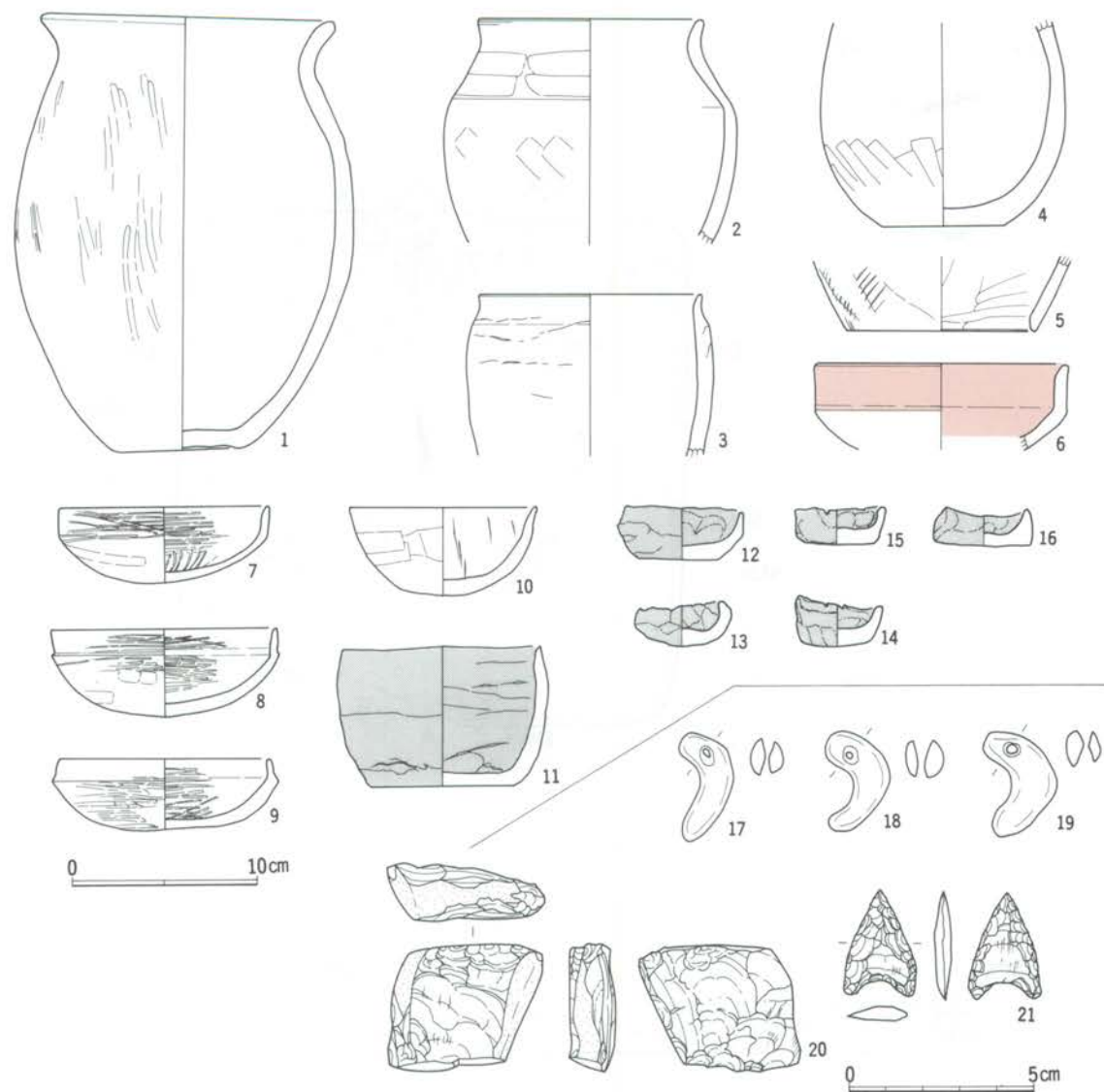


第51図 SI26出土遺物実測図



1層 黒色土層 IIa層
 2層 暗褐色土層 ローム粒を含む

第52図 SI27遺構実測図



第53図 SI27出土遺物実測図

口径12.2cm、器高4.7cmで、赤褐色を呈する。口縁はヘラミガキ、体部は周縁に沿ってヘラナデされ、内面は全面にヘラミガキされる。9は6とともに、中央西寄りから出土した。口径11.4cm、器高3.9cmで、赤褐色である。体部と内面には、比較的雑なヘラミガキが施される。10は椀で、覆土中から発見された。口径10.4cm、器高4.8cmで、暗褐色を呈する。体部はナデの後、粗い横のヘラナデで調整される。11は手捏ね的技法の鉢で、8とともに北西隅付近から出土した。口径10.9cm、器高7.3cmで、暗褐色を呈するが、内外面に黒色処理の痕跡が残っている。体部はナデ仕上げであるが、輪積痕がよく観察できる。底部には木葉圧痕が見られる。12～16は手捏ね土器で、11と同様、いずれも内外面に黒色処理の痕跡が残っている。12は覆土中から発見された。口径6.3cm、器高2.9cmを測り、赤褐色である。体部の稜以下は雑なヘラ調整で、凹凸が著しく、粘土粒を継ぎ足した痕跡がよく残っている。13は竈西脇から出土した。口径4.3cm、器高2.8cmで、赤褐色を呈する。1枚の粘土板から成形されており、内面には指圧痕が周回する。14は南壁際から

出土した。口径4.5cm、器高2.9cmで、暗褐色を帯びる。成形法は13と同様だが、底部外面はヘラで調整している。15は北東隅付近から出土した。口径4.5cm、器高2.1cmで、暗褐色を帯びる。成形法は13・14と同様だが、底部は硬い物に押し当てて平坦面を調整する。16は竈内から出土した。口径4.5cm、器高2.1cmで、赤褐色を呈する。成形、調整とも15と同様である。

17～19は土製勾玉である。17は竈東袖上から出土した。長さ3.0cm、重量3.3gで、赤褐色を呈するが、僅かに黒色処理の痕跡を残す。粘土紐を折り曲げ、一端を両側から穿孔して、他端を細くして成形している。穿孔部は未調整で、雑な仕上げである。18は覆土中から発見された。長さ2.7、重量3.6gで、特徴は17に準じる。19は覆土中から発見された。長さ2.8cm、重量5.2gで、特徴は17・18に準じる。

20は石核で、覆土中から発見された。チャート製で、26.5gを量る。両極に打面を持っている。

21は石鏃で、覆土中から発見された。安山岩製で、両面の外縁部を剥離している。重量2.0gを量る。

SI 28 (第54図、第55図、第56図、図版23、図版32、図版34)

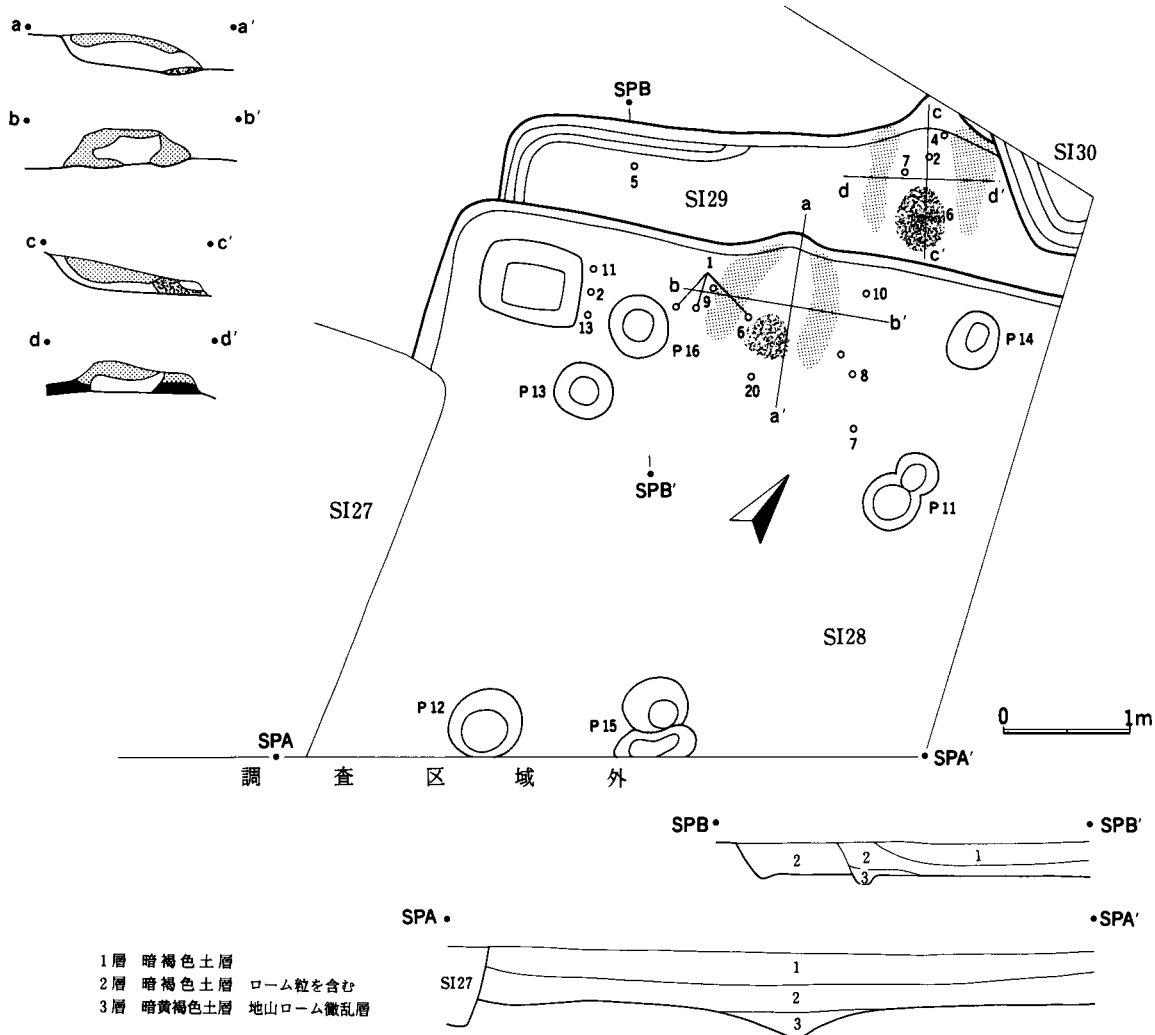
遺構 SI 29・SI 30とともに、調査区域の東端に位置する住居跡である。北側でSI 29を攪乱し、西壁はSI 27に攪乱され、東南側の一部は調査区域外に達している。規模不明の方形プランを持つ。北壁中央に竈があり、周溝は存在しない。四本柱穴はP11・P12・P13から構成され、残る1基は調査区域外に出ている。このほか北西隅には貯蔵穴がある。また、P15に接する不整形ピット (SPA—SPA'にかかる) は、本住居跡の梯子穴の可能性がある。竈の遺存状態は良好であるが、遺構検出時に上面が若干削平された。顕著な船形ピットは認められない。床面は硬化面が広範に広がっている。

遺物 竈を中心として、土師器、土玉、転用砥具等が出土した。

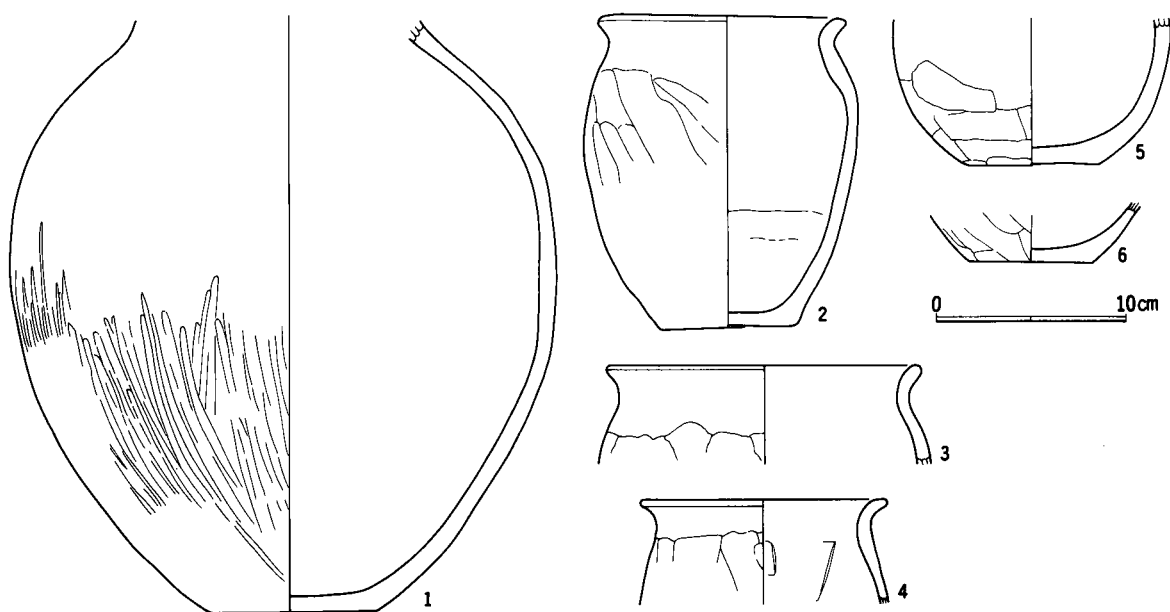
1～6は甕である。1は竈周辺から散乱した状態で出土した。現高30.5cmで、暗褐色を呈する。胎土に石英、長石、雲母を含む。胴部調整はヘラナデの後、下半部に縦のヘラミガキが入る。2は貯蔵穴脇の覆土から出土した。口径12.8cm、器高16.3cmで、暗褐色を呈する。胴部は縦のヘラケズリを多用する。底部には木葉圧痕が認められる。下半部は器面が荒れている。3は覆土中から発見された。赤褐色で、胴部はヘラケズリされている。4は覆土中から発見された。胴部にはヘラケズリが見られる。5は覆土中から発見された。明褐色で、底部周辺は横にヘラケズリされる。6は竈内から出土した。赤褐色で、底部周囲にヘラケズリが認められる。7～10は杯である。7は竈東脇から出土した。明褐色で、体部は周縁に沿ってヘラナデされる。8は竈東脇から出土した。口径15.6cm、器高5.0cmで、明褐色を呈する。体部調整はヘラナデである。9は竈西脇から出土した。口径13.2cm、器高4.6cmで、明褐色を呈する。体部は周縁に沿ってヘラケズリされる。10は竈東脇から出土した。口径13.6cmで、赤褐色を呈する。体部は周縁に沿ってヘラケズリされる。

11・12は土玉である。11は貯蔵穴脇から出土した。最大径1.8cm、重量4.9gを量る。黒色で、ナデ仕上げされ、紐通し面は両面にわたり面取りされている。12は覆土中から発見された。最大径1.8cm、重量8.0gを量る。茶褐色で、ナデ仕上げされ、紐通し面の両面が面取りされる。

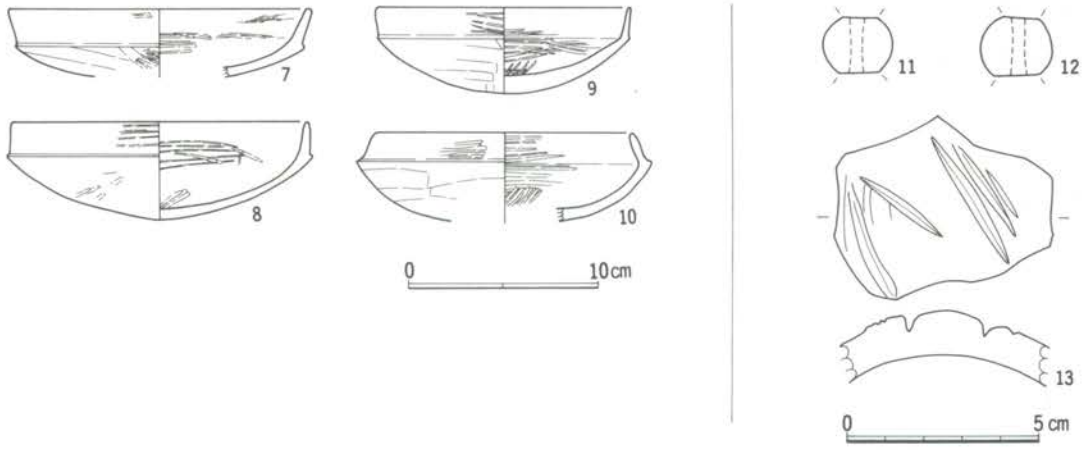
13は土器片転用砥具で、貯蔵穴脇の覆土から出土した。刃器による擦痕が、土器片の表側のみに見られる。赤褐色を呈する。



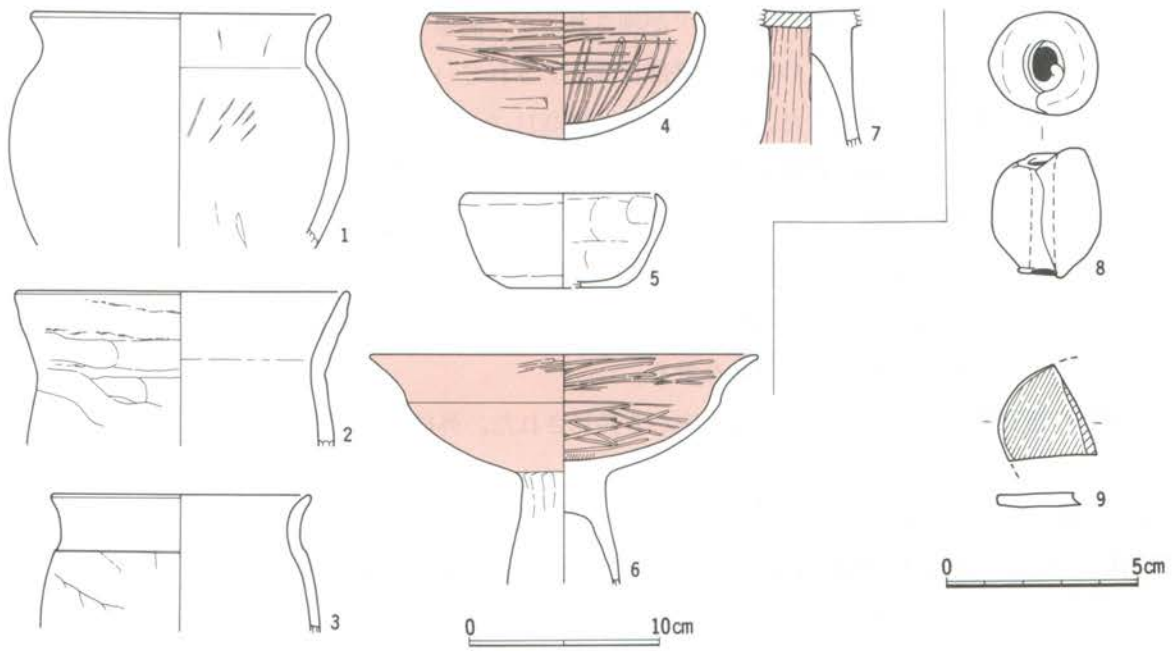
第54図 SI28・SI29・SI30遺構実測図



第55図 SI28出土遺物実測図(1)



第56図 SI28出土遺物実測図 (2)



第57図 SI29出土遺物実測図

SI 29・SI 30 (第54図、第57図、図版23、図版33、図版34)

遺構 SI 29は北端がSI 30に、南側大半がSI 28に攪乱され、東半分は調査区域外となっている。したがって、調査できたのは竈を含む僅かな範囲にすぎなかった。北壁に竈を持つ方形プランと推定される。周溝は竈手前でとぎれている。四本柱穴のうちP14・P15・P16の3基が確認できた。これらの配置からすると、竈の位置は東に若干ずれているかもしれない。竈は東袖がSI 30に接し、煙道部先端は調査区域外にあって、遺構検出時に上面が削平された。顕著な船形ピットを伴わない。

SI 30は方形プランの一角(南隅)が、僅かに調査区域にかかってSI 29を攪乱している。周溝を伴っている。

遺物 遺物はすべてSI 29からのもので、SI 30は無遺物である。土師器、土玉、石製模造品等が出土した。

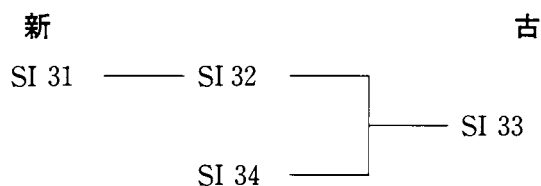
1～3は甕である。1は竈内から出土した。口径15.8cm、現高12.2cmで、赤褐色を呈する。胴部はヘラナデされている。2は竈内から出土した。口径17.6cm、現高8.0cmで、赤褐色である。胴部は横のヘラケズリが多用される。口縁付近は輪積痕を残している。3は覆土中から発見された。口径13.6cm、現高7.1cmで、明褐色を呈する。胴部はヘラケズリされる。4・5は杯である。4は竈煙道内から出土した。口径14.2cm、器高6.5cmで、内外面に赤彩されている。体部は横のヘラケズリの後、上半がヘラミガキされる。内面には粗い放射状ヘラミガキが入っている。5は西隅寄りの壁際から出土した。口径10.9cm、器高4.9cmで、赤褐色を呈する。体部はナデの後、弱いヘラナデが施されるが、調整不十分で、器壁の厚みにむらがある。内面のほうが丁寧にヘラナデされている。口縁部は横ナデされていない。手捏ね風の土器である。6・7は高杯である。6は竈内から出土した。口径20.5cm、現高11.9cmで、杯部は内外面とも赤彩されている。体部は、外面がヘラナデ、内面は斜格子状にヘラミガキされる。7は覆土中から発見された。現高6.9cmで、外面が赤彩される。脚部調整は縦ヘラケズリである。

8は土玉で、西寄りの覆土中から発見された。長さ3.5cmで、茶褐色を呈する。不十分なナデ調整で、粘土帯の接合痕が明瞭に残っている。紐通し面からは、渦巻き状の粘土帯が観察できる。細棒に粘土帯を巻き付けて成形された製品である。27.1gを量る。

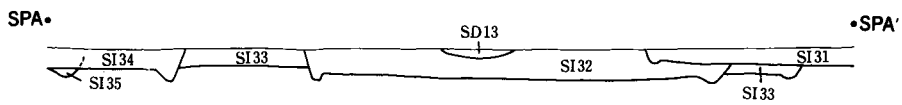
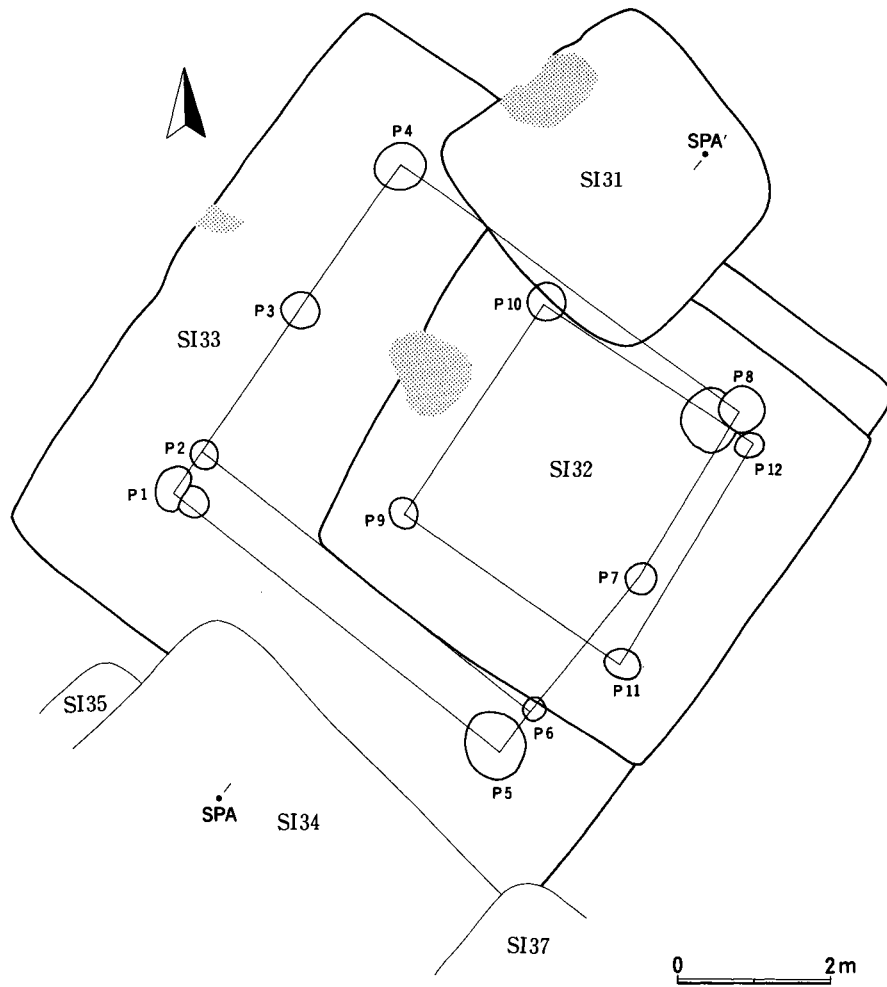
9は鏡形の滑石製模造品の一部で、覆土中から発見された。外縁と片面が磨られている。3.6gを量る。

第4節 SI 31～SI 33

新旧関係 SI 31～SI 33及びSI 34は一連の重複関係にある(第58図)。断面図SPA—SPA'から明らかなように、SI 31はSI 32とSI 33を攪乱している。また、SI 32とSI 34は、SI 33を攪乱している。以上の関係を図式的に示せば、次のようになる。



柱穴の帰属 SI 31は柱穴がなく、SI 34は位置がずれるので、SI 32とSI 33の関係について述べる。SI 32に属するピットは、P9～P12の4基で、単純な四本柱穴を構成する。SI 33に属するピットは、P1～P8の8基である。SI 33は南西壁が拡張されており、P2→P1、P6→P5の移築は、それに対応している。また、P1・P4間にP3が、P5・P8間にP7が入るので、この住居跡の柱列配置は1間×2間となる。



第58図 新旧関係と柱穴の帰属 (3)

SI 31 (第59図、第60図、図版 8、図版34、図版35)

遺構 南西側でSI 32・SI 33を攪乱している。3.3m×3.6mの不整形プランの小型住居跡である。北西壁中央に竈を持ち、周溝は北側を半周する。柱穴は検出されなかった。竈は焚き口側の残りが悪く、上面は遺構検出時に削平された。床面は広範に硬化している。

遺物 遺物は少なく、土玉、鉄製品が出土した。

1は土玉で、南東壁寄りから出土した。最大径2.2cmで、茶褐色を呈する。紐通し面は両面とも面取りされている。重量8.6gを量る。

2は鉄製品の一部で、全体の形状は不明である。覆土中から発見された。長さ6.3cmで、両端を折損している。現在は半円筒形になっているが、本来は円筒形であったと考えられる。また、全体が僅かに湾曲しているが、これも本来は真直であったろう。重量9.3gを量る。

SI 32 (第61図、第62図、図版 8、図版23、図版34)

遺構 SI 33の西側を攪乱し、北隅はSI 31に攪乱される。5.1m×5.6mの台形に近いプランを呈する。北西壁中央に竈が設けられ、周溝は全周している。四本柱穴は完備し、貯蔵穴は北隅と東隅に2基備えている。竈は南袖をSD 13に攪乱されていた。床面は広範に硬化している。

遺物 各所から土師器、土玉、白玉等が出土した。

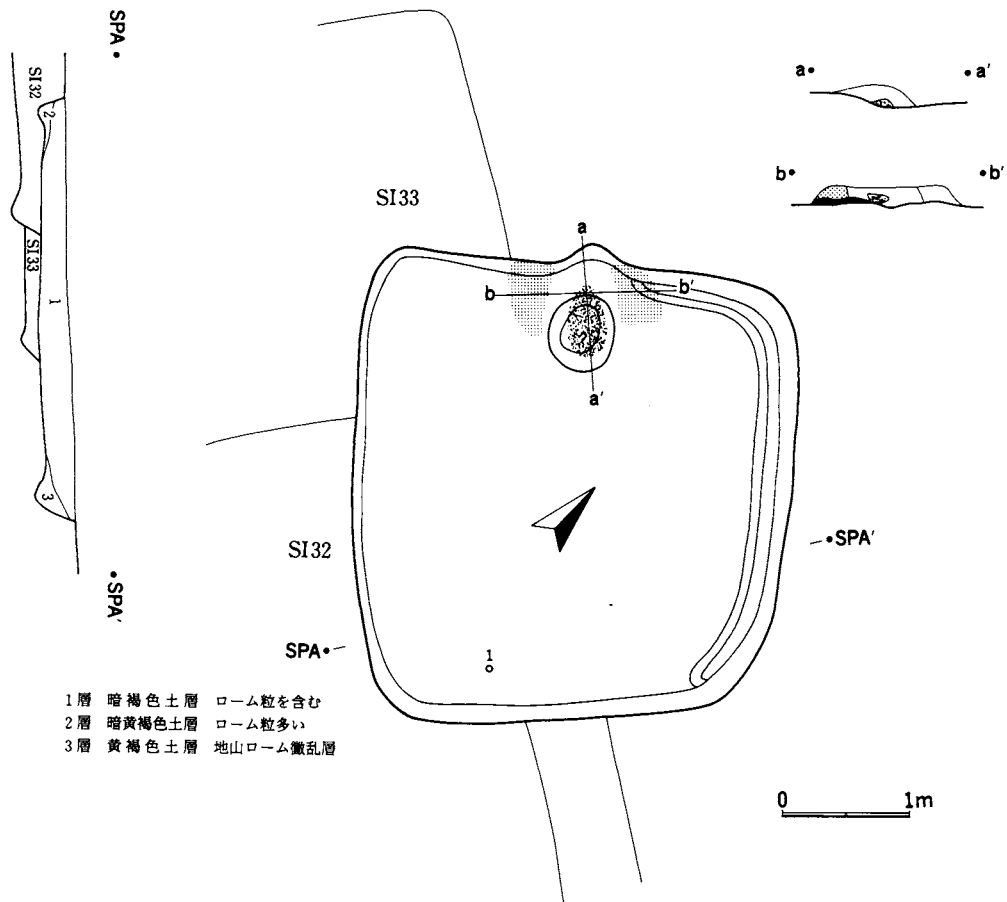
1は甕で、中央北寄りから出土した。口径21.3cm、現高8.2cmで、灰褐色を呈し、胎土には石英、長石を含む。胴部はヘラナデされている。2～5は杯である。2は北隅に近い周溝上から出土した。口径15.5cm、器高4.4cmで、赤褐色を呈する。体部はヘラナデされ、内面は細いヘラナデで、平滑にされている。3は中央から出土した。口径13.4cm、器高3.8cmで、明褐色だが、大きな黒斑が入っている。調整技法は2と等しい。4はP1付近から出土した。口径12.0cmで、赤褐色を呈する。体部は周縁に沿ってヘラケズリされる。内面はヘラナデで平滑にされている。5は南東壁際の覆土中から出土した。口径13.0cm、器高4.8cmで、赤褐色だが大きな黒斑が入っている。体部は周縁に沿ってヘラケズリされ、内面は細いヘラミガキが密に見られる。6～9は高杯である。6は5とともに、南東壁際の覆土中から出土した。口径15.0cm、現高9.9cmで、暗赤褐色を呈し、杯部内面は黒色処理されている。体部は放射状にヘラケズリされ、脚部は縦ヘラケズリされる。杯部内面は放射状にヘラミガキされている。7は中央東寄り覆土中から出土した。現高9.2cmで、赤褐色を呈し、内面は黒色処理されている。脚部は縦ヘラケズリが多用される。8は東隅付近の覆土から出土した。

10は土玉で、中央北寄り覆土中から出土した。最大径3.0cm、重量18.2gを計り、明褐色を呈する。ナデ仕上げで、紐通し面は両面とも面取りされている。

11は白玉で、P9脇の覆土中から出土した。滑石製で、直径6mm、重量0.2gを量る。

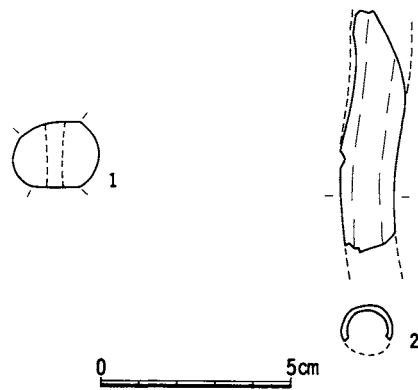
SI 33 (第63図、第64図、図版 8、図版24、図版31、図版34)

遺構 東側をSI 31とSI 32に、南側をSI 34に攪乱されている。8.2m×8.5mの方形プランを呈する大型住居跡である。竈は北西壁中央に備えられ、周溝は北隅、南隅付近には存在しない。柱穴はP1～P8で、1間×2間に配置される。このほか貯蔵穴が竈北脇に設置されている。

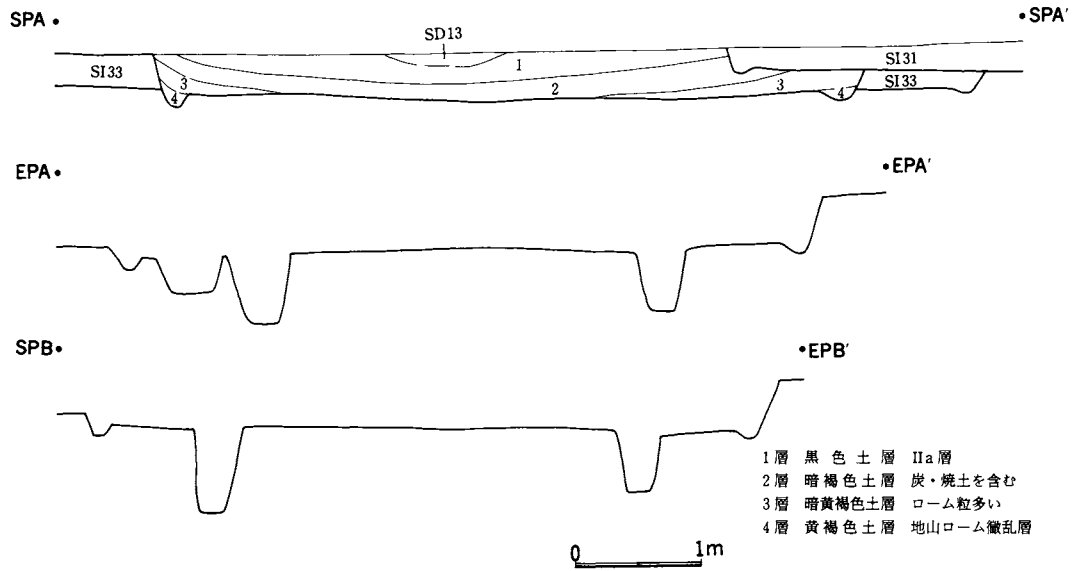
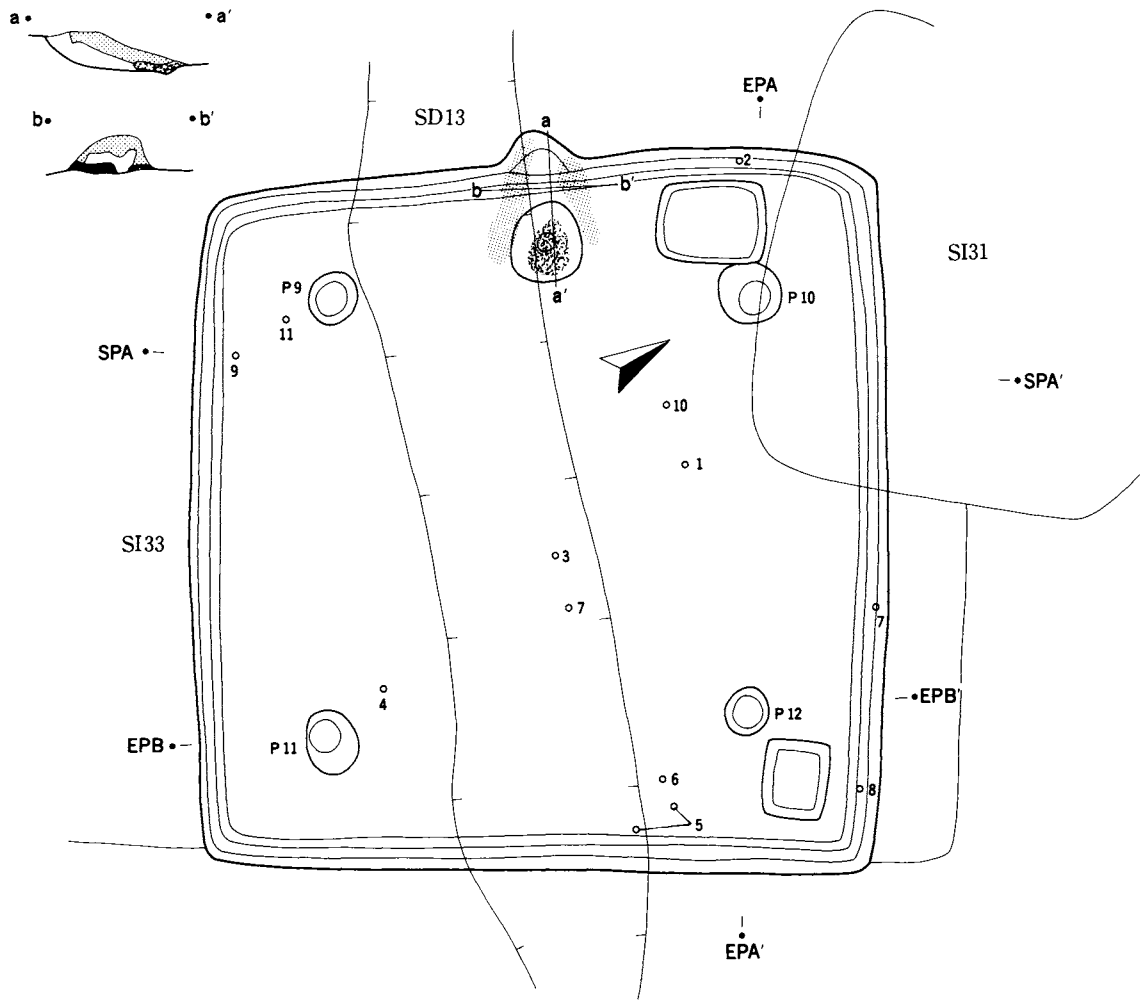


- 1層 暗褐色土層 ローム粒を含む
- 2層 暗黄褐色土層 ローム粒多い
- 3層 黄褐色土層 地山ローム攪乱層

第59図 SI31遺構実測図



第60図 SI31出土遺物実測図



第61図 SI32遺構実測図

この住居は南西壁及び北西壁が周溝外に拡張されている。それに伴って、柱穴がP2→P1、P6→P5と移築された。また、竈も火床が手前から奥へと、貯蔵穴も北から南へと作り替えられている。

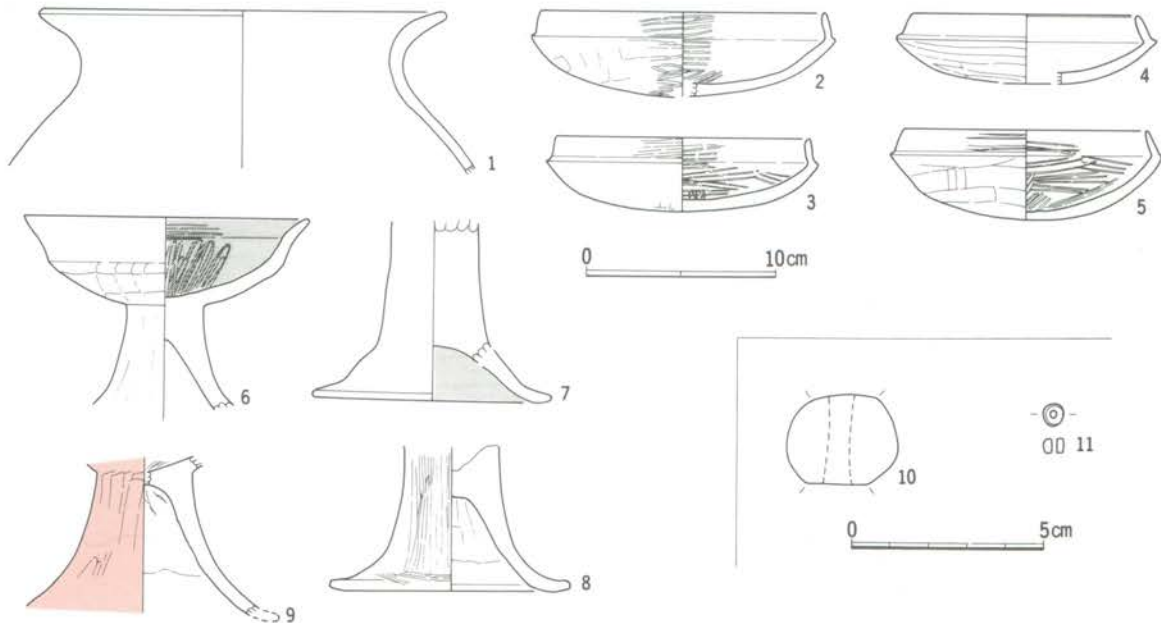
竈はSD 13に大方破壊され、火床と北袖の一部を残すのみである。住居跡の覆土は、ローム包含土が上層を覆い、人為的埋没であることを示している。

遺物 各所から土師器、土玉、敲石等が出土した。

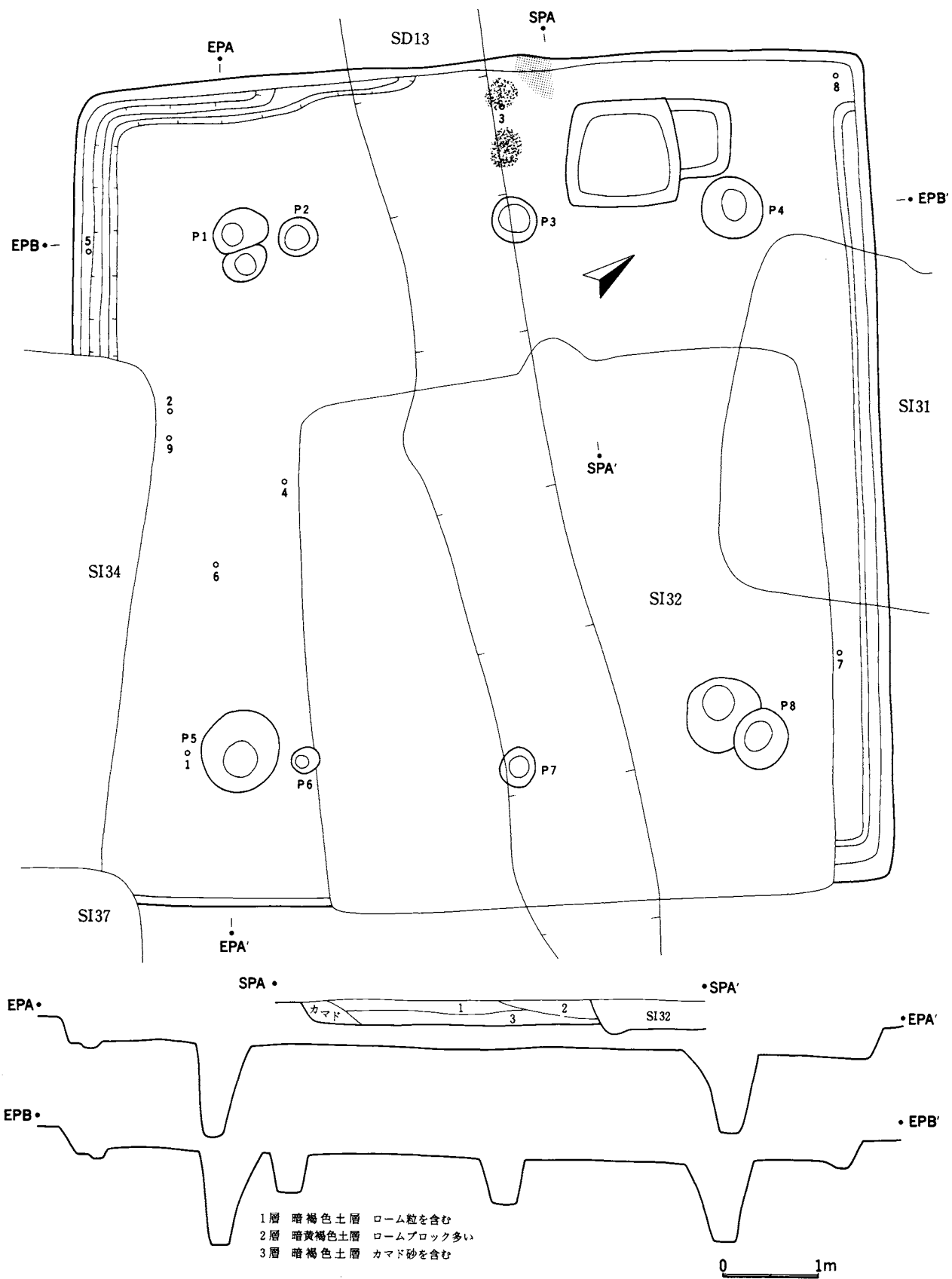
1～4は甕である。1はP5脇から出土した。口径23.1cm、現高8.8cmで、赤褐色を呈する。胴部は縦にヘラナデされる。2は南西壁寄りの覆土から出土した。口径14.1cm、器高16.9cmで、赤褐色を呈する。胴部は粗く横にヘラナデされる。3は竈内から出土した。口径12.6cm、現高15.6cmで、明褐色を呈する。口縁から胴部に至るまで粗いヘラナデが施される。4は中央南寄りの覆土から出土した。口径14.7cm、現高8.3cmで、暗褐色を呈する。胴部はヘラナデされ、頸部には指圧痕が残っている。5・6は杯である。5は南西壁際の覆土中から出土した。口径14.4cm、器高3.9cmで、内外面とも黒色処理されている。体部は周縁に沿ってヘラナデされ、内面はヘラナデされ、平滑になっている。6は南寄りから出土した。内外面とも黒色処理されている。調整技法は5に準じる。7は手捏ね土器で、北東壁際から出土した。口径4.7cm、器高4.4cmで、赤褐色を呈する。全体的にナデ調整だが、口縁付近は横ナデされている。

8は土玉で、北隅から出土した。最大径3.2cmで、茶褐色を呈する。全体がナデ仕上げされ、重量28.2gを量る。

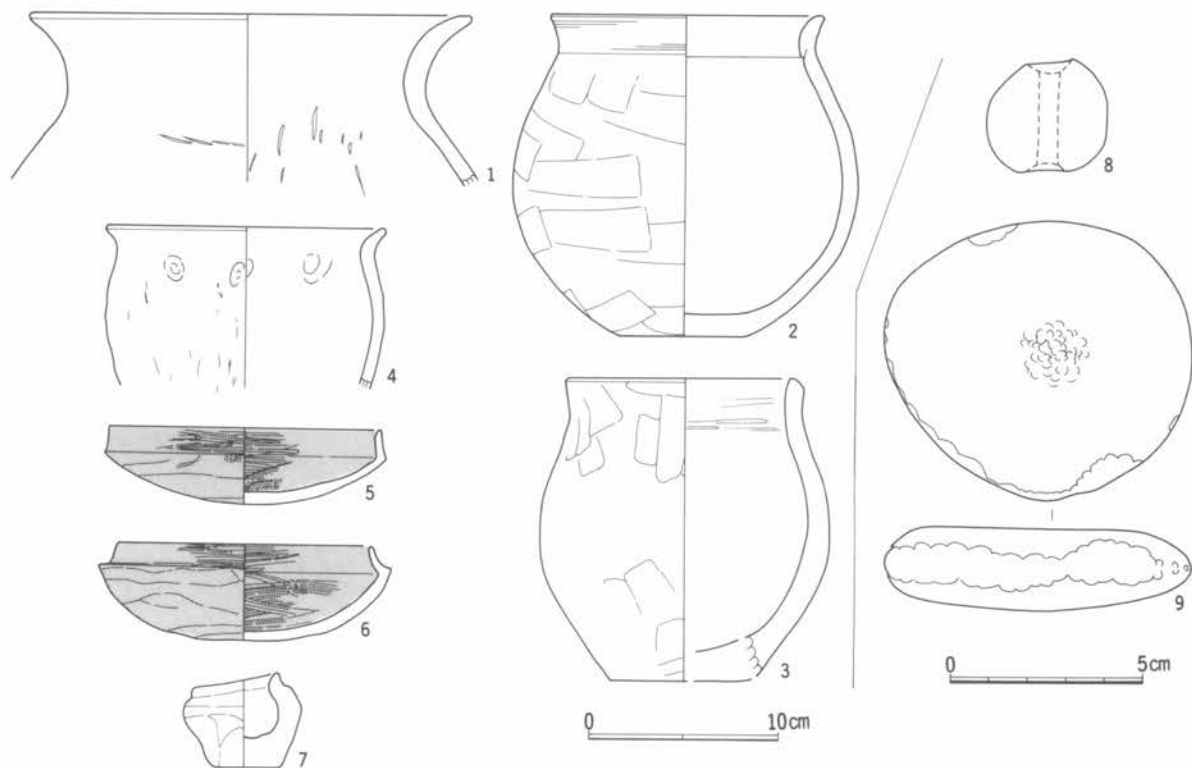
9は敲石で、南西壁寄りから出土した。長径8.0cmの扁平な不整円形で、周縁部と片面中央に細かな敲打痕がある。硬砂岩製で、重量190.4gを量る。



第62図 SI32出土遺物実測図



第63図 SI33遺構実測図



第64図 SI33出土遺物実測図

第5節 SI 34～SI 37

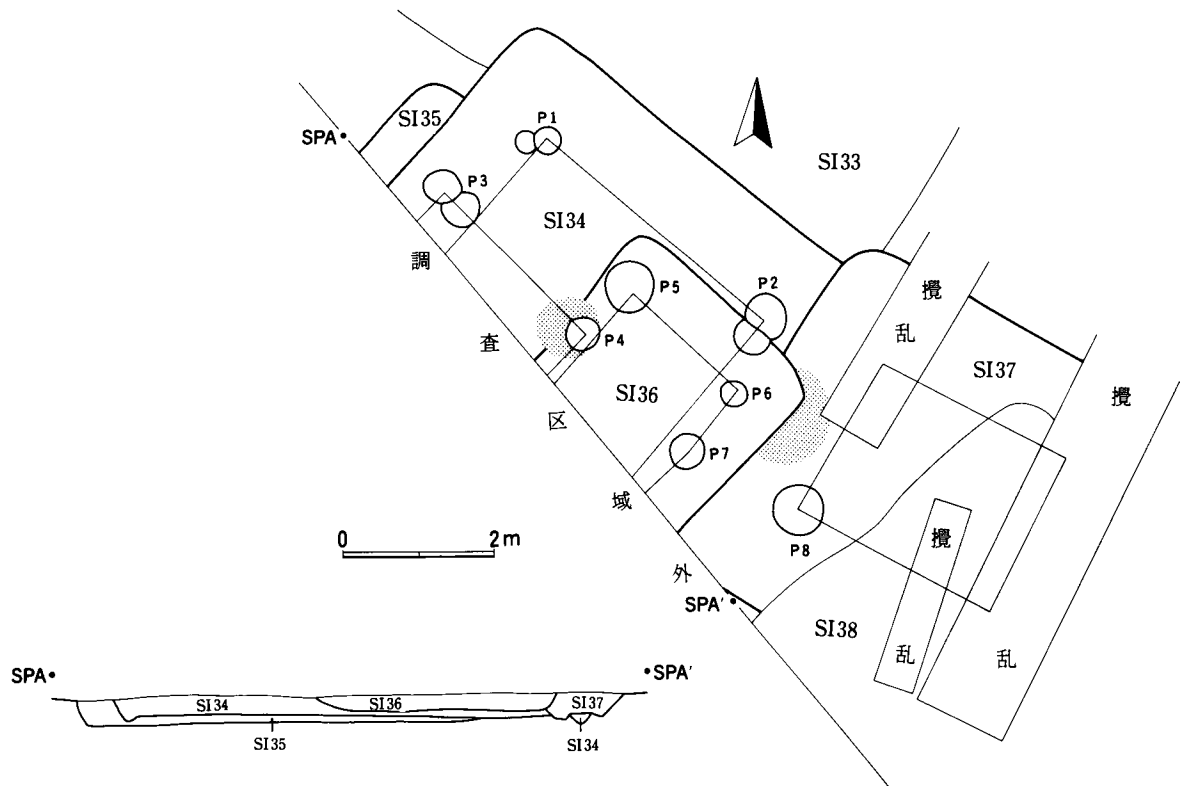
新旧関係 SI 34～SI 38は一連の重複関係にある（第65図）。断面図SPA—SPA'によれば、SI 36はSI 34とSI 37を攪乱しており、SI 37はSI 34を、SI 34はSI 35をそれぞれ攪乱している。またSI 37はその南側をSI 38に攪乱されている。以上の関係を図式的に示せば、次のようになる。



柱穴の帰属 このグループは南西部が調査区域外にかかり、さらに南東部では近時の攪乱を受けているので、柱穴が完備している住居跡は見られない。SI 34は四本柱穴のうち、P1・P2が検出された。SI 35にはP3・P4が伴い、四本柱穴の東半を構成する。SI 36はP5・P6が四本柱穴の東半となり、P7が梯子穴となる。SI 37については、近時の攪乱によりP8のみしか残っていなかった。SI 38については後述する。

SI 34・SI 35（第66図、第67図、図版24、図版31、図版33）

遺構 SI 34は南西側が調査区域外に出ており、東側でSI 33を、西側でSI 35を攪乱するが、南側でSI 36及びSI 37に攪乱されている。前掲（第65図）の断面図を参考にすれば、一辺6.5m前後の方形プランを持つ住居跡である。竈は調査区域外に出て検出できなかったが、周溝は調査範囲では全周している。この住居に伴う柱穴はP1・P2で、四本柱穴の東半を構成する。北隅には貯蔵穴が存在するが、再三作り替えられ



第65図 新旧関係と柱穴の帰属 (4)

ており、柱穴が掘り替えられている事実とともに、住居跡の拡張を想定させる。床面の中央付近は硬化している。覆土上層にII a層が堆積していることから、本住居跡の廃絶後ある程度の時間を経てから、SI 36が掘り込まれたものと考えられる。

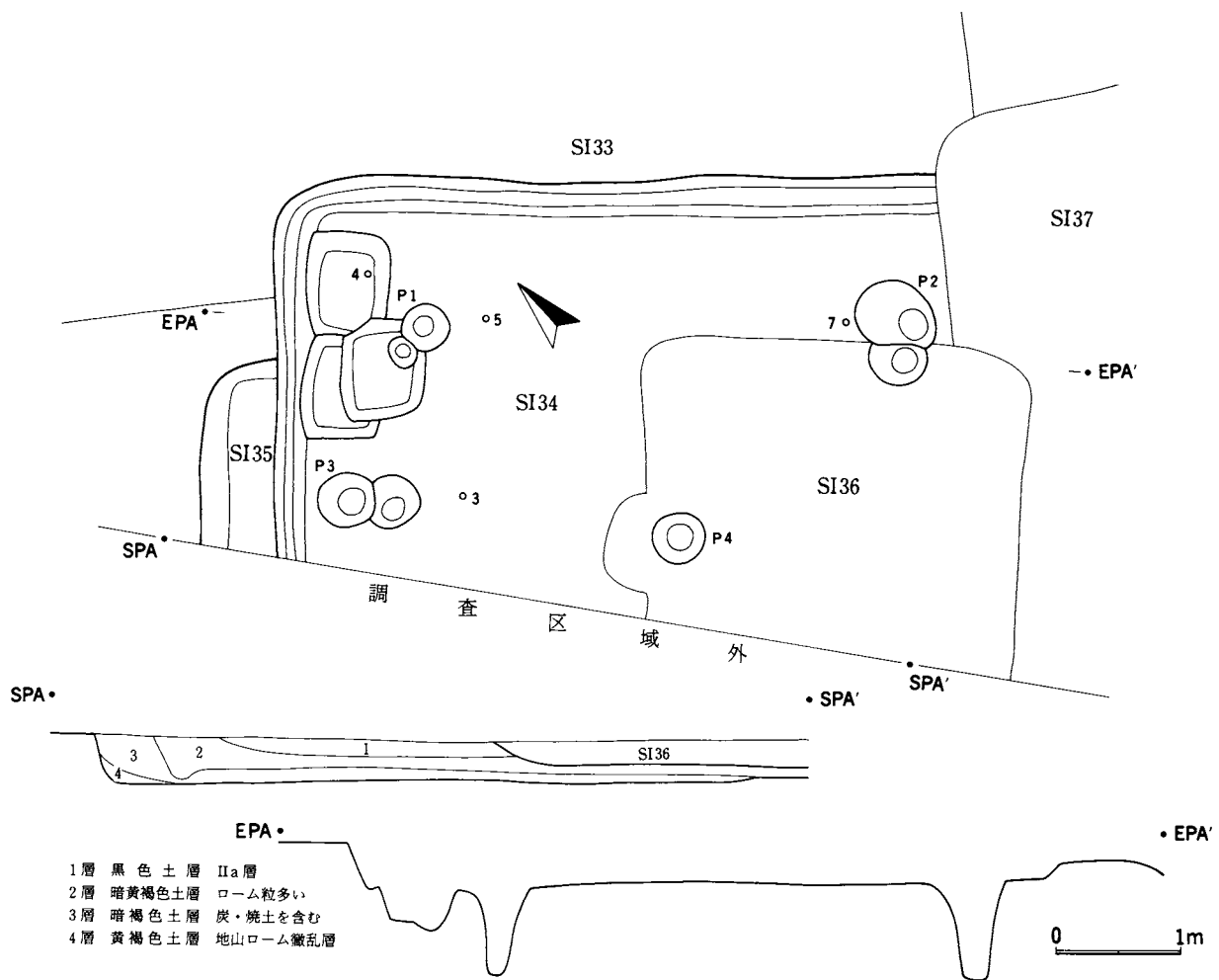
SI 35は西側の大部分が調査区域外にあり、残りの大半もSI 34に攪乱されている。断面図を参考すれば、一辺5.3m程の方形プランとなる。周溝は調査範囲内では存在しない。この住居跡の柱穴としては、P3とP4が四本柱穴の東半を構成する。

遺物 遺物のほとんどはSI 34から出土した。SI 35に属するのは6のみである。

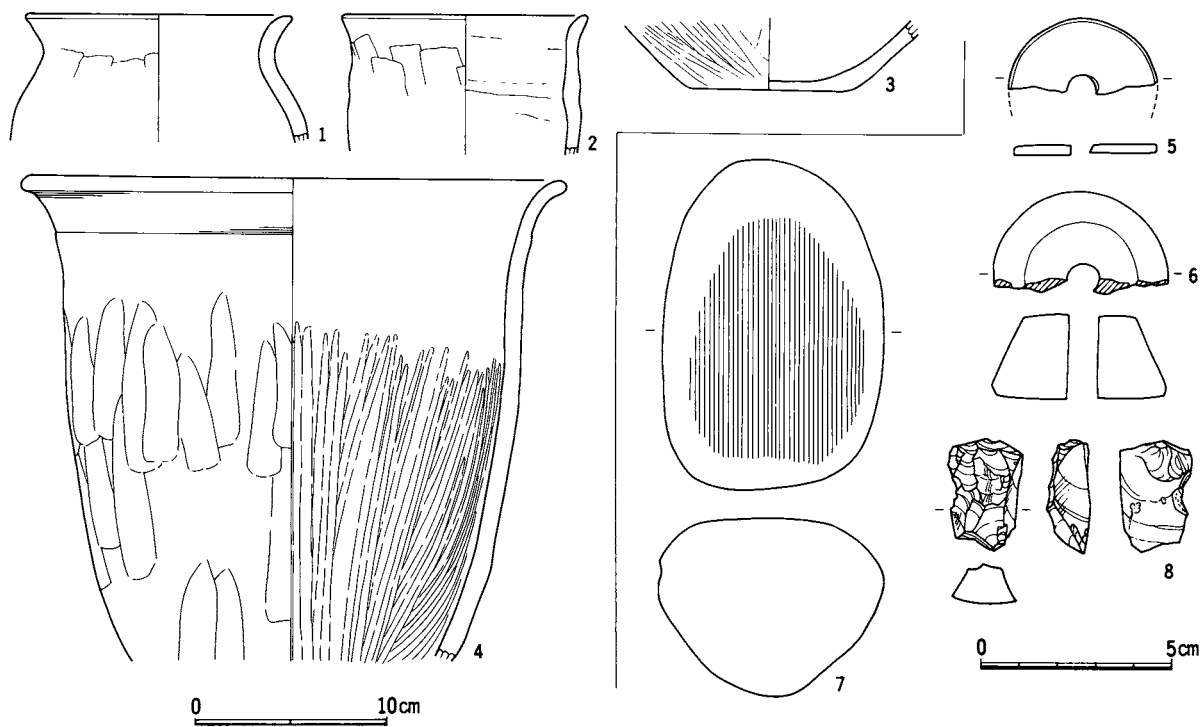
SI 34からは土師器、有孔円盤、石核、磨石等が出土した。

1～3は甕である。1は覆土中から発見された。口径18.0cm、現高6.6cmで、暗褐色を呈する。胴部は縦にヘラケズリされている。2は覆土中から発見された。口径13.0cm、現高7.3cmで、赤褐色を呈する。胴部は縦にヘラケズリされる。3は中央北寄りから出土した。胎土には石英・長石を含み、灰褐色を呈する。底部周囲は斜めにヘラナデされている。4は甗で、貯蔵穴中から出土した。口径27.7cm、現高24.9cmで、赤褐色を呈する。胴部は伏せた状態で縦にヘラケズリされ、内面はヘラナデにより平滑になっている。

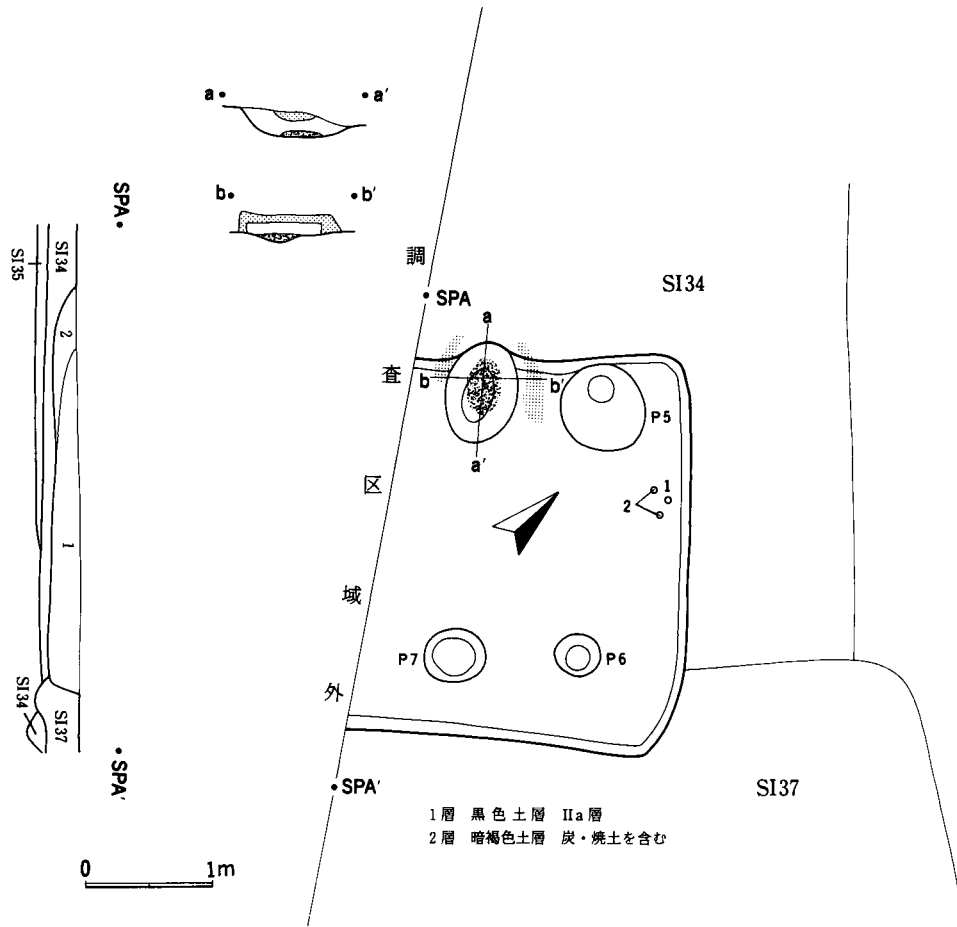
5は有孔円盤で、P1脇から出土した。滑石製で、中央に単孔が穿たれている。直径3.9cm程で、3.4gを量る。6はSI 35の覆土中から発見された土製紡錘車である。明褐色を呈し、胎土に雲母を含んでいる。全体がナデ仕上げされ、底面は面取りされている。底面の直径4.7cm、高さ2.3cm、現重量22.9gを量る。7は磨石で、P2脇から出土した。幅広の一面に平行擦痕が見られる。硬質砂岩製で、長さ8.4cm、重量348.7gを量る。8は黒曜石製の石核で、覆土中から発見された。両極からの剝離痕が認められる。長さ3.0cm、



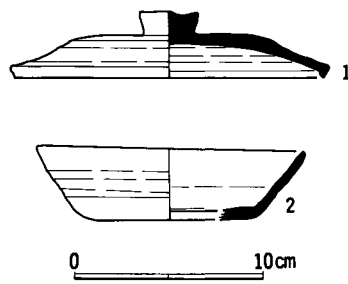
第66図 SI34・SI35遺構実測図



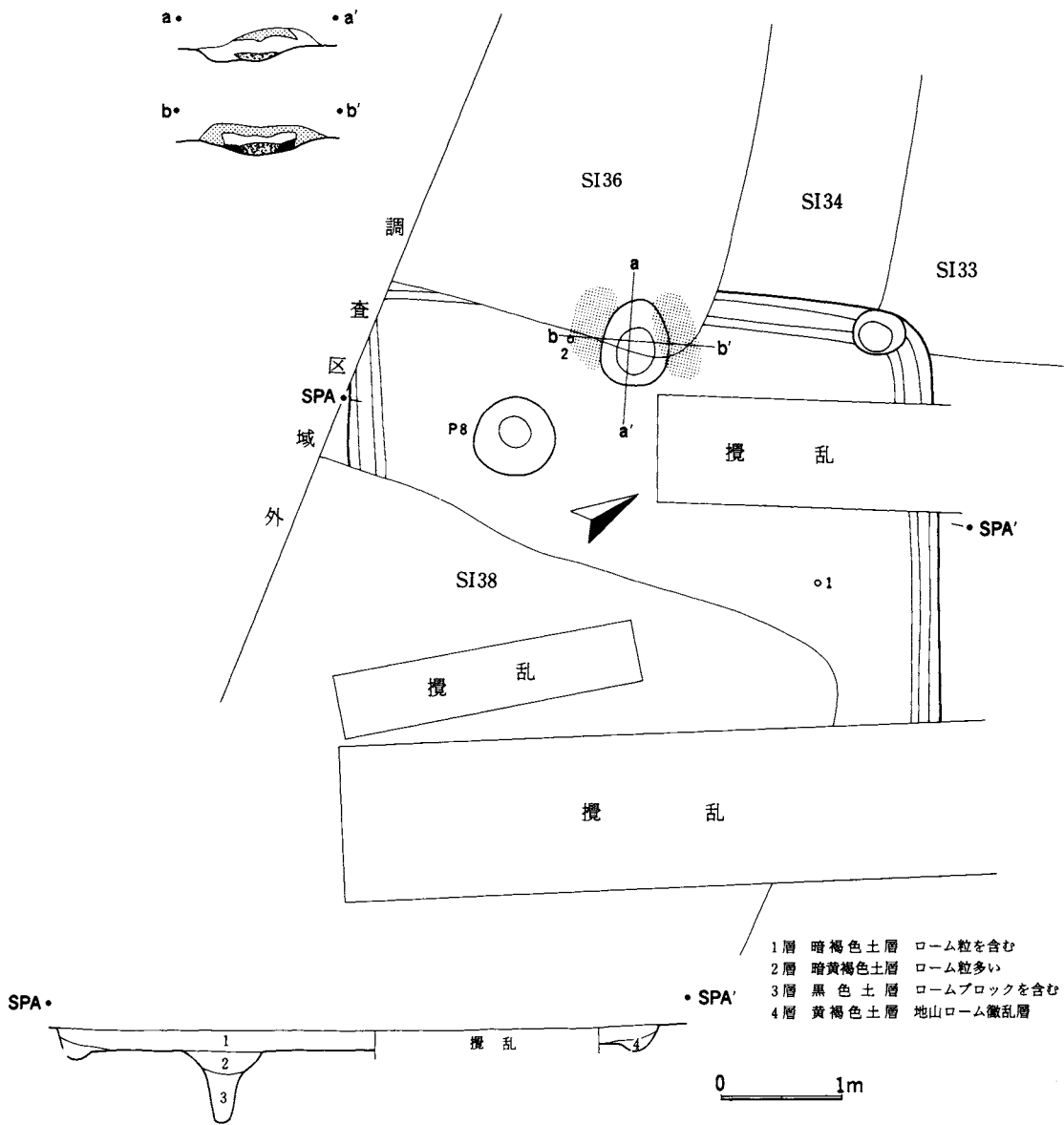
第67図 SI34・SI35出土遺物実測図



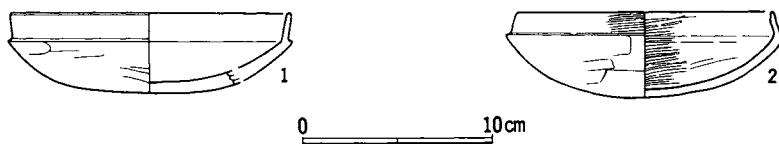
第68図 SI36遺構実測図



第69図 SI36出土遺物実測図



第70図 SI37遺構実測図



第71図 SI37出土遺物実測図

重量6.1gを量る。

SI 36 (第69図、図版9、図版24)

遺構 北側でSI 34を、南側でSI 37を攪乱し、南西側は調査区域外に出ている。一辺3.1m前後の方形プランを持つ小型住居跡である。北西壁中央に竈を備え、P5・P6の柱穴とP7の梯子穴が存在する。竈は上部が削平されていて、遺存状況は悪い。床面上に直接上屋材を積み上げている。覆土はII a層が厚く堆積し、自然埋没を物語っている。

遺物 遺物量は少なく、須恵器が出土している。

1は杯蓋で、北東壁際から出土した。口径16.2cm、器高3.5cmで、明灰色を呈する。頂部は回転ヘラケズリが行き届き、広い平坦面を作っている。

2は杯身で、1とともに北東壁際から出土した。復元口径14.0cm、器高4.0cmで、明灰色を呈する。ロクロ目はやや強く、底面及び体下部を手持ちヘラケズリしている。

SI 37 (第70図、第71図、図版24)

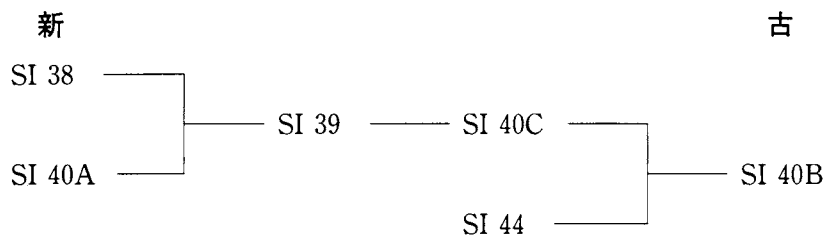
遺構 北隅でSI 33・SI 34を攪乱し、竈付近はSI 36に、南側は大きくSI 38に攪乱されている。また、西隅は調査区域外である。このほかにも、本住居跡は至る所近時の攪乱を被っている。規模不明の方形プランを持ち、北西壁中央には竈を備えている。周溝は調査範囲では全周している。柱穴は攪乱のためにP8の1基しか検出できなかった。このほか北隅には小ピットが存在する。竈は床面から直接上屋材を積み上げて構築しており、上半は遺構検出時に削平された。床面は中央付近に硬化面が残っている。

遺物 遺物量は少なく、土師器が出土した。

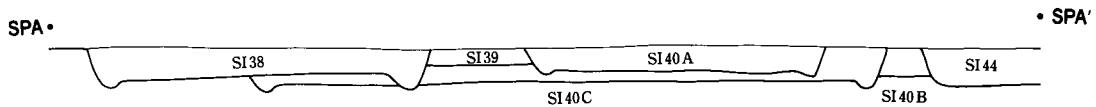
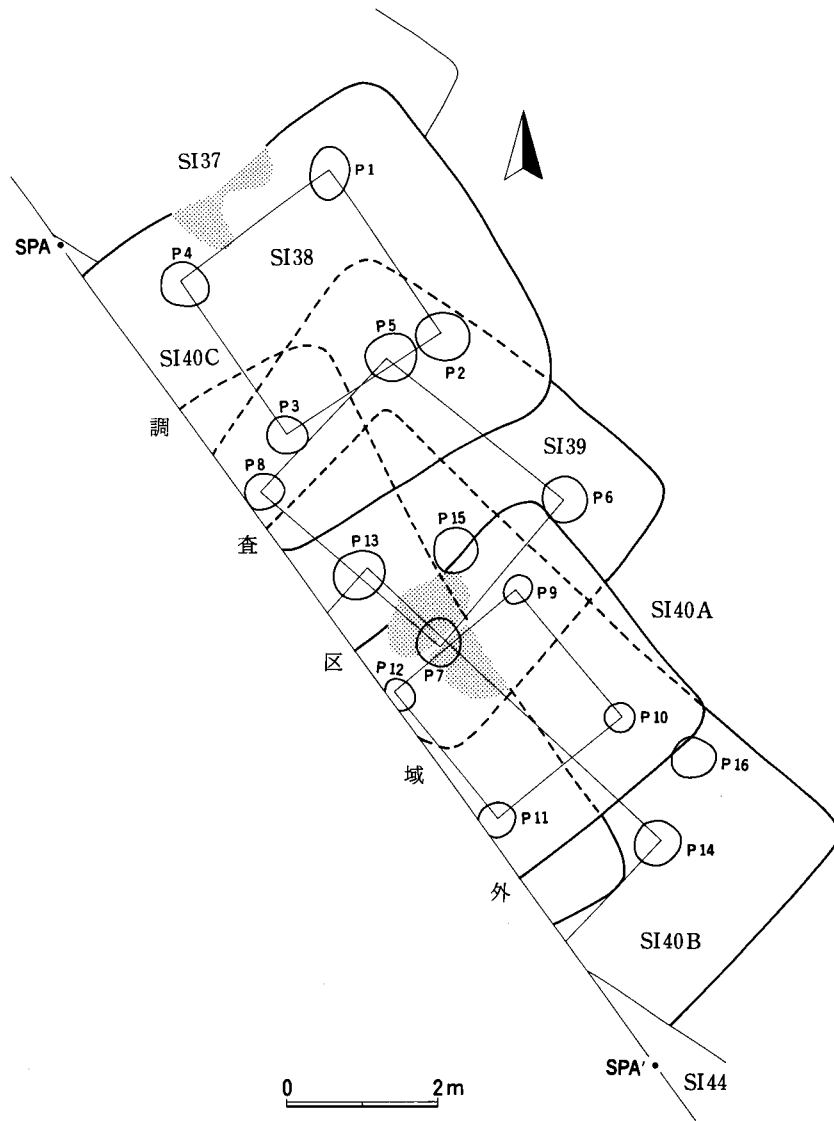
1・2は杯である。1は北東壁寄りの覆土から出土した。口径14.7cm、器高4.2cmで、赤褐色を呈する。体部は周縁に沿ってヘラナデされ、内面はヘラナデによって平滑にされている。2は竈南脇から出土した。口縁は内外面ともヘラナデ、体部は周縁に沿ってヘラケズリされ、内面はヘラナデによって平滑にされている。

第6節 SI 38～SI 40

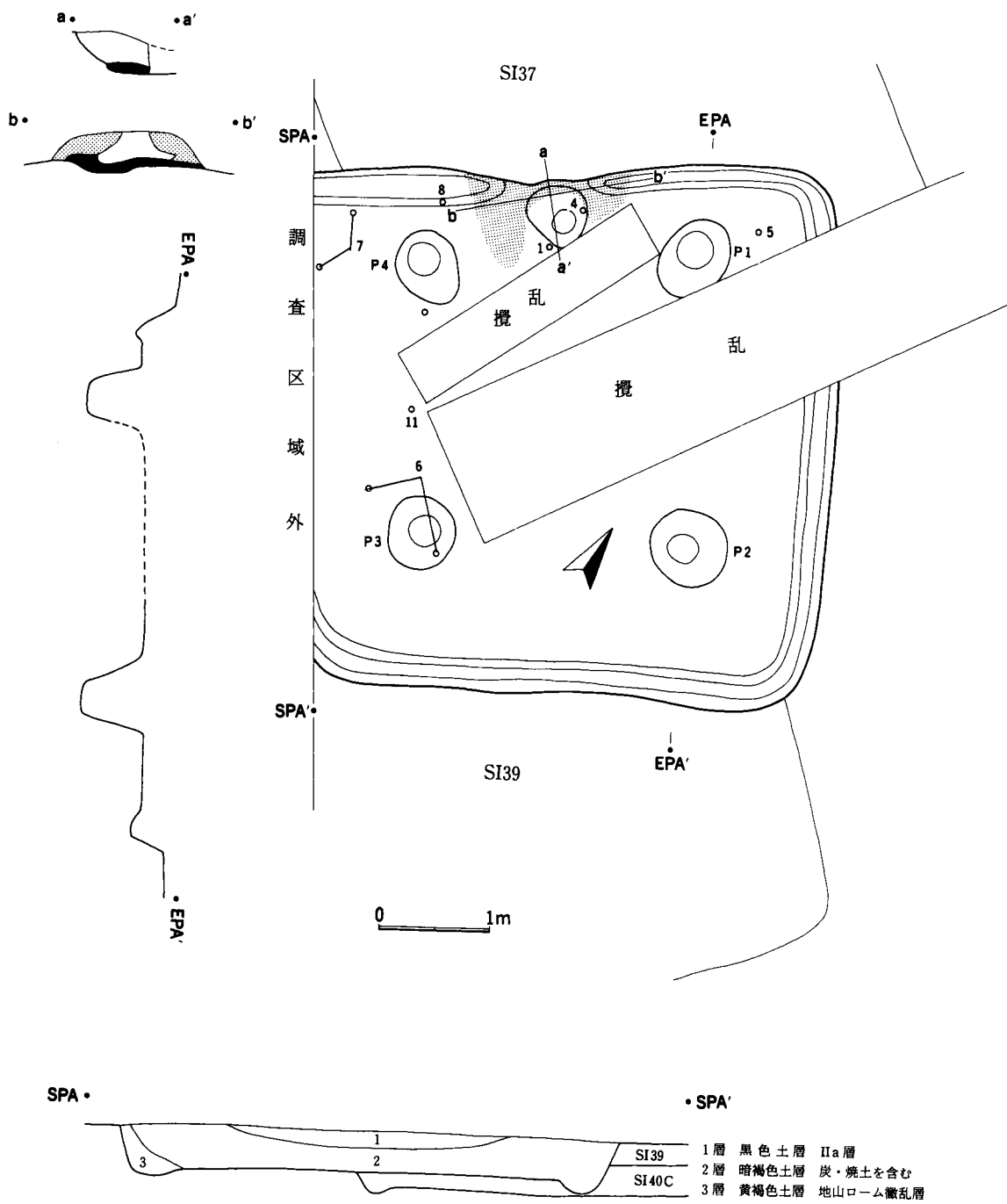
新旧関係 SI 38～SI 40A・B・Cは一連の重複関係にある(第72図)。断面図SPA—SPA'から明らかなように、SI 38とSI 40AはSI 39とSI 40Cを攪乱し、SI 39はSI 40Cを攪乱している。またSI 40CとSI 44はSI 40Bを攪乱している。以上の関係を図式的に示せば、次のようになる。



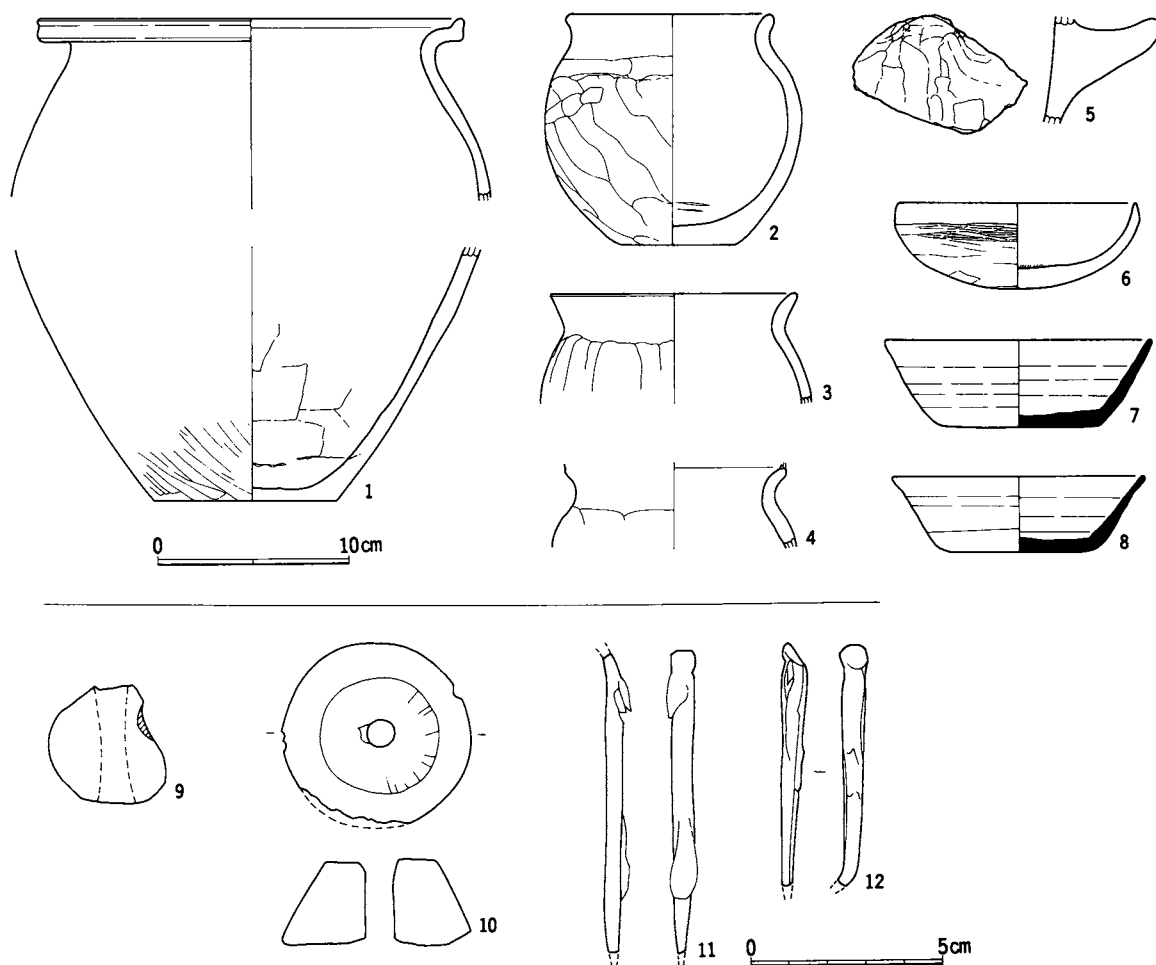
柱穴の帰属 SI 38はP1～P4で四本柱穴を構成する。SI 39はP5～P8で四本柱穴を構成する。SI 40AはP9～P12で四本柱穴を構成する。SI 40BはP13とP14が四本柱穴の東半となる。またP15とP16は位置関係からみて、本住居跡に属するであろう。SI 40Cの柱穴は、すべて調査区域外にある。



第72図 新旧関係と柱穴の帰属 (5)



第73図 SI38遺構実測図



第74図 SI 38出土遺物実測図

SI 38 (第73図、第74図、図版9、図版24、図版33、図版34、図版35)

遺構 北側でSI 37を、南側でSI 39を攪乱し、近時の攪乱のために中央部が破壊されている。また、南西壁は調査区域外に出ている。4.6m×4.8mの方形プランを呈する。北西壁中央に竈があるが、その部分だけ北西壁が住居内にせり出している。周溝は全周し、四本柱穴は完備している。竈は上面はすでに削平され、前面も攪乱されていた。覆土の下層は炭・焼土を含んでいるが、貼り床の床面は焼けていないので、この層は人為的な埋土である。

遺物 各所から土師器、須恵器、土玉、紡錘車、釘等が出土した。

1～4は甕である。1は竈上の覆土中から出土した。口径22.2cm、器高24.6cm以上で、暗褐色を呈し、胎土には石英・雲母が含まれる。体部は全体にヘラナデ調整され、底部には木葉痕が認められる。2は覆土中から発見された。口径11.0cm、器高12.2cmで、赤褐色を呈する。胴部には斜めのヘラケズリが多用される。3は覆土中から発見された。口径11.7cmで、赤褐色を呈する。胴部は縦ヘラケズリが多用される。4は竈上から出土した。口唇部を欠き、赤褐色を呈する。胴部はヘラケズリされる。5は甗の把手で、北隅付近から出土した。把手と本体の接合部を中心に、ヘラケズリ調整されている。6は杯で、P3付近の覆土から出土した。口径12.4cm、器高4.6cmで、赤褐色を呈する。体部はヘラナデされている。7・8は須恵器杯である。7は西隅付近の覆土から出土した。口径13.2cm、器高4.0cmで、灰褐色を呈する。ロクロ目は弱く、底部は手持ちヘラケズリされている。胎土には雲母が混入する。8は竈南脇の覆土中から出土した。

口径13.2cm、器高4.0cmで、灰褐色を呈する。ロクロ目はやや強く、底部は手持ちヘラケズリされている。胎土には雲母を含む。

9は土玉で、覆土中から発見された。径3.1cmで、黒色を呈し、ナデ仕上げされている。

10は石製紡錘車で、P4脇から出土した。底径5.0cm、高さ2.2cmで、底部を若干破損し、頂部平坦面には短い擦痕が取り巻いている。緑泥片岩製で、重量58.5gを量る。

11・12は釘である。11は中央南西寄りから出土した。先端を欠き、現長7.9cmである。一端を折り曲げて、扁平な頂部を作り出している。重量7.2gを量る。12は覆土中から発見された。先端を欠き、現長6.3cmで、製法は11に準じる。重量4.7gを量る。

SI 39 (第75図、第76図、図版9、図版24)

遺構 SI 40Cを埋め立てて造られた住居だが、北側をSI 38に、南側をSI 40Aに攪乱され、西側の一部が調査区域外に出ている。方形プランの中央から東隅にかけてのみ良好に遺存していた。竈の有無は不明で、周溝は調査範囲では確認できた。四本柱穴は完備している。床面は広範に硬化している。

遺物 土師器が出土している。

1・2は甕である。1は覆土中から発見された。口径22.6cmで、明褐色を呈する。胎土には長石・雲母を含む。胴部調整はヘラナデである。2は中央覆土中から出土した。口径12.8cmで、暗褐色である。胴部はヘラケズリされている。3～7は杯である。3は覆土中から発見された。口径12.0cm、器高4.5cmで、赤褐色を呈する。体部は周縁に沿ってヘラナデをしている。4は中央覆土中から出土した。口径11.6cm、器高4.6cmで、赤褐色を呈する。体部は周縁に沿ってヘラナデされ、底部には木葉痕が残る。底部を中心に大きな黒斑が見られる。また、外面の一部に赤彩の痕跡がある。5は中央覆土から出土した。口径11.4cm、器高3.8cmで、暗褐色を呈する。体部はヘラナデされている。6は覆土中から発見された。口径12.0cm、器高4.0cmで、赤褐色を呈する。体部はヘラナデされている。7は大型杯の底部で、東壁際から出土した。赤褐色を呈し、全体にヘラケズリが施される。内面は細いヘラナデによって平滑にされている。

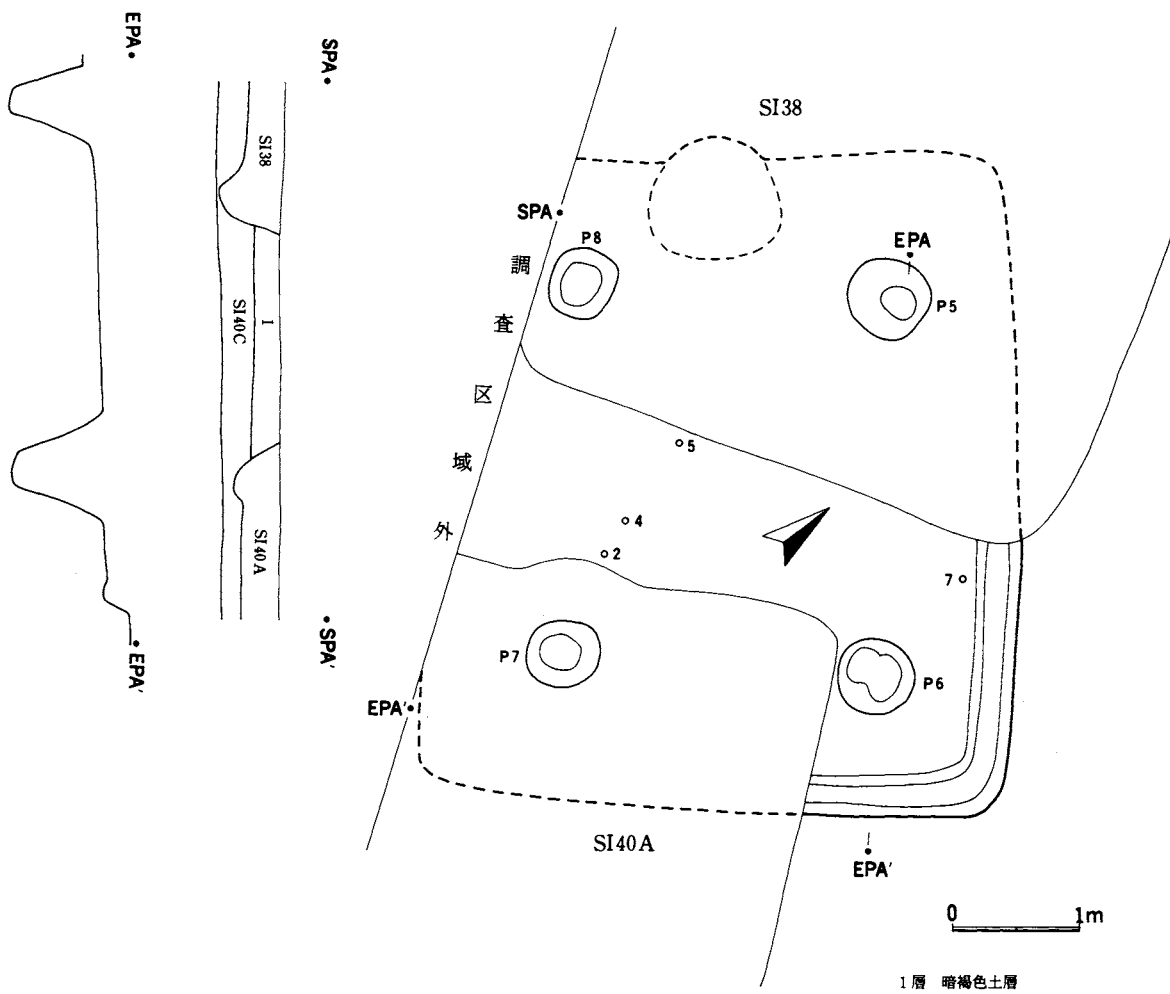
SI 40A (第77図、第78図、図版9、図版34、図版35)

遺構 SI 39・SI 40B・SI 40Cを攪乱しており、西辺は調査区域外である。一辺3.8mの方形プランを呈する小型住居跡である。竈は北西壁中央に設置され、周溝は全周する。四本柱穴は完備している。竈の上屋根材の前半が消失している。火災を受けた住居跡で、床面付近には炭や焼土が散乱していた。床面は広範に硬化している。

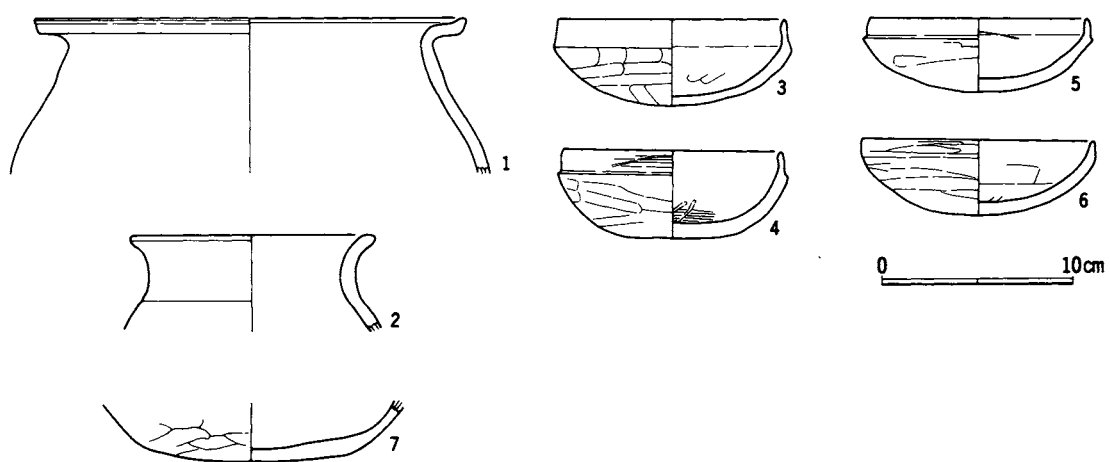
遺物 遺物量は少なく、土玉、鉄鏃が出土した。

1は土玉で、P11脇から出土した。最大径3.7cmで、茶褐色を呈する。ナデ仕上げだが、紐通し穴周辺はヘラナデ調整されている。一部に平行擦痕が認められる。38.8gを量る。

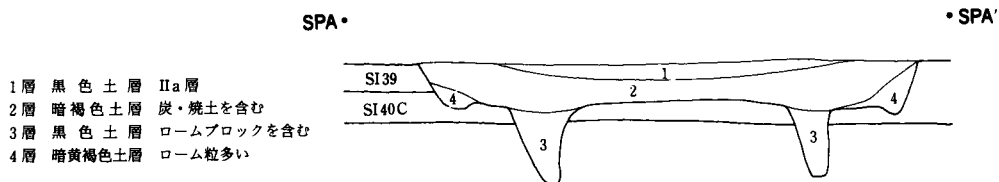
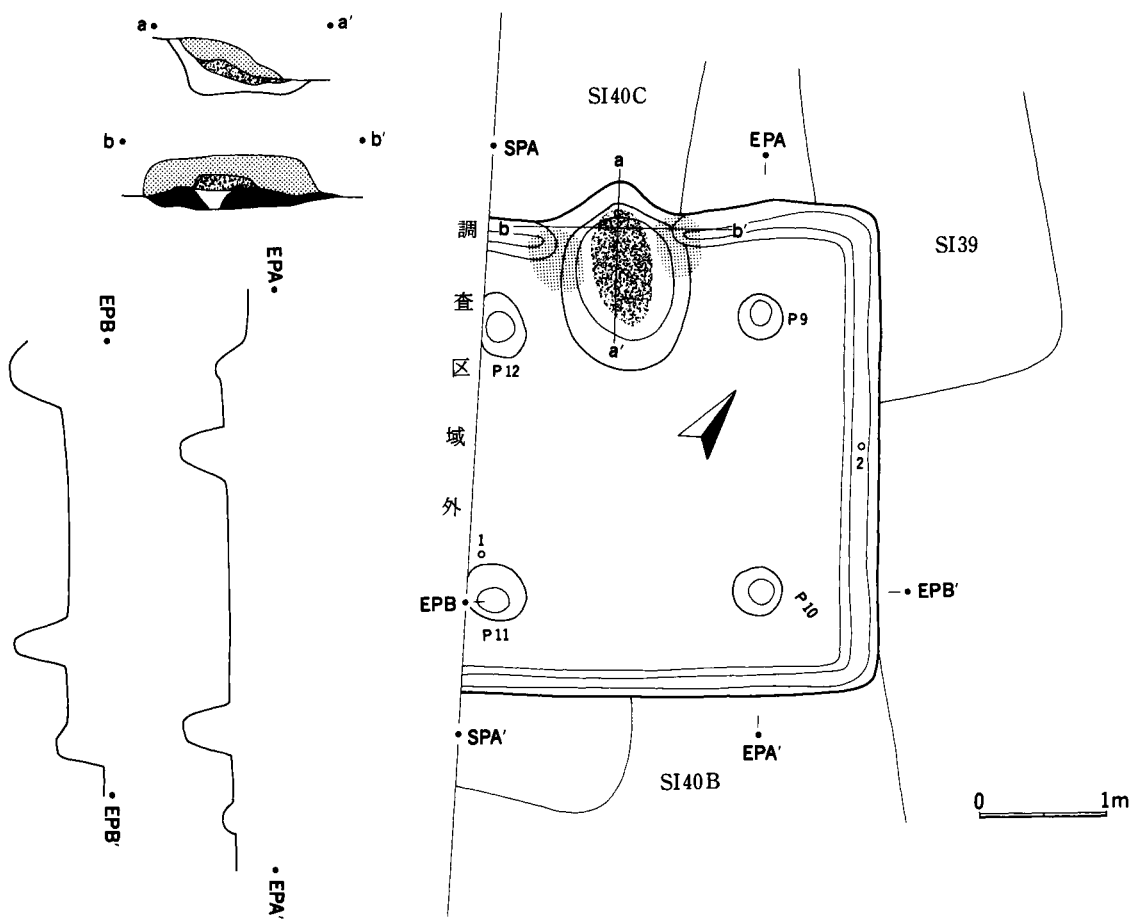
2は鉄鏃で、東壁際の覆土から出土した。長さ8.3cm、重量12.1gを量る。三角形の刃部は再利用されたらしく、両側に磨滅痕がある。



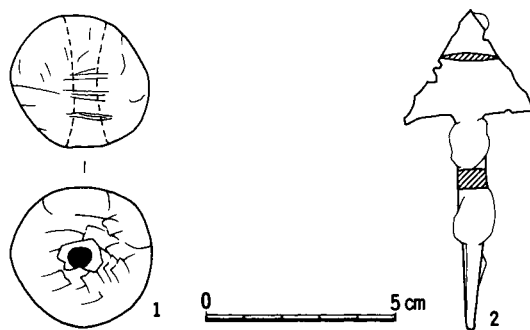
第75図 SI39遺構実測図



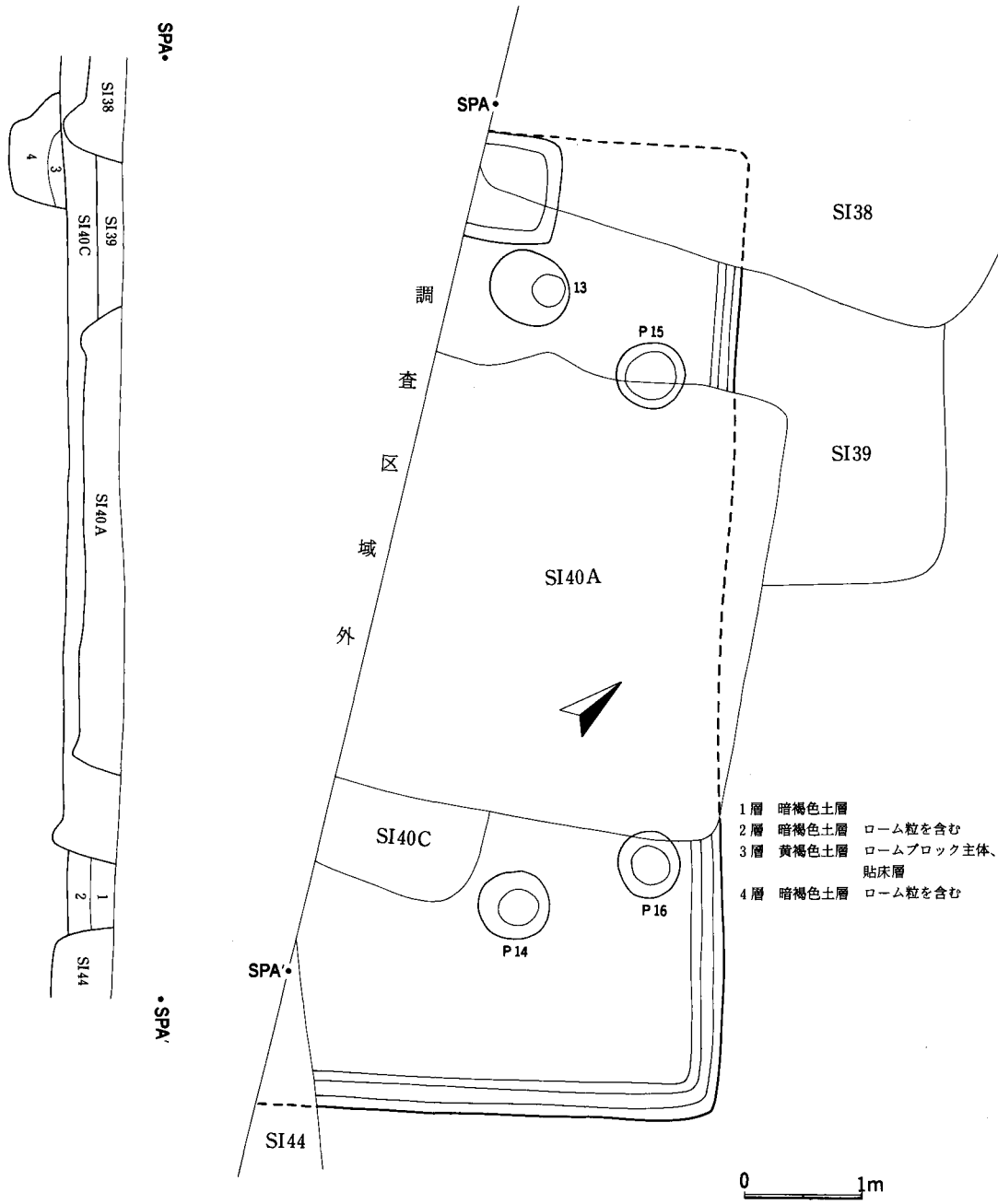
第76図 SI39出土遺物実測図



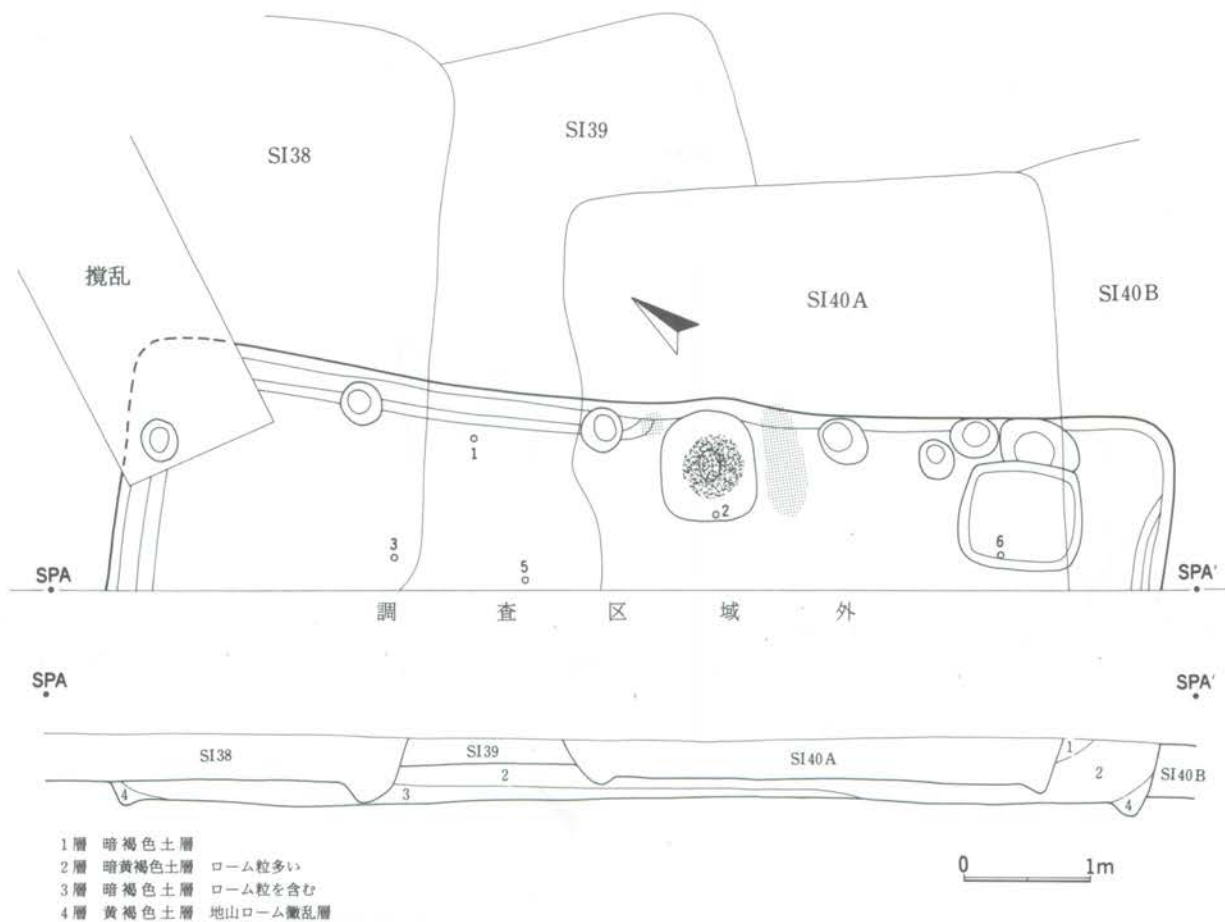
第77図 SI40A遺構実測図



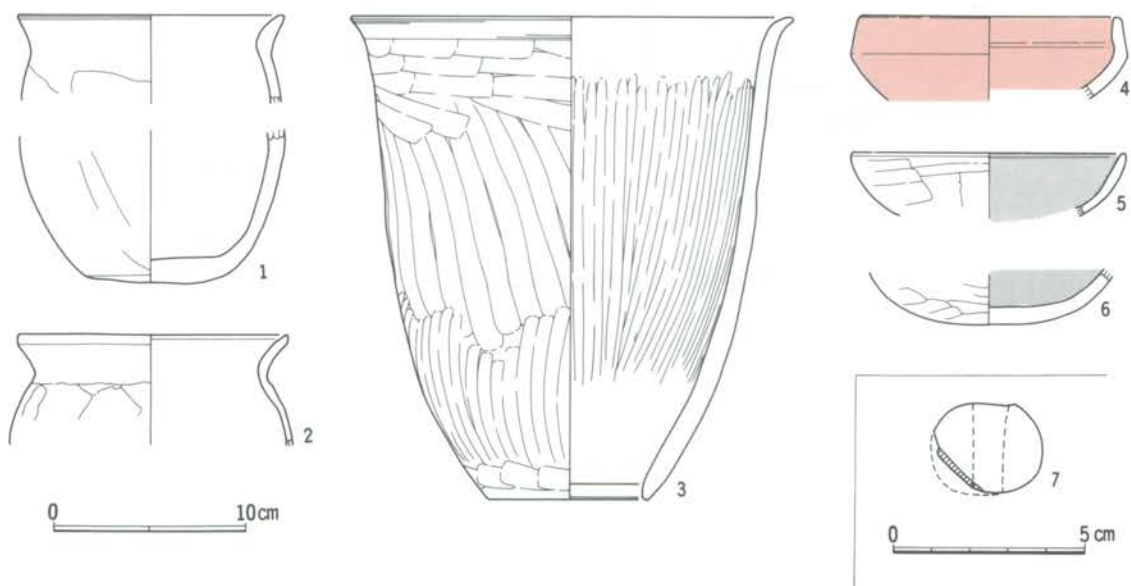
第78図 SI40A出土遺物実測図



第79図 SI40B遺構実測図



第80図 SI40C遺構実測図



第81図 SI40C出土遺物実測図

SI 40B (第79図、図版9)

遺構 北西側でSI 39を攪乱するが、SI 38に攪乱され、中央でSI 40A、SI 40Cに、南側でSI 44に攪乱されている。また、南西側の大半が調査区域外となっている。一辺8.2m前後の方形プランの大型住居跡である。竈は調査区域外に出ている。周溝は調査範囲では確認できた。四本柱穴はP13とP14が東半の2基に相当する。西端には、一部調査区域外にかかっている貯蔵穴が存在する。P15、P16はP13、P14と対称的な位置にあるが、床面下15cm～20cmと浅く、柱穴とは考えられない。床面の硬化は顕著ではない。

遺物 遺物は出土しなかった。

SI 40C (第80図、第81図、図版9、図版24、図版25、図版34)

遺構 SI 39とSI 40Bを攪乱するが、北側でSI 38に、南側でSI 40Aに攪乱され、西側の大半が調査区域外に出ている。一辺8.3m前後の方形プランを呈する大型住居跡になるものと思われる。竈は東壁のやや南寄りに設置されている。周溝は北側ではよく確認できるが、南側でははっきりしない。四本柱穴はすべて調査区域外に出ている。また、南隅付近に貯蔵穴が設けられている。このほか浅い小ピットが、東壁際に多数掘られている。調査範囲では、床面の顕著な硬化部分は認められなかった。

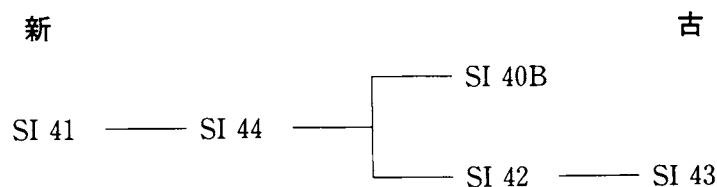
遺物 土師器、土玉が出土した。

1・2は甕である。1は東壁際から出土した。口径14.0cmで、赤褐色を呈する。胴部はヘラケズリ調整され、内面には煤が付着している。2は竈内から出土した。口径14.2cmで、明褐色を呈する。胴部はヘラケズリされている。3は甕で、北寄りから出土した。口径23.2cm、器高25.1cmで、明褐色を呈する。胴部を縦にヘラケズリした後、口縁付近と底部周囲を横にヘラケズリしている。内面は細かいヘラナデが施される。4～6は杯である。4は覆土中から発見された。内外面とも赤彩され、体部はヘラナデされている。内面には放射状のヘラミガキが見られる。5は北寄りの覆土中から発見された。暗褐色を呈し、内面は黒色処理されている。体部は周縁に沿ってヘラケズリされる。6は貯蔵穴上から出土した。内面は黒色処理され、体部はヘラケズリされている。

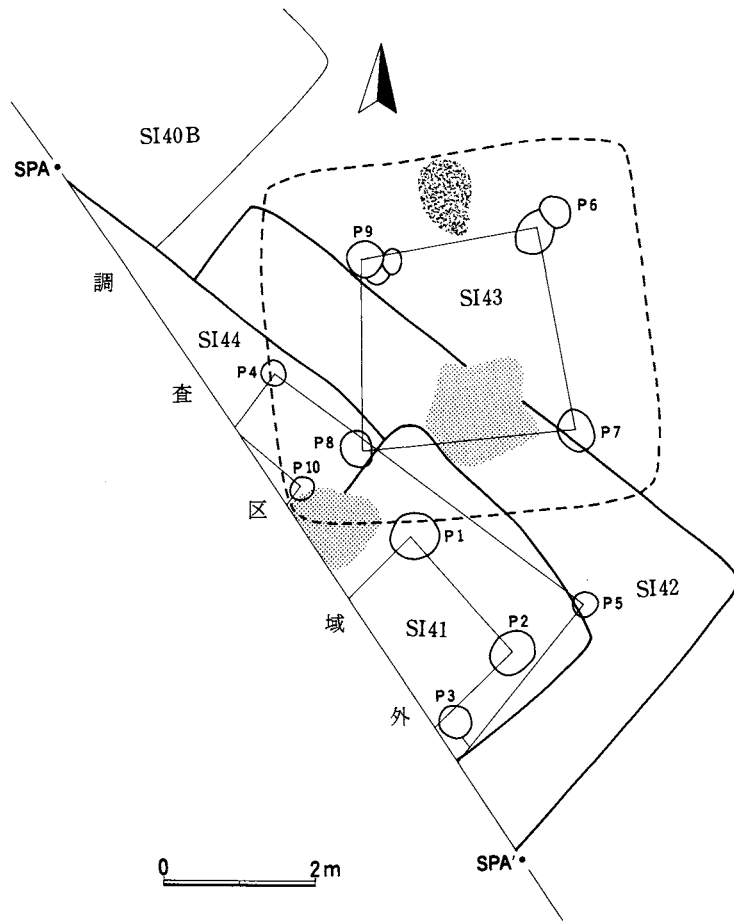
7は土玉で、覆土中から出土した。茶褐色で、ナデ仕上げされている。

第7節 SI 41～SI 47

新旧関係 SI 41～SI 44は一連の重複関係にある(第82図)。まず断面図SPA—SPA'から明らかなように、SI 41はSI 42とSI 44を攪乱し、SI 44はSI 42及びSI 40Bを攪乱している。SI 42とSI 43の関係は、SI 42の竈が良好に遺存していることから、SI 42はSI 43の後から造築されたことが判明する。以上の関係を図式的に示せば、次のようになる。



柱穴の帰属 SI 41はP1、P2が四本柱穴を構成し、残りの2基は調査区域外に出ている。P3は梯子穴となる。SI 42はP4、P5が四本柱穴の東半を構成する。SI 43はP6～P9で四本柱穴が完備している。SI 44はP10が四本柱穴の一部と思われるが、このほかは調査区域外にある。



第82図 新旧関係と柱穴の帰属 (6)

SI 41 (第83図、第84図、図版10、図版25、図版33、図版35)

遺構 SI 42、SI 44を攪乱し、南西半は調査区域外に出ている。一辺約3.8mの方形プランを呈する小型住居跡である。竈は北西壁に設置されているが、北西壁の竈部分は内側に若干せり出している。周溝は検出されなかった。P1、P2は四本柱穴の一部で、P3は梯子穴である。竈の構築は上屋材を直接床面から積み上げていく。その上部は検出時既に削平されていた。床面は広範に硬化している。覆土は下層に破壊された竈上屋材を包含し、上層にはII a層が堆積する、典型的な自然埋没層序を示している。

遺物 各所から土師器、須恵器、石製模造品、刀子等が出土した。

1～3は甕である。1は中央南寄りから出土した。口径27.9cm、現高13.6cmで、暗褐色を呈する。胎土には石英・長石を含む。胴部はヘラナデされている。2はP3脇の覆土中から出土した。口径14.4cmで、明褐色を呈する。胴部は縦ヘラケズリされる。3は竈北脇から出土した。現高10.7cmで、灰褐色を呈する。胎土には石英・長石を含む。胴部はヘラナデの後、細かい単位で縦ヘラミガキされている。4は須恵器杯で、竈内から出土した。口径14.0cm、器高4.0cmで、灰褐色を呈する。ロクロ目は強く、底部は手持ちヘラケズリされている。

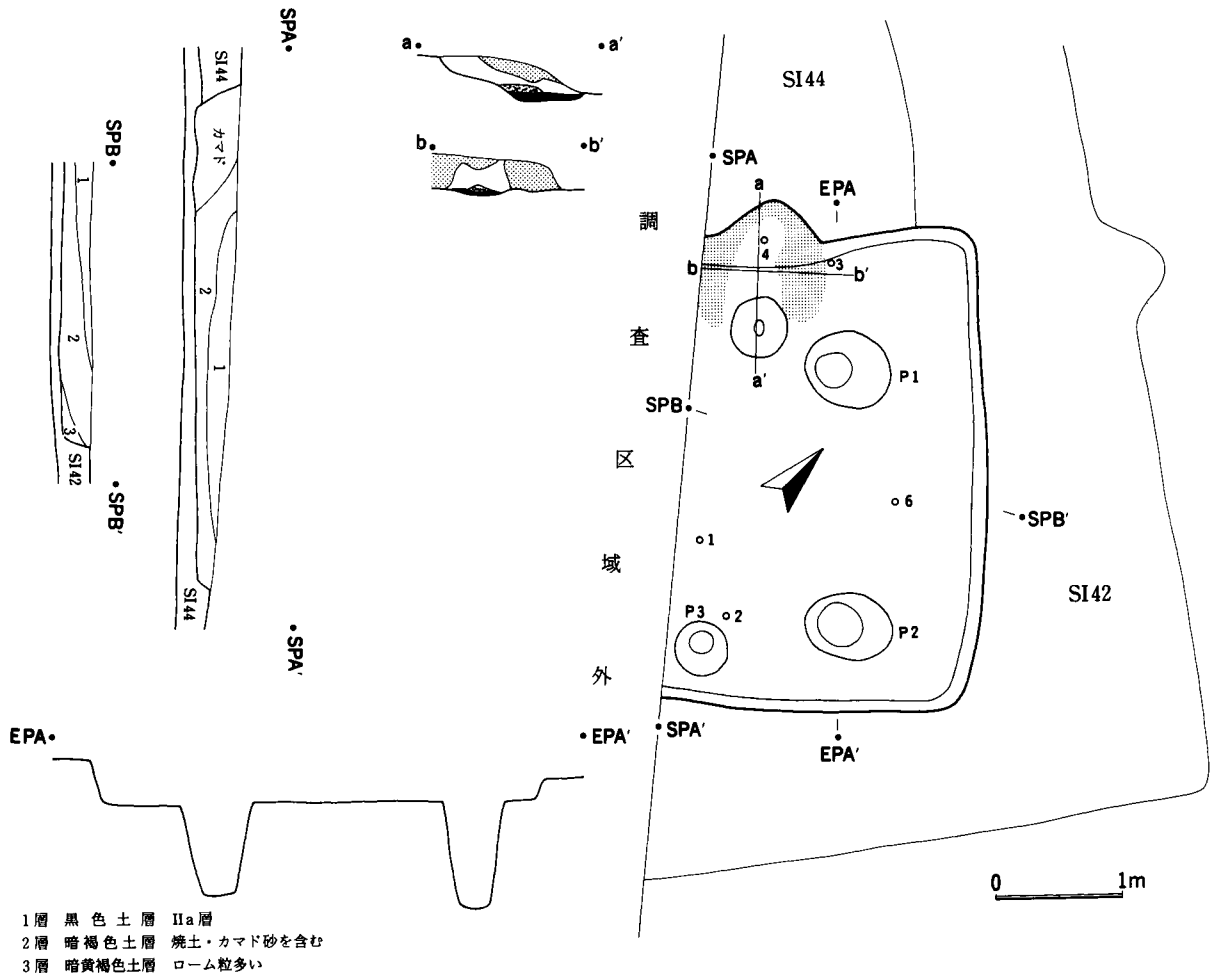
5は石製模造品で、覆土中から発見された。おそらく剣形の未製品で、一端を尖らせ、一辺を細かな剝離によって直線化している。先端にやや近く小孔を穿っている。剝離の中途段階の製品で、表面や側面には擦滑痕は見られず、裏面は未調整である。滑石製で、重量5.4gを量る。

SI 42 (第85図、第86図、図版10、図版25)

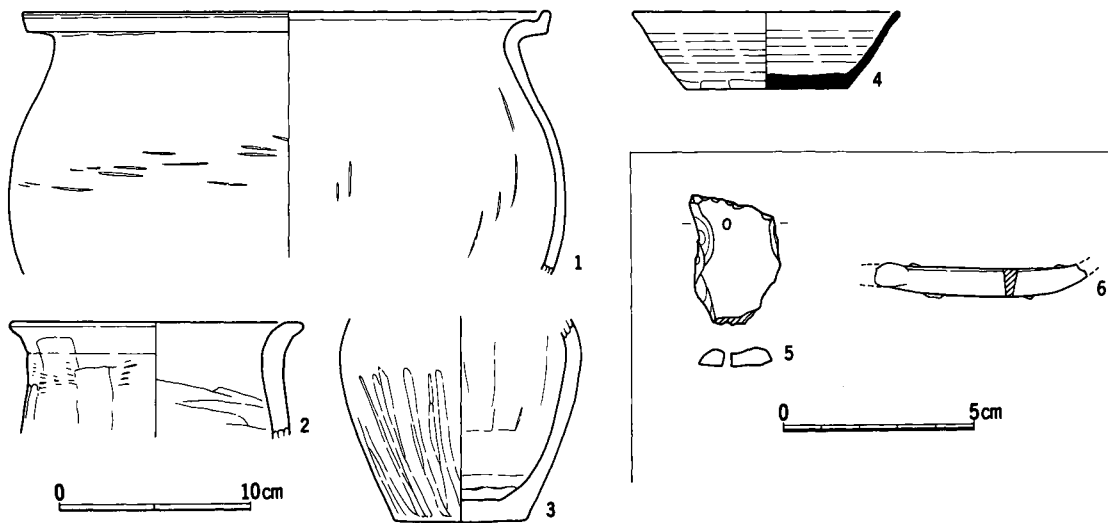
遺構 本遺跡の竪穴住居跡中最南端に位置する。東側でSI 43を攪乱し、中央から北西にかけてSI 41、SI 44に攪乱され、西半は調査区域外にある。また、台地の傾斜面にかかるため南東壁は十分検出できなかった。一辺8.1m前後の方形プランの大型住居跡である。北東壁中央に竈があり、周溝は全周していたと思われる。P4とP5が四本柱穴の一部を構成している。竈と東隅の間に貯蔵穴が設けられている。竈の上部は検出時既に若干削平されており、東袖部の手前が消失していた。床面は広範に硬化している。

遺物 主に竈と貯蔵穴周辺から土師器が出土した。

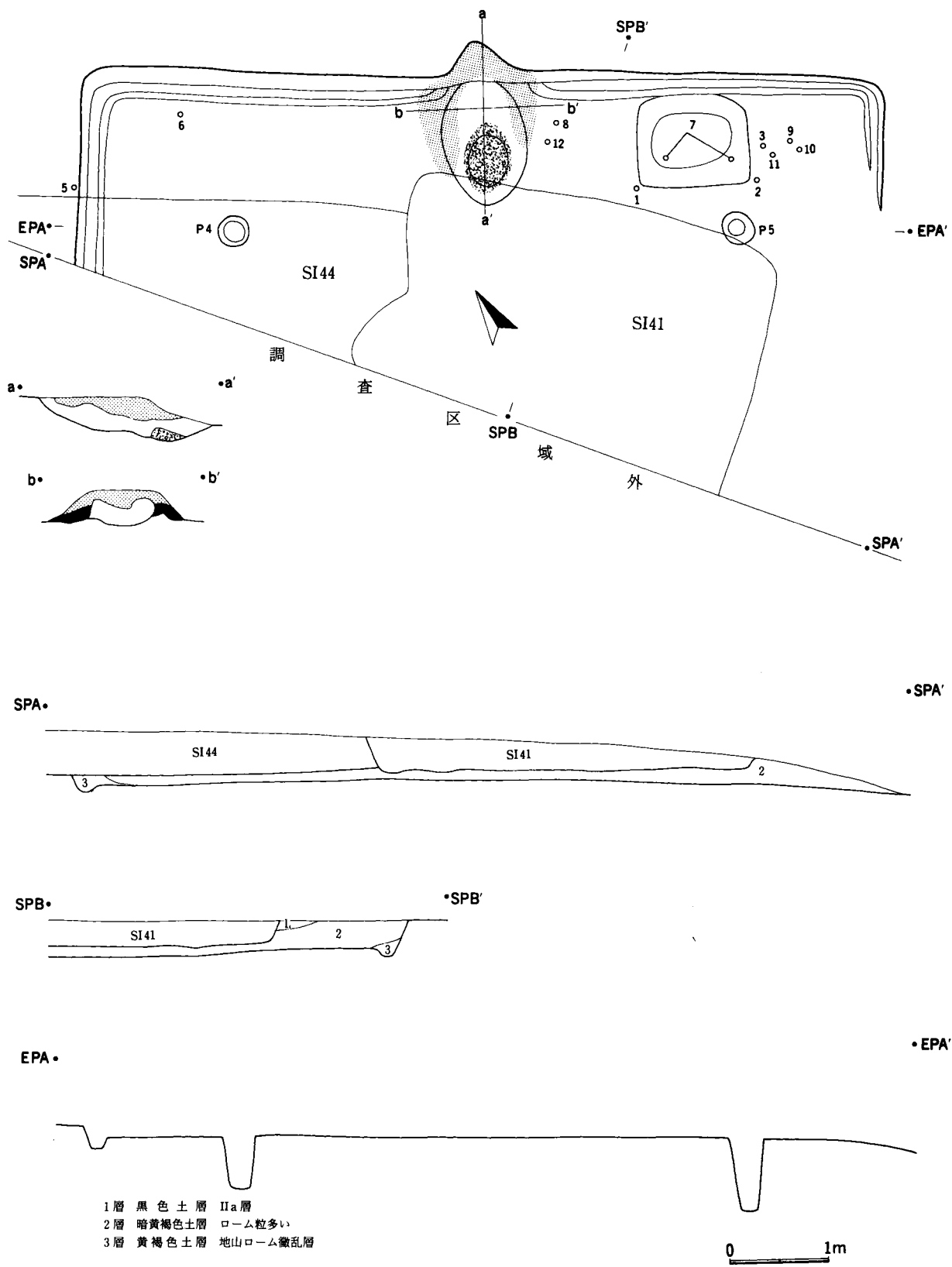
1～6は甕である。1は貯蔵穴西脇から出土した。口径17.2cm、器高20.2cmで、赤褐色を呈する。胴部は縦にヘラケズリされている。2は貯蔵穴東脇から出土した。口径13.1cm、器高18.3cmで、明褐色を呈する。胴部は縦ヘラケズリされ、底部周囲は横ヘラケズリされている。3は貯蔵穴東脇から出土した。口径15.2cm、現高6.8で、赤褐色を呈する。胴部は縦ヘラケズリされる。内外面に煤が付着している。4は覆土中から発見された。口径13.6cm、現高8.2cmで、赤褐色を呈する。胴部は斜めにヘラケズリされる。5は遺構検出時に、北西壁に接した遺構外から検出された。口径12.8cm、現高9.8cmで、明褐色を呈する。胴部はヘラナデされる。6は北隅付近の覆土から出土した。明褐色を呈し、胎土には石英・雲母を含む。胴部は細かい単位で斜めにヘラナデされている。7は鉢で、貯蔵穴内に散乱していた。口径11.5cm、器高7.7cmで、赤褐色を呈する。体部はナデの後に粗くヘラナデされる。外面には焼成時の黒斑がある。8～10は杯である。8は竈東脇から出土した。口径11.9cm、器高5.0cmで、内外面が黒色処理されている。体部はヘラケズリの後ヘラナデされ、内面はヘラナデで平滑になっている。9は貯蔵穴東脇から出土した。口径13.3cm、器高5.6cmで、赤褐色を呈する。体部はヘラケズリの後ヘラナデされ、内面は細かい単位でヘラミガキされて



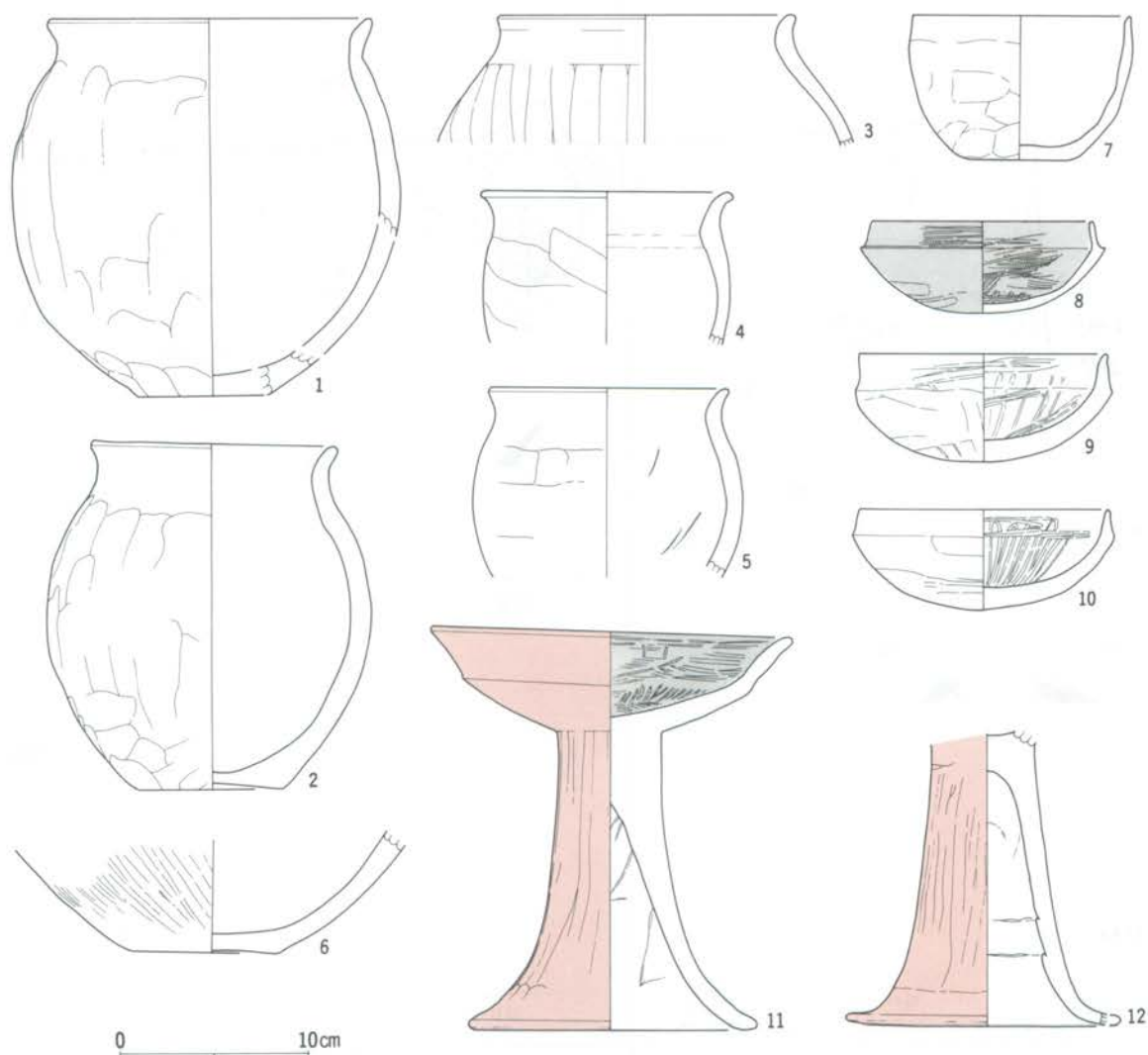
第83図 SI41遺構実測図



第84図 SI41出土遺物実測図



第85図 SI42遺構実測図



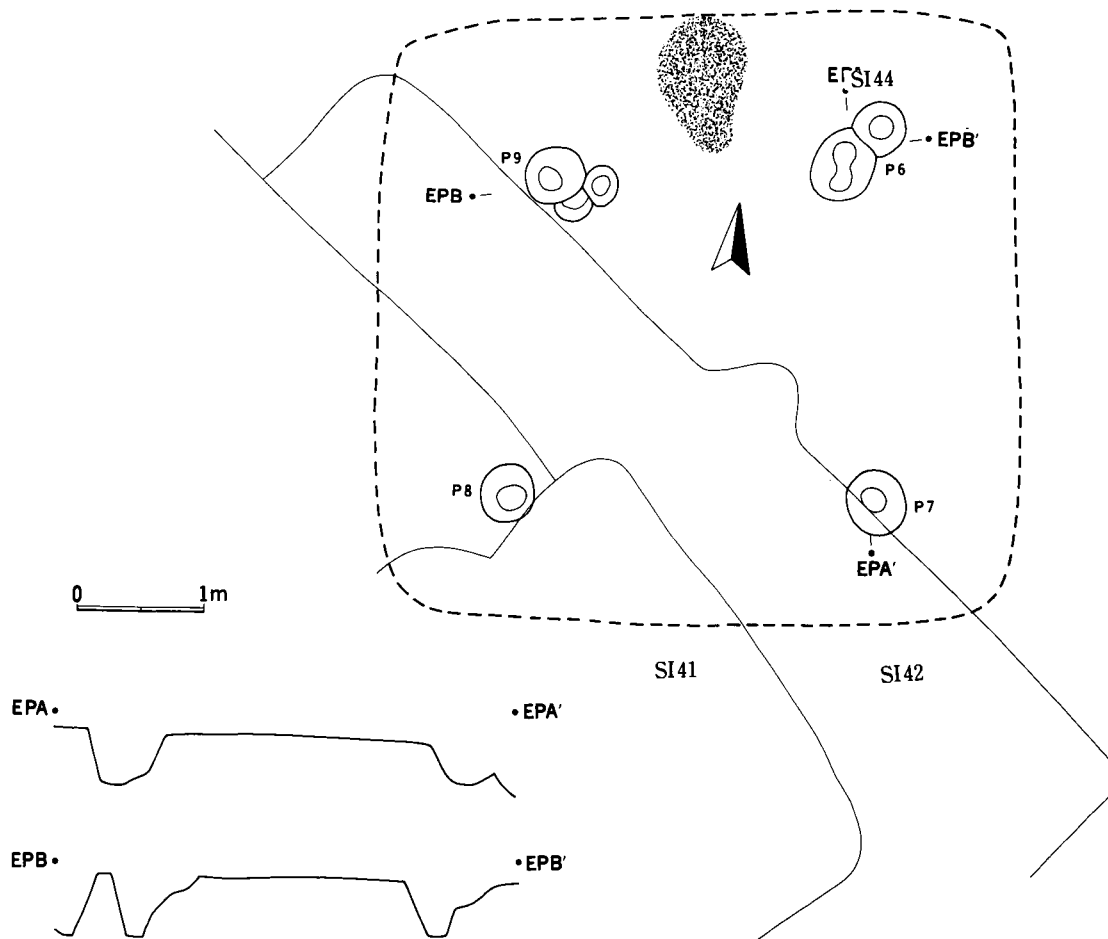
第86図 SI42出土遺物実測図

いる。体部の器壁に厚みがあり、かなり重量がある。10は貯蔵穴東脇から出土した。口径13.3cm、器高5.3cmで、赤褐色を呈する。調整技法は9に準じる。11・12は高杯である。11は貯蔵穴東脇の覆土中から出土した。口径19.8cm、器高21.0cmで、外面は赤彩され、杯部内面は黒色処理されている。杯部体部はヘラナデされ、内面は細かい単位でヘラミガキされている。脚部は縦ヘラケズリが周回し、内面にはヘラケズリの際のヘラ跡が残っている。12は竈東脇から出土した。現高13.3cmで、外面は赤彩されている。脚部は縦ヘラケズリが周回し、内面は輪積痕が明瞭に残る。

SI 43 (第87図、図版10)

遺構 本住居跡はSI42の遺構検出中に、竈の火床跡の焼成硬化面域と床の一部の硬化面が発見されたことによって存在が確認された。床面はソフトローム中に設定されている。柱穴はP6～P9の四本柱穴が完備していた。周溝の有無は不明である。南西側がSI 42等に攪乱されている。

遺物 遺物は出土しなかった。



第87図 SI43遺構実測図

SI 44 (第88図、第89図、図版10、図版32)

遺構 北側SI 40B、SI 42を攪乱し、南側でSI 41に攪乱されるが、大半が調査区域外に出ている。規模は不明だが、一辺5.5m以上ある方形プランを呈すると思われる。竈は調査区域外にあり、周溝は伴わない。柱穴はP10が検出された。壁からは間仕切り溝が1条延びている。床面の中央寄りが硬化していた。この住居跡はローム粒主体土によって人為的に埋められている。

遺物 遺物は少なく、土師器、転用砥具が出土した。

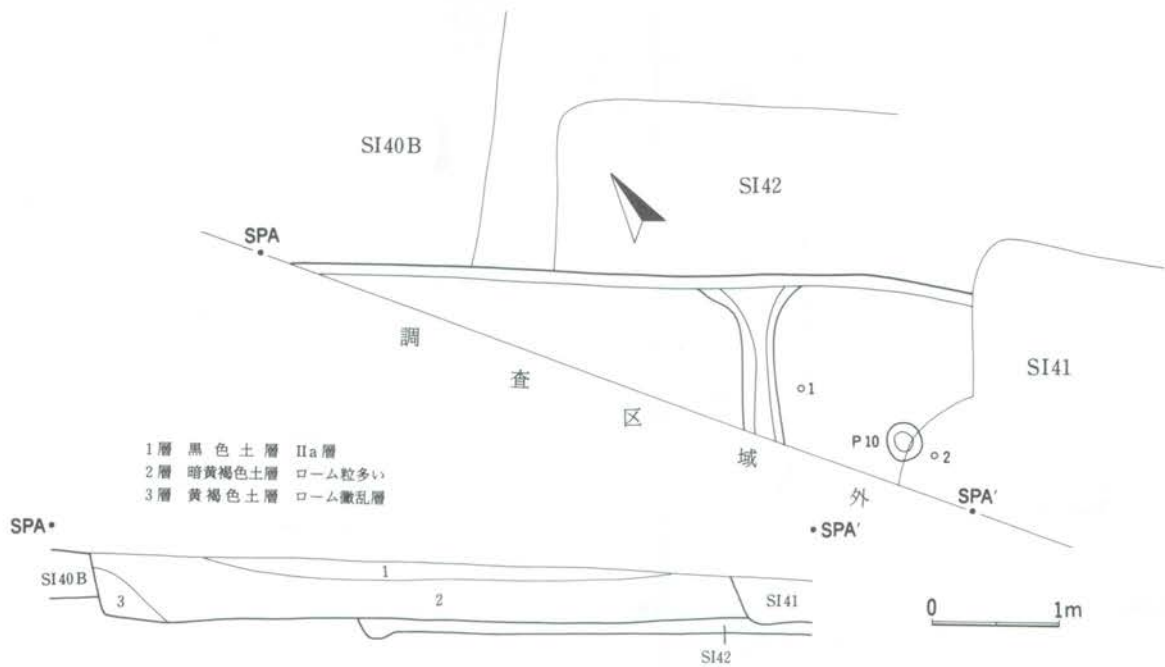
1は甕で、間仕切り溝脇の覆土から出土した。口径10.2cmで、暗褐色を呈する。胴部は縦ヘラケズリされている。

2は土器片転用砥具で、表面にのみ刃器の擦痕が縦横に走っている。土器は内外面とも赤彩されている。

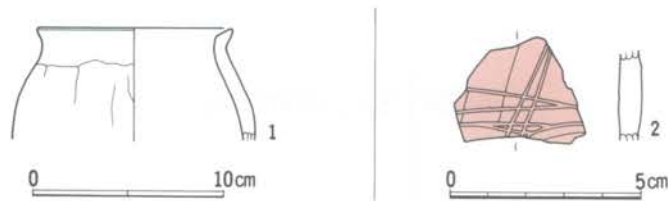
SI 45・SI 46 (第90図、第91図、図版11、図版25)

遺構 調査区中央付近に位置し、東側でSI 21を攪乱し、南側はSI 49に攪乱される。

SI 45は3.0m×3.4mの台形プランの小型住居跡である。南側はSI 46に攪乱されている。北壁に竈を持つ。周溝は攪乱を受けた南側は確認できなかった。四本柱穴は浅いが完備している。竈の遺存状態は良好で、床面の中央は硬化していた。



第88図 SI44遺構実測図



第89図 SI44出土遺物実測図

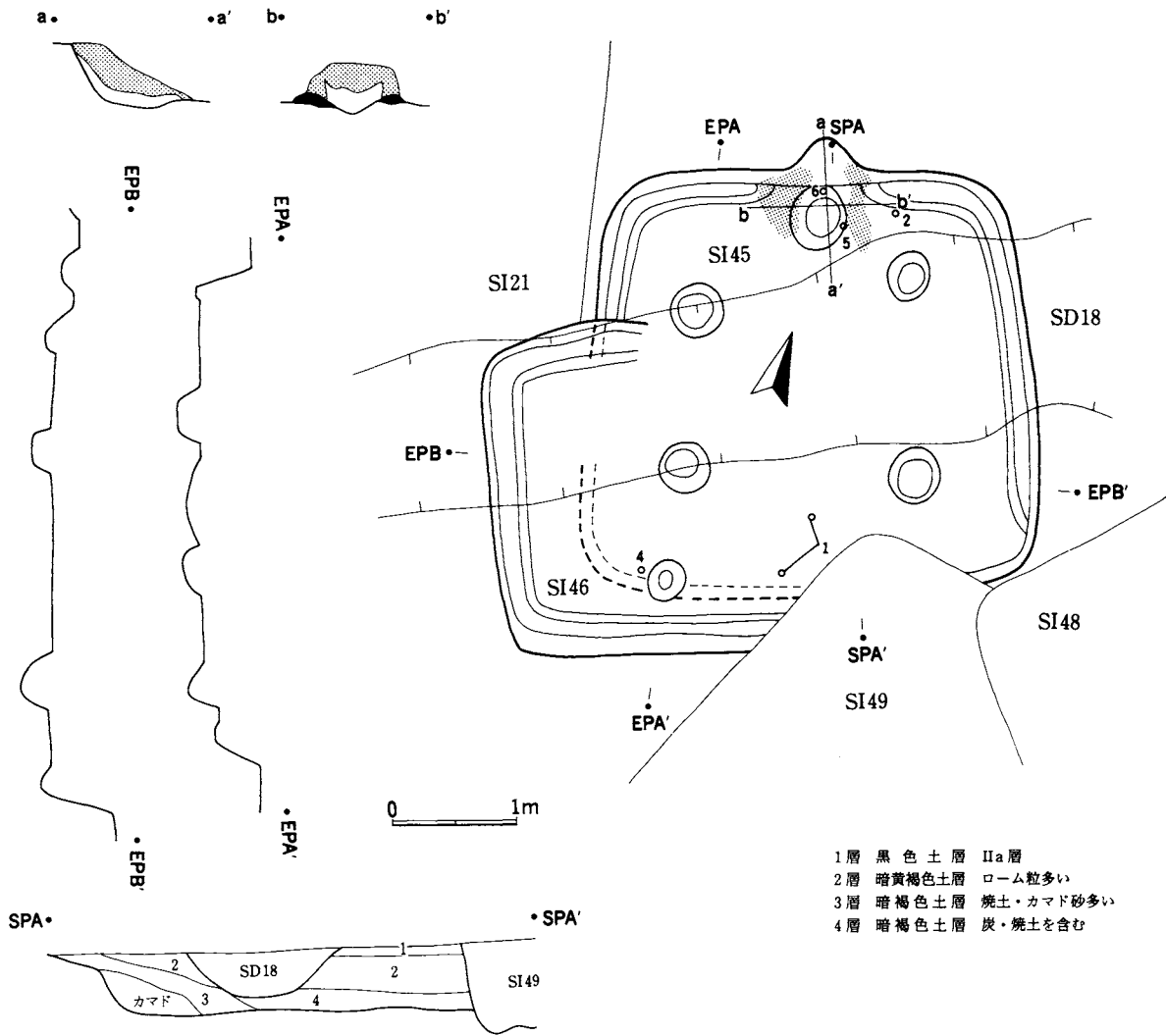
SI 46はSI 45を攪乱しているが、SI 45から発掘を着手したので、浅い床面を持つ本住居跡を破壊してしまった。規模は小さく、3 m弱の方形プランである。竈の有無は不明で、周溝は全周していたと思われる。南側に梯子穴を備えている。中央の貼床は硬化しており、これが両住居跡の新旧関係の決め手となった。

以上の住居跡間の新旧関係を下に表示しておく。

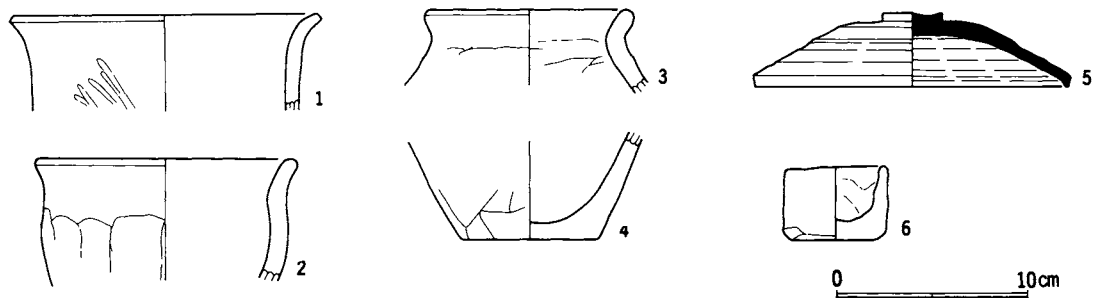


遺物 SI 45からは2・3・5・6が竈を中心に出土した。土師器と須恵器がある。

2・3は甕である。2は竈東脇から出土した。復元口径13.6cmで、赤褐色を呈する。胴部は縦ヘラケズリされている。3は覆土中から発見された。復元口径11.0cmで、赤褐色を呈する。頸部以下はヘラケズリされる。5は須恵器杯蓋で、竈内から出土した。口径16.3cm、器高3.8cmで、灰褐色を呈する。ロクロ目は



第90図 SI45・SI46遺構実測図



第91図 SI45・SI46出土遺物実測図

やや強く、頂部は回転ヘラケズリされている。6は手捏ね土器で、竈内から出土した。口径5.2cm、器高3.8cmで、赤褐色を呈する。手捏ねで成形してから、底部を硬い物に押し当てて平坦面を作り、体部を横ナデして仕上げている。

SI 46からは1と4が出土した。いずれも土師器甕である。

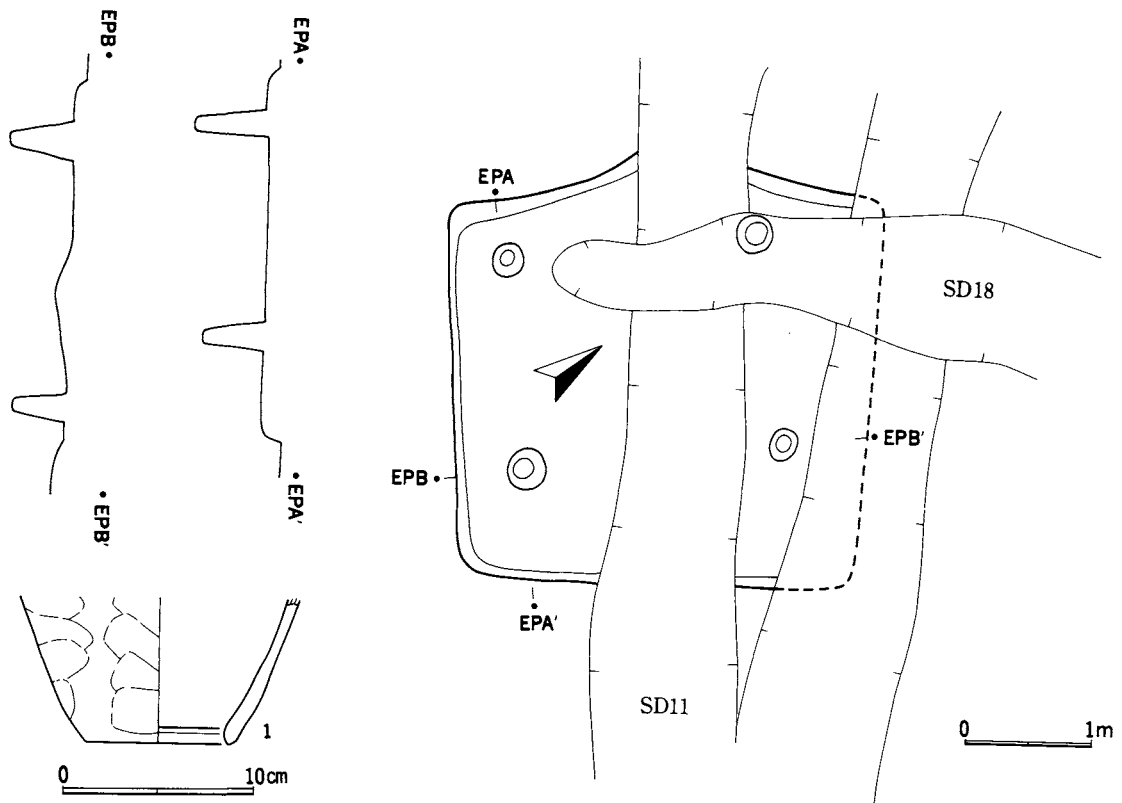
1は南東寄りから出土した。口径16.3cmで、暗褐色を呈する。頸部以下はヘラナデされる。4は梯子穴脇から出土した。赤褐色で、底部周囲は横にヘラケズリされている。内面は剥落が激しい。

SI 47 (第92図、図版11)

遺構 調査区の中央に位置する。ほかの住居跡との重複関係はないが、溝の攪乱によってかなり破壊されている。3m前後の方形プランを持つ小型住居跡である。竈は北西壁に存在したが、SD 11が攪乱していた。周溝は伴わない。四本柱穴は完備している。床面は浅く設定され、顕著な硬化面は認められない。

遺物 土師器片が少量出土した。

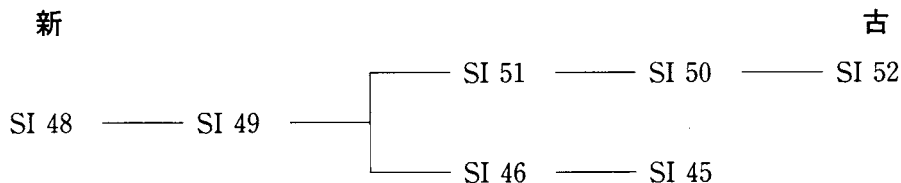
1は甕で、覆土中から発見された。赤褐色で、幅広の横ヘラケズリ調整である。外面に焼成時の黒斑がある。



第92図 SI47遺構・出土遺物実測図

第8節 SI 48～SI 51

新旧関係 SI 48～SI 51は一連の重複関係にある(第93図)。断面図SPA—SPA'からは、SI 48がSI 49を攪乱し、SI 49はSI 51を攪乱しているのがわかる。また断面図SPB—SPB'からはSI 51がSI 50を攪乱している様子が明瞭である。なお、SI 51は東側でSI 52を攪乱している。SI 49が北隅でSI 45、SI 46を攪乱していることは前述した。以上の関係を図式的に示せば、次のようになる。



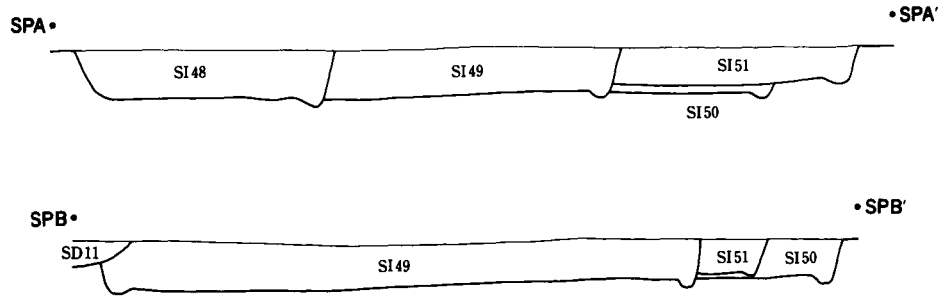
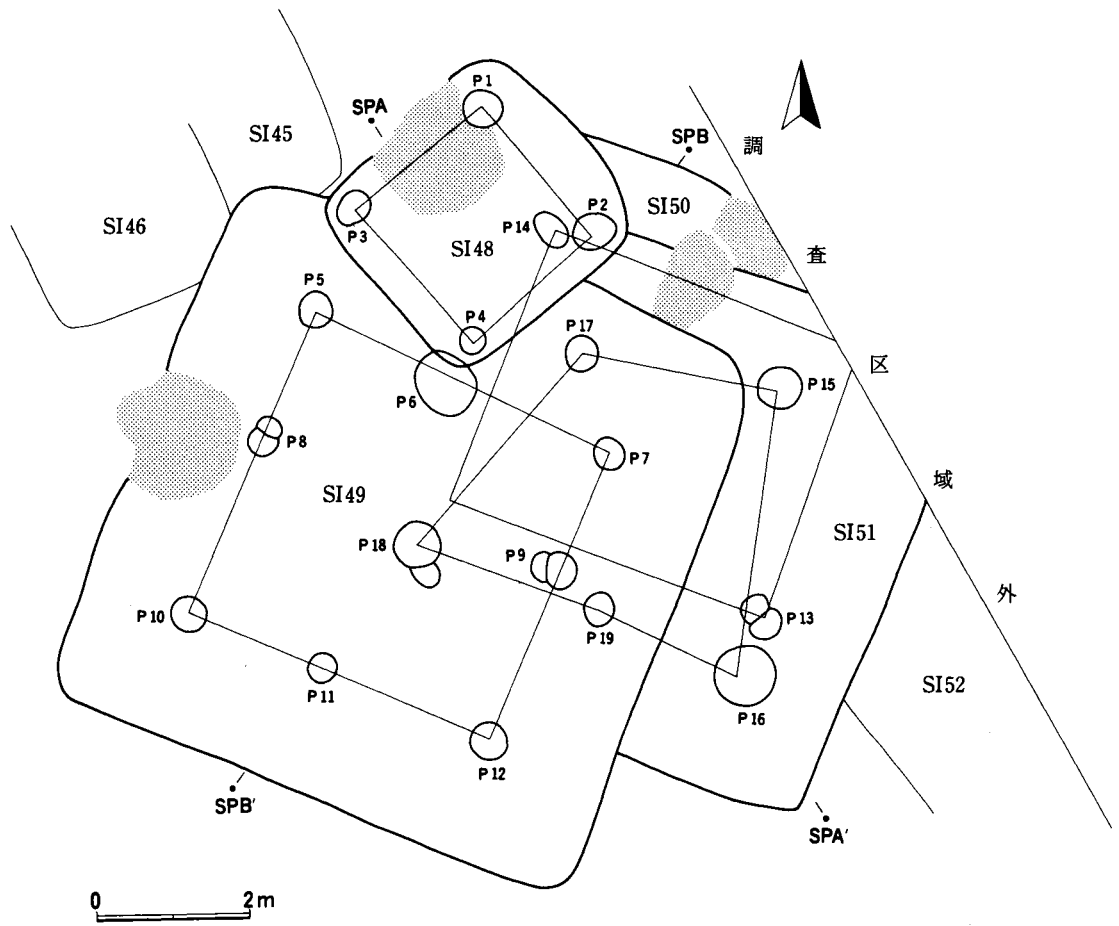
柱穴の帰属 SI 48の柱穴は、P1～P4で四本柱穴を構成する。大型住居跡のSI 49はP5～P12の8基から構成される2間×2間の配置をとる。P18は総柱の中心柱的位置にあるが、直上は堅牢に床貼りされているので、本遺構には属さない。また、P19は梯子穴の位置にあるが、柱穴P9に近づきすぎているので、本遺構には属しないと考えられる。SI 50は多くの住居跡に攪乱されて、本来の柱穴を特定することは難しいが、P13とP14が四本柱穴を構成する。北東の1基は調査区域外にあり、南西の1基は検出できなかった。SI 51は変則的な柱穴配置で、北辺がP15・P17の2基、南辺がP16・P19・P18の3基となる。

SI 48 (第94図、第95図、第96図、図版11、図版25、図版26、図版33、図版34)

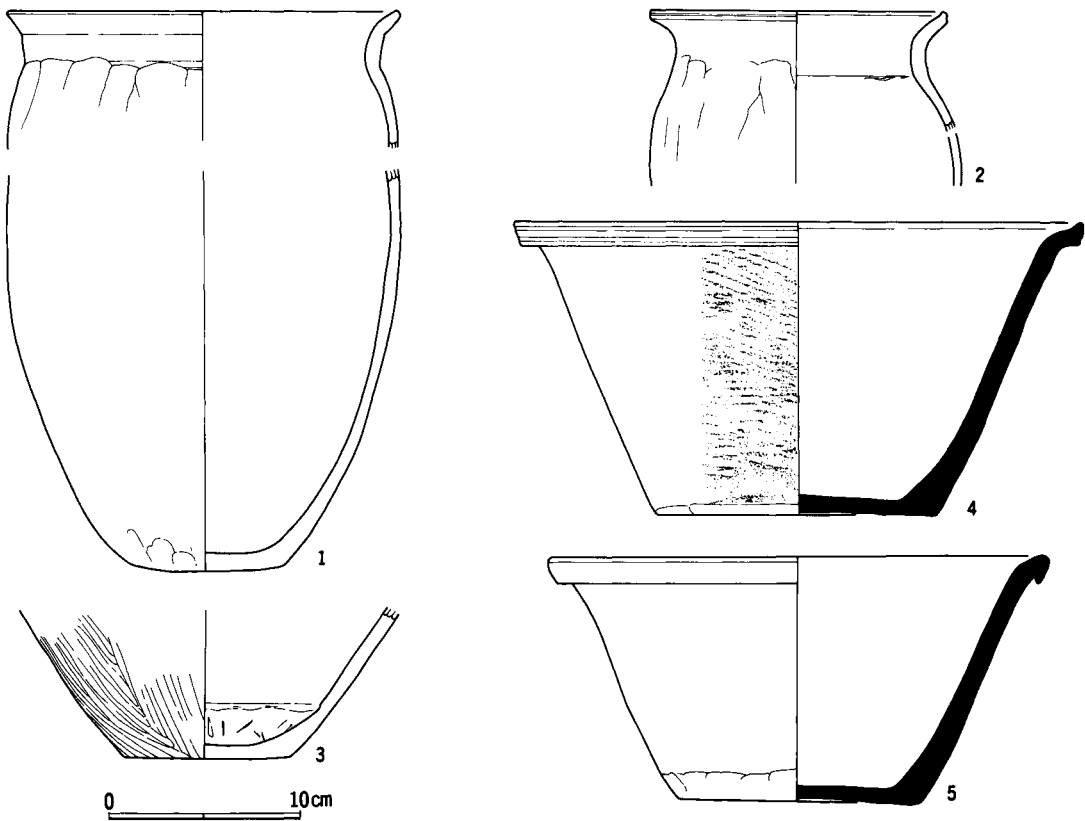
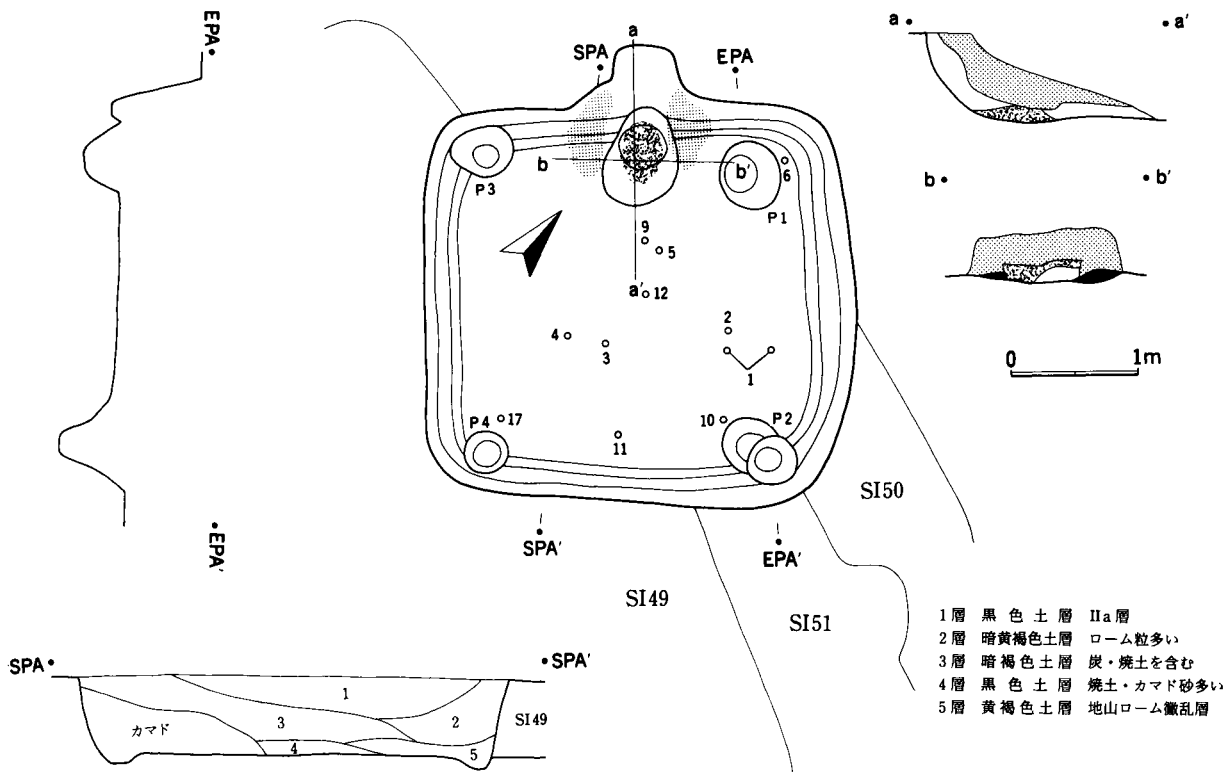
遺構 SI 49・SI 50・SI 51を攪乱している。2.9m×3.4mの略方形プランを呈する小型住居跡である。北西壁中央に竈を持ち、周溝が全周する。四本柱穴は完備し、四隅に偏在している。竈は手前の上屋材が若干崩れ、床面に散乱していた。煙道は深く、壁外に突出している。床は硬化面が広範に広がっている。住居廃絶後は、ローム土や炭・焼土包含土等により、人為的に埋められた。

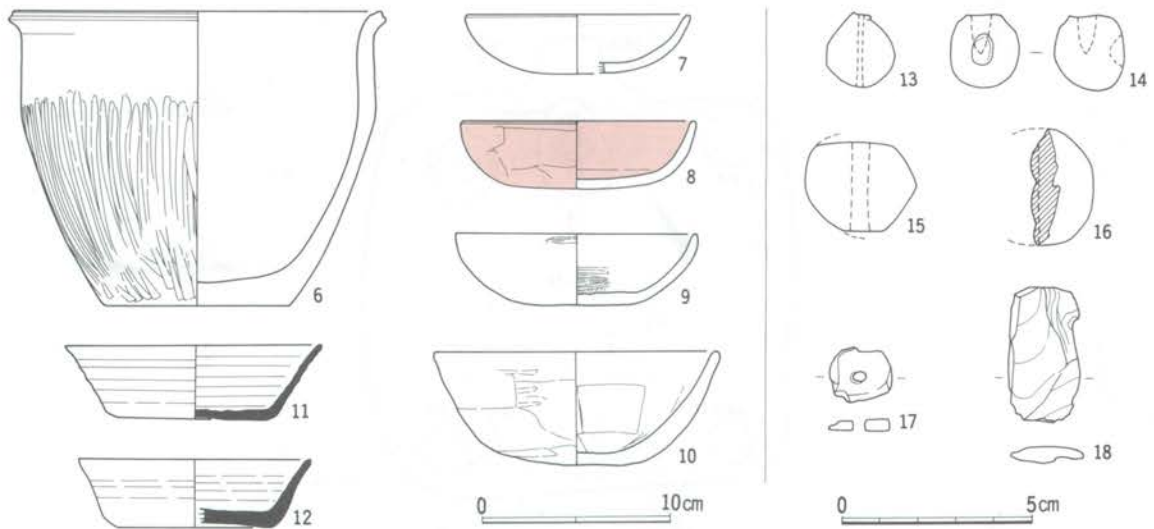
遺物 本住跡の遺物は覆土中から出土したものが圧倒的に多い。土師器、須恵器、土玉、白玉、剥片等が出土した。

1～3は土師器甕である。1は東寄り覆土中から出土した。口径20.6cm、器高28.0cmで、赤褐色を呈する。胴部は上半が縦ヘラケズリ、下半が縦ヘラナデされる。2は東寄り覆土から出土した。口径15.6cm、現高8.9cmで、暗褐色を呈する。胴部調整は縦ヘラケズリが多用される。3は中央覆土中から出土した。灰褐色を呈し、胎土には石英・長石を含む。胴部は細い単位でヘラナデされている。底部は木葉圧痕が残る。4、5は須恵器鉢である。4は中央覆土中から出土した。口径29.9cm、器高15.1cmで、暗灰褐色を呈する。胴部には全面にタタキ目が巡り、内面は指頭で成形後に横ナデ調整している。底部は内外面とも叩き板による回転ナデ調整を施している。5は中央覆土中から出土した。口径26.2cm、器高12.6cmで、大半は赤褐色だが、底部周辺は暗灰褐色を呈する。胴部は内外面とも横ナデが行き届き、底部周囲はヘラケズリされている。底部はヘラナデ調整である。6は土師器鉢で、北隅から出土した。口径19.5cm、器高15.6cmで、茶褐色を呈する。胴部は細い単位で縦ヘラナデされ、底部はヘラナデ調整される。焼成時の黒斑がある。7～10は土師器杯である。7は覆土中から発見された。赤褐色を呈し、内外面ともヘラナデされている。8は覆土中から発見された。口径12.6cm、器高3.6cmで、内外面とも赤彩される。体部外面はヘラケズリされ、内面はヘラミガキされる。9は中央覆土から出土した。口径13.3cm、器高3.9cmで、赤褐色を呈する。体部外面はヘラナデ、内面は細い単位でヘラナデされている。10はP2脇の覆土中から出土した。口径15.0



第93図 新旧関係と柱穴の帰属 (7)





第96図 SI48出土遺物実測図(2)

cm、器高6.0cmで、暗褐色を呈する。体部から底部にかけてヘラナデされている。11、12は須恵器杯である。南東寄り覆土から出土した。口径13.5cm、器高4.0cmで、灰褐色を呈する。ロクロ目は強く、底部は回転ヘラケズリされている。12は中央覆土から出土した。口径12.2cm、器高3.6cmで、灰褐色を呈する。ロクロ目は弱く、底部は手持ちヘラケズリされる。

13～16は土玉で、いずれも覆土中から発見された。13は最大径1.9cmで、茶褐色を呈する。ナデ仕上げされ、6.1gを量る。14は最大径1.9cmで、茶褐色を呈する。2方向から穿孔された形跡があるが、いずれも未貫通である。ナデ仕上げされ、7.3gを量る。15は明褐色を呈し、ナデ仕上げされている。16は赤褐色を呈し、ナデ仕上げされている。

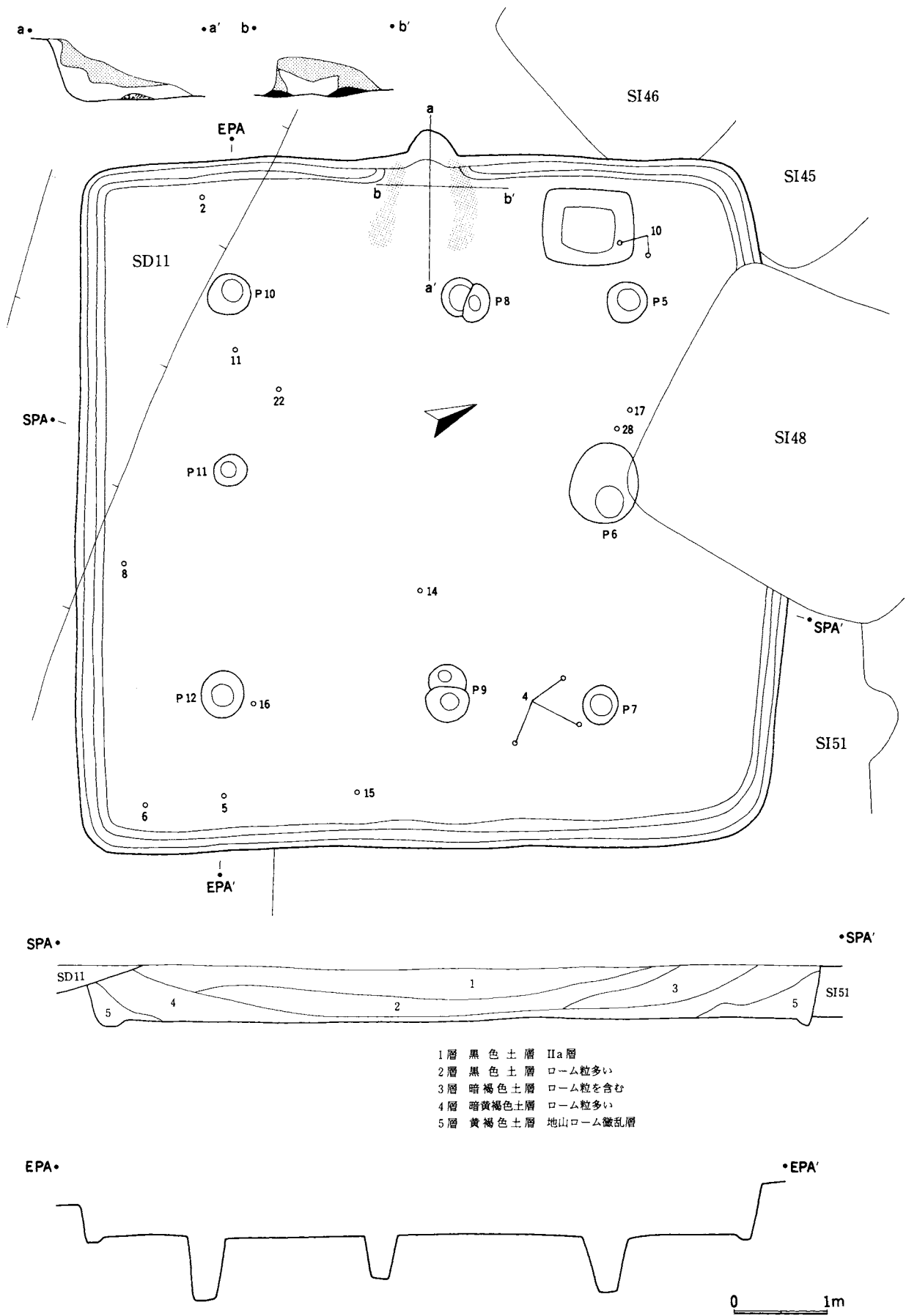
17は滑石製白玉で、P4脇8から出土した。長径1.6cm、重量1.0gを量る。穿孔されただけで、ほとんど未調整である。18は滑石片岩製の剝片で、長さ3.5cmで、重量4.8gを量る。

SI 49 (第97図、第98図、第99図、図版11、図版26、図版32、図版34)

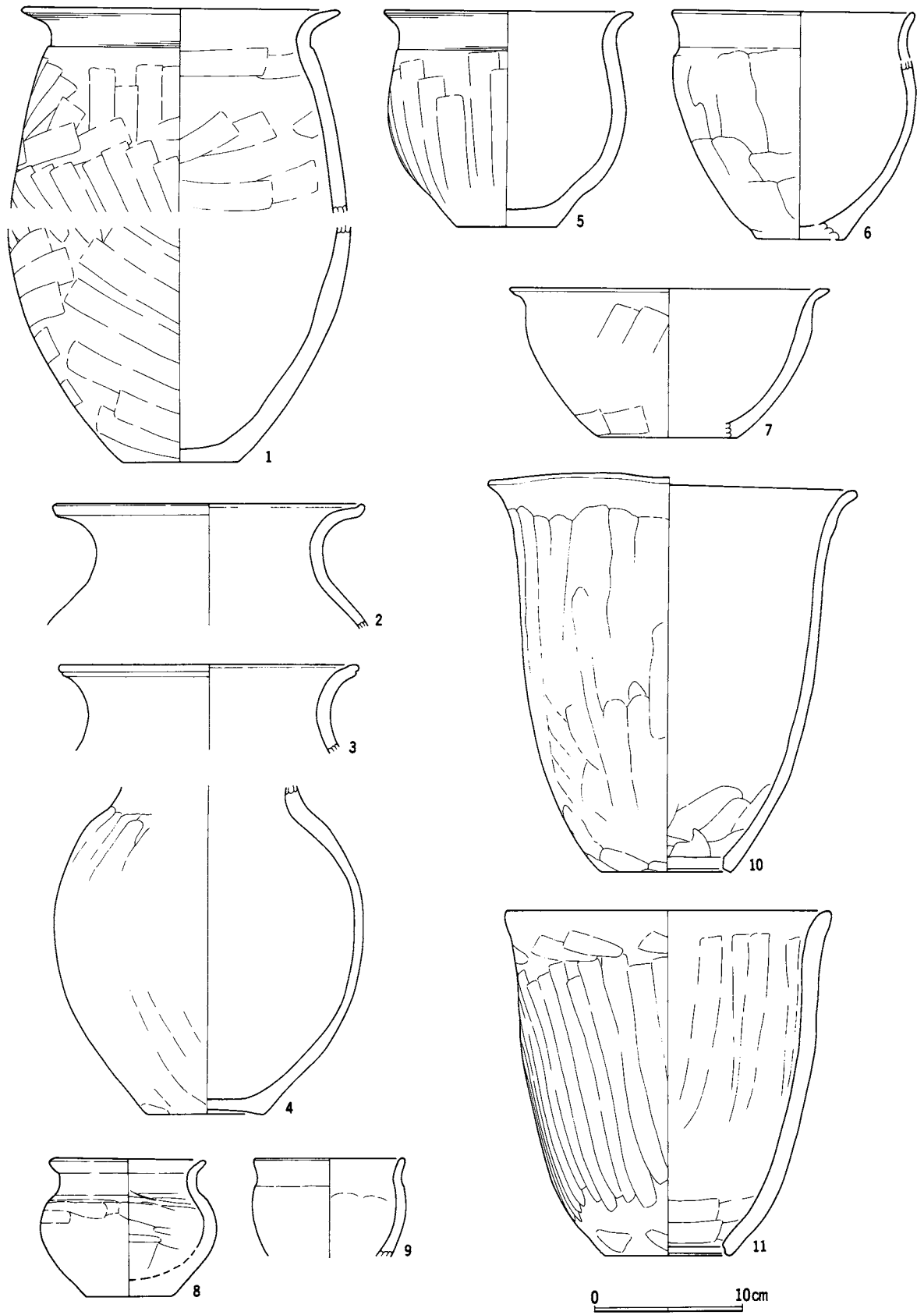
遺構 北側でSI 45・SI 46・SI 51を攪乱するが、SI 48に攪乱されている。7.0m×7.2mの方形プランを呈する大型住居跡である。西壁中央に竈を備え、周溝が全周する。柱穴は方形に8基配列され、2間×2間となる。このほか北西隅と竈の中間に貯蔵穴が設けられる。竈の遺存状態は良好で、顕著な船形ピットは存在せず、火床もあまり焼けていない。床面は広範に硬化していた。住居廃絶後、周縁にローム包含土が投棄され、その後中央部は自然に埋没したものと思われる。

遺物 各所から土師器、須恵器、土玉、転用砥具、鉄器等が多量に出土した。覆土中のものが多い。

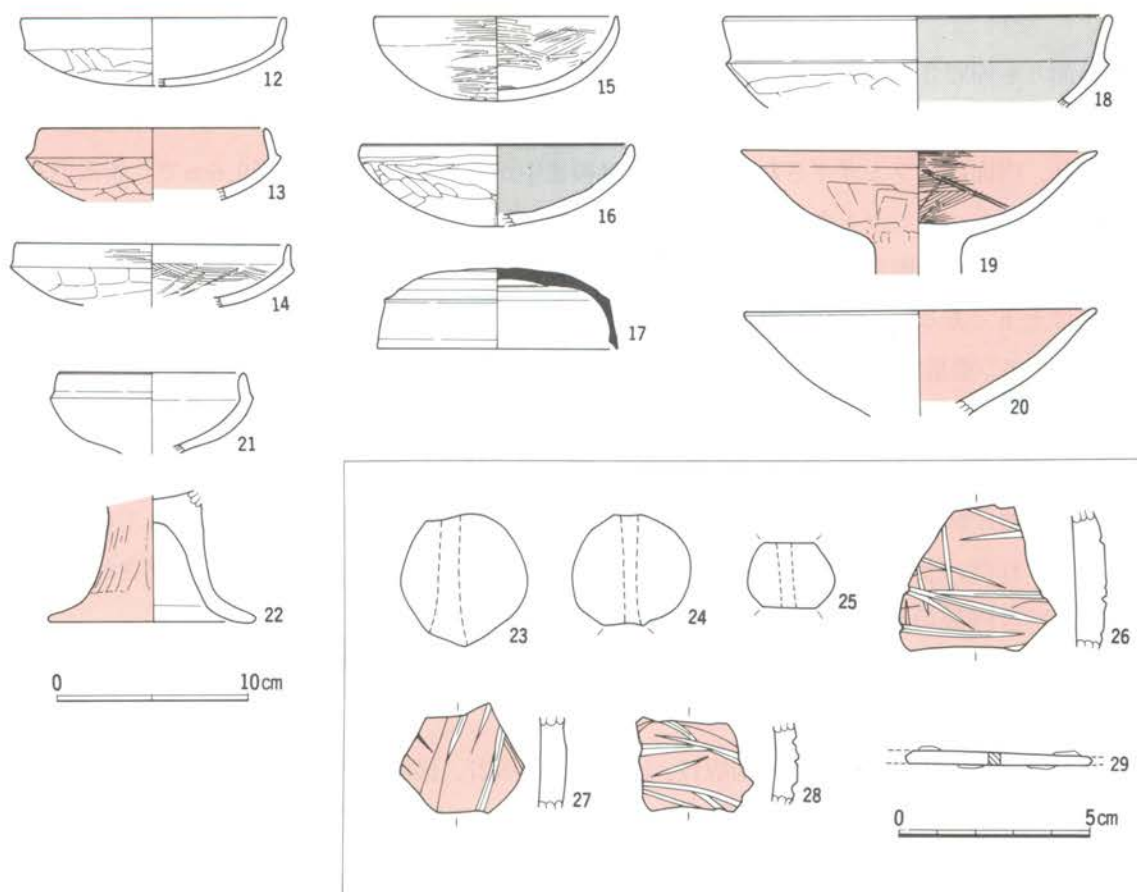
1～6は甕である。1は覆土中から発見された。口径16.8cm、器高30.0cm以上で、赤褐色を呈する。胴部はヘラナデされるが、上部は縦方向、下部は粗い斜め方向となる。内面には粗いヘラナデが見られる。2は南西隅付近の覆土から出土した。口径21.0cmで、灰褐色を呈する。胎土には石英・長石を含む。横ナデ調整が主体となる部位である。3は覆土中から発見された。口径20.2cmで、赤褐色を呈する。横ナデされている。4はP7付近の覆土から、散乱した状態で出土した。現高21.8cmで、赤褐色を呈する。胴部は縦ヘラケズリの後、ヘラナデされている。5は南東隅付近の覆土中から出土した。口径16.2cm、器高14.7cm



第97図 SI49遺構実測図



第98図 SI49出土遺物実測図(1)



第99図 S I 49出土遺物実測図 (2)

で、赤褐色を呈する。胴部は縦ヘラケズリが多用される。6は南東隅の覆土から出土した。口径16.5cm、現高15.4cmで、暗褐色を呈する。胴部は縦ヘラケズリされる。7は鉢で、覆土中から発見された。口径20.8cm、現高10.0cmで、暗褐色を呈する。胴部はナデの後、疎らなヘラケズリを行っている。8は小型壺で、南壁際覆土中から出土した。口径10.5cm、器高5.8cmで、赤褐色を呈する。頸部までは横ナデ、胴部はナデの後、横にヘラナデされる。9はおそらく小型台付甕である。口径10.2cm、現高6.5cmで、暗褐色を呈する。胴部はナデ調整される。10・11は甗である。10は貯蔵穴内及びその周辺から出土した。口径25.1cm、器高26.5cmで、赤褐色を呈する。胴部は縦ヘラケズリされる。11はP10付近から出土した。口径22.0cm、器高22.9cmで、赤褐色を呈する。胴部を縦ヘラケズリした後に、頸部と底部周囲を横にヘラケズリしている。内面は縦にヘラナデされる。内外面に焼成時の黒斑がある。12~16は杯である。12は覆土中から発見された。口径14.0cm、器高3.6cmで、暗褐色を呈する。体部は周縁に沿ってヘラケズリされ、内面はヘラナデで、平滑になっている。13は覆土中から発見された。明褐色を呈し、調整は12に準じる。14は中央東寄りから出土した。暗褐色を呈し、口縁は横ナデの後、粗いヘラミガキが入る。内面は細いヘラミガキによって平滑になっている。15は東壁付近の覆土から出土した。口径12.8cm、器高4.5cmで、赤褐色を呈する。内外面ともナデの後、細い単位でヘラミガキされる。16はP12脇の覆土から出土した。内面が黒色処理されている。体部は不規則なヘラケズリが施される。17は須恵器杯蓋で、P6脇の覆土から出土した。口径12.6cm、器高4.2cmで、明灰色を呈する。口唇と稜は鋭く成形され、頂部の回転ヘラケズリは半ばまで達している。18~22は高杯である。18は覆土中から発見された。暗褐色を呈し、内面は黒色処理されている。体部は周縁に沿ってヘラケズリされ、内面はヘラミガキされている。19は覆土中から発見された。口径18.6cm、現高6.5cm

で、内外面とも赤彩されている。体部は不規則にヘラケズリされ、内面はヘラナデで平滑になっている。20は覆土中から発見された。口径18.4cmで、赤褐色を呈し、内面は赤彩されている。体部調整はヘラナデが多用され、内面はヘラミガキされている。21は覆土中から発見された。口径9.6cmで、赤褐色を呈する。体部は内外面ともヘラミガキされている。22はP10・P11間から出土した。現高6.6cmで、明褐色を呈し、外面が赤彩されている。脚部は縦ヘラケズリされている。

23～25は土玉である。いずれも覆土中から発見されている。23は最大径3.5cmで、明褐色を呈し、ナデ仕上げされている。重量33.7gを量る。24は最大径3.2cmで、茶褐色を呈し、ナデ仕上げされている。重量29.6gを量る。25は最大径2.3cmで、茶褐色を呈する。ナデ仕上げされ、紐通し面は両面が面取りされている。重量10.3gを量る。

26から28は土器片転用砥具である。転用された土器片は、いずれも内外面とも赤彩されている。26は覆土中から発見された。土器片の外面のみに刃器の擦痕が縦横に走る。27は覆土中から発見された。特徴は26に準じる。28はP6脇の覆土から出土した。特徴は前二者に準じる。

29は鉄鏃または釘の一部で、覆土中から発見された。断面が方形を呈し、現長4.9cm、重量3.7gを量る。

SI 50・SI 51 (第100図、第101図、図版11、図版26、図版27、図版33、図版34、図版35)

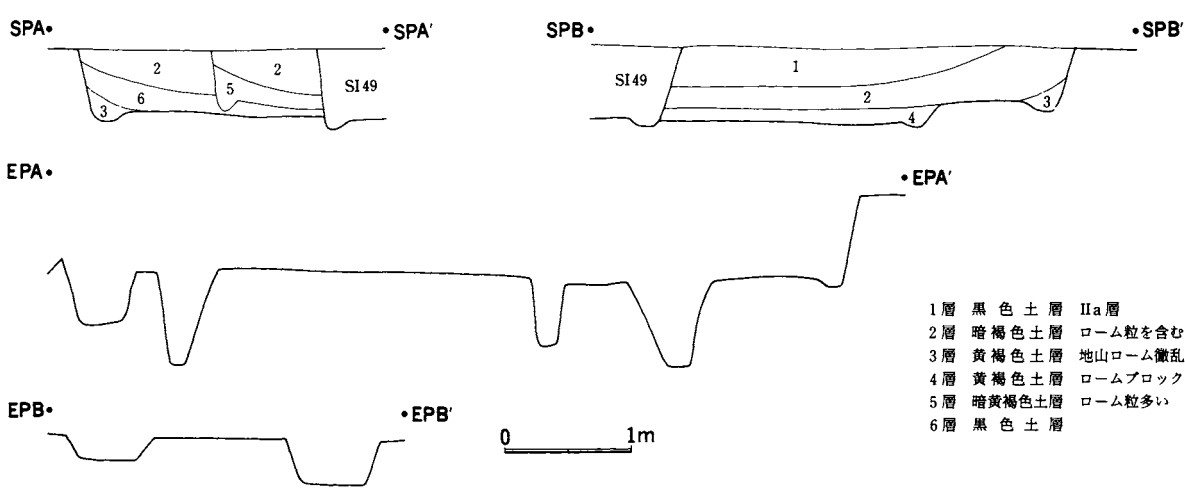
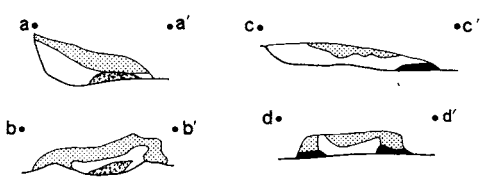
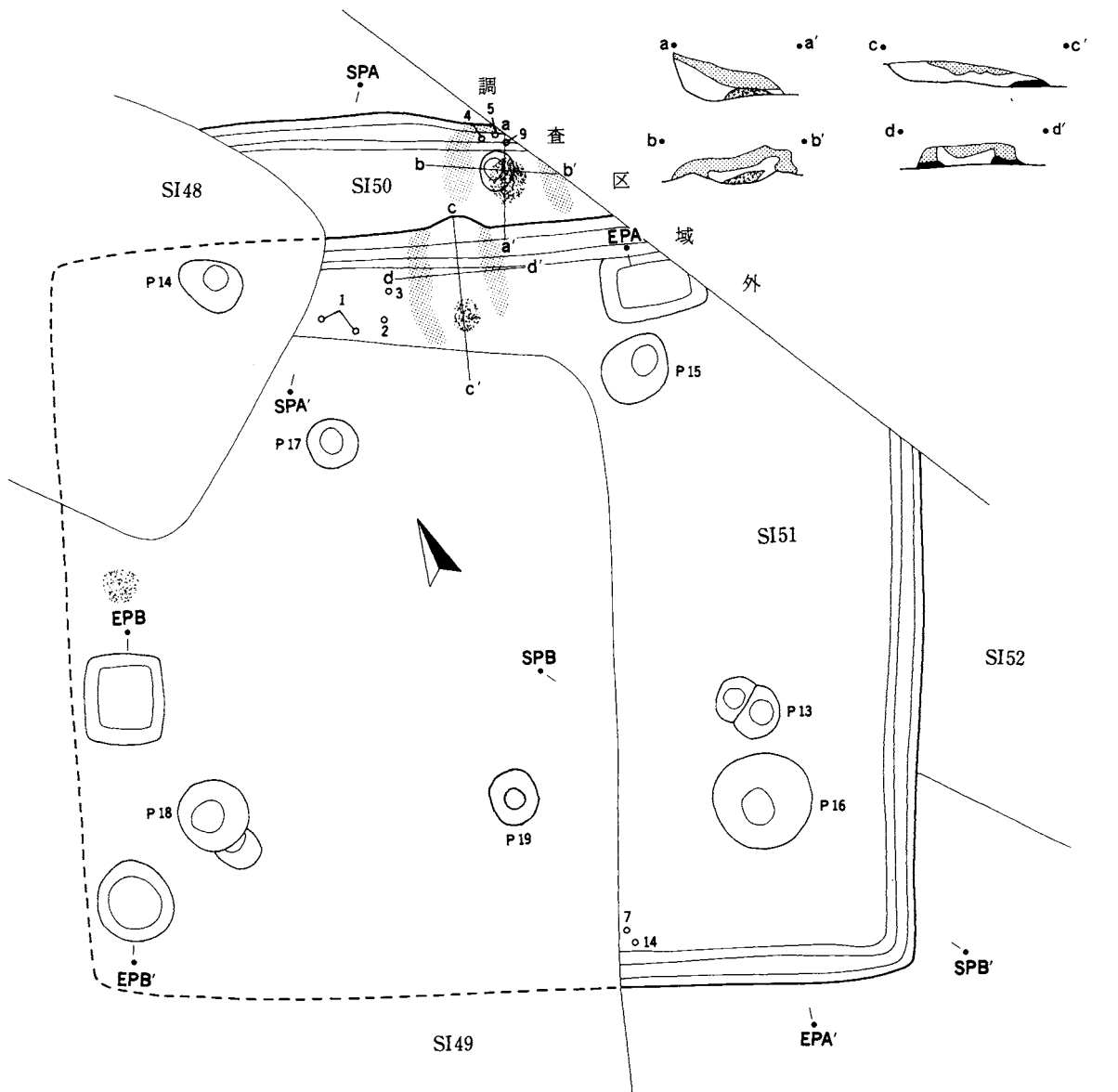
遺構 SI 50は大半をSI 51によって攪乱されている。また、両住居跡は南東でSI 52を攪乱するが、北西側ではSI 48・SI 49に攪乱されており、東隅は調査区域外に出ている。

SI 50は竈周辺と一部の床面のみが良好に遺存していた。規模は不明で、周溝は全周していたらしい。竈は北東壁に設置されるが、SI 51に攪乱されたり、一部が調査区域外にかかっている。柱穴は四本柱穴のうち、P13とP14が確認された。

SI 51は竈周辺と東側が良好に遺存している。6m×7m程の長方形に近いプランを呈し、周溝は確認範囲では全周していた。竈は東北壁中央に設けられるが、上部はかなり削平されている。顕著な船形ピットは見られず、焼成硬化面も小さい。なお、推定北西壁中央付近には本住居跡に属すると思われる焼成硬化面があり、これが第二竈または旧竈に相当する。柱穴は変則配置のP15～P19の5基である。このほかの施設として、二つの竈脇にはそれぞれ貯蔵穴が存在する。このうち、第二竈(旧竈)脇のものは、貯蔵穴としてはやや浅すぎる感がある。また、推定西隅には円形プランの貯蔵穴様のピットが存在する。床面は中央部が硬化している。

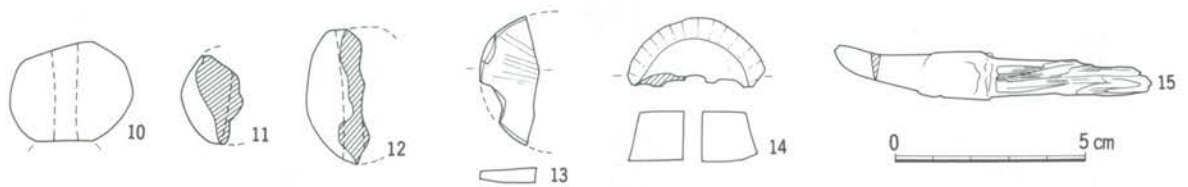
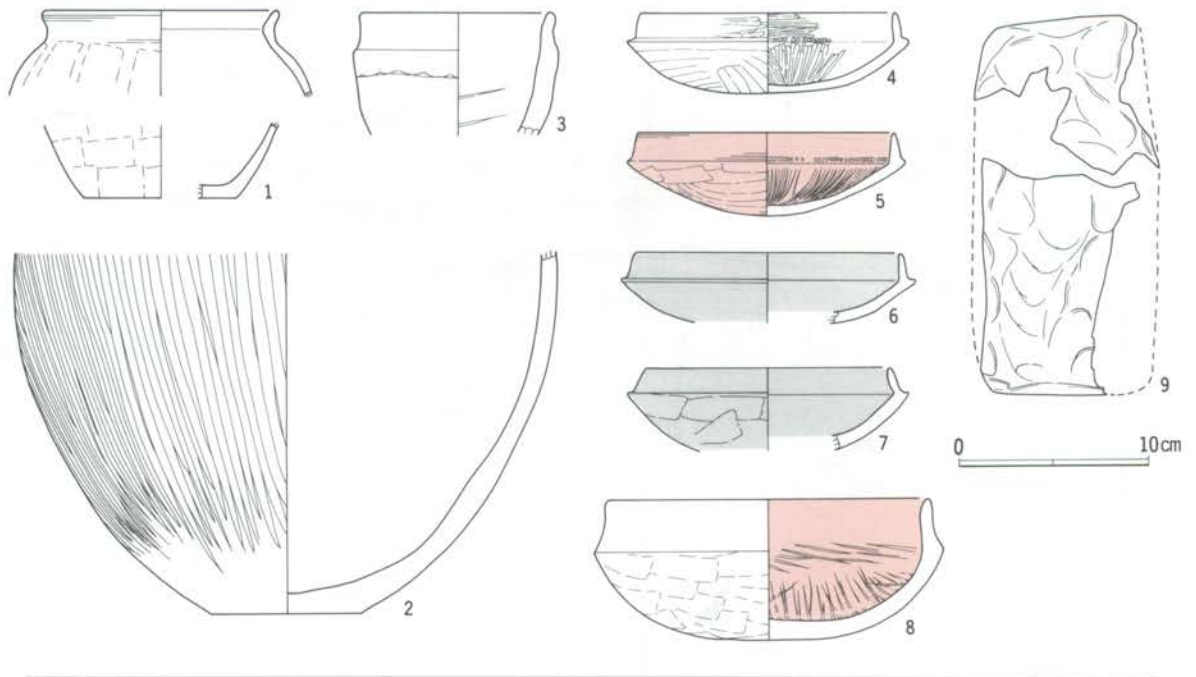
遺物 両住居跡から土師器、土製支脚、土玉、石製模造品、紡錘車、刀子等が出土した。SI50に属するものは4・5・6・8・9で、それ以外はSI 51からの遺物である。

1～3は甕で、いずれも竈西脇から出土した。1は散乱した状態で出土した。口径12.1cmで赤褐色を呈する。胴部は縦ヘラケズリの後ヘラナデ、底部周囲は横ヘラケズリである。2は現高18.7cmあり、暗褐色を呈する。胎土に石英・長石を含む。胴部は細い単位で縦にヘラミガキされている。3は口径9.7cmで、赤褐色を呈する。胴部はヘラナデされているが、輪積痕を残し、表面は加熱されて荒れている。内面には焼成時の黒斑がある。4～8は杯である。4は竈内から出土した。口径13.5cm、器高4.2cmで、赤褐色を呈する。体部は不規則にヘラナデされ、口縁と内面は細い単位でヘラナデされ、平滑になっている。5は4とともに竈内から出土した。口径13.5cm、器高4.4cmで、内外面が赤彩されている。体部は不規則なヘラケズリで、内面は細い単位のヘラミガキがなされ、その際の調整具刺突痕が口縁内面を周回している。6は覆



- 1層 黒色土層 IIa層
- 2層 暗褐色土層 ローム粒を含む
- 3層 黄褐色土層 地山ローム攪乱層
- 4層 黄褐色土層 ロームブロック主体、貼床層
- 5層 暗黄褐色土層 ローム粒多い
- 6層 黒色土層

第100図 SI50・SI51遺構実測図



第101図 SI50・SI51出土遺物実測図

土中から発見された。口径14.0cmで、内外面が黒色処理されている。体部はヘラナデされている。7は南西壁際の覆土中から発見された。口径12.8cmを測り、内外面とも黒色処理されている。体部は周縁に沿ってヘラナデされる。8は大型杯で、覆土中から発見された。口径16.8cm、器高7.4cmで、赤褐色を呈する。内面は赤彩されている。体部はヘラナデが周縁に沿って施され、内面は細かい単位でヘラミガキされている。

9は土製支脚で、竈内から出土した。高さは20cmを若干上回り、赤褐色を呈する。頂部が広めの円筒に近い形状となる。頂面には丸棒状の刺突痕やヘラによる傷痕が見られ、側面は全面的に指頭圧痕が残っている。

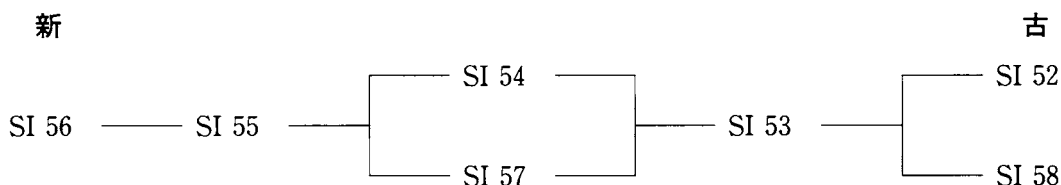
10～12は土玉で、いずれも覆土中から発見された。10は最大径3.3cmで、明褐色を呈する。ナデ仕上げされ、紐通し穴の一面が面取りされている。重量19.5gを量る。11は明褐色で、ナデ仕上げされている。12は明褐色を呈し、胎土に雲母を含んでいる。ナデ仕上げされ、表面には赤彩の痕跡がある。

13は石製模造品で、覆土中から発見された。輪郭が円形になるところから、鏡形か有孔円盤の一部である。片面に平行擦痕が見られる。14は石製紡錘車で、7とともに南西壁際の覆土中から出土した。滑石製で、高さ1.3cmを測る。側縁には成形時の鑿による削り跡が周回している。

15は刀子で、覆土中から発見された。現長8.5cmで、重量9.6gを量る。茎には柄の木質部が付着している。刃部は繰り返しの研ぎ出しのために著しく短小化している。

第9節 SI 52～SI 58

新旧関係 SI 52～SI 58は一連の重複関係にある(第102図)。断面図SPA—SPA'からSI 55がSI 54を、SI 54がSI 53を、SI 53がSI 52を攪乱しているのがわかる。また、断面図SPB—SPB'からはSI 56がSI 57を、SI 57がSI 53を、SI 53がSI 58を攪乱していることがわかる。さらに断面図SPC—SPC'からSI 57がSI 55を攪乱しているのがわかる。なお、発掘作業の過程で、SI 55がSI 57を攪乱していることが判明した。以上の関係を図式的に示せば、次のようになる。



柱穴の帰属 SI 52の柱穴はP1のみ判明し、その南東にあるべき柱穴は検出できなかった。P2はその位置からみて柱穴とは見なせない。SI 53の四本柱穴はP3～P5の3基が検出され、残る1基は調査区域外にある。SI 54の柱穴はP6のみ検出された。このほかは不明である。SI 55の柱穴は全く確認されなかった。SI 56も同様である。ただしP7は梯子穴となる。SI 57の四本柱穴はP8～P11で完備し、P12が梯子穴となる。SI 58ではP13～P15で四本柱穴を構成する。残る1基は確認できなかった。P16は覆土の状態から後世の攪乱である。

SI 52 (第103図)

遺構 南北をSI 51とSI 53に攪乱され、東側は大きく調査区域外にはみ出している。浅い床面で、検出範囲では周溝は確認できた。P1は十分深い柱穴となるが、P2は浅く、用途不明である。床面は広範に硬化している。覆土は人為的に埋められたもので、ローム粒主体土が充填していた。

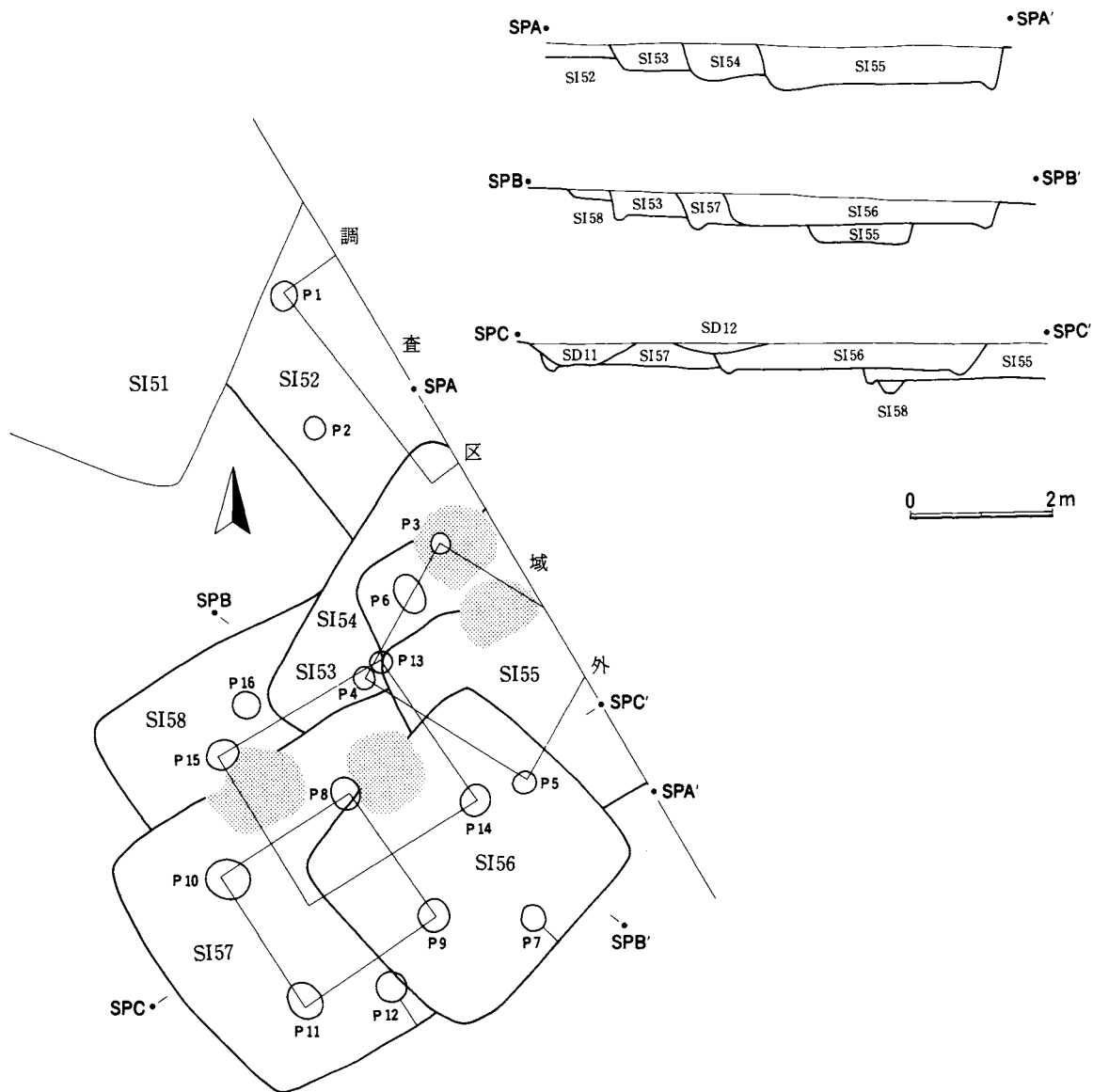
遺物 遺物は検出されなかった。

SI 53 (第104図、第105図、図版12、図版27)

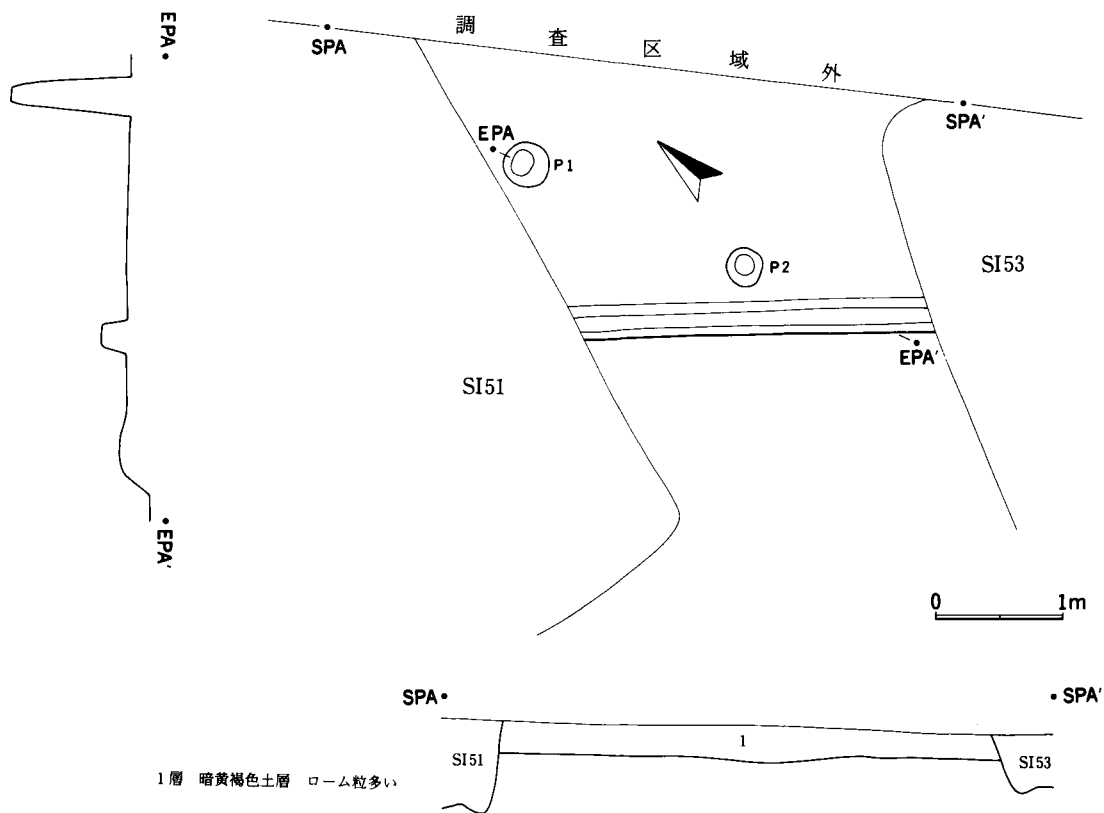
遺構 北側でSI 52、SI 58を攪乱しているが、南側でSI 54・SI 55・SI 56・SI 57に攪乱されている。また、東側は調査区域外に出ている。床面が保存されているのは西壁周辺のみである。一辺4.2m前後の方形プランを呈する。竈は調査区域外の北壁に設けられていると思われる。検出範囲では幅が狭い周溝が全周している。四本柱穴はP3・P4・P5の3基が確認された。残る1基は調査区域外にある。床面は中央寄りに硬化面が検出できた。住居跡廃絶後に、大半がローム包含土で人為的に埋められている。

遺物 遺物量は少ない。すべて土師器である。

1・2は鉢で、いずれも覆土中から発見された。1は暗褐色を帯び、内外両面に部分的赤彩を施されている。胴部はヘラナデ調整される。2は口径10.6cm、器高7.2cmを測り、上げ底気味で赤褐色を呈する。胴部は粗いヘラケズリの後、ヘラナデされている。3・4は杯で、ともに南西隅付近から出土した。口径13.8cm、器高4.6cmで、赤褐色を呈する。口縁は細かい単位で内外面とも粗くヘラナデされ、体部はヘラケズリ後にヘラナデされ、内面は細かい単位で放射状にヘラナデされている。4は口径13.5cm、器高4.7cmで、暗赤褐色を呈する。口縁と体部の境が沈線化している。口縁はヘラナデされ、体部は周縁に沿ってヘラナデされている。内面には細かい単位による放射状のヘラナデが見られる。



第102図 新旧関係と柱穴の帰属 (8)



第103図 SI 52遺構実測図

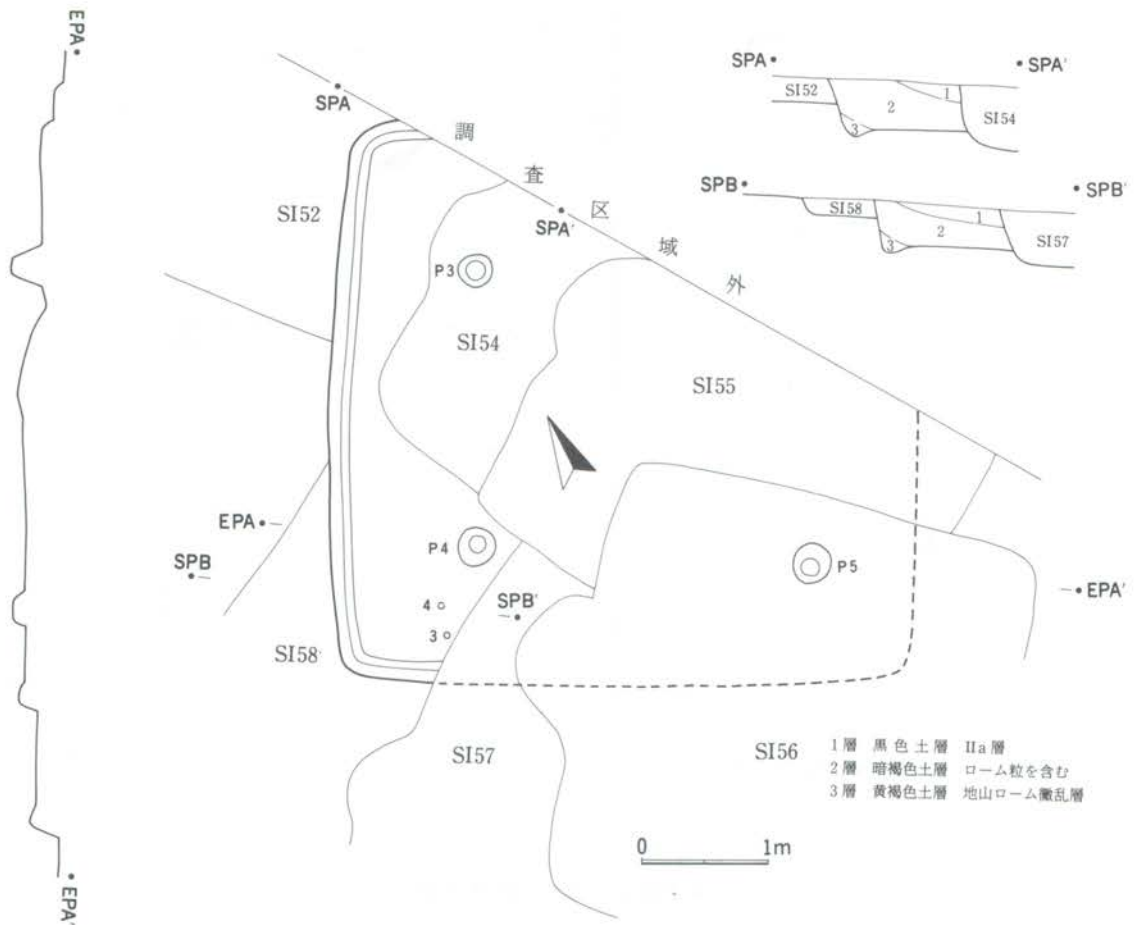
SI 54 (第106図、第107図、図版12、図版27、図版34)

遺構 SI 54はSI 53を攪乱しているが、SI 55によって大半を攪乱されている。また、東側は調査区域外に出ている。竈と北西隅周辺のみが遺存していた。SI 55と同様な小規模住居跡である。北壁に竈を持ち、周溝は検出範囲では全周している。柱穴は北壁際に1基のみ検出された。竈の遺存状況は良好である。

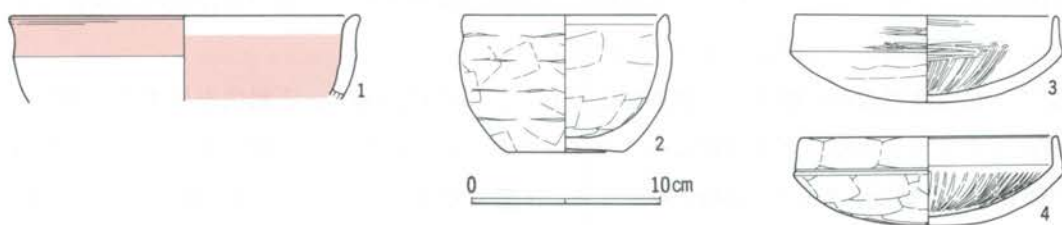
遺物 主に北西隅周辺から土師器、土玉等が出土した。

1は甕で、北西隅周辺から散乱した状態で出土した。口径13.7cmで、赤褐色を呈する。胴部は上半が斜めから横にヘラケズリされ、下半は縦にヘラケズリされている。2・3は杯である。2は西壁際から出土した。口径13.8cm、器高4.2cmで、赤褐色を呈する。体部外面はヘラケズリの後、粗いヘラミガキが施され、内面は口縁にヘラミガキが見られる。3は覆土中から発見された。口径14.4cm、器高4.3cmで、赤褐色を呈し、内面上半が赤彩されている。体部外面はヘラケズリの後粗くヘラミガキされ、内面は細かい単位でヘラミガキされている。

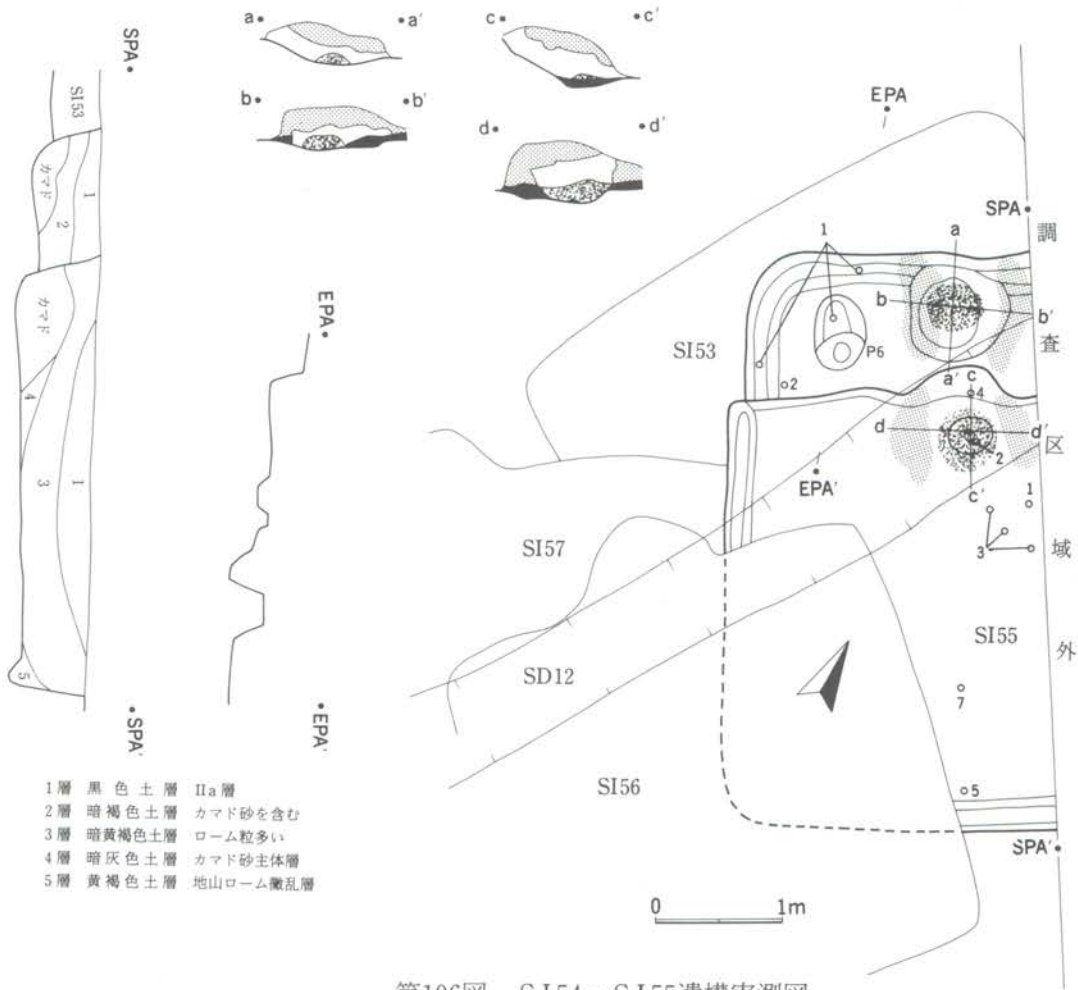
4は土玉で、覆土中から発見された。明褐色を呈し、ナデ仕上げされている。遺存している紐通し面は面取りされている。



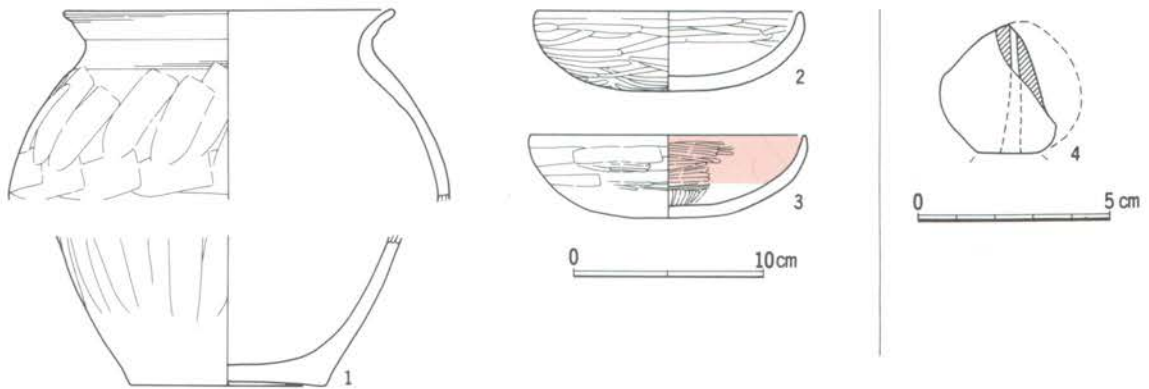
第104図 SI53遺構実測図



第105図 SI53出土遺物実測図



第106図 SI54・SI55遺構実測図



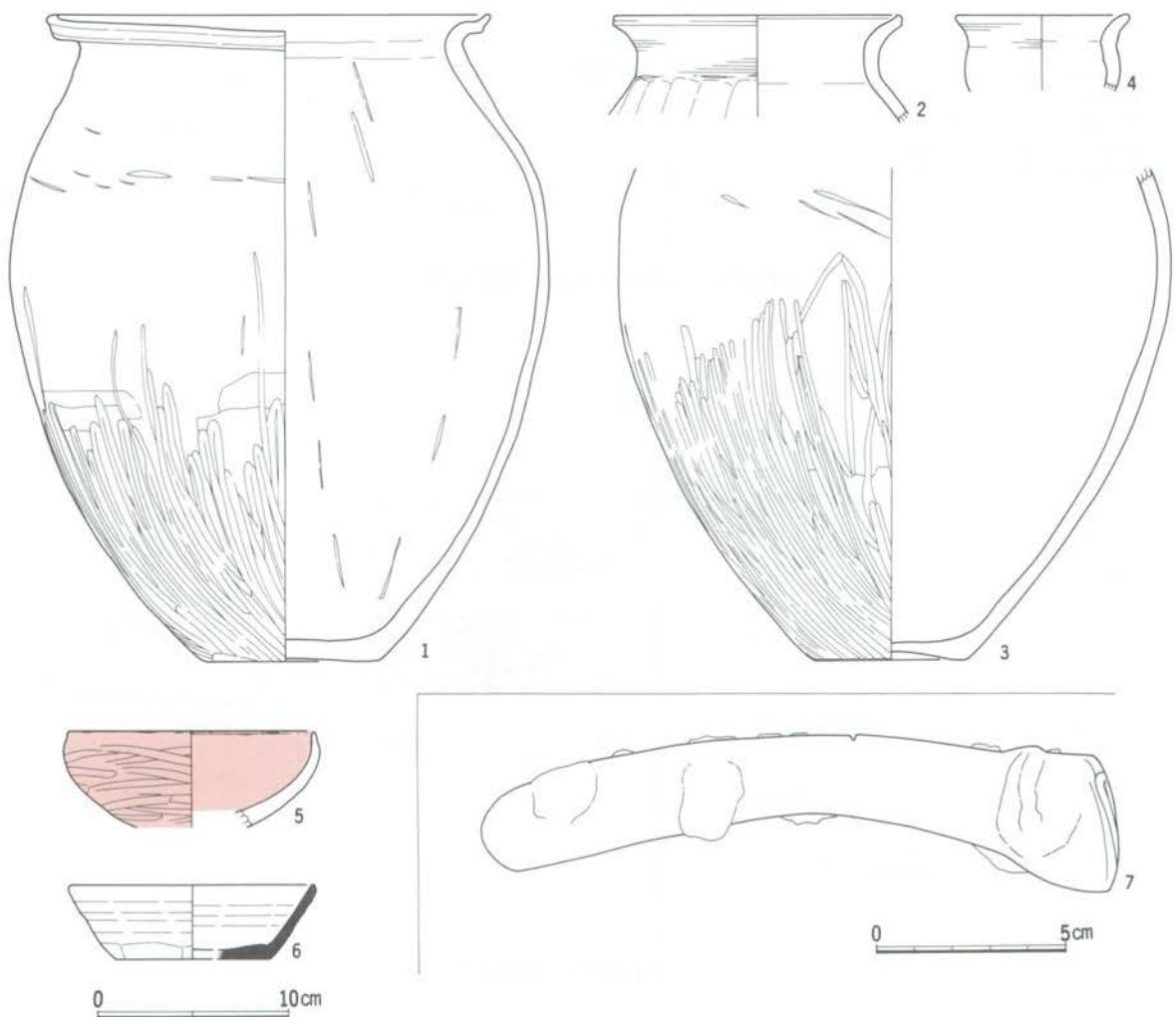
第107図 SI54出土遺物実測図

SI 55 (第106図、第108図、図版12、図版27、図版35)

遺構 北側でSI 53・SI 55・SI 57を攪乱しているが、南側ではSI 56に攪乱されている。また東側は調査区域外に出ている。一辺約3.5mの方形プランを持つ小型住居跡である。北壁に竈を備え、周溝は北壁側は存在しない。柱穴は検出範囲では確認されなかった。竈は顕著な船形ピットが存在しない。また、SD 12によって上屋部分が削平されている。床面は中央付近が硬化している。

遺物 主に竈周辺から土師器、須恵器、鎌等が出土した。

1～3は甕である。1は竈前面から出土した。口径23.3cm、器高33.6cmで、暗褐色を呈し、胎土には石英、長石を含む。胴部は中段を横にヘラケズリした後、下半部に細い単位でヘラナデを施す。底部には木葉痕が見られる。2は竈内から出土した。口径12.7で、赤褐色を呈する。胴部は縦ヘラケズリが多用される。3は1とともに竈前面から散乱した状態で出土した。現高24.4cmで、暗灰褐色を呈する。胎土には石英、長石を含む。胴下半部には細い単位のみガキに近い縦ヘラナデを施す。底部には木葉痕が認められる。4は鉢または小型甕で、竈内から出土した。口径9.2cmで、明褐色を呈する。胴部は全体にナデ調整される。外面には焼成時の黒斑が見られる。また、焼成温度が高すぎたために、器表面には細かなひび割れが密に



第108図 SI55出土遺物実測図

入っている。5は杯で、南壁際から出土した。口径12.9cmで、内外面とも赤彩されている。体部は周縁に沿ってヘラナデされている。6は須恵器杯で、覆土中から発見された。口径15.0cm、器高3.9cmで、明灰色を呈する。胎土には雲母を含んでいる。ロクロ目はやや弱く、底部及び体部下端は手持ちヘラケズリ調整されている。

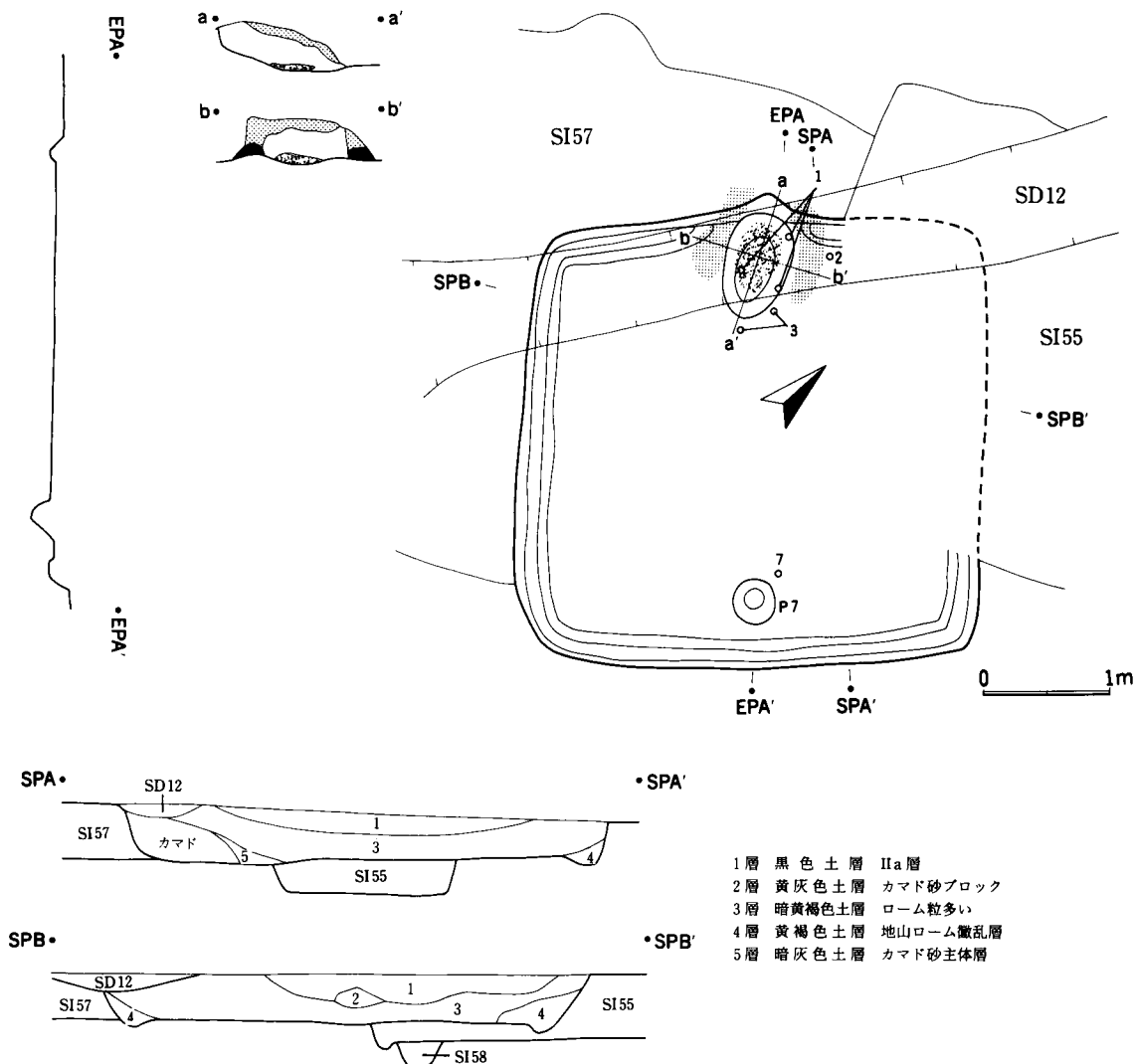
7は鎌で、中央南寄りから出土した。長さ16.7cmで、刃部は余り摩耗していない。重量49.5gを量る。

SI 56 (第109図、第110図、図版12、図版27、図版31、図版34)

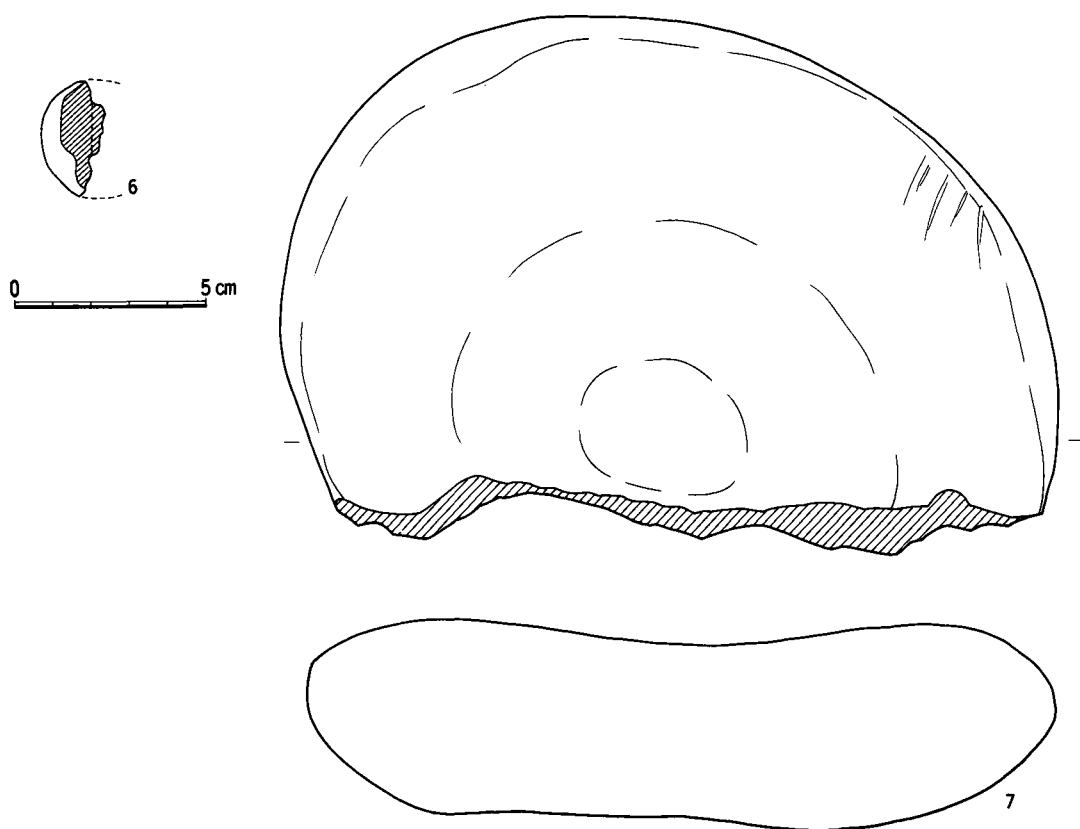
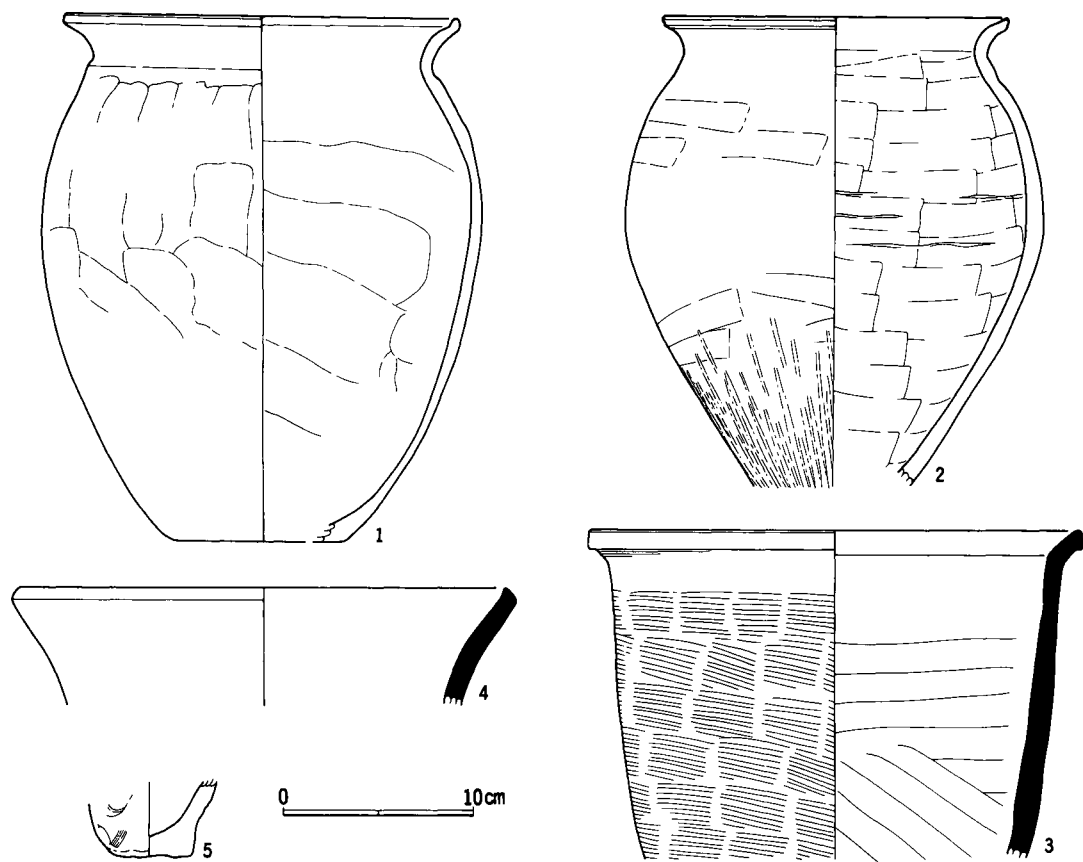
遺構 SI 55・SI 57を攪乱している。3.3m×3.7mの方形プランを呈する小型住居跡である。北西壁中央に竈を備えている。北側は掘りすぎのために壁を壊してしまったが、周溝は全周していた。柱穴は存在せず、南東壁中央際に梯子穴がある。竈はSD 12によって上部が削平されている。床面は中央付近を中心に硬化面が認められる。覆土はローム包含土が投棄された後に、II a層が自然堆積している。

遺物 主に竈周辺から土師器、須恵器、土玉、石皿等が出土した。

1・2は土師器甕である。1は竈内から出土した。口径20.7cm、器高27.5cmで、暗褐色を呈する。胴部は上半は縦の、下半は斜めのヘラケズリがなされる。2は竈東脇から出土した。口径18.0cm、現高24.7cm



第109図 SI 56遺構実測図

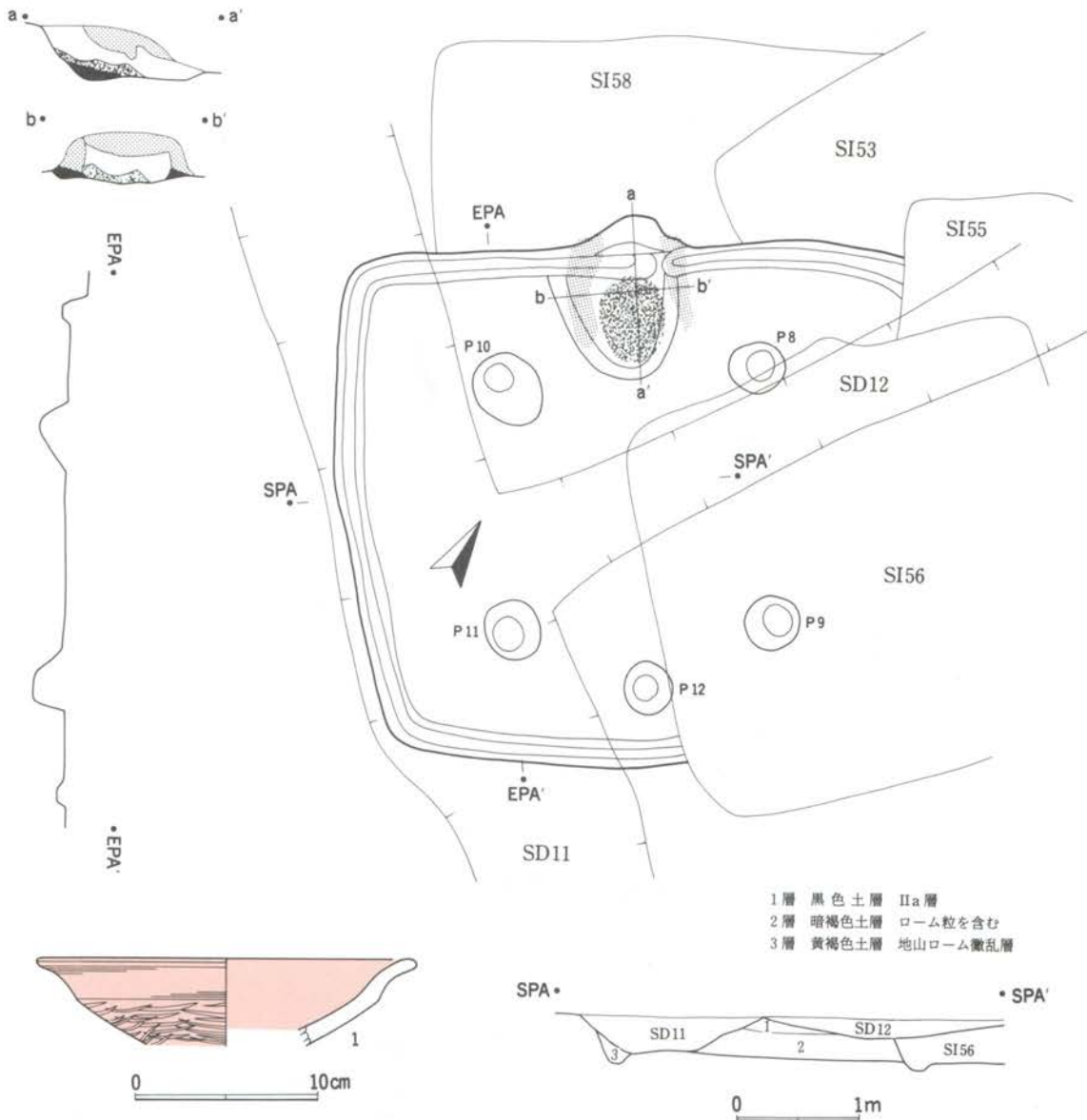


第110図 SI56出土遺物実測図

で、暗褐色を呈する。胎土には石英、長石を含む。胴部は粗いヘラナデの後、下半部は細い単位でヘラミガキされている。内面は全面的にヘラナデされるが、輪積痕が残っている。肩部に煤が付着し、加熱されて器表面が荒れている。3は須恵器甕で、竈前面から出土した。口径25.6cm、現高17.1cmで、明灰色を呈する。胎土には雲母が混入している。胴部は横方向の短いタタキ目で充填され、内面はヘラナデされている。4は須恵器甕で、覆土中から発見された。口径25.6cmで、青灰色を呈する。内外面とも横ナデされている。5は手捏ね土器で、覆土中から発見された。現高4.6cmで、赤褐色を呈する。粘土貼り付け痕、指圧痕、スサ痕等が見え、内面はヘラナデされている。

6は土玉で、覆土中から発見された。明褐色を呈し、ナデ仕上げされている。

7は石皿で、P7脇から出土した。安山岩製で、最大径20.3cm、重量2.77kgを測る。両面の中央部がくぼんでおり、側縁を含めて全面が磨滅している。縁辺部に擦痕が見られる。



第111図 SI57遺構・出土遺物実測図

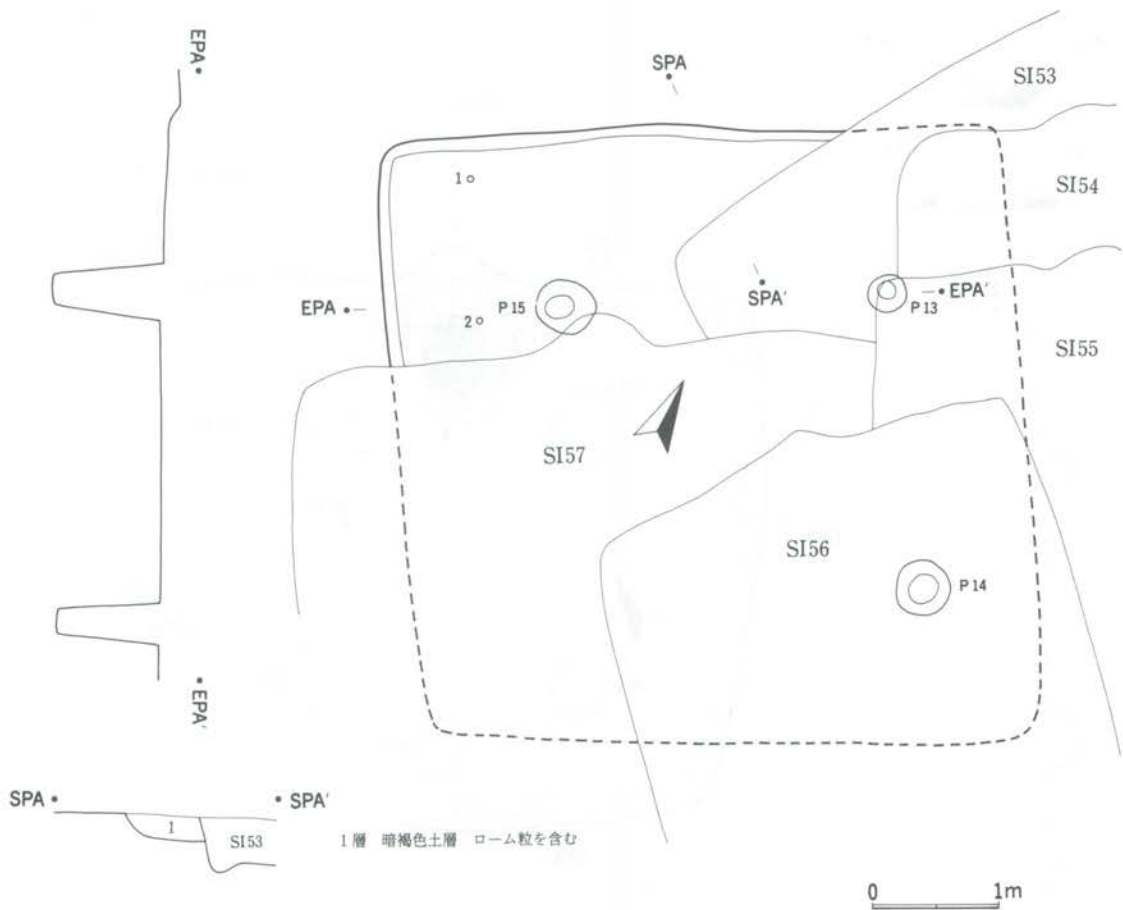
SI 57 (第111図、図版12)

遺構 北側でSI 53・SI 58を攪乱するが、SI 55・SI 56に攪乱されている。4.0m×4.7m程の長方形プランを呈する。北壁中央に竈が設置され、周溝は検出範囲では全周している。浅い四本柱穴が完備し、梯子穴が付属している。竈は上面が若干削平されている。床面は中央付近が硬化している。覆土の大半は人為的に埋められたローム包含土である。

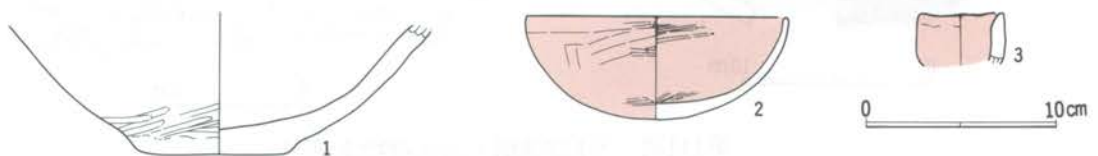
遺物 遺物量は少ない。1は高杯で、覆土中から発見された。口径20.8cmで、内外面とも赤彩されている。胎土には雲母が含まれる。体部は細い単位で粗くヘラミガキされている。

SI 58 (第112図、第113図、図版12、図版27)

遺構 東側をSI 53～SI 57の住居跡群によって大きく攪乱されている。方形プランの浅い住居跡である。



第112図 SI58図遺構実測図



第113図 SI58出土遺物実測図

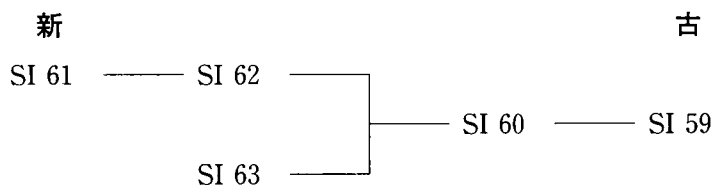
遺存状況が悪く、検出範囲では竈、周溝は存在しない。四本柱穴のうち3基が確認された。

遺物 土師器が出土した。

1は甕で、西隅付近から出土した。赤褐色を呈し、ヘラナデ調整している。2は杯で、P15西脇の覆土中から出土した。口径13.8cm、器高5.4cmで、内外面とも赤彩されている。体部はヘラナデされている。3は手捏ね土器で、覆土中から発見された。底部を欠き、内外面とも赤彩されている。

第10節 SI 59～SI 68

新旧関係 SI 59～SI 68のうちSI 59～SI 63は一連の重複関係にある(第114図)。断面図SPA—SPA'から明らかなように、SI 61はSI 60及びSI 62を攪乱し、SI 62はSI 60を、また、SI 60はSI 59を攪乱している。さらにSI 63の竈はSI 60を攪乱していた。以上の関係を図式的に示せば、次のようになる。



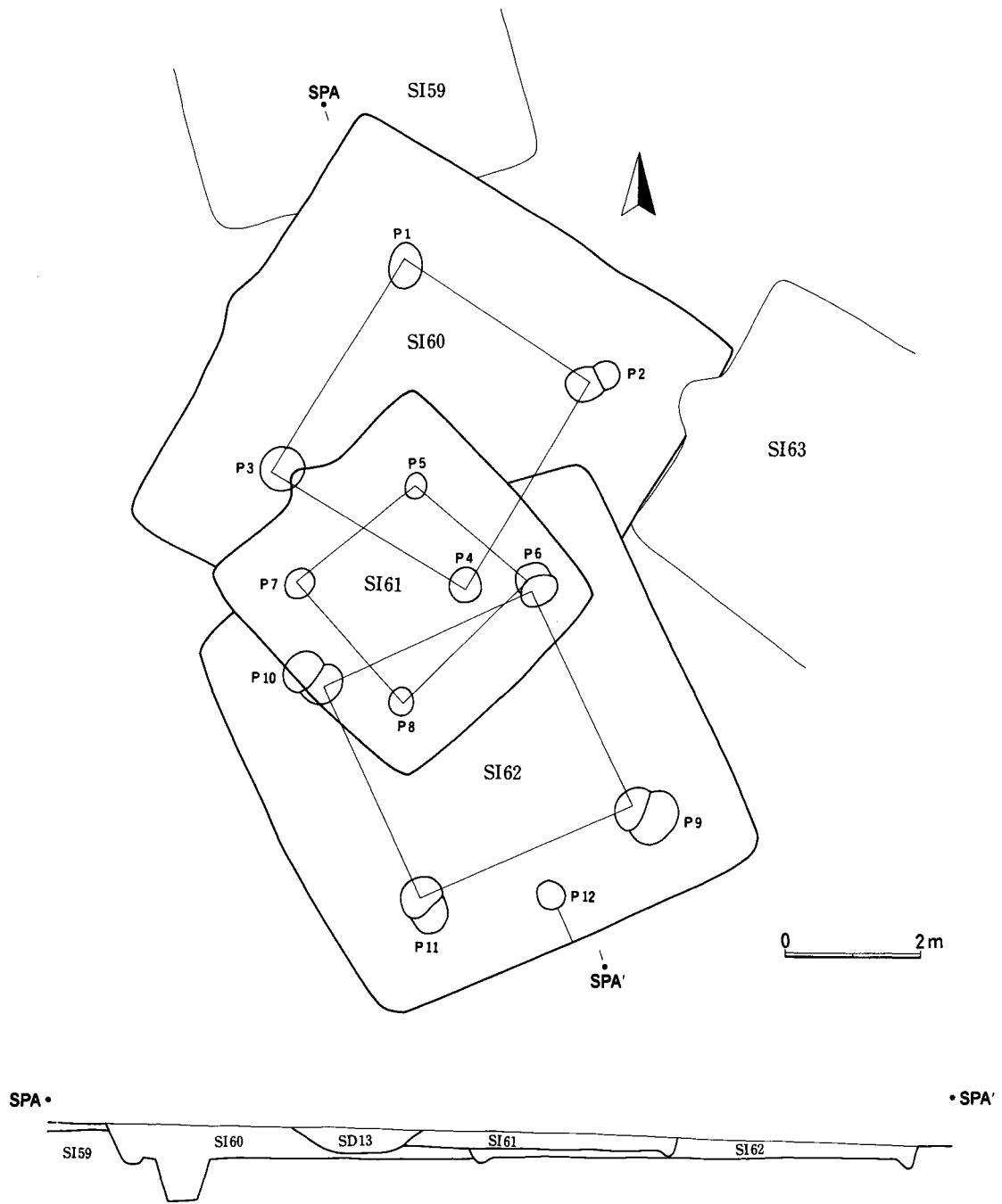
柱穴の帰属 SI 60はP1～P4の四本柱穴である。SI 61はP5～P7で四本柱穴を構成する。SI 62はP6とP9～P11が四本柱穴となり、P12は梯子穴となる。

SI 59 (第115図、第116図、第117図、図版13、図版27、図版28、図版29)

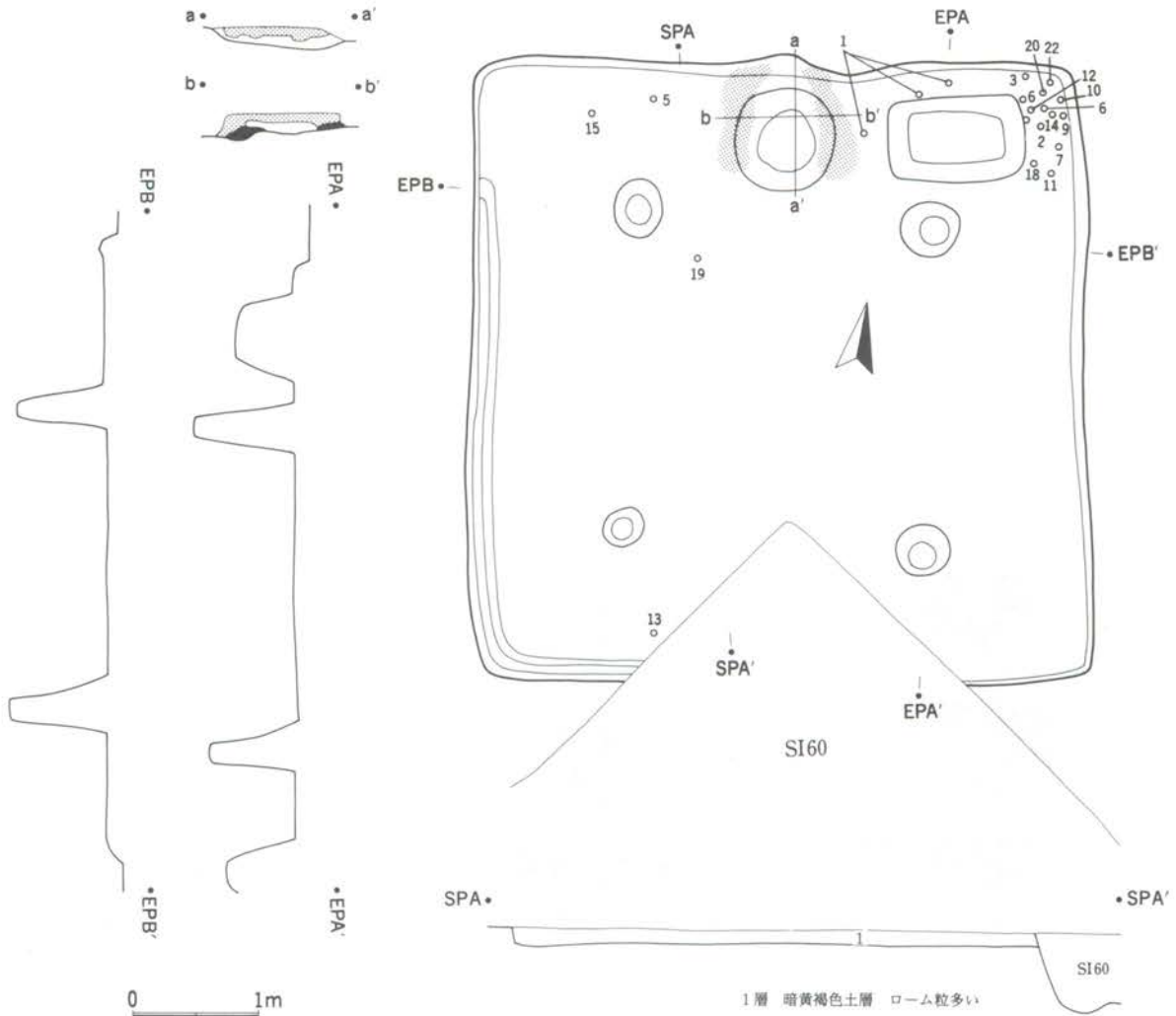
遺構 南側がSI 60に攪乱されている。4.9m×5.0mの方形プランを呈する、きわめて浅い住居跡である。北壁中央に竈があり、周溝は西側に偏在する。深い四本柱穴が完備し、そのほか貯蔵穴が竈東脇に伴っている。竈は上部が削平されており、内部の焼土は稀少で、火床もあまり焼けていなかった。床面は中央付近が硬化していた。なお、西壁際からは炭・焼土が検出された。

遺物 北東隅を中心に土師器、須恵器が多量に出土した。

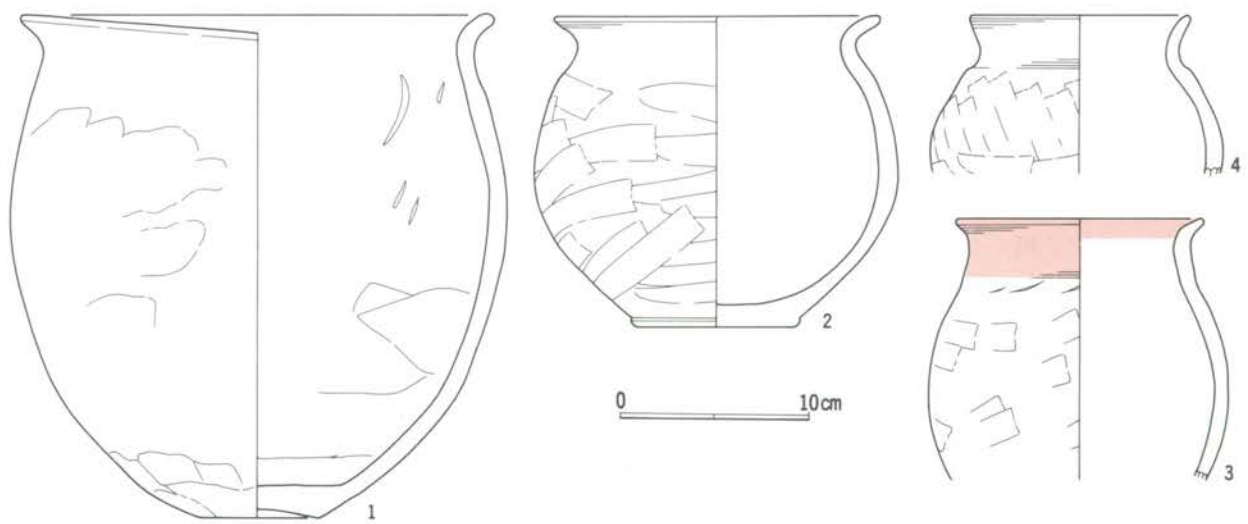
1～4は甕である。1は竈東脇から散乱した状態で出土した。口径24.8cm、器高26.1cmで、暗褐色を呈する。底部は上げ底で、胴部はヘラケズリの後、粗くヘラナデされている。2は北東隅から出土した。口径16.8cm、器高16.2cmで、赤褐色を呈する。胴部は横方向に粗くヘラナデされ、内面は全面に煤が付着している。3は北東隅から出土した。口径12.9cm、現高13.5cmで、赤褐色を呈し、口縁は内外面とも赤彩されている。頸部には輪積痕を消した際のヘラ跡が残っている。胴部は横方向のヘラナデの後、ナデ調整される。口縁の内外面には煤が付着している。4は覆土中から発見された。口径11.2cm、現高8.1cmで、赤褐色を呈する。胴部は上半が斜め、中程は横方向にヘラナデされている。外面は加熱され、器表面が荒れている。5は壺で、竈西脇から出土した。口径15.4cm、現高18.5cmで、暗褐色を呈する。強調された頸部が球形の胴部に接続する器形をとる。胴部は頸部周辺が斜め、それ以下は粗い横方向のヘラナデ調整がなされる。6は甗で、北東隅から出土した。口径24.6cm、器高23.8cmで、赤褐色を呈する。胴部は下半部が横方向にヘラケズリされている。7は丸底短頸壺で、北東隅から出土した。口径10.7cm、器高9.9cmで、赤褐色を呈する。胴部は横方向のヘラケズリの後、ナデ調整されている。



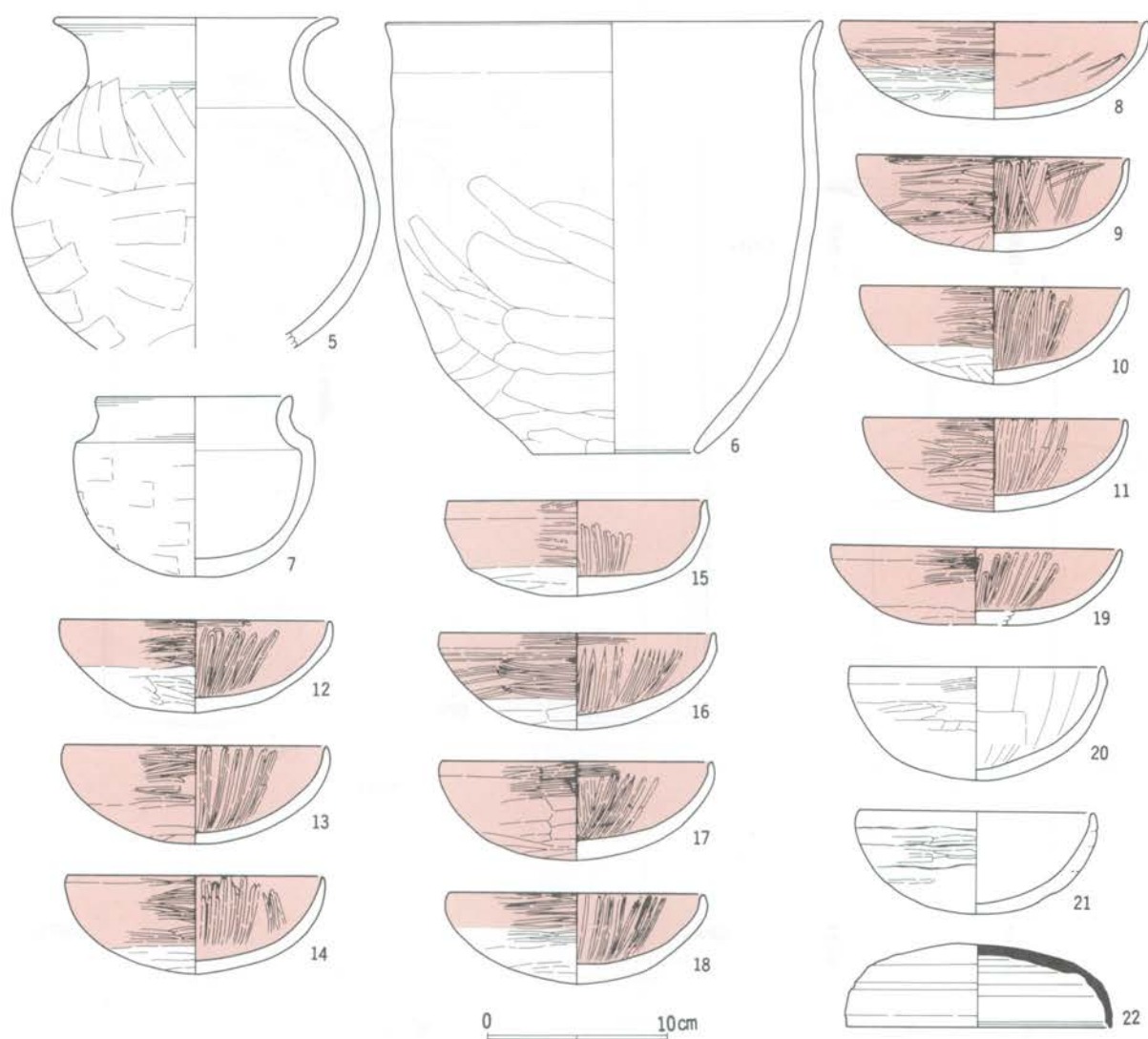
第114図 新旧関係と柱穴の帰属 (9)



第115図 SI59遺構実測図



第116図 SI59出土遺物実測図 (1)



第117図 SI59出土遺物実測図(2)

8～22は杯で、22のみが須恵器である。このうち、8・9・10・11・12・14・18・20・21・22の10個体は、東壁と貯蔵穴の間の狭い空間に、一部が入れ子状態で2列に並んで出土した。8は口径17.0cm、器高5.5cmを測る。外面の底部周辺以外はすべて赤彩されている。胎土には雲母を含む。体部は細い単位で粗くヘラミガキされている。9は口径15.0cm、器高5.5cmで、内外面とも赤彩されている。胎土には雲母を含む。体部は細い単位で粗くヘラミガキされ、内面は放射状にヘラミガキされている。10は口径14.8cm、器高5.4cmで、外面の底部周辺以外はすべて赤彩されている。体部はヘラナデの後、上半が細い単位で密にヘラミガキされ、内面は放射状にヘラミガキされている。11は口径14.6cm、器高5.2cmで、内外面とも赤彩されている。胎土には雲母を含む。体部はヘラナデの後、上半が細い単位で密にヘラミガキされ、内面は放射状にヘラミガキされている。12は口径15.0cm、器高5.1cmで、外面の下半部以外はすべて赤彩されている。胎土には雲母を含む。体部はヘラナデされた後、上半部が細い単位でヘラミガキされ、内面は放射状にヘラミガキされている。13は南壁際から出土した。口径14.4cm、器高5.3cmで、内外面とも赤彩されている。胎土には雲母を含む。体部はヘラケズリされた後、上半部が細い単位でヘラミガキされ、内面は放射状にヘラミガキされている。14は口径14.2cm、器高5.4cmで、外面の底部周辺以外はすべて赤彩されている。体部

はヘラケズリされた後、底部付近まで細い単位でヘラミガキされ、内面は放射状にヘラミガキされている。15は竈西側の北壁付近から出土した。口径14.2cm、器高5.2cmで、体部下半が鈍い稜をなす。胎土には雲母を含む。外面の底部周辺以外はすべて赤彩されている。体部はヘラケズリの後、上半が細い単位で粗くヘラミガキされ、内面は底部を中心に放射状にヘラミガキされている。16は覆土中から発見された。口径15.2cm、器高5.3cmで、外面の底部周辺以外はすべて赤彩されている。胎土には雲母を含む。体部はヘラデされた後、細い単位で粗くヘラミガキされ、内面は放射状にヘラミガキされている。17は覆土中から発見された。口径15.0cm、器高5.4cmで、内外面とも赤彩されている。胎土には雲母を含む。体部はヘラナデされた後、口縁から体上部にかけて細い単位で密にヘラミガキされ、内面は放射状にヘラミガキされている。18は口径14.2cm、器高5.0cmで、外面下半部以外はすべて赤彩されている。胎土には雲母を含む。体部はヘラナデされた後、口縁から体上部にかけて細い単位でヘラミガキされ、内面は放射状にヘラミガキされている。19は竈前面西寄りから出土した。口径16.0cm、器高4.2cmで、内外面とも赤彩されている。胎土には雲母を含む。口縁から体上部にかけて細い単位でヘラミガキされ、内面は放射状にヘラミガキされている。20は口径14.0cm、器高6.3cmで、暗褐色を呈する。体部はヘラケズリの後、ヘラナデ、内面はヘラナデされている。21は口径13.0cm、器高5.6cmで、赤褐色を呈する。体部はヘラケズリの後、粗いヘラミガキを施し、内面はヘラナデされている。22は須恵器杯蓋である。口径14.7cm、器高4.6cmを測る。青灰色の地色だが、焼成時に熱を受けすぎて器表が荒れている。胎土には小石を含む。

ロクロ目は強く、頂部と体部の境目には沈線が入る。頂部は幅広く回転ヘラケズリされている。

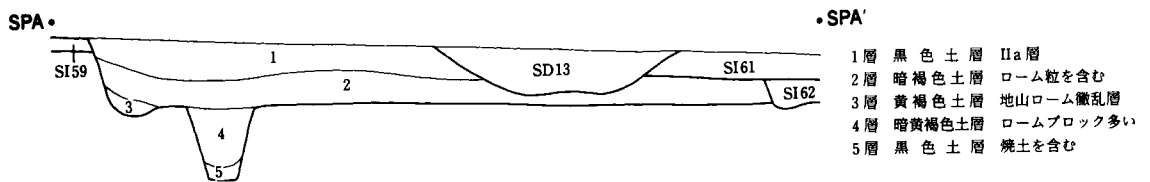
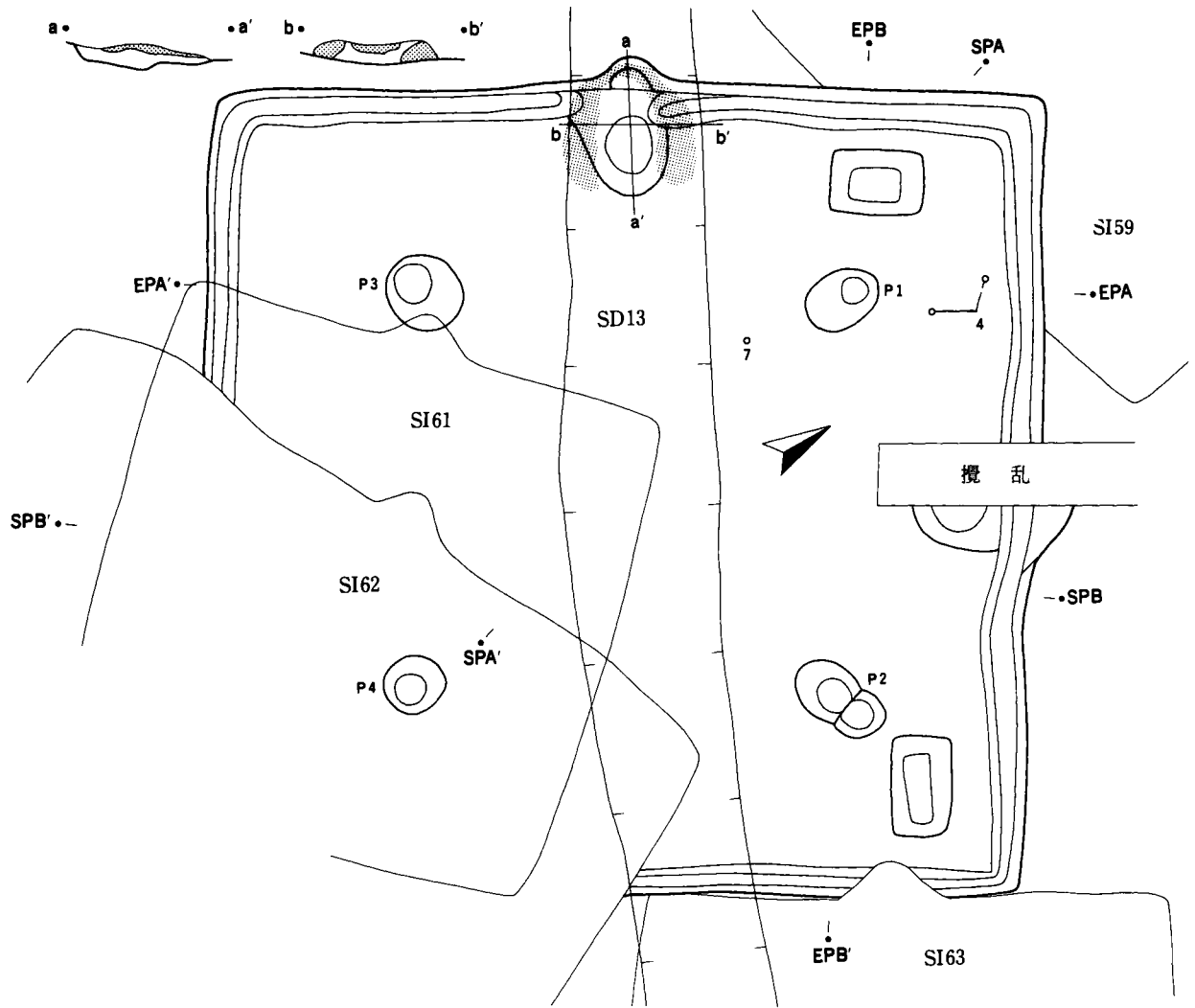
SI 60 (第118図、第119図、図版29、図版31、図版34)

遺構 北端でSI 59を攪乱するが、南側でSI 61・SI 62・SI 63に攪乱されている。6.6m×7.0mの方形プランを呈する。竈は新旧二つ存在する。旧竈は北東壁中央に、新竈は北西壁中央にそれぞれ設置されている。それに伴い、貯蔵穴も東隅と北隅付近に2か所検出された。前者の確認面が貼床で覆われていたので、竈の時間差を想定することができた。新竈はSD 13に攪乱されて上半部が破壊されている。この竈は床面上から直接砂質粘土を積み上げている。旧竈も新しい耕作坑で大きく攪乱されている。周辺には山砂が散乱していた。検出範囲では周溝は全周し、柱穴は四本柱穴が完備している。床面は広範に硬化していた。

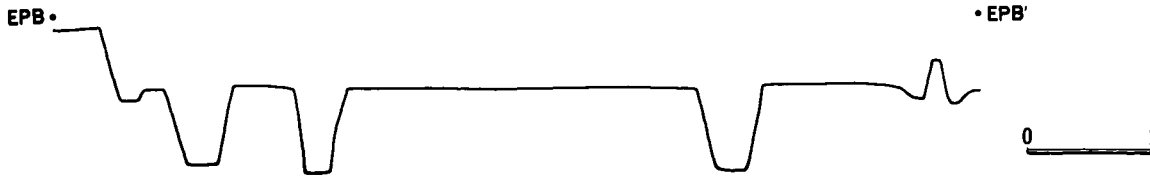
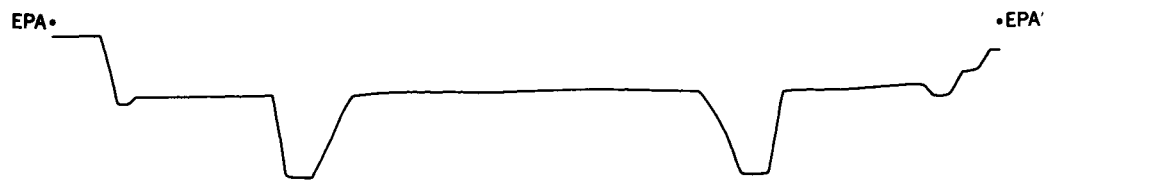
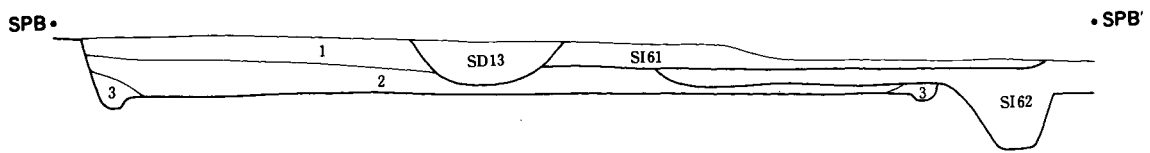
遺物 土師器、土玉、有舌尖頭器、磨石兼敲石等が出土した。

1～3は甕で、いずれも覆土中から発見された。1は口径12.7cm、現高9.4cmで、赤褐色を呈する。胴部は縦に2段にわたりヘラナデされている。内面には煤が付着している。2は口径12.8cm、現高6.4cmで、赤褐色を呈する。胴部は横方向に粗くヘラナデされている。3は赤褐色を呈し、粘土円盤を貼り付けて底部を形成している。4～6は杯である。4はP1の北脇から出土した。口径13.0cm、器高4.7cmで、内外面とも黒色処理されている。体部は周縁に沿ってヘラケズリされている。5は覆土中から発見された。口径14.6cm、現高4.1cmで、内外面とも黒色処理されている。体部以下に厚みがある個体で、周縁に沿ってヘラケズリされ、内面はヘラミガキされている。6は覆土中から発見された。口径14.7cm、現高3.6cmで、暗褐色を呈する。体部は周縁に沿って粗くヘラナデされている。

7～11は土玉である。7以外は覆土中から発見された。7はP1の南脇覆土から出土した。最大径3.2cmで、明褐色を呈する。ナデ仕上げされ、紐通し面は両面とも面取りされている。重量31.7gを量る。8は最大径3.1cmで、茶褐色を呈する。ナデ仕上げだが、紐通し穴周辺は未調整である。重量22.3gを量る。9は赤

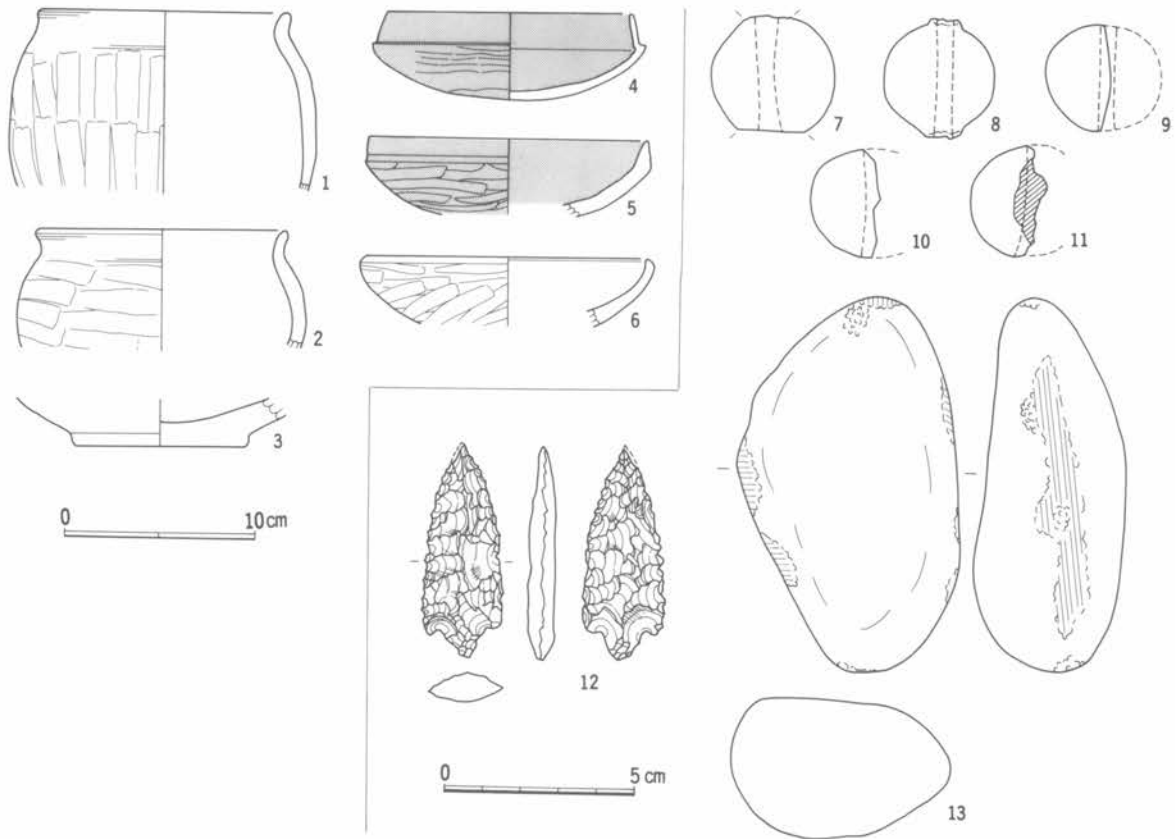


- SPA'
- 1層 黒色土層 IIa層
 - 2層 暗褐色土層 ローム粒を含む
 - 3層 黄褐色土層 地山ローム攪乱層
 - 4層 暗黄褐色土層 ロームブロック多い
 - 5層 黒色土層 焼土を含む



0 1m

第118図 SI60遺構実測図



第119図 SI60出土遺物実測図

彩された可能性がある。表面は光沢があるが、これは調整上のミガキではなく、手擦れによる結果と思われる。10は明褐色を呈し、胎土には雲母を含む。ナデ調整されている。11は赤褐色を呈し、ナデ7調整されている。

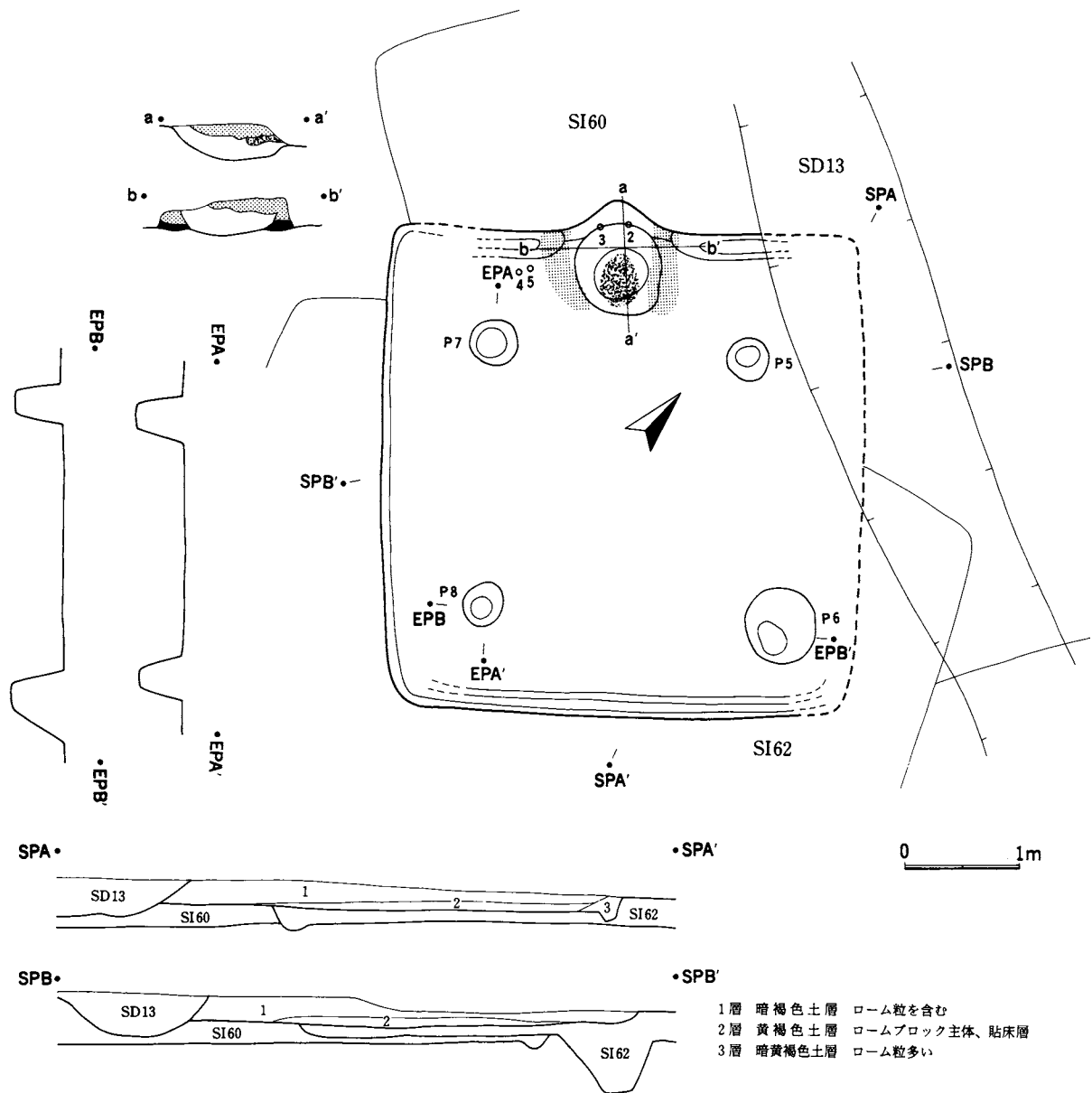
12は有舌尖頭器で、覆土中から発見された。頁岩製で、長さ5.6cm、重量9.1gを量る。両面にわたって、両側縁から中央に達する細かい剝離が施されている。袂入部は表裏左右各1回の剝離で成形されている。13は磨石兼敲石で、覆土中から発見された。硬質砂岩製で、長さ9.7cm、重量288.9gを量る。両面とも磨滅して平滑化しており、両端部及び両側縁には、敲打痕が見られる。

SI 61 (第120図、第121図、図版29、図版34)

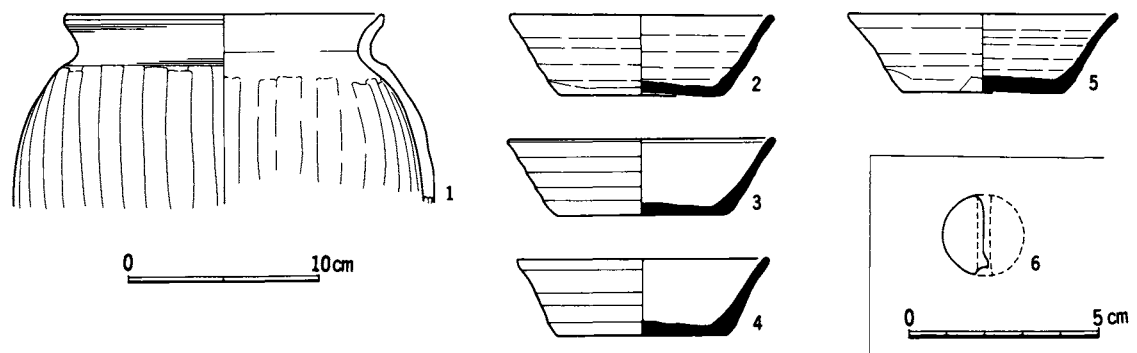
遺構 北側でSI 60を、南側でSI 62を攪乱している。床面の浅い住居跡で、ほかの住居跡覆土中に掘り込まれているため、北東壁や周溝が十分に確認できなかった。一辺約4.2mの方形プランを呈する。北西壁中央に竈があるが、上半部は削平されている。柱穴は四本柱穴が完備している。床面中央付近には硬化部分がよく残っている。

遺物 竈周辺を中心に、土師器、須恵器、土玉等が出土した。

1は甕で、覆土中から発見された。口径19.0cm、現高9.8cmで、赤褐色を呈する。胴部は縦方向に均整にヘラケズリされ、内面は縦方向に粗くヘラナデされている。2～5は須恵器杯である。2は竈内から出土した。口径14.0cm、器高4.1cmで、青灰色を呈する。胎土には雲母を含む。底部は上げ底となり、ロクロ目が強い。底部調整は回転ヘラケズリで、体部下端もヘラケズリされている。なお、底部外面には小さく「口」形の陰刻が見られる。3は竈内から出土した。口径13.9cm、器高4.0cmで、青灰色を呈し、胎土には雲母を



第120図 SI61遺構実測図



第121図 SI61出土遺物実測図

含む。ロクロ目は弱く、底部調整は回転ヘラケズリである。2と同様、底部外面には「ロ」形の陰刻が認められる。4は竈南脇の覆土から出土した。口径13.4cm、器高4.0cmで、茶褐色を呈する。胎土には雲母を含む。底部は手持ちヘラケズリ調整である。内外面に煤が付着している。5は竈南脇から出土した。口径14.2cm、器高4.1cmで、赤褐色を呈する。胎土には石英・長石・雲母を含む。ロクロ目はやや強く、底部は回転ヘラケズリ調整され、体部下端もヘラケズリされている。

6は土玉で、覆土中から発見された。赤彩され、ナデ仕上げされている。表面には手擦れによるものと思われる光沢がある。

SI 62 (第122図、第123図、図版13、図版29、図版31、図版35)

遺構 北側でSI 60を攪乱するが、SI 61に攪乱されている。6.3m×6.5mの方形プランを呈する。北西壁中央に竈が設置されているが、SI 61によって大きく攪乱されている。この竈は船形ピットは顕著でなく、床面から直接上屋材の砂質粘土を積み上げている。周溝は全周するが、竈の部分はとぎれている。柱穴は四本柱穴が完備している。すべての柱穴は建て替えの形跡を示している。このほか、北隅には大きな貯蔵穴を持ち、南東壁中央付近に梯子穴がある。床面の中央付近は硬化している。ローム包含土によって埋められた住居跡である。

遺物 少量だが、土師器、須恵器、フレーク、小札等が出土した。

1・2は甕である。1はP10の北脇から出土した。口径12.5cm、現高6.5cmで、赤褐色を呈し、胎土には雲母を含む。胴部には斜めのヘラナデが施される。2はP10の南脇から出土した。1と同一個体の可能性がある。赤褐色で、胴部下端は横にヘラケズリされている。なお、底部には木葉圧痕が認められる。3は鉢で、覆土中から発見された。口径18.2cm、器高10.0cmで、赤褐色を呈し、胎土には雲母を含む。胴部調整は上半部はナデ、下半部は横から斜めのヘラナデで、内面は全面がナデられている。4は須恵器杯蓋で、西隅付近の壁際から出土した。暗灰色で、現径14.8cm、現高3.6cmを測る。ロクロ目は弱く、頂部は幅広く回転ヘラケズリされている。

6は鉄製の挂甲小札で、P9内の覆土上層から出土した。長さ8.2cm、幅1.8cm、厚さ2.5mmで、重量9.5gを量る。上辺は丸みを帯びて突出し、下辺はやや斜めに仕上がっている。遺存状態は良好で、ほとんどの緘し穴は貫通している。

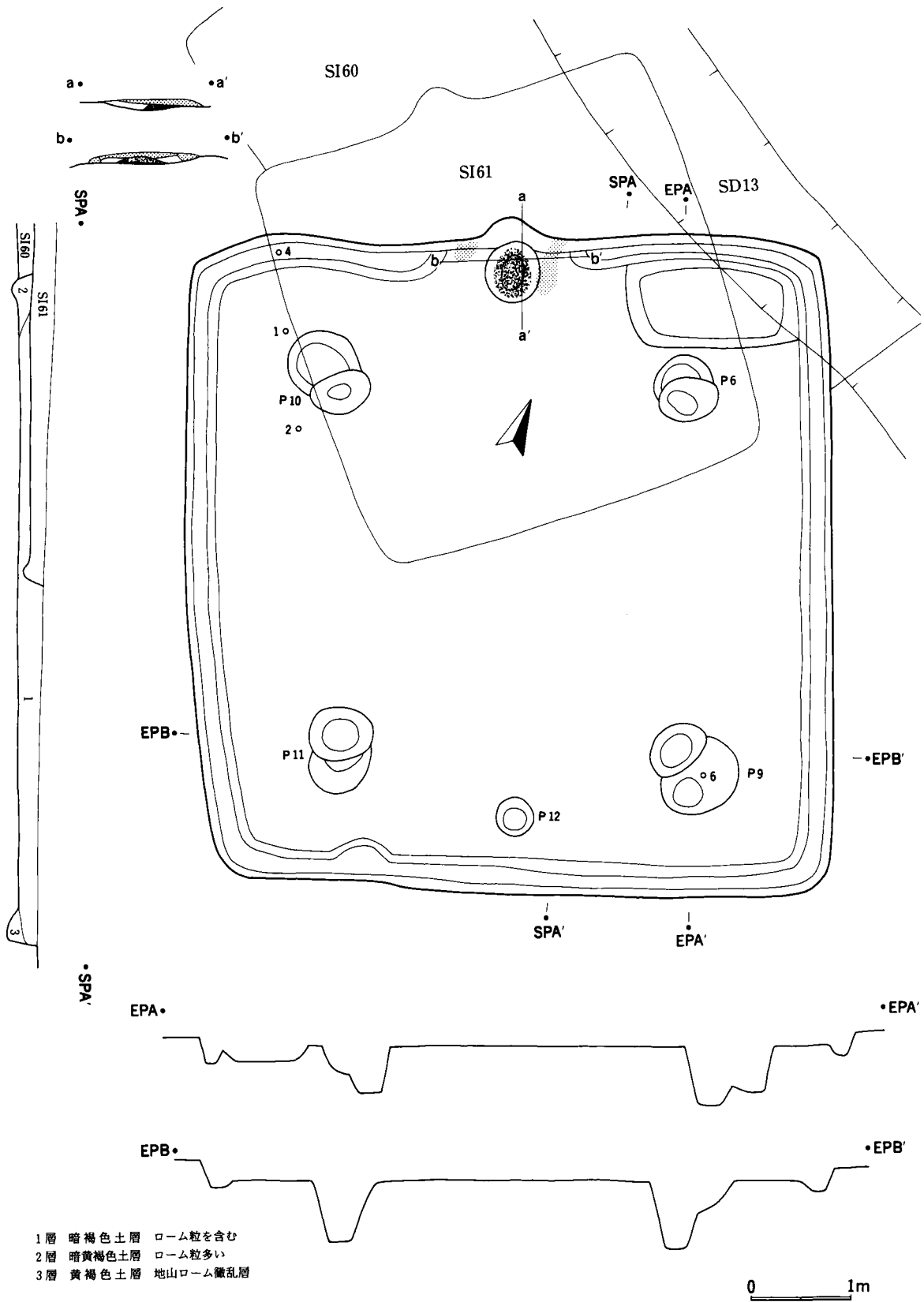
5はフレークで、覆土中から発見された。瑪瑙製で、重量6.0gを量る。一端に未加工面が残っている。

SI 63 (第124図、第125図、第126図、図版14、図版29、図版30、図版34)

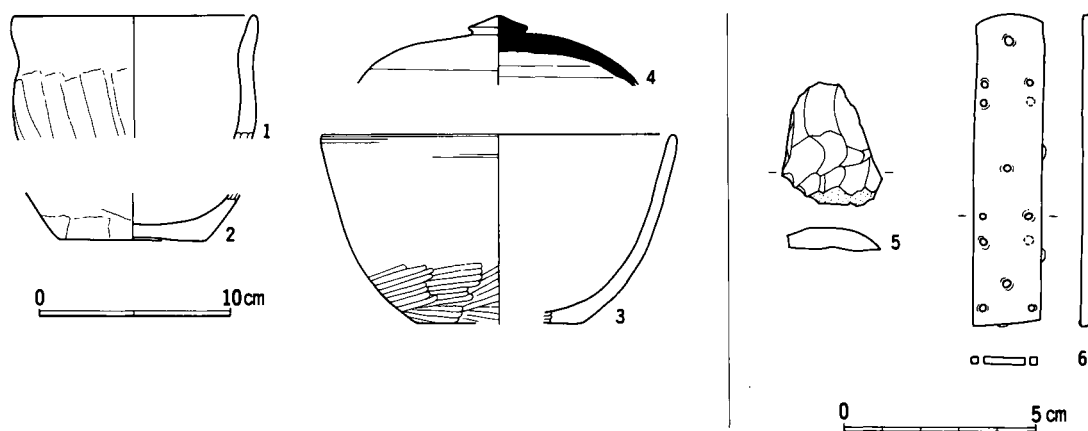
遺構 西側でSI 60を僅かに攪乱している。4.7m×5.0mの規模で、台形に近いプランを呈する。北西壁やや北寄りに竈が設置されている。遺存状態は良好である。柱穴は深さにばらつきがあるものの、P12～P15がある。さらに北東壁際中央にあるP17は、床面下55cmの深さがあって、これも柱穴とするのに差し支えない。P16は梯子穴となる。P18～P20の3基はいわゆる壁柱穴である。そのほか、この住居跡からは新旧2基の貯蔵穴が検出された。東隅にあるものが古く、確認面が貼床で覆われていた。床面は中央付近が硬化している。覆土は炭・焼土包含土が捨てられた後に自然埋没したことを示している。

遺物 竈・貯蔵穴付近を中心に、土師器、土玉が出土した。

1～4は甕である。1は中央南寄りから出土した。口径23.0cm、器高32.7cmで、明褐色を呈し、胎土に



第122図 SI62遺構実測図



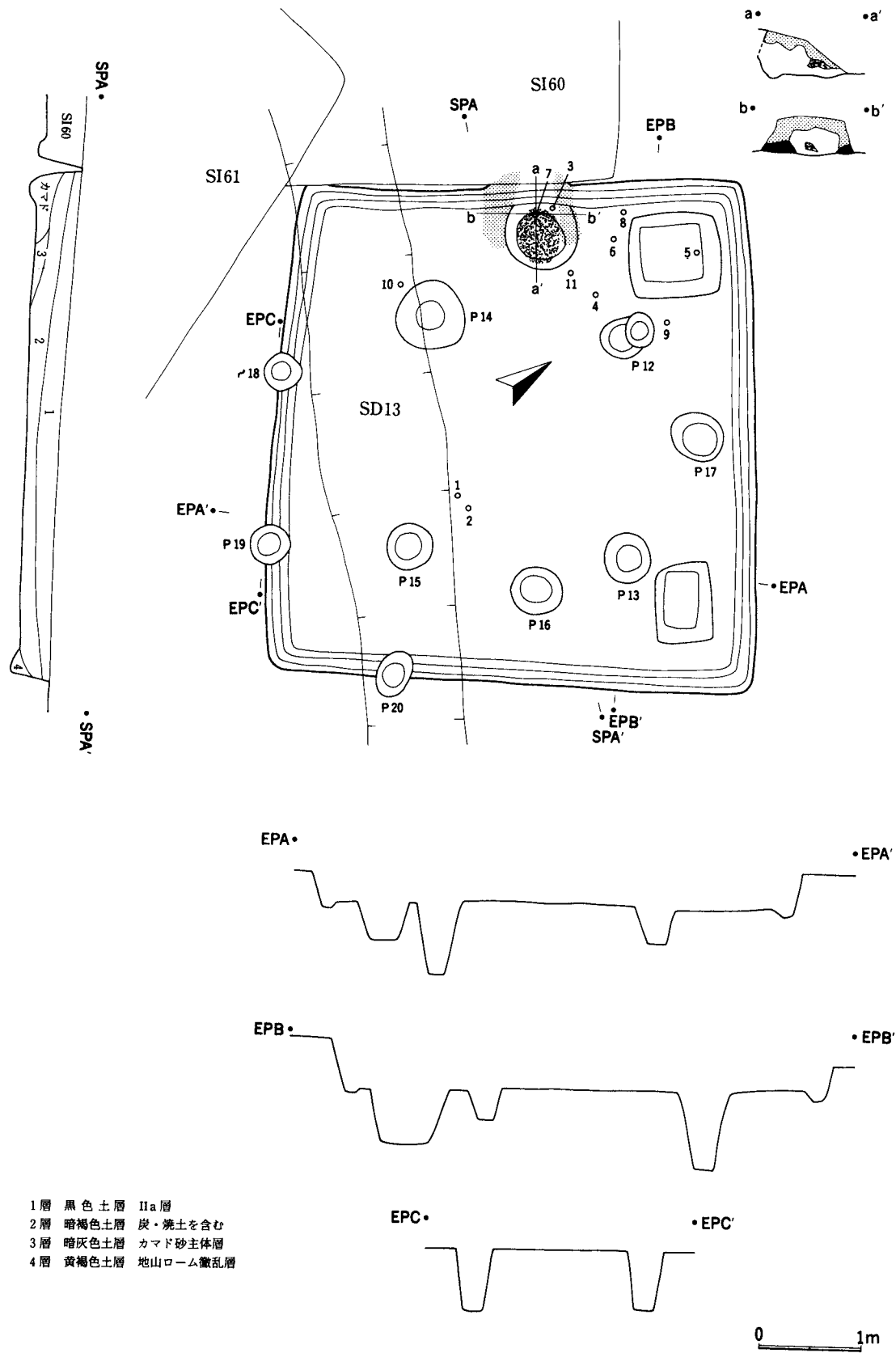
第123図 SI62出土遺物実測図

は長石・雲母を含む。胴部はナデの後、最大径部以下を細い単位で粗くヘラナデされている。また、焼成時の黒斑が見られる。2は1とともに、中央南寄りから出土した。口径22.7cm、器高32.0cmで、明褐色を呈し、胎土には小石が多い。胴部はナデの後、下半部が細い単位で斜めにヘラナデされている。焼成時の黒斑が見られる。3は竈内から出土した。口径16.1cm、現高14.9cmで、暗褐色を呈する。胴部はヘラケズリの後、弱いヘラナデを施している。4は竈・貯蔵穴間から出土した。現高25.9cmで、暗褐色を呈し、胎土には石英・長石を含む。胴部はナデの後、下半部が細い単位で斜めにヘラナデされている。5・6は甑である。5は貯蔵穴内から出土した。口径23.5cm、器高23.9cmで、赤褐色を呈する。胴部は縦にヘラケズリした後、口縁直下を横にヘラケズリしている。また焼成時の黒斑が見られる。6は竈・貯蔵穴間から伏せた状態で出土した。口径20.4cm、器高20.8cmで、赤褐色を呈する。胴部は斜め方向にヘラケズリされている。7は鉢で、竈内から出土した。口径23.5cm、器高11.7cmで、赤褐色を呈する。底部は上げ底となり、胴部は横にヘラナデされ、内面はヘラミガキされている。8は壺で、貯蔵穴と北西壁間の狭い空間から出土した。口径10.1cm、器高8.3cmで、赤褐色を呈する。胴部は縦のヘラケズリが施される。9～12は杯である。9はP12脇から出土した。口径13.2cm、器高4.5cmで、明褐色を呈する。体部は周縁に沿ってヘラナデされ、内面は細い単位でヘラミガキされている。10はP14脇の覆土中から出土した。口径13.2cm、器高4.5cmで、内外面とも黒色処理されている。体部はヘラナデされ、内面は細い単位でヘラミガキされている。11は竈前面から出土した。口径13.5cm、器高4.3cmで、内外面とも黒色処理されている。体部は周縁に沿ってヘラケズリされ、内面は細い単位でヘラミガキされている。12は覆土中から発見された。口径13.1cm、器高4.0cmで、暗褐色を呈し、内面は黒色処理されている。体部はナデの後、粗くヘラミガキされ、内面は細い単位でヘラミガキされている。

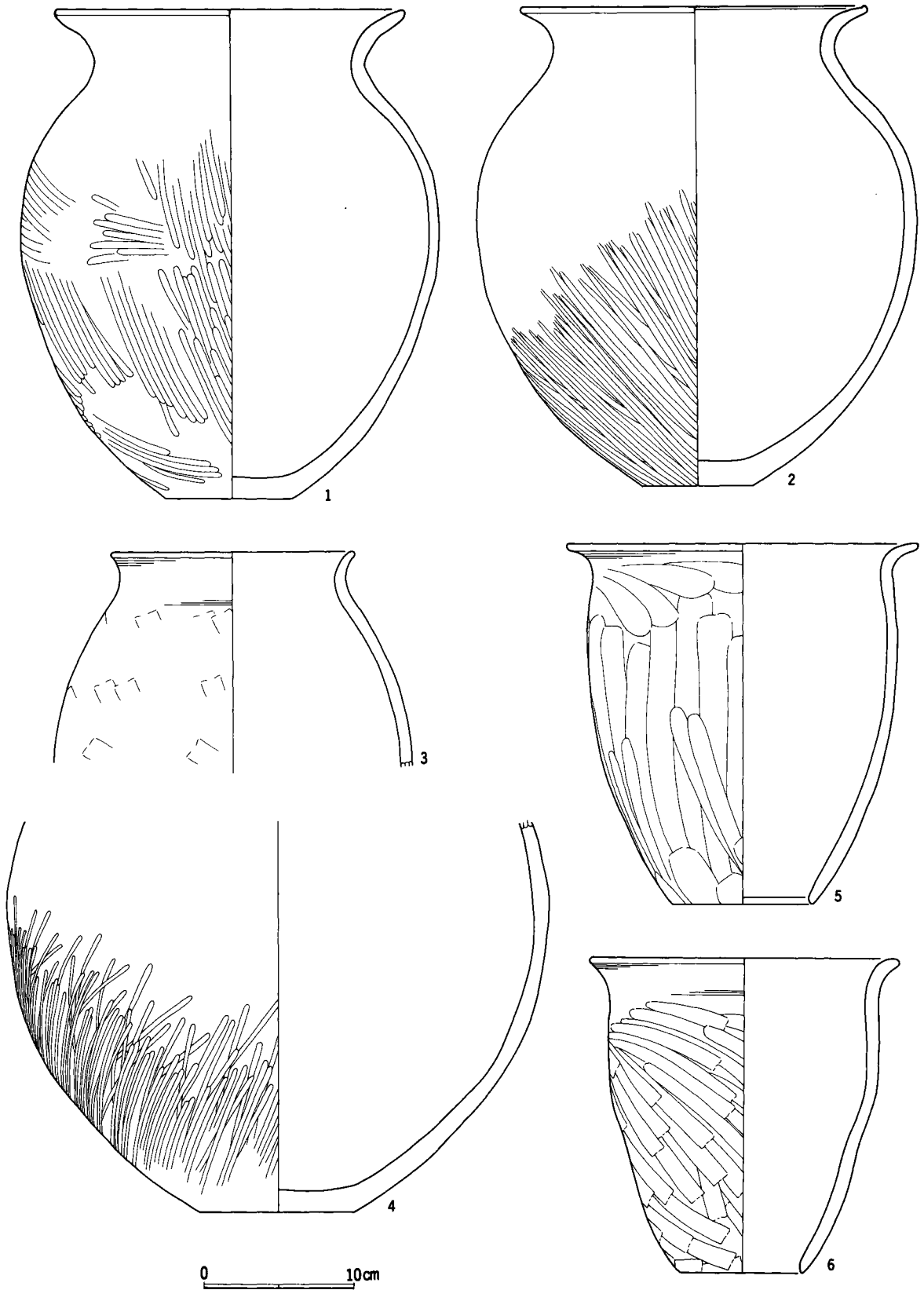
13～15は土玉で、いずれも覆土中から発見された。13は最大径3.3cmで、赤彩の可能性はある。ナデ仕上げだが、手擦れによる鈍い光沢を持っている。重量32.5gを量る。14は赤彩が施され、ナデ仕上げで、一方の紐通し面が面取りされている。15は赤彩が施され、ナデ仕上げだが、手擦れによる光沢を放つ。一部に擦痕が認められる。

SI 64 (第127図、第128図、図版14、図版30)

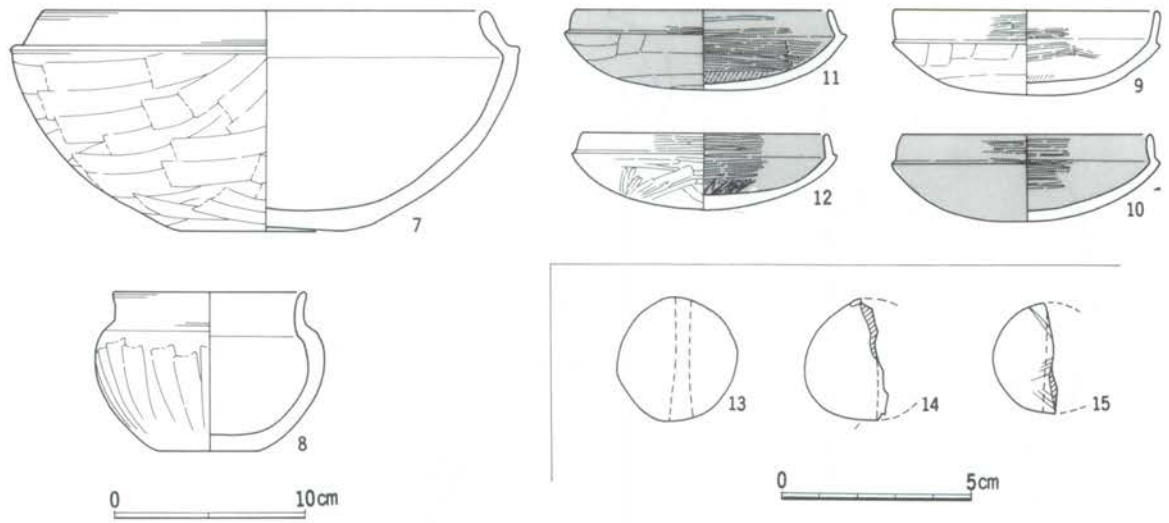
遺構 SI 63の南に位置する。遺構の東側は台地傾斜面にかかり、壁や床面が把握できなかつた。一辺4.1



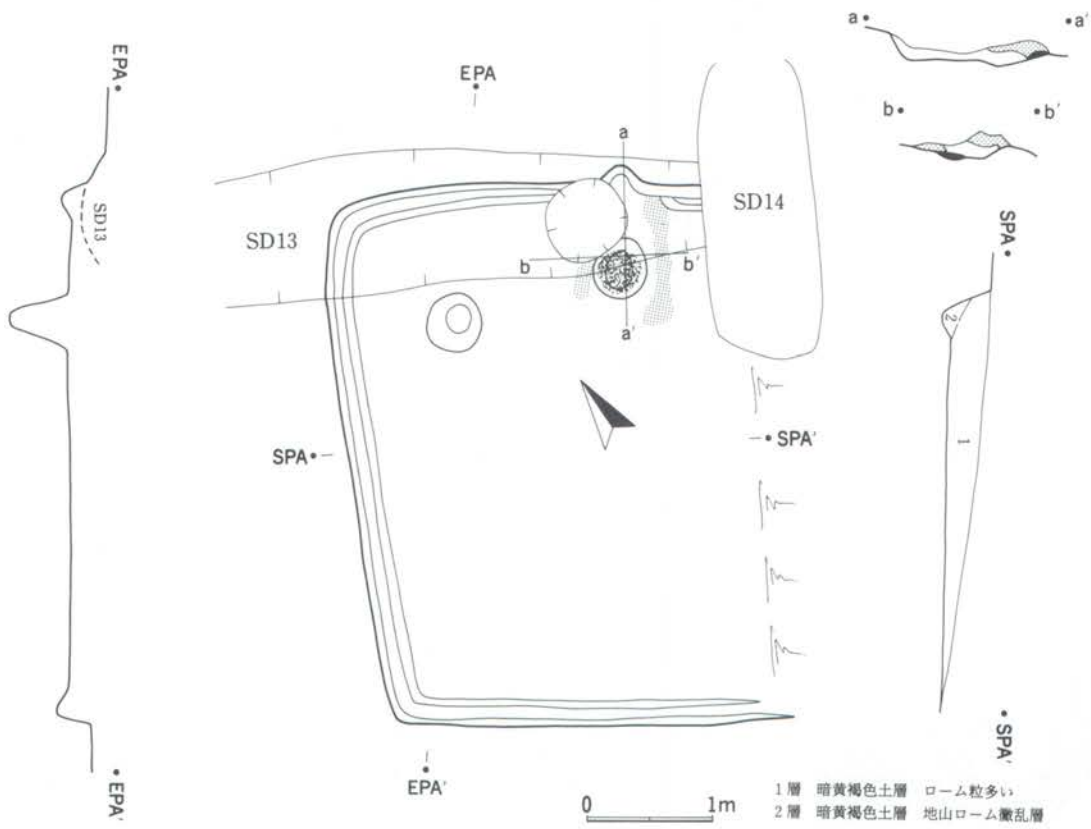
第124図 SI63遺構実測図



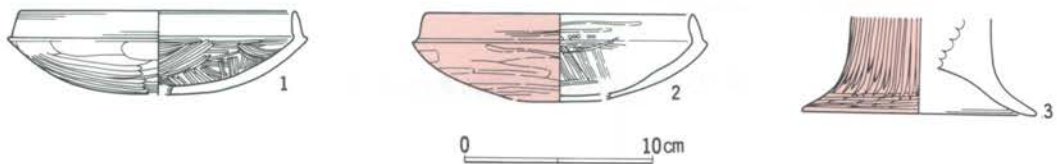
第125図 SI63出土遺物実測図(1)



第126図 SI63出土遺物実測図 (2)



第127図 SI64遺構実測図



第128図 SI64出土遺物実測図

m程の不整形プランであったと思われる。北東壁に竈があるが、SD 13の攪乱を受けて、遺存状態は悪い。周溝は検出範囲では全周している。柱穴は北隅寄りに1基検出した。床面の顕著な硬化部分は認められない。

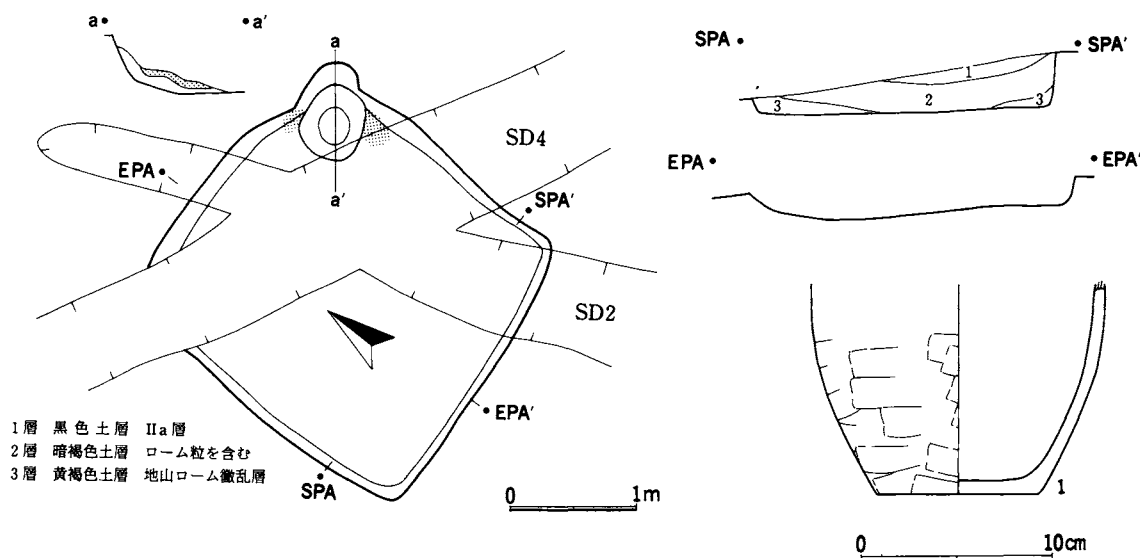
遺物 土師器が覆土中から発見されている。

1・2は杯である。1は口径14.3cm、器高4.4cmで、赤褐色を呈する。体部はヘラケズリの後、ヘラミガキされ、内面は細い単位でヘラミガキされている。2は口径14.2cm、現高4.5cmで、赤褐色を呈し、外面は赤彩されている。体部はヘラケズリの後、粗くヘラナデされ、内面は細い単位で粗くヘラミガキされている。3は高杯である。外面が赤彩されている。脚部・台部とも細い単位で丹念にヘラミガキされている。

SI 65 (第129図、図版15、図版30)

遺構 SI 1の南に位置する。2.4m×2.6mの方形プランを持つ小型住居跡である。竈は北東隅に設置されている。上屋材の遺存状態は悪いが、船形ピットや煙道ははっきりしている。火床はあまり焼けていない。周溝、柱穴、貯蔵穴等は存在しない。床面には顕著な硬化面は見られない。

遺物 遺物量は少ない。1は土師器甕で、覆土中から発見された。現高11.0cmで、赤褐色を呈する。胴部は横にヘラケズリされている。また、内面には煤が付着している。



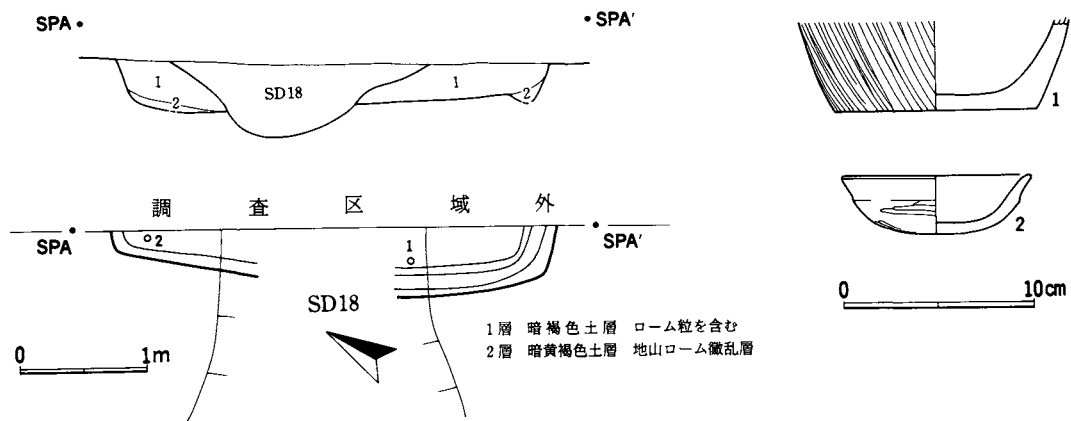
第129図 SI65遺構・出土遺物実測図

SI 66 (第130図、図版30)

遺構 SI 45の東方にあり、大部分は調査区域外に出ている。一辺3.5m程の方形プランとなる。周溝は南側のみ確認できた。覆土は人為的に埋められたローム包含土である。

遺物 土師器が出土した。

1は甕で、壁際の覆土から出土した。赤褐色で、斜めのヘラナデが周回している。表面は荒れている。2は杯で、北隅から出土した。口径4.9cm、器高3.1cmで、赤褐色を呈する。体部はナデの後にヘラナデされている。底部には焼成時の黒斑が見られる。



第130図 SI66遺構・出土遺物実測図

SI 67 (第131図、第132図、図版30、図版33)

遺構 SI 10の北に接して位置する。遺構検出面が深すぎて、壁や床面は確認できなかった。竈火床・貯蔵穴・柱穴が検出された。この住居跡のプランは、およそ第131図の破線で示した範囲になると考えられ、その規模は一辺約4.5mになる。竈の火床は一般に比べて深く作られている。諸ピットの配置は乱雑で、柱穴を定めにくい。後世のものが含まれていたり、すべてを検出しきっていない可能性も残る。この中でP6は深さや位置関係からみて、柱穴から除外して差し支えない。また、エレベーション図から、P1・P2は深く、P3・P4は浅いので、片流れ式の上屋構造を想定できるかもしれない。

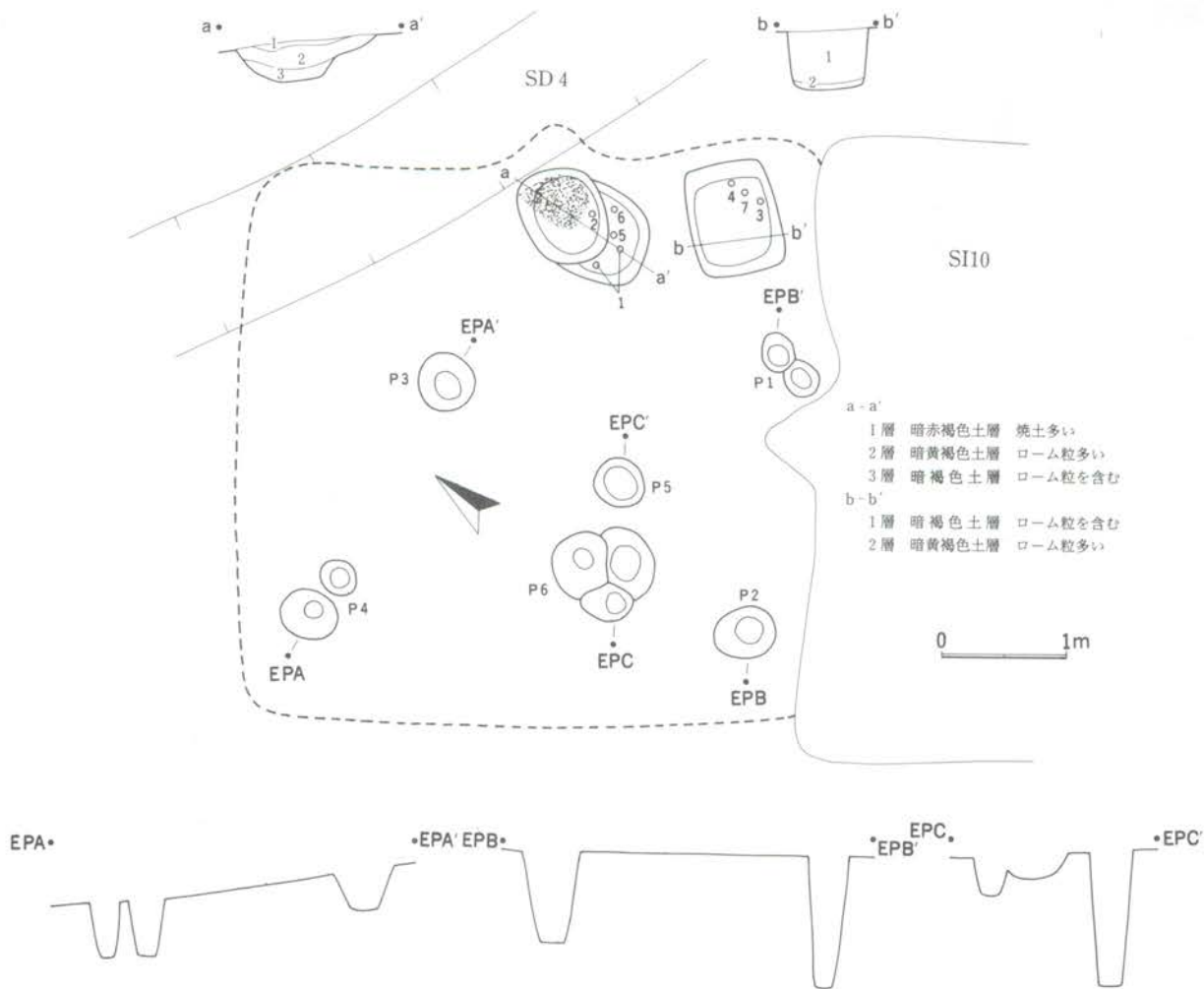
遺物 遺物は土師器と滑石製石核で、すべて本来の竈内と貯蔵穴から出土した。

1は甕で、竈内から散乱して出土した。口径11.5cmで、赤褐色を呈する。胴部はヘラナデされており、表面は荒れている。2～6は杯である。2は竈内から出土した。口径17.1cm、器高4.6cmで、赤褐色を呈する。体部は弱いヘラナデが施される。3は貯蔵穴から出土した。口径14.6cm、器高5.2cmで、赤褐色を呈し、口縁内外面、体部内面が赤彩されている。口縁は内外面とも細い単位でヘラミガキされ、体部は外面は弱いヘラナデ、内面は放射状にヘラミガキされている。4は貯蔵穴から出土した。口径14.8cm、器高4.9cmで、明褐色を呈する。体部には弱いヘラナデが認められる。5は竈内から出土した。口径16.6cm、器高4.5cmで、内外面が赤彩されている。体部は細い単位で、外面は周縁に沿って、内面は放射状にヘラミガキされている。6は椀形に近い器形で、口径12.2cm、現高7.0cmを測る。内外面とも赤彩されている。体部はナデの後、上半が粗いヘラミガキ、下半がヘラナデされている。

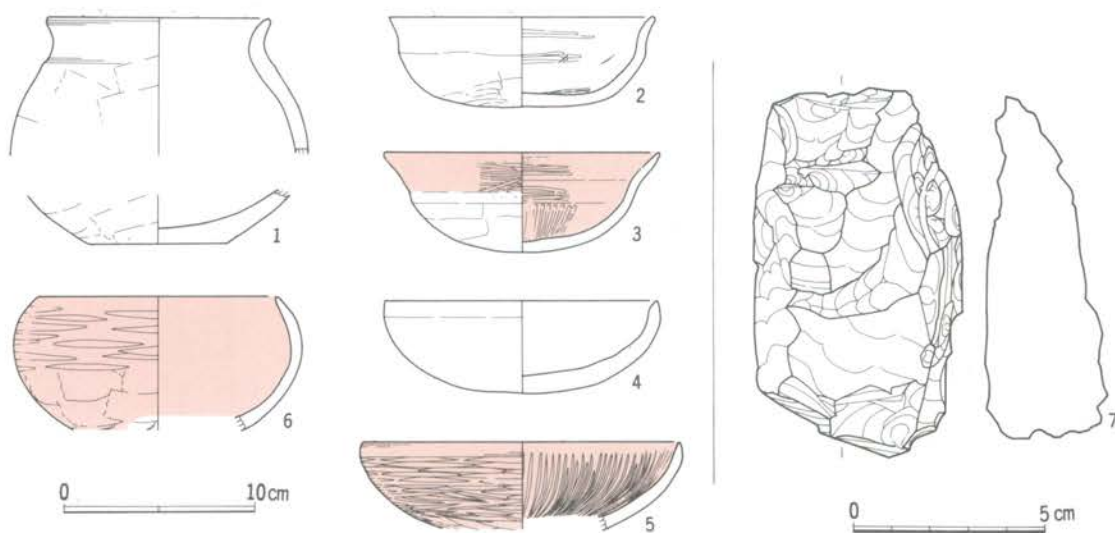
7は滑石製石核で、貯蔵穴から出土した。石製模造品や有孔円盤の素材剥片を供給した母岩で、暗緑色を呈し、重量237.3gを量る。

SI 68 (第133図)

遺構 SI 62の南に位置する。調査時点ではピット群として把握していたが、竪穴住居跡の可能性も残されているので、ここで報告する。P1～P4は位置関係からみて、四本柱穴の可能性はある。その場合、エレベーション図からP1・P2は深く、P3・P4は浅いので、片流れ式の上屋構造を考えることができる。P5は竈の船形ピットの位置としては最適だが、深さがP2とほぼ等しく、船形ピットにはならない。

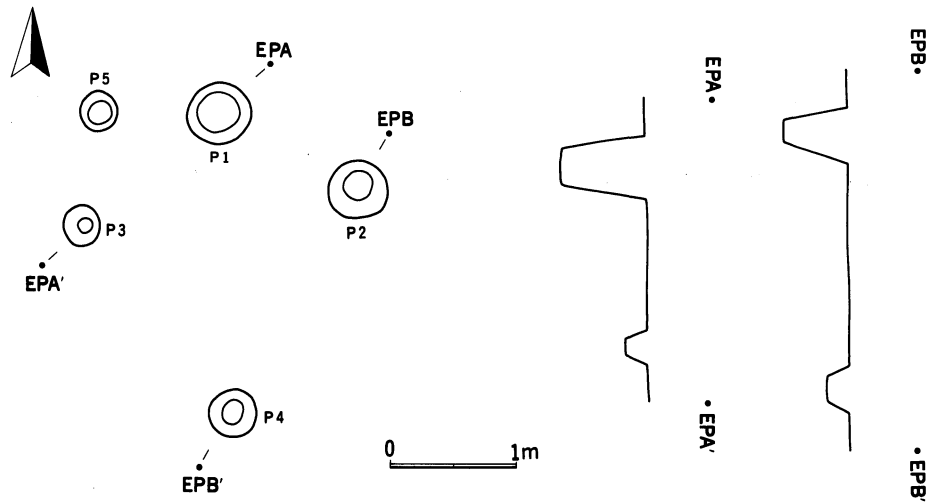


第131図 SI67遺構実測図



第132図 SI67出土遺物実測図

遺物 遺物は検出されなかった。



第133図 SI68遺構実測図

第3章 土坑類と出土遺物

土坑類は11基検出された。用途不明のものが多いが、陥穴、土墳墓などが含まれている（第134図）。

SK 1（第135図）

調査区北部に位置する陥穴である。SI 4・SI 5・SD 5の攪乱を受けている。確認面は長楕円形で、底部は幅が細く狭まっている。長径2.6m、短径0.9m、深さ2.2mを測る。遺物は出土しなかった。

SK 4（第136図、図版30）

調査区西部に位置し、遺構の南部は調査区域外にある。推定長径0.8m、短径0.6m、深さ0.4mのピットである。北辺から土師器甕が出土した。

この土器は口縁部破片で、口径16.3cm、現高6.1cmを測り、赤褐色を呈する。胴部はヘラナデされ、内面には輪積痕が残っている。

SK 7（第137図、図版34）

径約1m、深さ0.3mの略円形を呈する浅いピットである。掘り方は東側が深く、西側は浅く開いている。土師器、土玉が出土した。

1は甕で、南辺の底面上から出土した。口径25.6cm、現高14.0cmを測り、赤褐色を呈する。胴部は内外面ともナデ調整されている。2は土玉で、覆土中から発見された。最大径は2.6cmで、ナデ仕上げされている。茶褐色を呈し、胎土には雲母を含む。紐通し面は両面とも面取りされている。重量15.1gを測る。

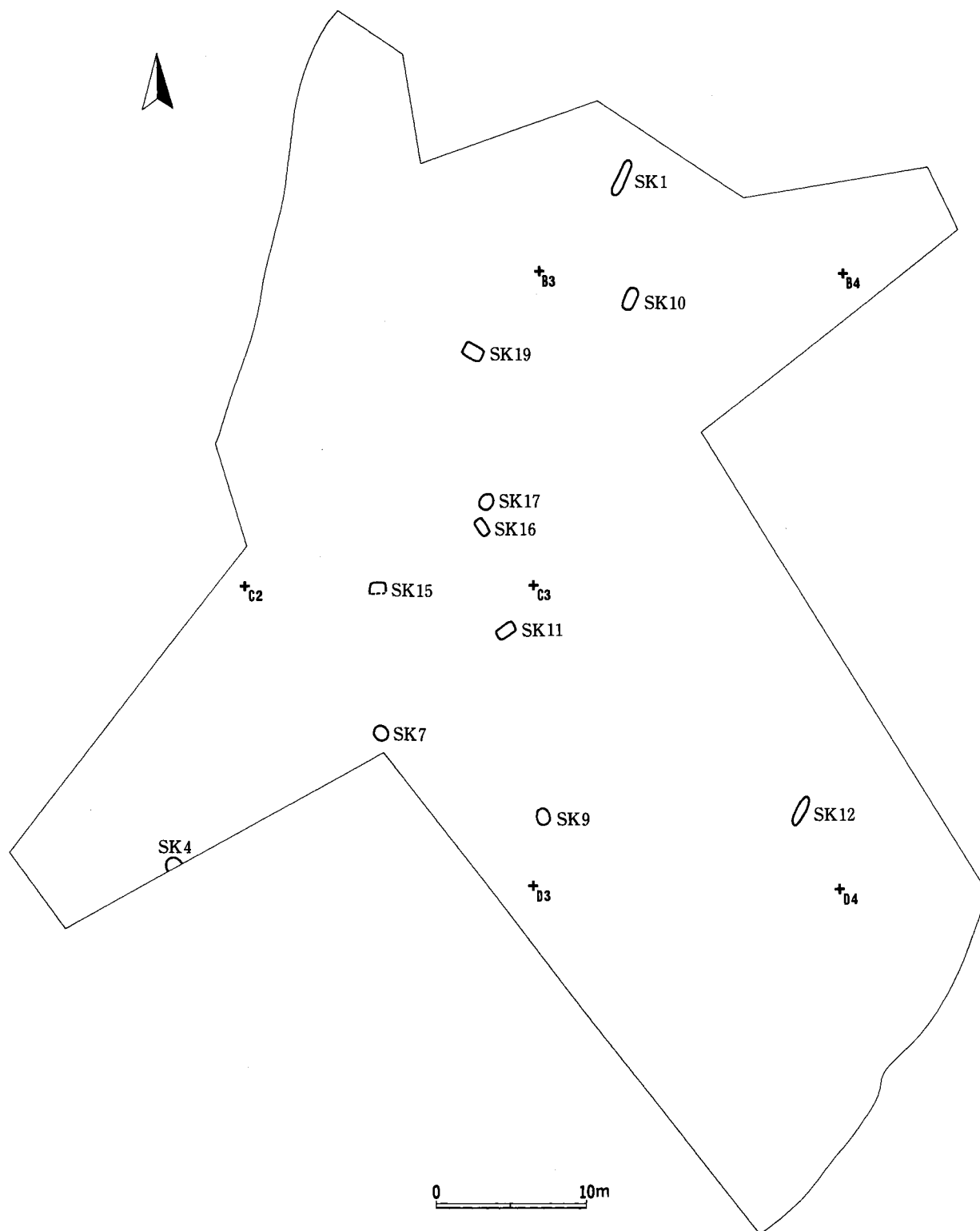
SK 9（第138図、図版16、図版33、図版34）

調査区の南部に位置している。平面は長径1.0m、短径0.8mの楕円形で、深さ0.4mのピットである。掘り方は西側が深く、東側は段をなして浅くなっている。土玉、滑石片が底面付近から出土した。

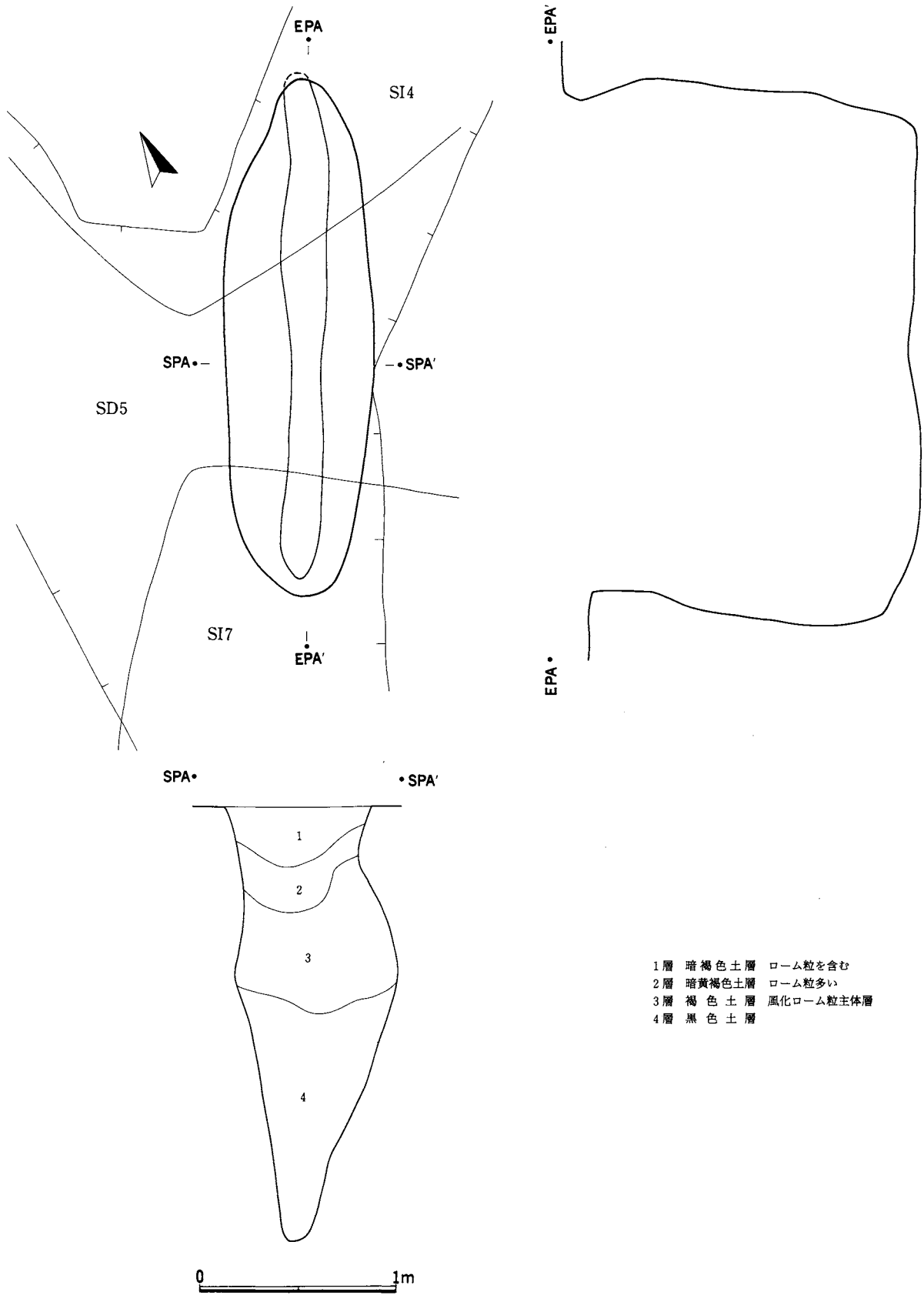
1～4は土玉である。1は最大径3.1cmで、赤彩の可能性がある。胎土には雲母を含む。紐通し穴の一面が面取りされ、表面には粘土小粒が付着している。ナデ仕上げされ、重量32.7gを測る。2は最大径3.5cmで、茶褐色を呈し、胎土には雲母を含む。粘土帯を巻きながら成形した末端部の痕跡が残っている。紐通し面の両面が面取りされている。ナデ仕上げで、重量14.4gを測る。3は現存径3.4cmで、茶褐色を呈し、胎土には雲母を含む。ナデ仕上げされている。4は茶褐色を呈し、ナデ仕上げされている。5は加工された滑石片岩で、長さ4.0cmで、表面を磨滑した後、周囲を剝離している。裏面は自然面が残されている。剣形模造品の未製品の可能性がある。重量4.0gを測る。

SK 10（第139図、図版16、図版36）

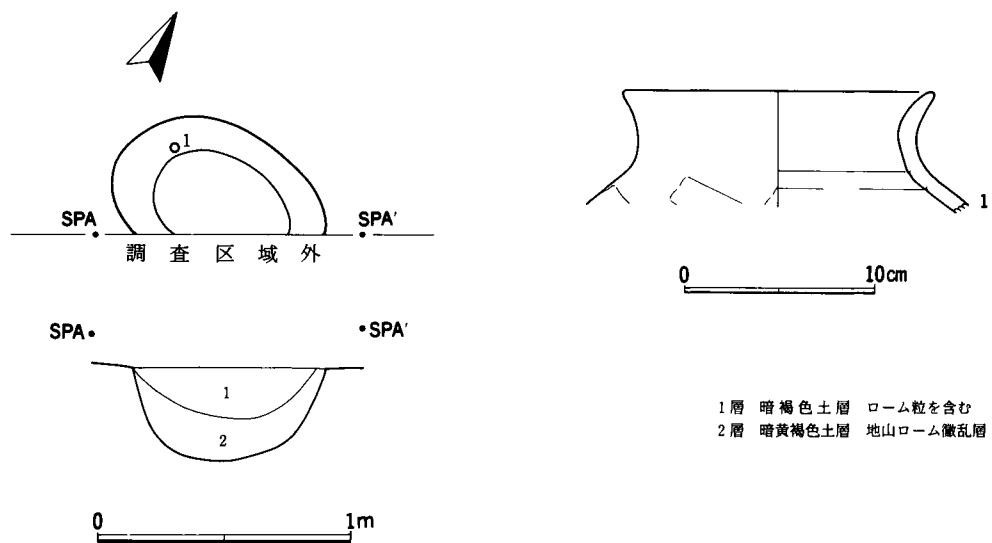
調査区北部に位置し、SI 8の床面を掘り抜いていた。長辺1.4m、短辺0.8m、確認面からの深さ0.15mの隅丸長方形を呈する土墳墓である。平坦な底面から周壁がなだらかに立ち上がっている。西壁際底面付近から、和鏡が鏡面を上に向けた状態で出土した。検出時には鏡面に漆塗り木箱の僅かな痕跡が確認でき



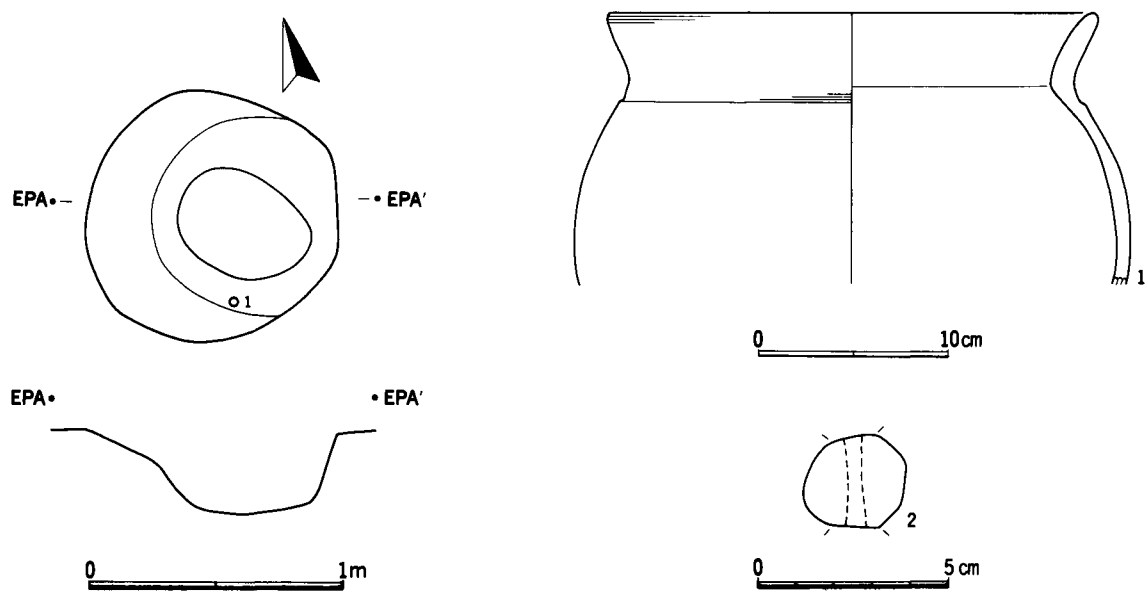
第134図 土坑類配置図



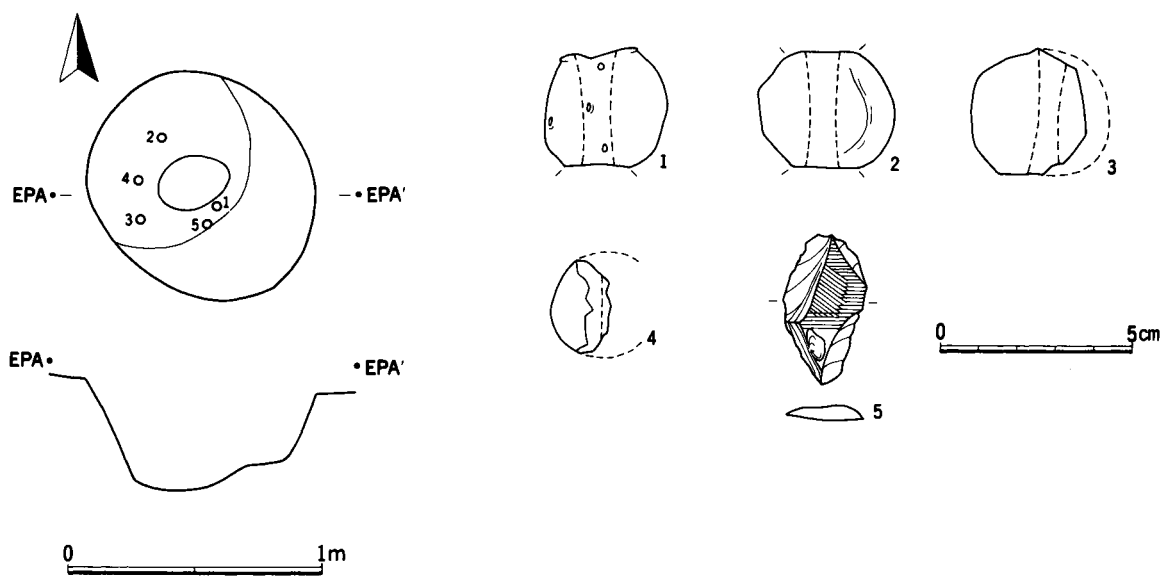
第135図 SK1 遺構実測図



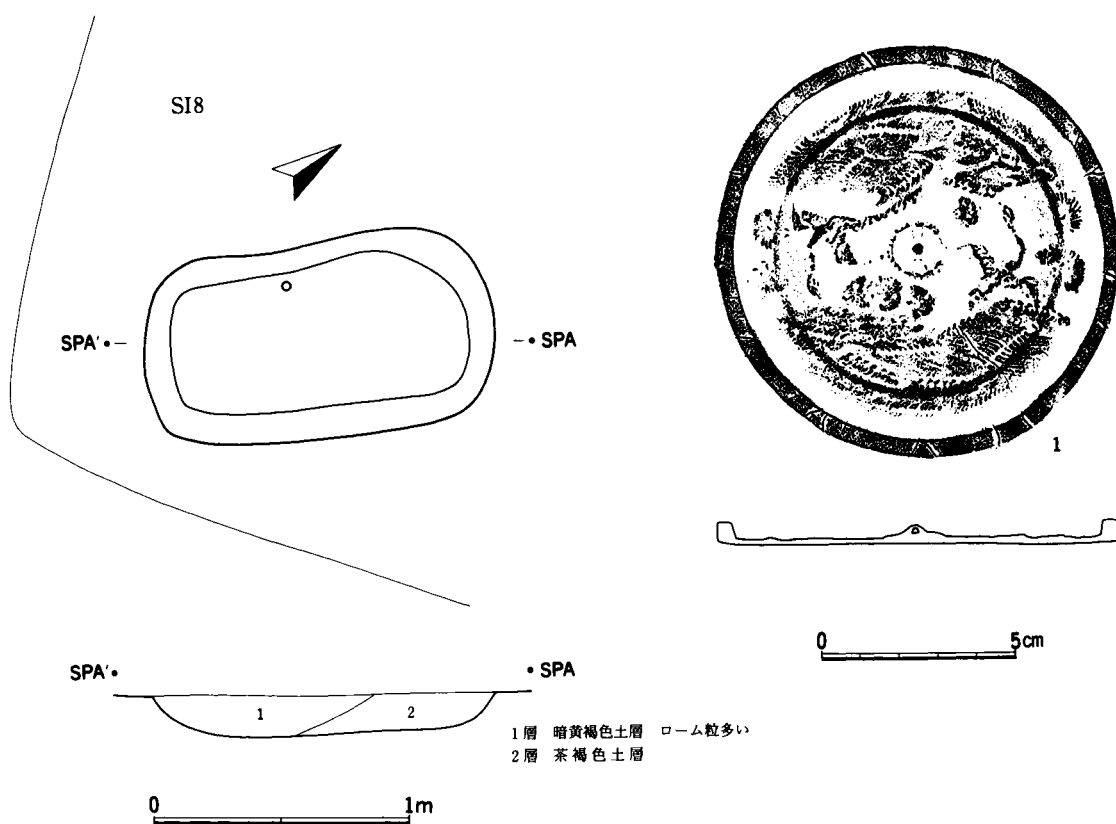
第136図 SK4 遺構・出土遺物実測図



第137図 SK7 遺構・出土遺物実測図



第138図 SK9遺構・出土遺物実測図



第139図 SK10遺構・出土遺物実測図

た。

出土した和鏡は青銅製で、鏡面は僅かに外反している。直径10.6cm、鈕高5mm、縁高7mm、重量106gを測る。鈕式は花形座鈕。縁は直角に立ち上がる平縁で、厚みがある。界圏は単圏で、断面蒲鉾形の肥線圏である。鏡背図像は天地に波濤を配し、中央は鈕を挟んで翼を広げた二羽の水鳥が反対布置されており、その間に小松が散らされている。各部の特徴からみて鎌倉時代後半の作例であろう。

SK 11 (第140図、図版16、図版30)

調査区の中央にあつて、SD 9 に接している。平面形は長辺82cm、短辺55cmの隅丸長方形を呈し、深さ59cmを測るピットである。底部付近から2個体分の土師器杯が散乱した状態で出土した。

1は口径14.4cm、器高4.3cmで、外面上半と内面が赤彩されており、胎土には雲母を含む。体部はヘラケズリ後にヘラミガキされている。内外面の器肌が荒れている。2は口径16.0cm、器高5.0cmで、外面上半と内面が赤彩されており、胎土には雲母を含む。体部はヘラケズリ後ヘラナデされ、内面は放射状にヘラナデされている。外面底部に「×」印の陰刻がある。内外面の器肌が荒れている。



第140図 SK11遺構・出土遺物実測図

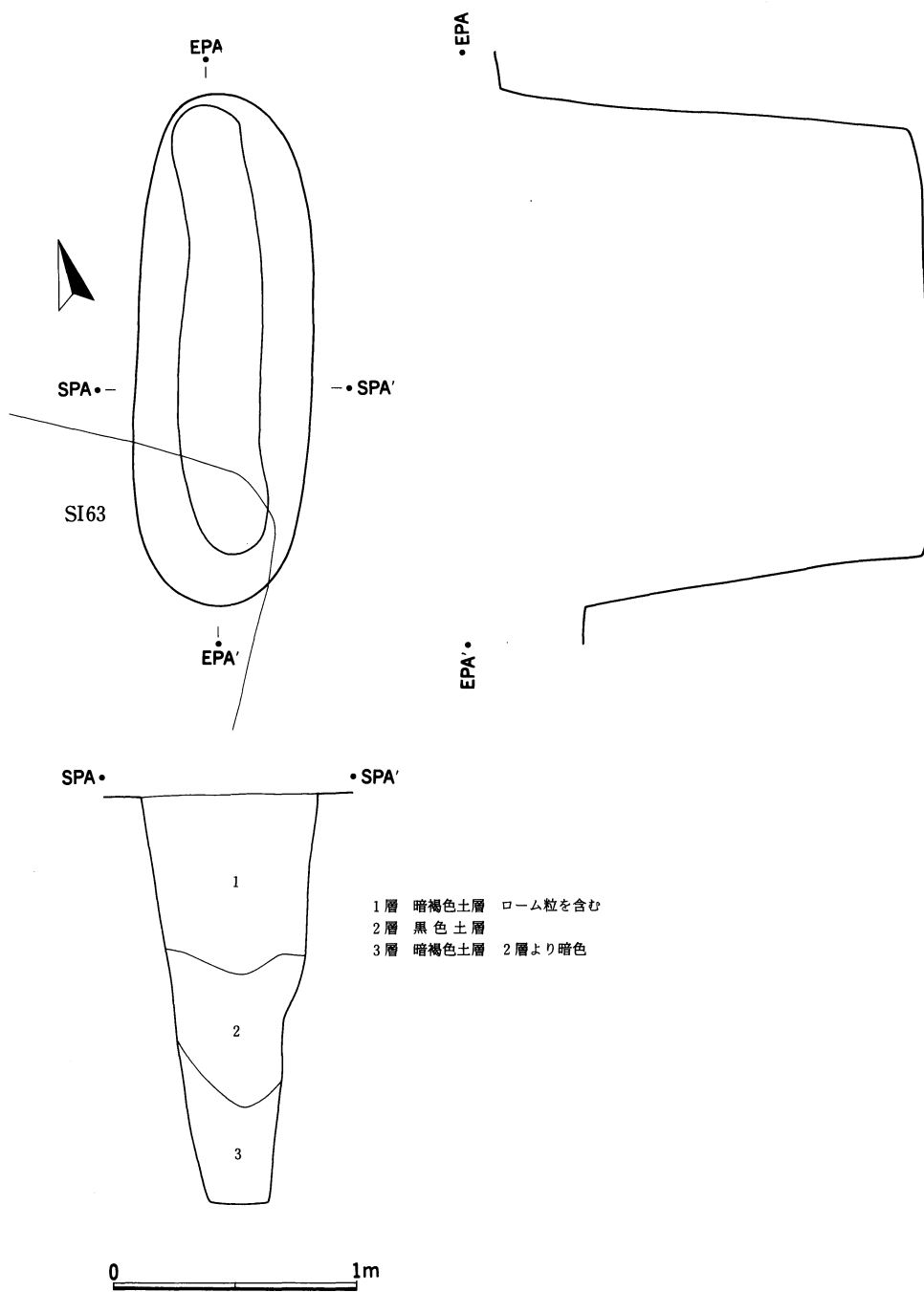
SK 12 (第141図)

調査区の南東に位置しており、南側がSI 63に攪乱されている。長軸2.1m、短軸0.7mの長楕円形プランで、深さ1.7mを測る陥穴である。遺物は出土しなかった。

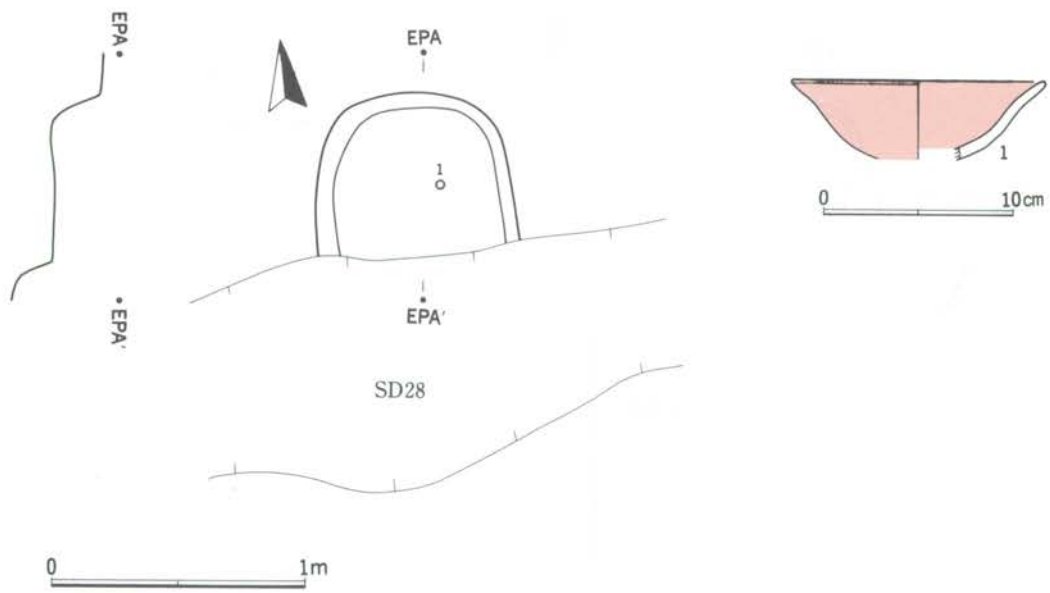
SK 15 (第142図、図版16)

調査区の中央西寄りに位置し、南半をSD 28に攪乱されている。隅丸長方形プランと思われるピットである。現存長辺68cm、短辺80cm、深さ20cmを測る。北寄りの覆土中から土師器高杯が出土した。

土師器高杯は杯部破片で、口径13.3cm、現高4.2cmを測る。内外面とも赤彩され、体部はヘラナデされている。



第141図 SK12遺構実測図

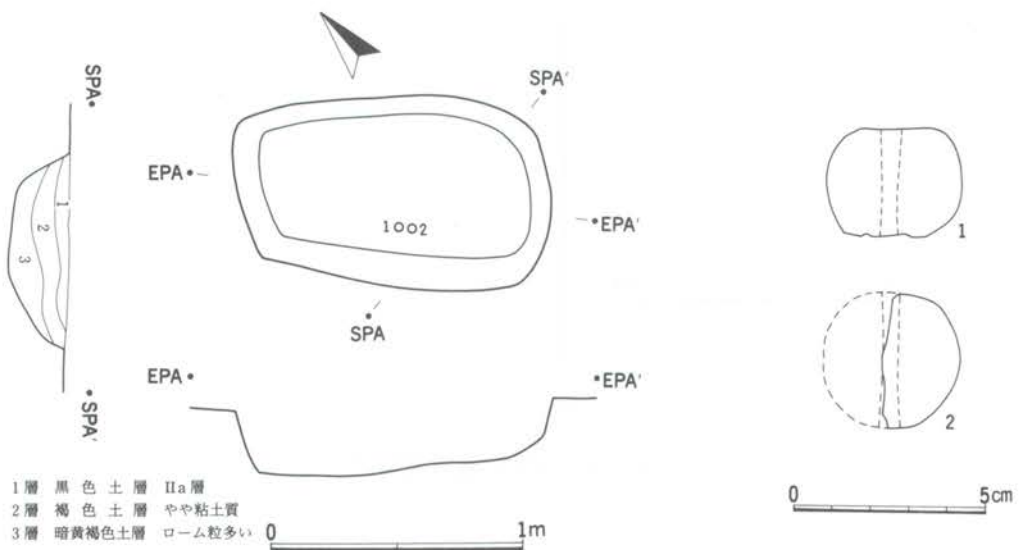


第142図 SK15遺構・出土遺物実測図

SK 16 (第143図、図版16、図版34)

調査区中央に位置する。不整な隅丸長方形プランのピットで、長辺120cm、短辺76cm、深さ27cmを測る。西壁際の覆土中から土玉が2個出土した。

1は最大径3.6cm、重量34.6gを測る。茶褐色を呈し、ナデ仕上げされている。2は最大径3.5cmで、赤彩されている可能性がある。



- 1層 黒色土層 IIa層
- 2層 褐色土層 やや粘土質
- 3層 暗黄褐色土層 ローム粒多い

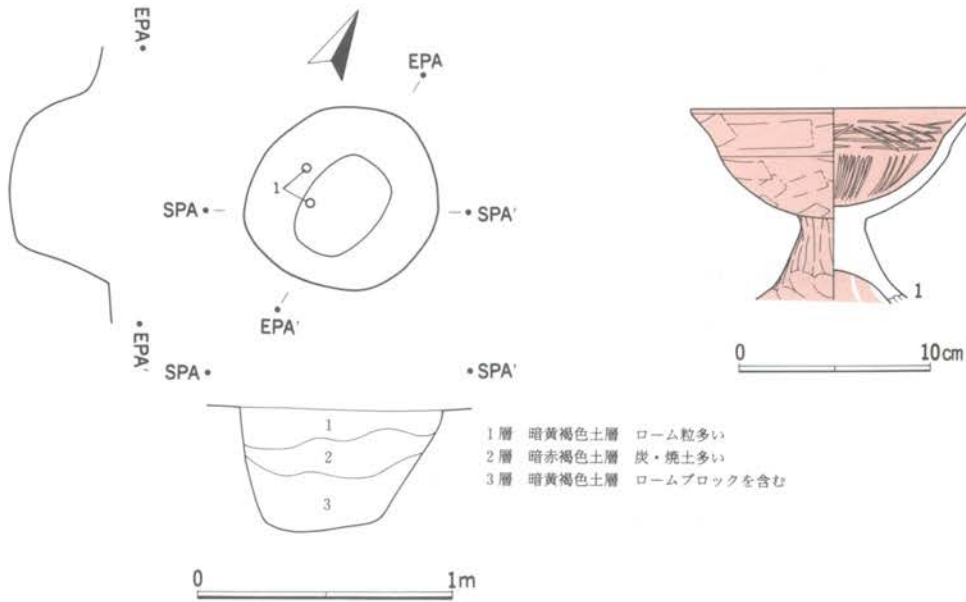
第143図 SK16遺構・出土遺物実測図

SK 17 (第144図)

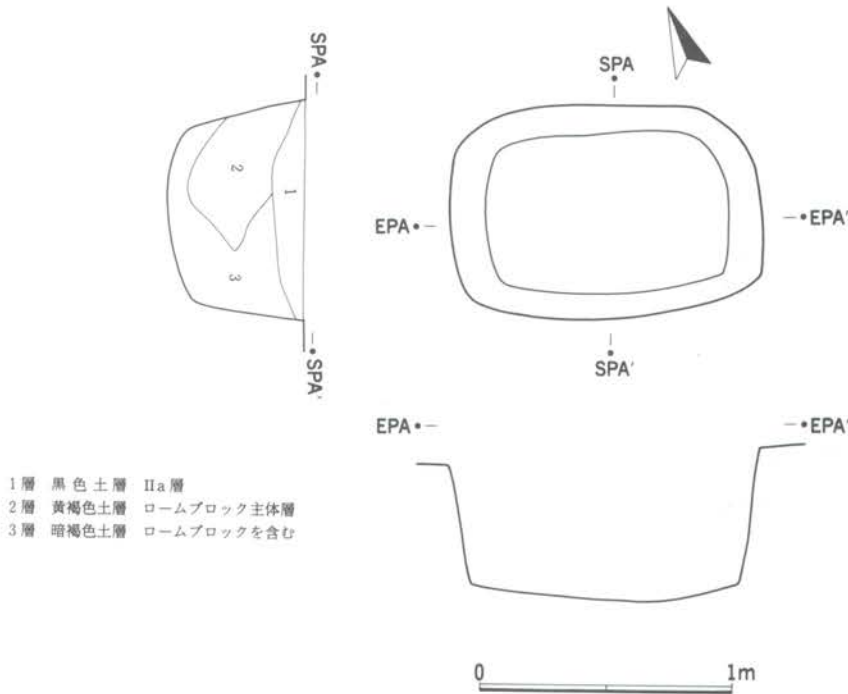
調査区中央に位置する。略円形プランのピットで、径75cm、深さ48cmを測る。覆土中から土師器高杯が出土した。土師器高杯は口径14.9cm、現高10.5cmで、内外面が赤彩されている。体部外面はヘラナデ、内面はヘラミガキされている。

SK 19 (第145図)

調査区のやや北側に位置する。隅丸長方形プランのピットで、平坦な底面を有し、長辺125cm、短辺82cm、深さ53cmを測る。遺物は出土しなかった。



第144図 SK17遺構・出土遺物実測図



第145図 SK19遺構実測図

第4章 道路跡・溝跡・柵跡と出土遺物

道路跡・溝跡・柵跡はすべて竪穴住居跡群を攪乱していたので、築造年代はそれよりも新しくなる。また出土遺物はほとんどが攪乱を受けた竪穴住居跡からの混入品とみなされるので、遺構と遺物を分離して記述する。

第1節 遺構（第146図、第147図、第148図、図版15）

道路跡はSD 1～2、溝跡はSD 2～17、柵跡はSD 18～19である。

SD 1

調査区の中央部を北東から南西にかけて緩く蛇行する道路跡で、現在の農道の直下に検出された。全長58m分が確認され、平均的な幅1.1m、深さ0.3mである。遺構確認面が非常に硬化していた。北東端付近でSD 10に攪乱され、南西部ではSD 5・SD 19を攪乱している。

SD 2

調査区北西部にあり、南北方向に33m分確認された。遺構確認面が非常に硬化していた。北部でSD 4、中央部でSD 5に攪乱されている。SD 5に攪乱された部分から南西方向に屈曲している。幅0.2～1m、深さは北部が0.3m、南部が0.1mと浅くなっている。

SD 3

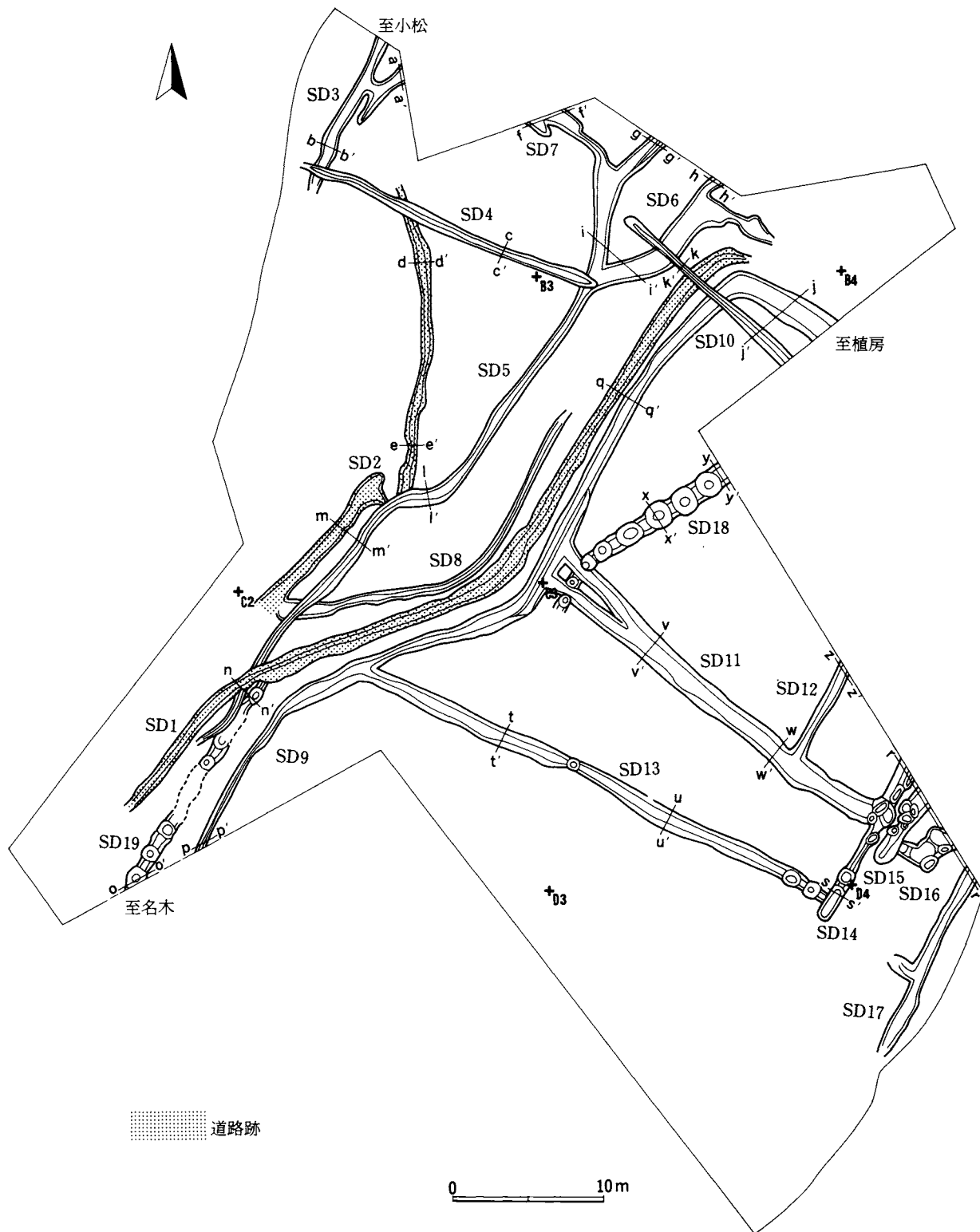
調査区最北端に位置し、全長12mが確認された。途中で別な溝と連結している。幅0.8m、深さ0.2mで、南端がSD 4に攪乱されている。

SD 4

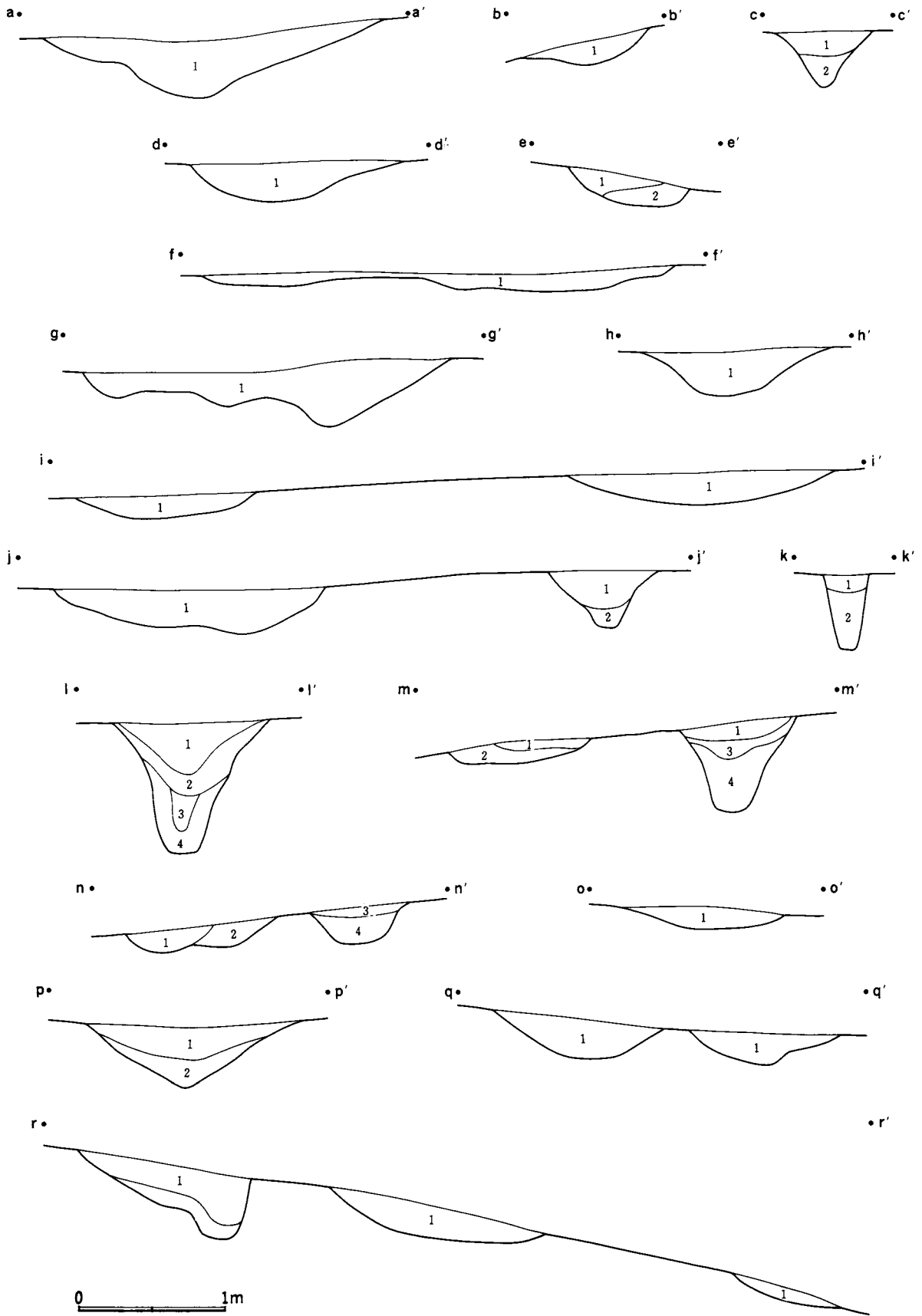
調査区北部を北西から南東に延びている。全長20mが確認された。幅0.6m、深さ0.4mを計る。北西端でSD 3、南東端でSD 5、中央でSD 2を攪乱している。

SD 5

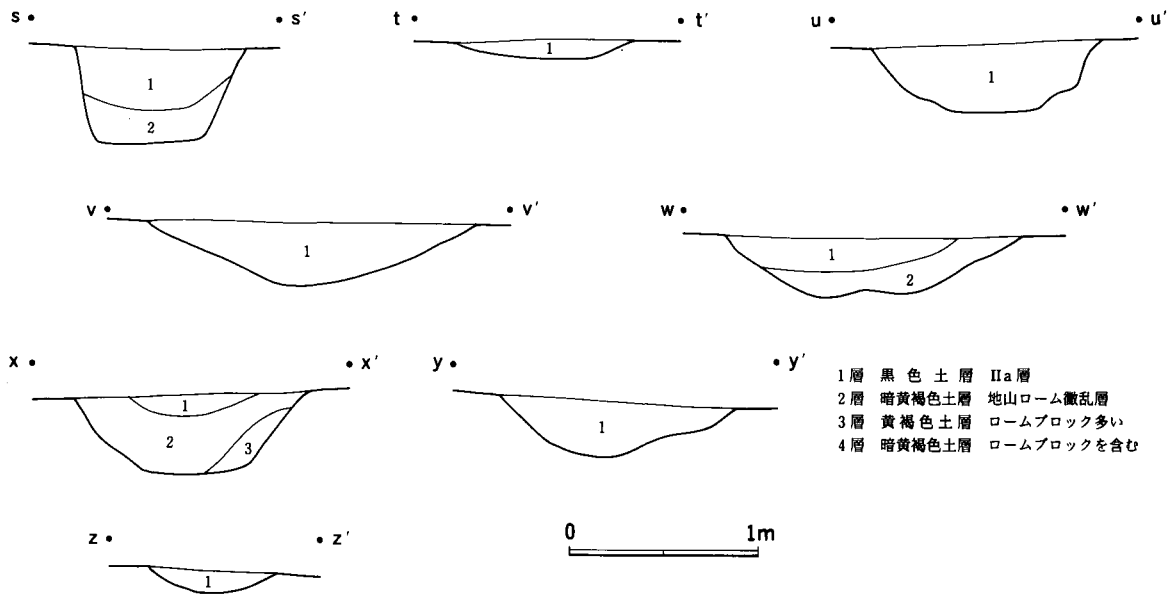
SD 1の北側を概ね並行して北東から南西に延びている。北側では2条に分岐しているが、分岐点までをSD 5とした。全長39m、幅1m、深さ0.8mを計るが、南に行くほど細く浅くなり、自然消滅している。北部ではSD 4に攪乱され、中央ではSD 2を攪乱し、南部ではSD 19を攪乱し、SD 1に攪乱されている。



第146図 道路跡・溝跡・柵跡配置図



第147图 道路迹·沟迹·栅迹断面图(1)



第148図 道路跡・溝跡・柵跡断面図 (2)

SD 6

SD 5 の北部で分岐する東側の溝である。この溝は調査区境界付近でさらに南東へ小溝を分岐している。全長11m分が確認され、幅1.4m、深さ0.2mである。

SD 7

SD 5 の北部で分岐する西側の溝である。SD 6 と対称的に小溝を北西へ分岐している。全長11m分が確認され、幅は最も広い部分で1.5m、深さ0.4mを計る。

SD 8

SD 1 とSD 5 に挟まれた位置にあり、中央で緩く屈曲してSD 2 に連結している。全長24m分が確認され、幅0.7m、深さ0.2mを計る。南西部でSD 5 に攪乱されている。

SD 9

SD 1 の東側にほとんど接するようにして延びている溝である。北端部で南東方向に直角に屈折しており、南端部は次第に細くなりながら調査区外へ続いている。北端付近でSD 10に攪乱され、中央部ではSD 11・SD 13と連結している。連結部分の側壁中段はテラスを形成している。全長61m分が確認された。北端部付近の幅1.7m、深さ0.3mである。

SD 10

調査区北東部にあり、SD 6・SD 1・SD 9 を攪乱しながら調査区外へ延びている。全長14m分確認され、幅0.7m、深さ0.4mを計る。

SD 11

調査区中央部でSD 9 と、南東部でSD 14と連結している。また、途中で北に延びるSD 12と連結している。SD 9 付近では二股に分岐し、SD 18を攪乱している。全長26m、幅1.6m、深さ0.3mを計る。

SD 12

SD 11の中途から分岐し、北東方向に延びている。全長6 m分が確認され、幅0.6m、深さ0.1mである。

SD 13

調査区南部に位置し、SD 9 から分岐し、南東方向に延びてSD14の末端部と連結している。全長33mで、杭穴と思われる小ピットを含んでいる。幅0.8~1.1m、深さは中央の小ピットを境に、西側で0.1m、東側で0.35mを計る。

SD 14

調査区南東部にあり、SD 13の末端部から始まって北東方向に延び、途中でSD 11・SD 15と連結している。全長11m分が確認された。幅0.7m、深さ0.25mである。SD 13との連結部は隅丸方形プランのピットを形成し、0.7×2.3mの規模があり、深さ0.5mを計る。また、SD 11との連結部では小ピットが密集している。

SD 15

SD 14の東側にほとんど接するように並行している。全長5 m分が確認され、途中で小ピットが密集している。幅1.2m、深さ0.15mである。

SD 16

SD 15から分岐し、直角に屈折して北東方向に延びている。全長5.5m分が確認された。小ピットを多数含んでいる。

SD 17

調査区南東端に位置し、北東方向に延びている。途中で北西方向に溝を分岐するが、すぐに自然消滅している。全長12.5m分が確認され、幅1 m、深さ0.1mを計る。

SD 18

調査区中央に位置する。溝を掘った後に杭を連続的に打ち込んだ柵跡である。全長14m分確認され、北東方向に行くほど溝幅が広がる。南端部付近でSD 11に攪乱されている。北東部の溝幅1.1m、深さ0.25 m、杭坑の深さ0.4mである。

SD 19

調査区南西部に位置する。SD 1 とSD 5 の交差点から始まって、断続しながら調査区外に延びている。SD 18と同様に溝を掘った後に杭を連続的に打ち込んでいる。溝幅0.7m、杭坑の深さ0.25mを計る。

第2節 出土遺物（第149～152図、図版31～34、図版36）

SD1 出土遺物

土師器が出土した。1・2は甕底部である。1は底部円盤を貼り付けて成形している。3は台付甕の脚台部である。脚部には粘土紐を捻った形跡がある。胎土は精良で、明褐色を呈する。4～9は杯である。4は内外面とも黒色処理されている。調整は内外面ともヘラミガキである。6は内外面とも赤彩され、胎土は精良で雲母を含む。8は内外面とも赤彩され、体部外面はヘラケズリ、内面は放射状にヘラミガキされている。9は内外面とも赤彩されている。

SD2 出土遺物

土師器・土玉が出土した。1～3は甕口縁部である。3は緩い段を形成している。4～6は杯である。4は口縁部と体部の境に細沈線が2条入っている。6の内面は黒色処理されている。7・8は土玉である。7の表面はミガキに近い光沢を持つ。胎土には雲母を含み、赤彩の可能性がある。紐通し面は両面とも面取りされている。最大径3.3cm、重量25.5gを量る。8は黒色を呈し、硬い平面上で押圧しながら成形したことが窺える。長さ3.2cm、重量3.8gを量る。

SD3 出土遺物

土師器が出土した。1・2は甕である。1は明褐色を呈し、胎土に石英・長石を含む。3は杯である。口径13.8cm、現高3.8cmで、体部はヘラケズリされている。4は手捏ね土器である。底径4.8cm、現高1.9cmで、内側から器壁を指頭で圧迫した痕跡がある。底部外面には木葉痕が見られる。

SD4 出土遺物

土師器が出土した。1・2は甕底部である。1は現高8.1cmあり、胴部はヘラケズリされている。3～5は杯である。3は内外面とも黒色処理されている。体部外面はヘラケズリされ、内面はヘラミガキされている。4は口径14.3cm、現高2.7cmで、体部はヘラナデされている。5は体部がヘラナデされている。6・7は高杯である。6は内外面とも赤彩されている。

SD5 出土遺物

土師器・土玉・土鈴が出土した。1・2は甕である。2の底部は削り出して成形されている。3は甕底部である。胴部はヘラナデされている。胎土は精良で雲母を含む。4～7は杯である。4は体部がヘラケズリされている。5は内外面とも赤彩されている。6は椀形を呈し、口径12.8cm、現高4.6cmである。7は外面上半と内面が赤彩され、口径16.9cm、現高4.8cmで、体部はヘラケズリされている。8は高杯脚部である。内外面が赤彩されている。9は土玉で、明褐色を呈し、ナデ仕上げされている。紐通し面の一面が面取りされている。最大径3.2cm、重量29.8cmを測る。10は土鈴で、赤褐色の杏仁形を呈する。上端近くに紐通し穴があり、下端は細長く開口している。下端を除く周縁には粘土紐を貼り付けた鱗が形成されている。開口部の両端付近には対になる刻み目が施されている。内部には球形の中子が存在する。長さ5.1cm、最大幅4.2cm、本体35.2g、中子2.5gを量る。

SD 6 出土遺物

土師器が出土した。1は杯で、内外面とも赤彩されている。胎土に雲母を含む。2は高杯の脚部上端部破片である。上面には杯部を受ける窪みがみられる。赤彩されている。

SD 7 出土遺物

土師器が出土した。1は甕口縁部で、明褐色を呈する。

SD 9 出土遺物

土師器・土玉が出土した。1・2は甕である。1の胴部はヘラナデ、2の胴部はヘラケズリされている。3～6は杯である。3は内外面とも赤彩され、体部はヘラケズリされている。口径12.7cm、現高3.1cmである。4は碗形を呈し、口径13.0cm、現高5.5cmを計り、内外面とも赤彩されている。体部外面はヘラナデ、内面は放射状にヘラミガキされている。5は口径14.6cm、現高5.4cmで、内面が赤彩されている。体部外面はヘラナデ、内面は放射状にヘラミガキされている。6は内外面とも赤彩されている。体部外面は横方向の、内面は放射状のヘラミガキがみられる。胎土に雲母を含む。7～9は高杯である。7は内外面とも赤彩され、胎土に雲母を含む。外面は口縁から体部にかけてヘラナデ、内面は口縁がヘラミガキされている。8は内外面とも赤彩され、胎土に雲母を含む。外面はヘラミガキされ、内面は横ナデされている。9は脚部破片で、内外面とも赤彩されている。外面はナデ、内面はヘラケズリされているが、器肌が荒れている。10は土玉で、明褐色を呈する。ナデ仕上げされている。

SD 10 出土遺物

土師器が出土した。1・2は甕底部である。3・4は杯である。3の内面は黒色処理され、体部はヘラケズリされている。4の体部はヘラケズリされている。

SD 11 出土遺物

土師器・礫器が出土した。1・2は甕である。1の胴部は横方向のヘラケズリがみられる。3は鉢である。口縁から体部にかけてヘラケズリされている。底部は平底になると思われる。4～6は杯である。4は底部を中心にヘラケズリされている。5も4と同様な調整がなされている。6は内外面とも黒色処理されている。外面は口縁がヘラミガキ、体部はヘラケズリ、内面はヘラミガキされている。7は礫器で、花崗岩の河原石の一端を両面から粗雑に剝離して刃部を形成している。重量220.5gを量る。

SD 13 出土遺物

土師器が出土した。1・2は甕である。1は赤褐色を呈し、胎土に雲母を含む。2は外面がヘラケズリ、内面はヘラミガキされ、胎土は精良である。浅鉢の可能性もある。3～5は杯である。3は口径14.5cm、現高3.5cmで、内外面とも赤彩されている。外面は横方向の、内面は放射状のヘラミガキがみられる。胎土に雲母を含む。4は口径15.8cm、現高3.3cmで、体部外面はヘラケズリ、内面はヘラミガキされている。5は体部がヘラケズリされ、胎土に雲母を含む。6～10は高杯である。6は内外面とも赤彩され、外面は口縁から体部にかけてヘラミガキ、内面は口縁がヘラミガキされている。7は内外面とも赤彩され、体部は

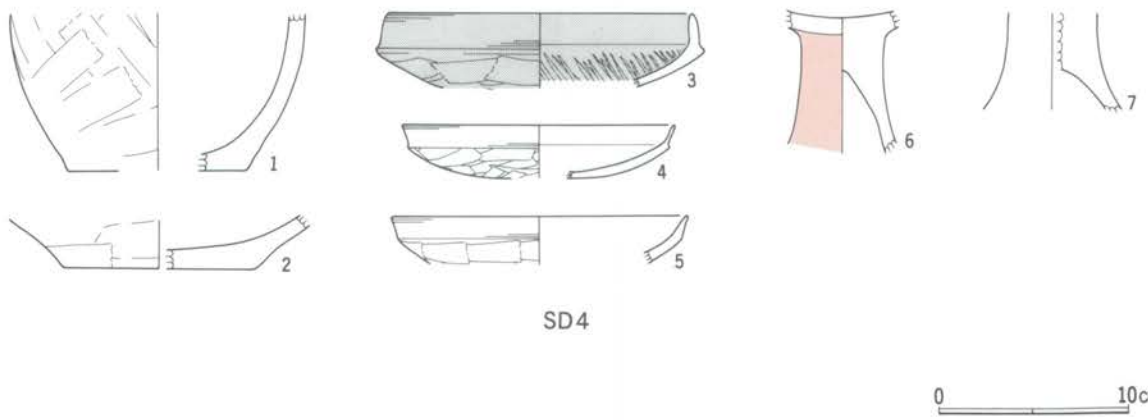
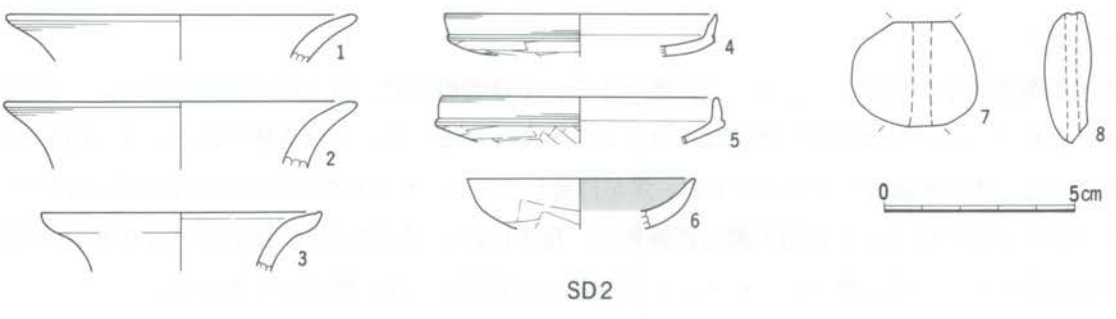
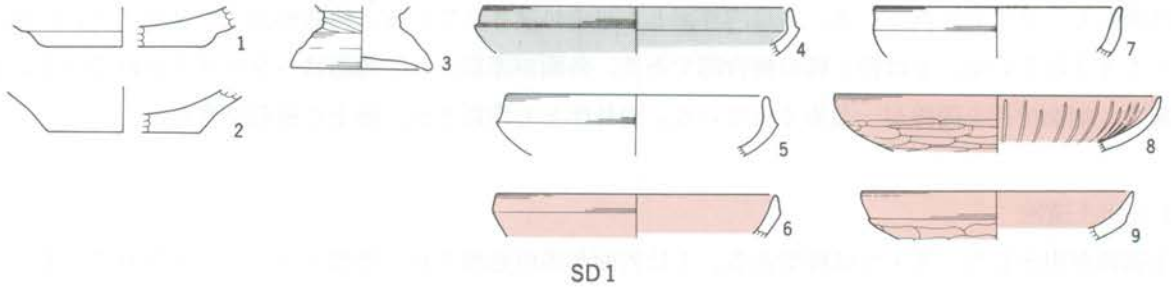
内外面ともヘラナデされている。8は内外面とも黒色処理されている。体部外面はヘラケズリ、内面はヘラミガキされている。9は杯と脚の接合部である。外面が赤彩され、脚部はヘラケズリされている。10は脚部で、端部付近を隆線が一条めぐっている。内外面とも赤彩され、胎土に長石を含む。

SD 15出土遺物

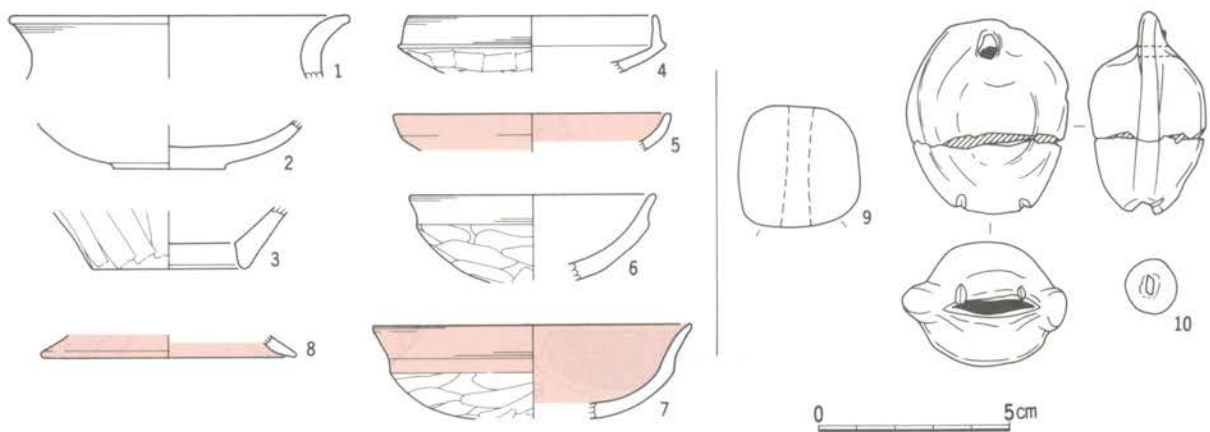
土師器が出土した。1・2は杯である。1は内面が黒色処理され、体部はヘラケズリされている。2は体部がヘラナデされている。

SD 18出土遺物

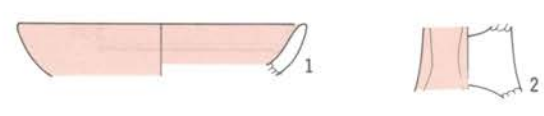
土師器・石製紡錘車が出土した。1～3は甕である。1は明褐色で、胎土には雲母を含む。2の胴部はヘラケズリされている。4は杯で、体部はヘラケズリがみられる。5・6は高杯である。5は内外面とも赤彩されている。体部外面はヘラミガキされ、煤が付着している。6は外面と内面口縁が赤彩されている。体部はヘラナデされている。7は滑石製の紡錘車で、高さ1.4cm、底径4.5cm、重量54.1gを量る。黒色を呈し、上面は磨かれ、下面は擦られている。上面周縁には放射状の浅い擦痕が多数見られる。



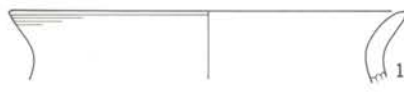
第149図 道路跡・溝跡・柵跡遺物実測図(1)



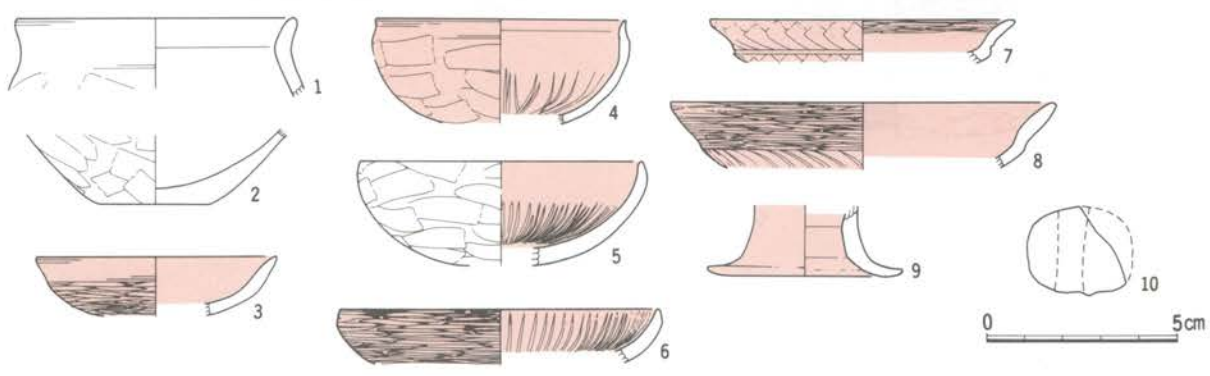
SD5



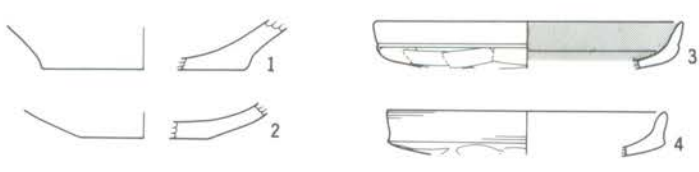
SD6



SD7



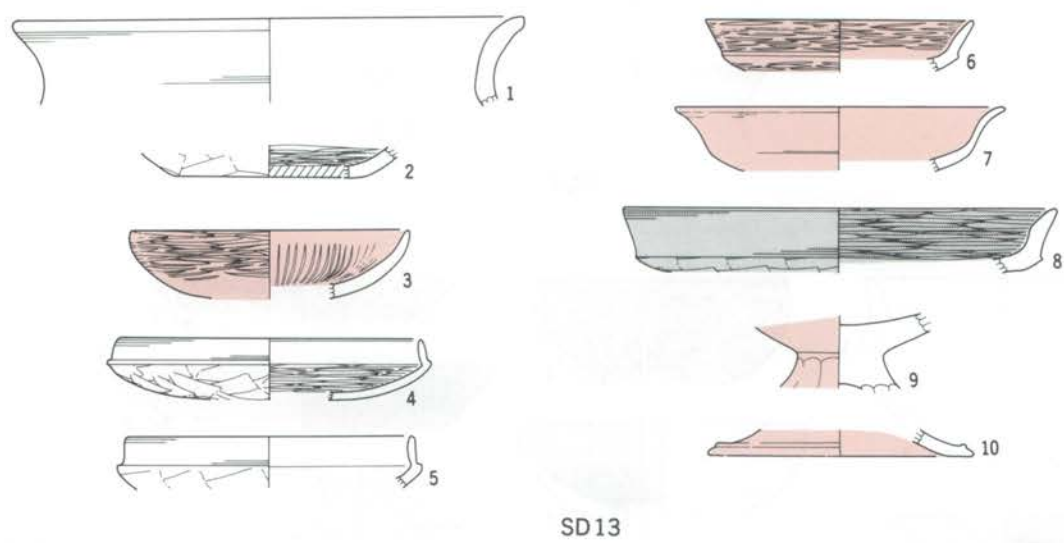
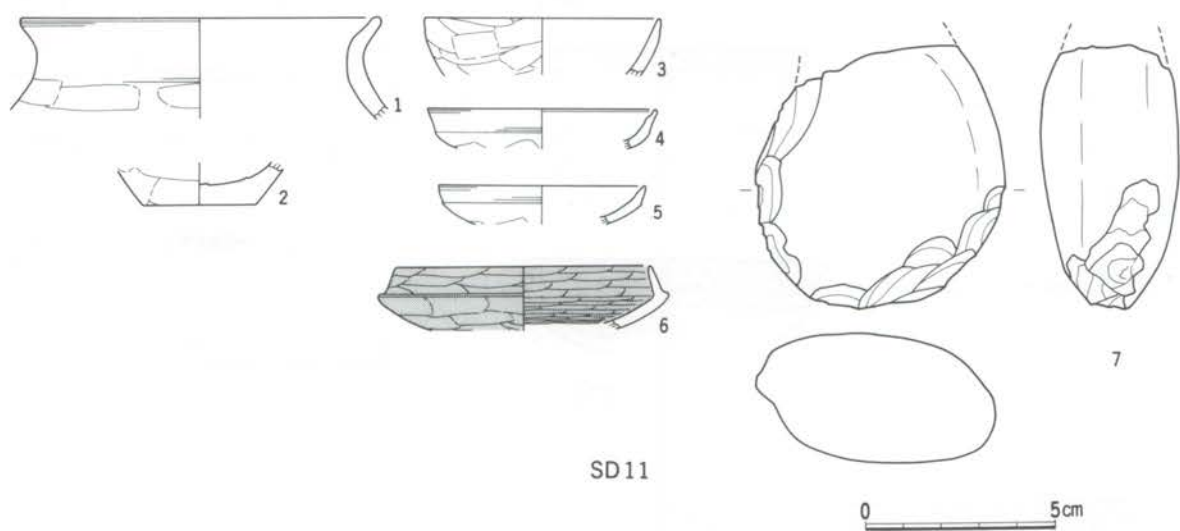
SD9



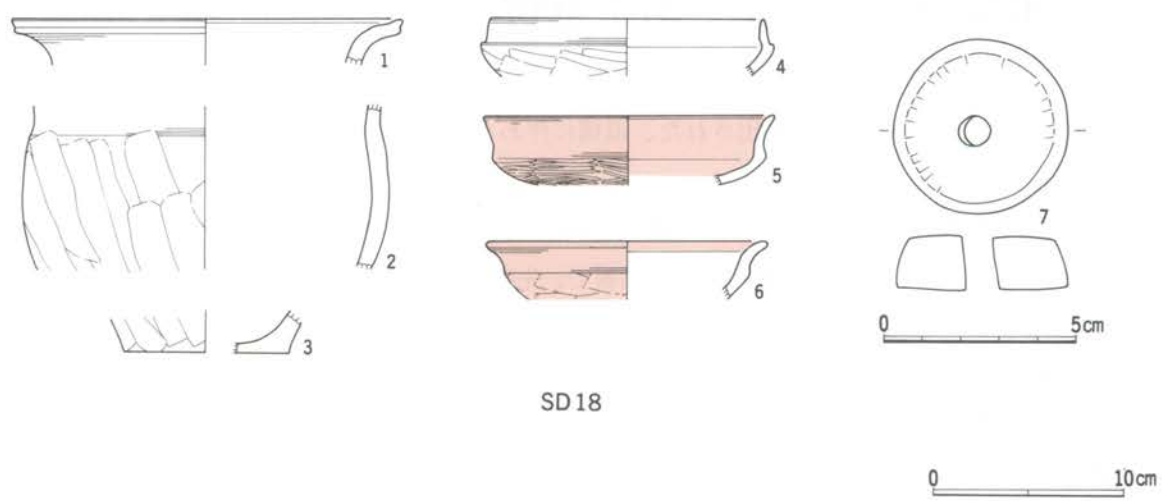
SD10



第150図 道路跡・溝跡・柵跡遺物実測図(2)



第151図 道路跡・溝跡・柵跡遺物実測図(3)



SD18

第152図 道路跡・溝跡・柵跡遺物実測図(4)

第5章 グリッド出土遺物 (第153図、第154図、図版31～35)

表土掘削中及び遺構面確認中に検出された、遺構に伴わない出土遺物である。

1・2は旧石器時代の石器である。1は玉随製の石核で、多方向からの剝離痕がみられる。重量3.7gを量る。C2区から出土した。2は黒曜石製の尖頭器で、先端部を欠失している。片面剝離で調整される。重量2.7gを量る。

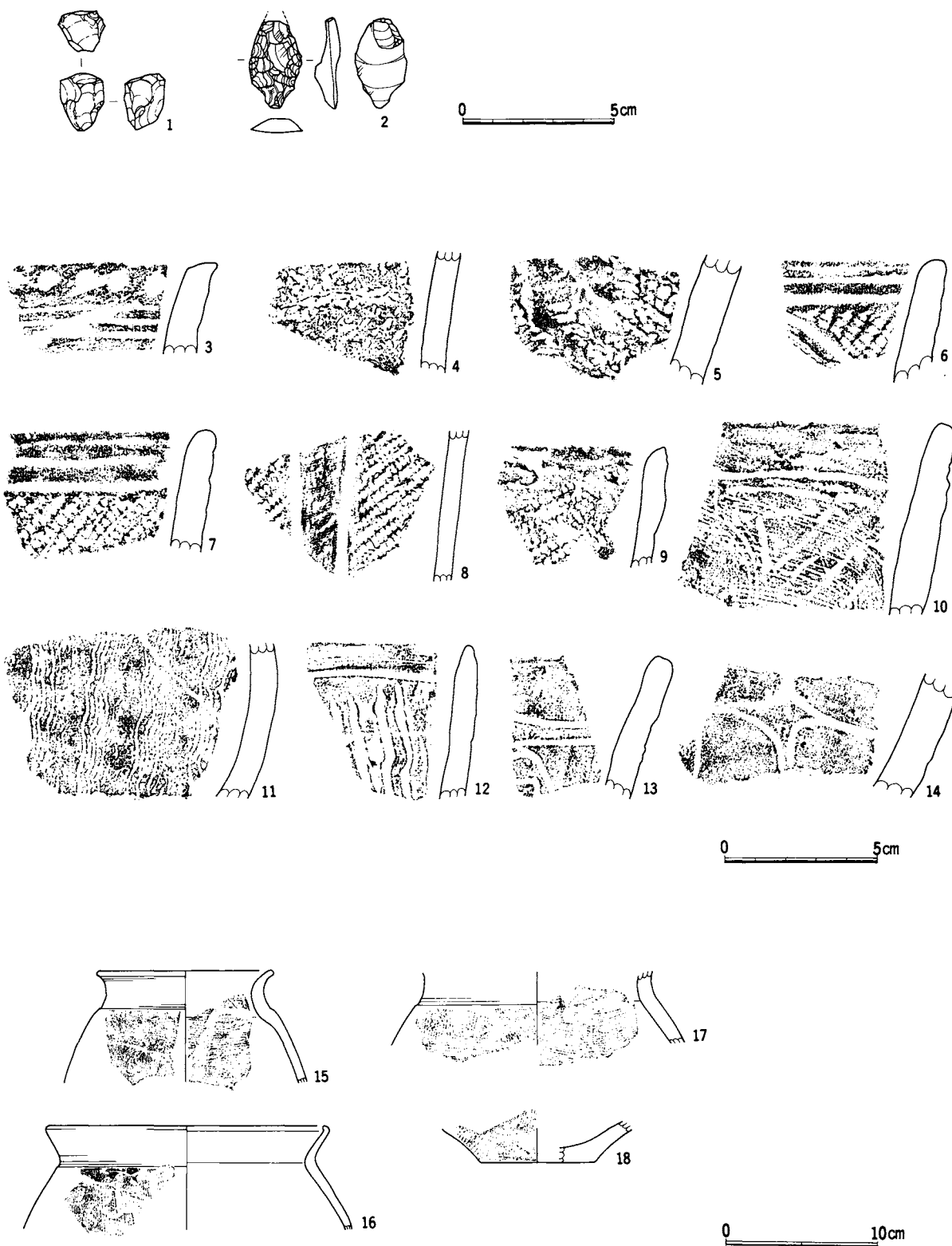
3～14は縄文土器である。3は口縁直下に円形刺突文がめぐり、その下に並行沈線が配される。B2区から出土した。4・5は斜縄文である。4は原体圧が弱く不鮮明である。D3区から出土した。5は原体が大きく、器壁も厚い。D3区から出土した。6～8は沈線と斜縄文の組み合わせからなる土器である。6はB3区から出土した。7はA3区から出土した。8は磨消縄文で、B3区から出土した。9は斜縄文で、口縁付近は無文となる。C2区から出土した。10～12は平行沈線文等の土器である。10は太めの沈線地文上に細目の櫛描文を重ねている。A3区から出土した。11は波状の櫛描文、12は平行沈線が垂下している。11はA3区、12はB3区から出土した。13・14は区画沈線文である。13はB2区、14はB3区から出土した。

15～18は古墳時代前期のハケ目調整土師器で、いずれも甕である。15は頸部が肥厚し、内外両面にハケ目が施される。B2区から出土した。16は口縁部が僅かに内屈する。B3区から出土した。17は内外両面にハケ目が施される。B3区から出土した。18はB3区から出土した。

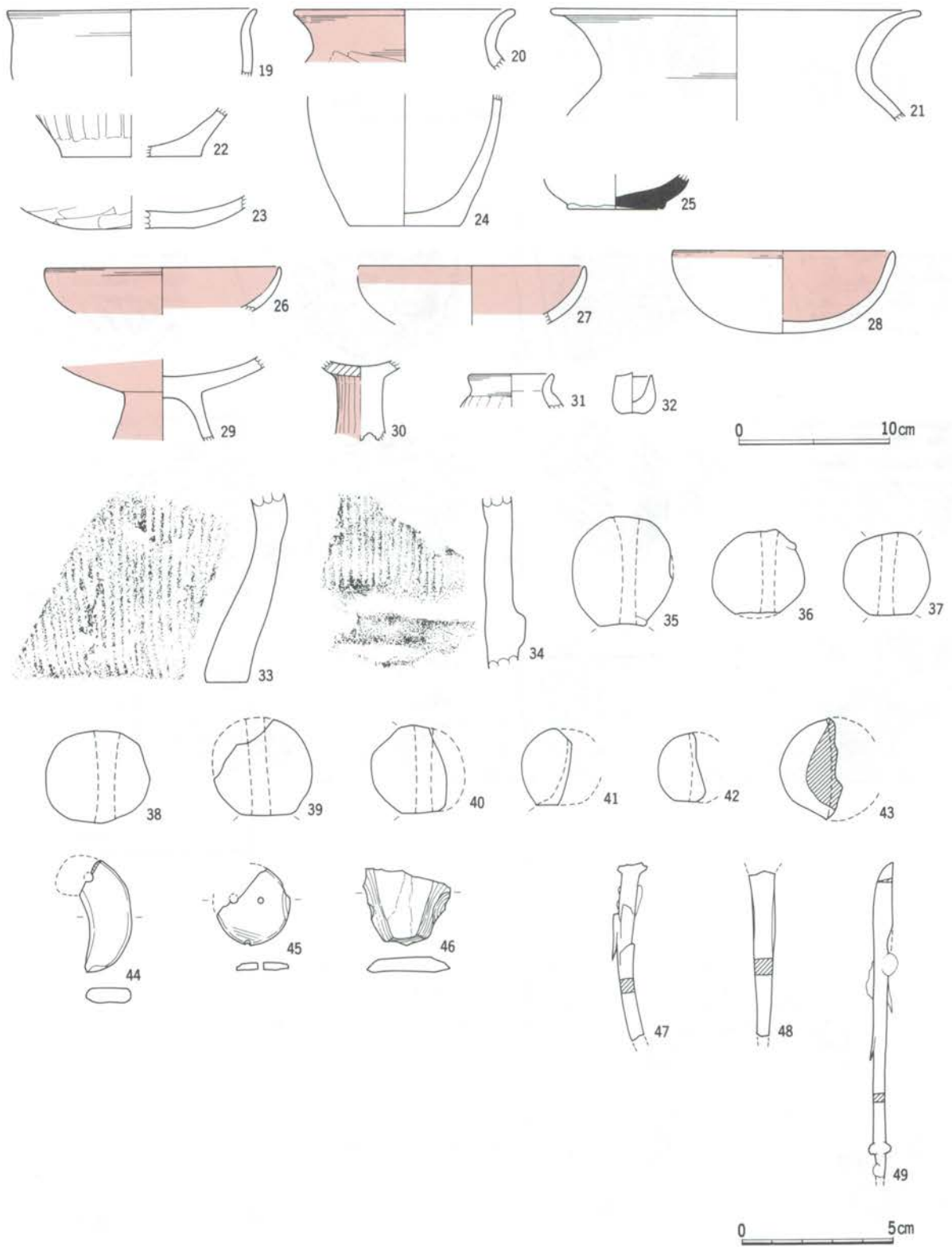
19～32は古墳時代後期以降の土器である。19～24は土師器甕である。19はC3区から出土した。20は外面が赤彩されている。A3区から出土した。21は明褐色で、胎土に雲母・長石を含む。B3区から出土した。22はA3区から出土した。23はC3区から出土した。24は胴部がヘラナデされ、明褐色を呈し、胎土に雲母・長石を含む。C2区から出土した。25は須恵器壺で、ロクロ調整され、底部は糸切りである。胎土は精良で、赤褐色を呈し、軟質である。B4区から出土した。26～28は土師器杯である。26は内外面とも赤彩されている。体部はナデ調整である。C3区から出土した。27は外面口縁と内面が赤彩されている。体部はナデ調整である。C3区から出土した。28は口径14.5cm、器高5.4cmを計り、外面口縁と内面が赤彩されている。体部はナデ調整である。B2区から出土した。29・30は土師器高杯である。29は外面が赤彩され、内外面ともヘラナデされている。C3区から出土した。30は内外面とも赤彩されている。B4区から出土した。31は土師器ミニチュア土器で、口径5.4cmで、赤褐色を呈する。口縁は横ナデ、胴部はヘラケズリされている。B2区から出土した。32は手捏ね土器で、口径2.4cm、器高2.8cmを計り、赤褐色を呈する。内外面ともナデ仕上げされている。C2区から出土した。

33・34は円筒埴輪片である。いずれも明褐色を呈し、ハケ目が縦走している。33は底部破片で、C3区から出土した。34はタガがめぐっている。C2区から出土した。

35～43は土玉で、いずれもナデ仕上げされている。35は赤彩の可能性があり、胎土に雲母を含む。紐通し面の一面が面取りされている。重量30.8gを計る。B4区から出土した。36は赤彩され、重量22.9gを計る。C1区から出土した。37は明褐色を呈し、紐通し面は両面が面取りされている。重量17.5gを計る。C2区から出土した。38は赤彩が施されている。重量27.8gを計る。C2区から出土した。39はミガキに近い光沢があり、赤彩が施され、胎土に雲母を含む。紐通し面が面取りされている。B3区から出土した。



第153図 グリッド出土遺物実測図 (1)



第154図 グリッド出土遺物実測図(2)

40は明褐色を呈し、ミガキに近い光沢がある。紐通し面が両面とも面取りされている。胎土に雲母を含む。B 2区から出土した。41は明褐色を呈し、紐通し面が面取りされている。C 2区から出土した。42は赤褐色を呈し、紐通し面が両面面取りされている。B 2区から出土した。43は暗褐色を呈する。C 3区から出土した。

44～46は滑石製品である。44は勾玉形模造品である。頭部を欠失し、現長3.7cm、重量5.1gを計る。破損面に穿孔跡がみられる。C 2区から出土した。45は鏡形模造品である。中央に双孔があり、両面に粗い擦痕がみられる。重量2.4gを計る。B 3区から出土した。46は滑石剝片である。側面が台形状に加工され、上部を折損している。剣形模造品の可能性もある。重量4.9gを計る。D 3区から出土した。

47～49は鉄製品である。47・48は釘である。断面方形で、47は端部を屈折させて扁平な頭部を形成している。重量7.1gで、D 3区から出土した。48は重量7.5gで、B 3区から出土した。49は鉄鏃で、長茎の片刃鏃で、現長10.3cm、重量7.4gを計る。

第6章 まとめ

第1節 土器の編年(第155図、第1表)

検出された諸遺構の編年作業をもってまとめとしたい。名木大台遺跡の今回の調査区は、竪穴住居跡の重複が著しい。したがって、切り合い関係を見極めることによって、多くの住居跡の新旧関係を把握することができる。第2章において、逐次検討した重複関係を総合すると第1表のようになる。この結果に基づいて各住居跡から出土した土器群を比較して、最終的に調整する必要がある。以下では時期別に土器の特徴をみていこう(第155図)。なお、第I期から第IV期までの編年指標は土師器に限定されている。

第I期 杯は単純口縁の丸底で、深い椀形を呈する。内外面に赤彩されており、内面には放射状のヘラミガキが施されている(1)。大型甕類には壺とも称すべき、頸部が直立し球胴状のものがあるが(2)、一般的と思われるのは、短い口縁に太い胴部が直結するタイプであろう(3)。中型甕には2タイプが併存する。一つは大型甕と類縁的で、より旧状を示し、胴部が球形である(4)。もう一つは僅かに頸部が存在し、そこからなだらかに胴部最大径部に達する器形である(5)。甗は器高が低く、短い口縁を持つバケツ形で、底径が広い(6)。高杯は全形を窺える資料に欠けるが、杯部は口縁と体・底部の境に明瞭な稜を形成し、口縁のS字状の張り出しが顕著で、内面には粗いヘラミガキが施され、内外面に赤彩されている。脚部は短脚である(7)。本期の土器にはこのほかに、大鉢・丸底短頸壺・手捏ね土器などがあり、土玉・滑石製模造品が伴出している。

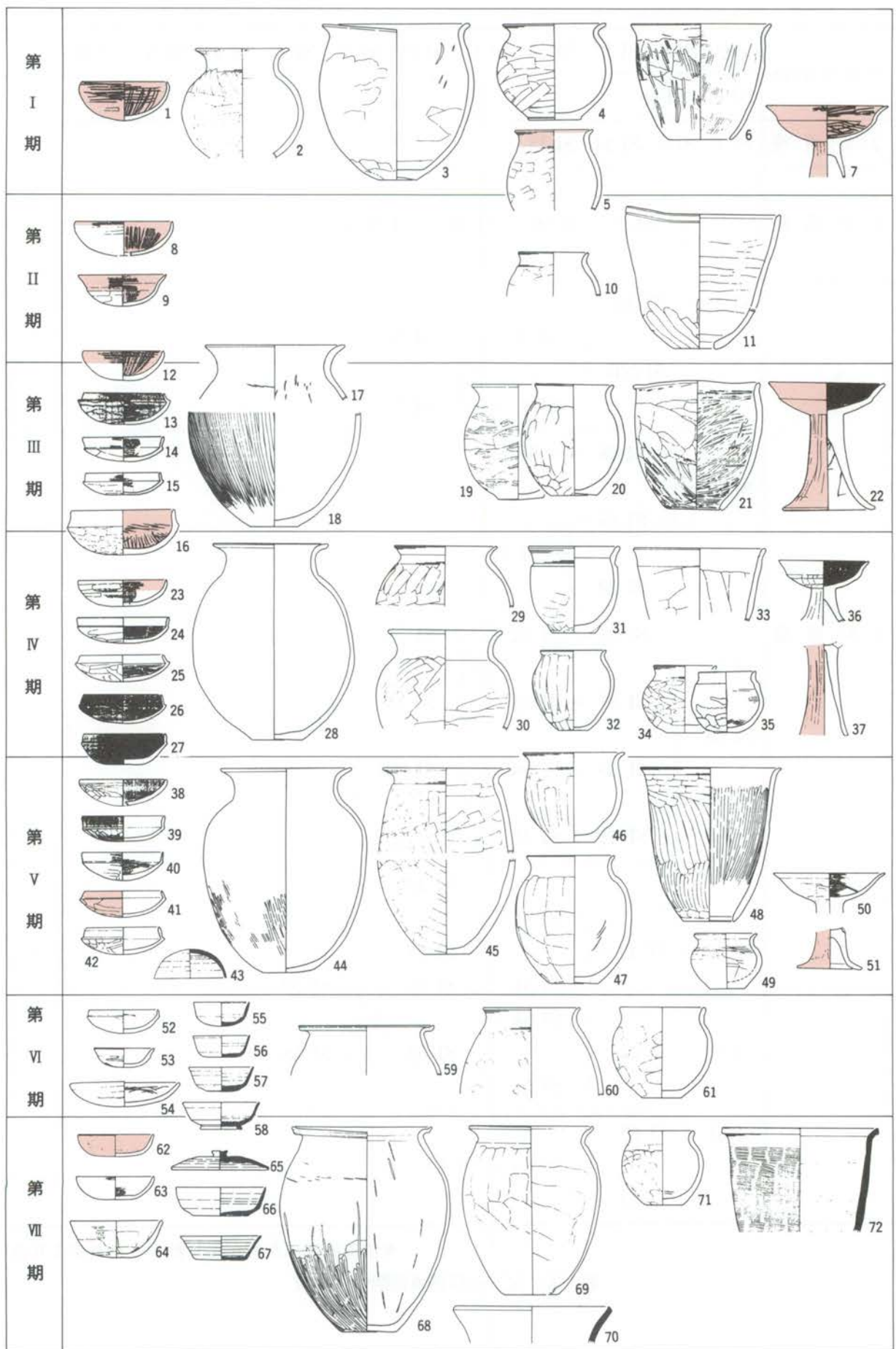
第II期 確認できた器種は少ない。杯は2タイプに分化する。一つは前期来の椀形で、前期よりも口径が大きく、器高が低くなっている。赤彩は内外面全体に施されるとは限らない(8)。もう一つは口縁と体・底部の境に稜が形成されるもので、口縁は同期の高杯と類縁的で、S字状に大きく張り出している。外面体・底部以外に赤彩され、内面は放射状にヘラミガキされている(9)。大型甕の良好な資料は存在しない。中型甕は前期の系譜を引いたなで肩タイプが見られる(10)。甗は器高が高く、単純口縁で、底径が狭くなっている(11)。高杯の良好な資料は存在しない。本期の土器にはこのほかに手捏ね土器があり、滑石母岩が伴出している。

第III期 杯は3タイプが併存する。第1は前期から続く単純口縁の椀形で、相変わらず赤彩されるが、口径が前期より小さくなってくる(12)。第2は須恵器模倣杯で、蓋形・身形とも本期が初現である。内面は十分にヘラミガキされているものが多い(14・15)。また、本期から黒色処理された杯が登場する(13)。第3は大型杯である。鉢としてもよいかもしれないが、器形が杯と相似的なので杯に含めた。各部の調整も杯と変わらない(16)。なお、前期に現れた高杯類縁杯は、本期には消滅する。大型甕では常総型が初めて現われる。このタイプは硬質で、明褐色を呈し、石英・長石が胎土に含まれていることが特徴である。完形品は見られないが、口縁は単純口縁で、頸部の屈曲は強い(17)。胴部は球形よりもやや長く延び、全面に縦ヘラミガキされ、底部は既に平底化している(18)。なお、普通の焼成の大型甕は本期には存在しない。中型甕は第I期に見られた両タイプが併存している(19・20)。甗は第I期と系統を同じくするもので、口縁が短く屈折しているが、器高は明らかに高くなっている(21)。高杯は長脚化が著しい。外面は赤彩、内面は黒色処理されている。第I期には顕著なS字状に張り出していた口縁は、短くなり、屈曲も不明瞭になっている(22)。なお、良好な遺存例には恵まれないが、従来の短脚高杯も併存している。本期の土器

| | |
|-------|--|
| 単独住居跡 | SI 3 SI 9 SI 12 SI 15 SI 17 SI 20 SI 24 SI 47 SI 64 SI 65 SI 66 |
| | SI 67 SI 68 |
| 2 軒重複 | SI 4 SI 5 SI 14 SI 13 |
| 3 軒重複 | SI 1 — SI 6 — SI 2 SI 16 — SI 18 — SI 19 |
| 4 軒重複 | SI 11 — SI 10 — SI 22B — SI 22A — SI 8 — SI 23 SI 7 |
| | SI 26 — SI 25 SI 27 — SI 28 — SI 29 — SI 30 |
| | SI 31 — SI 32 — SI 36 — SI 37 — SI 34 — SI 38 — SI 39 — SI 40C — SI 40A — SI 41 — SI 44 — SI 33 SI 35 SI 40B SI 42 |
| | SI 45 SI 46 — SI 48 — SI 49 — SI 51 — SI 50 — SI 54 — SI 56 — SI 55 — SI 57 — SI 21 SI 52 SI 53 — SI 58 |
| | SI 61 — SI 62 — SI 63 — SI 60 — SI 59 |

※重複表記は左方がより新しく右方がより古い

第1表 竪穴住居跡重複関係一覧表



第155图 主要器種編年图

にはこのほか、小鉢・手捏ね土器があり、土玉・滑石製品白玉・土製支脚等が伴出している。

第Ⅳ期 杯は従来の椀形(23)と須恵器模倣形(24~27)の2タイプが存在し、大型杯は姿を消す。出土量は模倣形の方が圧倒的に多くなる。これら2タイプは前期に比べ、口径は変わらないが扁平化が極限に達する。椀形タイプは赤彩されるものが希になり、その形状は同時代の稜を失った須恵器杯蓋と紛らわしい。須恵器模倣形には前期同様、黒色処理されたもの(26・27)が見られる。大型甕は常総型と普通焼成の2タイプが併存する。常総型は口縁の水平化が進み、頸部が直立する傾向を示す。胴部は最大径が中位にあるものの、長胴化の傾向にある(28)。普通焼成のものは短い口縁に膨らんだ胴部を持つもの(29)と、頸部が立ち上がって肩が張るもの(30)とがある。中型甕は2タイプが存在する。口縁と胴部の境に稜を持つもの(31)と、従来の短い口縁のなで肩タイプ(32)である。本期から小型甕が出現する。短い口縁に膨らんだ胴部を持つ(34・35)。甗は口縁の横ナデが行き届き、胴部から底部にかけて直線的にすばまっている(33)。高杯は長脚と短脚が併存する。杯部の形状は従来の系譜上にある(36・37)。本期にはこのほか、土玉・滑石製白玉・土製支脚等が伴出している。

第Ⅴ期 杯は従来の単純口縁椀形タイプと須恵器模倣タイプに加え、新たに須恵器杯が出現し、以後継続的な変遷を見せる。椀形タイプは底部面積が小さくなり、断面形が三角形に近づき、内面が黒色処理されるものがある(38)。須恵器模倣タイプは全体的に口径が前期よりも縮小している。蓋形では短い口縁が直立するもの(40)、身形では短い口縁が強く内屈するもの(41)が主流を占める。依然として赤彩、黒色処理品がみられる。須恵器杯は蓋形で、合子形式の最終段階に属している(43)。大型甕は常総型と南関東型の2種類がみられる。本期の常総甕は一層判然とした頸部に倒卵形の長胴部が続いている(44)。南関東型は水平化した口縁に強く横ナデされた頸部が伴っており、胴部最大径は中位にある(45)。中型甕には前期(31)からの系譜をひき口縁のくびれが弱くなったもの(46)と、肩が張った長胴タイプ(47)がある。小型甕は頸部が直立した壺に近い器形をとる(49)。甗は前期の系譜上にあって、長胴化が極限に達する(48)。高杯は長脚タイプが消滅し、短脚のみとなる。杯部は従来の系譜をひいているが、口縁と体・底部を画する稜は消失している(50)。依然として赤彩品がみられる。本期の土器にはこのほか大鉢・鉢・手捏ね土器等がある。伴出遺物の種類は豊富で、土玉・土製勾玉・水晶製切子玉・滑石母岩・滑石片・石製紡錘車・砥石・転用砥石等があり、さらに鎌・鉄鎌・鉄製小札等の鉄製品が初出する。

第Ⅵ期 杯は土師器と須恵器が併存する。土師器は従来の椀形は口径が広がって浅皿化する(54)。一方須恵器模倣型は矮小化の極限に達する(52・53)。赤彩品、黒色処理品は姿を消している。須恵器は身形のみ存在するが、小口径で底部に丸みを残すもの(55)から、底部の面取りが著しいもの(59)、斜めに張り出す高台を付したものの(58)等のバリエーションが見られる。大型甕には常総型と普通焼成のものがある。常総型の完形品は存在しないが、口縁は口唇部がつまみ出された複合口縁となり、頸部は消失してなで肩の胴部が直結している(59)。普通焼成品は第Ⅳ期まで存続していたなで肩中型甕の器形が復活している(60)。中型甕は前期(46)の口縁がさらに短くなった器形を呈する(61)。小型甕・甗・高杯の良好な資料は存在しない。本期の伴出品には土玉・石製紡錘車・鉄鎌・管状鉄器等がある。

第Ⅶ期 杯は土師器と須恵器が併存している。土師器は平底の盤状の器形が主体で(62・63)、身の深い椀状品もある(64)。盤状品には赤彩が施されたものが存在する。須恵器には蓋形と身形がある。蓋形は高いつまみを持ち、かえりは既に消失している(65)。身形は前期よりも口径が広がって、底部に面取りを施すもの(66)と、器壁を薄く仕上げ、ロクロ切り離し痕を篋で消しているもの(67)とがある。大型甕は

土師器のほかに須恵器が加わる。土師器には常総型と普通焼成品がある。常総型の上半部は前期とあまり変化はない。胴部は上位に最大径を持ち、底径は従来よりもやや大きくなっている(68)。普通焼成品は南関東型の系譜上にあり、頸部が強く横ナデされ、口唇部が僅かにつまみ出されている(69)。須恵器は口縁部資料に限られるが、ラップ状に開いた口唇部が面取りされている(70)。本期には中型甕は存在しない。小型甕は前期の中型甕の器形を引き継いでいる(71)。甗は須恵器が登場する。口縁は短く屈折し、胴部は全面にタタキ目が刻まれている(72)。なお、破片資料ではあるが、土師器も存在する。本期の土器にはこのほかに大鉢・手捏ね土器がある。特に大鉢はSI 48の一括資料にみるように土師器・須恵器の完形品がそろって出土している。伴出遺物には土玉・滑石製模造品・滑石製白玉・滑石片・石製紡錘車・鎌・刀子・釘等がある。

以上の記述に基づいて各時期の特徴を要約すると下記のようになる。第Ⅰ期・第Ⅱ期を分割した理由は碗形杯の身の深さだが、第Ⅶ期までを通覧した場合の特徴は共通しており、一括することもできる。第Ⅲ期は黒色処理品を含む須恵器模倣杯と常総型大甕が新たに出現し、高杯は長脚化するといった大きな画期となっている。須恵器模倣杯の初現は下総の他地域に比べると遅れている。また、常総型甕は前期に初現的形態が存在しても不自然ではない。第Ⅳ期の特徴的な現象は甕のサイズの多様化で、容量別に明らかに3分類でき、数量も多い。第Ⅴ期には須恵器杯が登場し、長脚高杯が消滅している。須恵器杯は以前から希に出土しているが、いずれも混入品で系統的に連続しない。この程度の規模の集落跡としては、須恵器杯の系統的出土は遅い方である。第Ⅵ期は杯類に大きな変化がみられ、須恵器模倣杯の最終段階であるとともに、従来の碗形品が浅皿形に交替した。また、須恵器杯もある程度の普及をみた。甕のサイズは再び2種類に戻る。高杯は既に消滅している。第Ⅶ期は須恵器の普及期として特徴づけられる。土師器は盤状に変化し、須恵器は蓋・身が出揃う。須恵器は大甕や甗にも初現している。

最後にこの編年を絶対年代に対比してみよう。この問題は第Ⅰ期から第Ⅶ期に至るまで、間断無く連続していたのか、あるいは途中で一定の断絶期間を経過しているのか、という問題と大きく関連している。

第Ⅰ期と第Ⅱ期は単純口縁碗形杯の時代とも称すべく、前述のように極めて緊密な関係があって、土器組成上では一括できる。同様に第Ⅲ期から第Ⅴ期までは須恵器模倣杯の時代として、常総型甕の出現、長脚高杯の存在等の要素とともに一括できる。第Ⅵ期は土師器杯は新旧の混在期になっており、常総型甕の複合口縁化、高杯の消滅等の現象によって独自の色彩が強い。第Ⅶ期は土師器盤状杯の出現、須恵器の杯以外の器種への普及といった、これまた独自の要素を持っている。したがって、第Ⅱ期と第Ⅲ期、第Ⅴ期と第Ⅵ期、第Ⅵ期と第Ⅶ期の間に大きな変化があって、もし断絶期を想定するならばこれらの期間がふさわしいであろう。

第Ⅰ期の身の深い碗形杯は、須恵器と伴出している他地域例では5世紀後葉を中心とする時期に比定できる。本遺跡もそれに準じてよかろう。第Ⅱ期の浅身の碗形杯や高杯類縁杯は、第Ⅰ期に直続する6世紀前葉に比定できる。第Ⅲ期から第Ⅴ期については第Ⅴ期の須恵器杯蓋(43)が一基準を提供し、7世紀中葉を中心とする時期が考えられる。したがって、第Ⅳ期は7世紀前葉、第Ⅴ期は6世紀後葉をそれぞれ想定できよう。第Ⅵ期は須恵器杯にバリエーションが見られるが、7世紀末葉から8世紀初頭を中心とする時期であろう。第Ⅶ期は一方では土師器盤状杯や外反ぎみに開く薄手の須恵器杯等の存在、他方ではロクロ土師器杯の欠如等から、8世紀前葉に比定できる。

第2節 集落の変遷と生活の変化（第156図、第2表、第3表）

前節での土器編年に基づいて、各竪穴住居跡の帰属時期を確定すれば第2表のようになる。そこで、各時期の分布上の特徴を窺うべく第156図を作成したが、発掘面積に制約されて単位集団の抽出には至らなかった。土器編年からは第II期と第III期の間、第V期と第VI期の間に断絶期を想定できる。この間の住民の累世的な系譜関係を吟味することは不可能であるが、一部の文化要素に着目して本遺跡の特徴を把握してみたい。

第3表は土器以外の竪穴住居跡出土遺物を摘記したものだが、このうち土玉・滑石製品・鉄製品を取り出して第156図中に書き入れてみた。土玉の用途についてはまだ明らかでないところがあるが、しばしば赤彩されていた可能性があること、手擦れによるものと思われる光沢を有することなどから、数珠に類似する祭祀用具と考えられる。滑石製品の用途はまず装身具であり、また古墳祭祀の場からよく出土することを思えば第2に、祭祀用具としての用途が考えられる。土玉と滑石製品を祭祀用具とみなした場合、両者が同一祭祀の異なる局面で使用されたのか、あるいは別個の祭祀に属していたものかは不明である。なお、滑石製品については本遺跡のみならず、周辺の集落遺跡からも完成品・未成品・母岩等が検出されており、現下総町域が古代にあっては玉造集団の居住地であったことが知られる。したがって、本遺跡の住民も玉造集団の首長に支配されていた小集団であると思われる。

この3種類の遺物の累世的な出土状況を見ると、土玉・滑石製品はほぼ一貫して存在しているのに対して、鉄製品は第V期からかなりの普及率を以て出現し、以後第VII期まで存続している。鉄製品の内容は第V期には鉄鏃・小札等の武具が主体だが、第VII期になると刀子・釘が武具に取って代わっている。

古墳時代後期から律令時代初期にわたる、この歴史的な現象を解釈すれば以下のようなだろう。当地の住民は第I期から第VII期に至るまで2回程入れ替わっているが、その祭祀体系は一貫して替わることなく、土玉や滑石製品が用いられていた。一方、第V期には武具を主とした鉄製品がまとまって導入される。この時期が当地における古墳時代の終末期に相当するのであろう。中央では既に大化改新が収束して、国郡整備を主たる事業とする地方政策が伸展していく時期である。したがって、第V期にみられる集落の軍事化は、改新を経た中央政府と旧守的な在地勢力との軍事的葛藤の反映であろう。この葛藤を経て、在地における国郡制が確立する第VI期になると、当地には前期住民に入れ替わって、おそらく国郡制肯定派の新住民が新たな集落を形成していくのである。当地を撤収した旧住民は、生産力の低劣な谷津の奥地を目指して、さらに内陸に分け入ったのではなかろうか。このことは第1章第2節で概観した遺跡分布の傾向から推定できる。この間土玉・滑石製品に代表される祭祀体系は一貫しているので、新住民の旧居地もこの近隣であったろう。

| | |
|-----|---|
| 第Ⅰ期 | (SI 5) SI 6 SI 29 (SI 43) SI 58 SI 59 |
| 第Ⅱ期 | SI 25 SI 67 |
| 第Ⅲ期 | SI 4 SI 13 SI 18 SI 19 SI 21 SI 24 SI 33 SI 42 SI 50 SI 53 |
| 第Ⅳ期 | (SI 2) SI 3 SI 7 SI 10 SI 12 SI 14 SI 22A SI 32 SI 37 (SI 52) SI 54 |
| | SI 57 SI 60 SI 64 |
| 第Ⅴ期 | SI 1 SI 8 SI 16 (SI 22B) SI 23 SI 26 SI 27 SI 28 (SI 30) SI 34 |
| | (SI 40B) SI 40C SI 44 SI 45 SI 46 SI 47 SI 49 SI 51 SI 62 SI 63 SI 65 |
| 第Ⅵ期 | SI 9 SI 15 SI 17 (SI 31) SI 35 SI 39 (SI 40A) SI 66 |
| 第Ⅶ期 | SI 11 SI 36 SI 38 SI 41 SI 48 SI 55 SI 56 SI 61 |
| 不 明 | SI 20 SI 65 SI 68 |

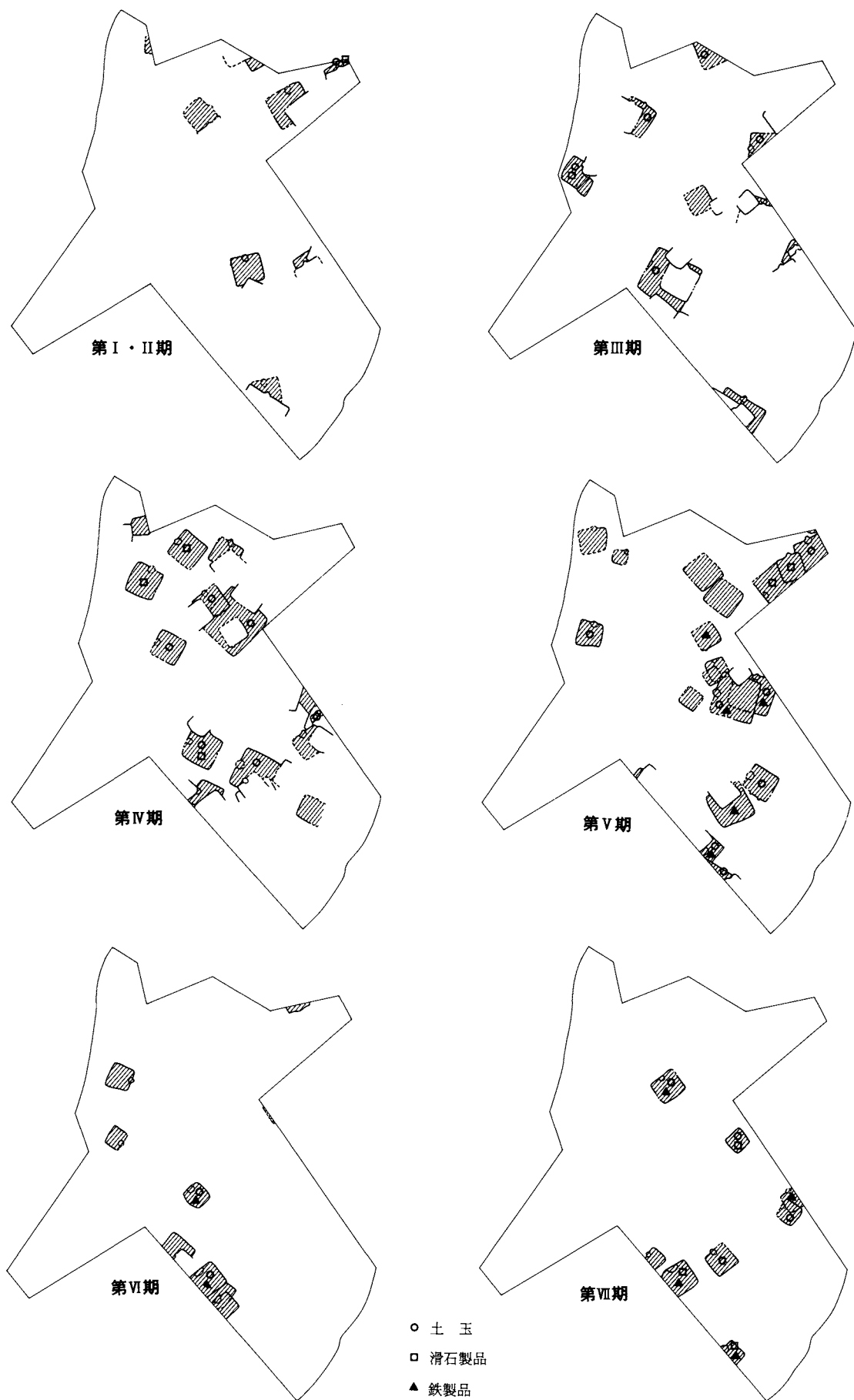
※カッコ内は推定

第 2 表 竪穴住居跡の帰属時期

| | |
|-----|--|
| 第Ⅰ期 | 土玉・滑石製模造品 |
| 第Ⅱ期 | 滑石母岩 |
| 第Ⅲ期 | 土玉・滑石製白玉・土製支脚 |
| 第Ⅳ期 | 土玉・滑石製白玉・土製支脚 |
| 第Ⅴ期 | 土玉・土製勾玉・水晶製切子玉・滑石片・滑石母岩・石製紡錘車・砥石・転用砥石・ |
| | 〈鎌〉・〈鉄鏃〉・〈鉄製小札〉 |
| 第Ⅵ期 | 土玉・石製紡錘車・〈鉄鏃〉・〈管状鉄器〉 |
| 第Ⅶ期 | 土玉・滑石製模造品・滑石製白玉・滑石片・石製紡錘車・〈鎌〉・〈刀子〉・〈釘〉 |

※〈 〉内は鉄製品

第 3 表 土器以外の竪穴住居跡出土遺物



第156図 竪穴住居跡群の変遷

写真図版



遺跡遠景



確認調査グリッド



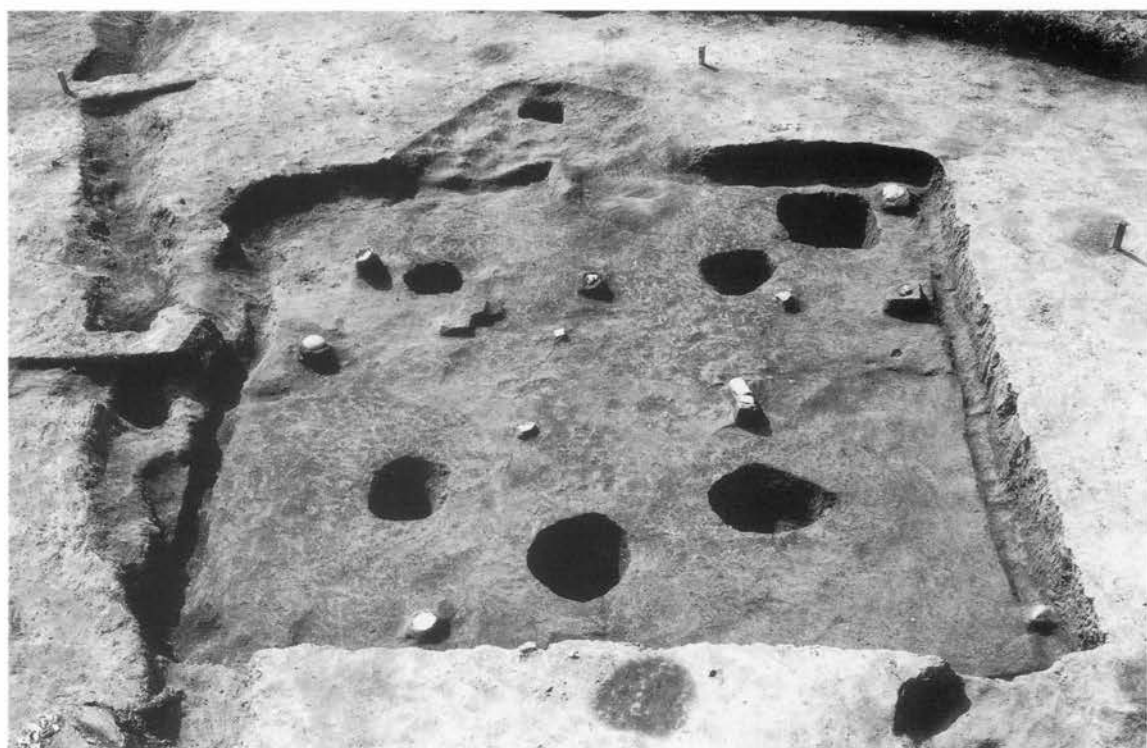
北西部遺構群

南部遺構群





SI 1 • SI 2



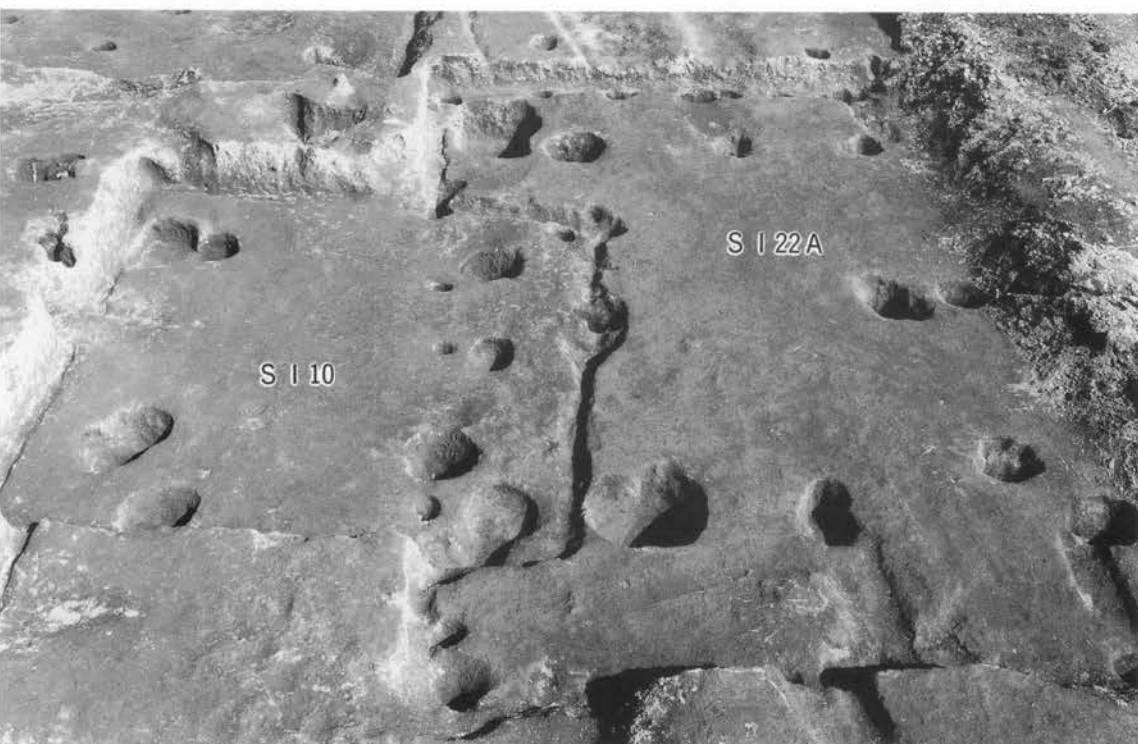
SI 3



SI 4 • SI 5



S I 9



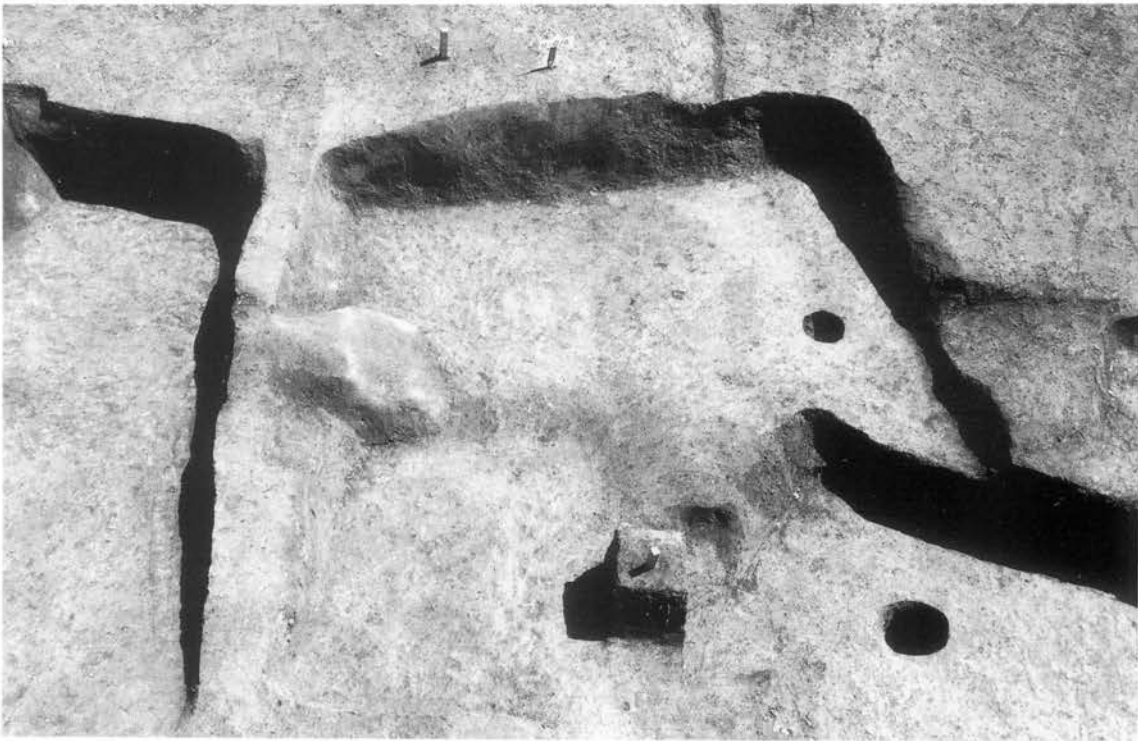
S I 10 · S I 22A



S I 22A
出土遺物



S I 15



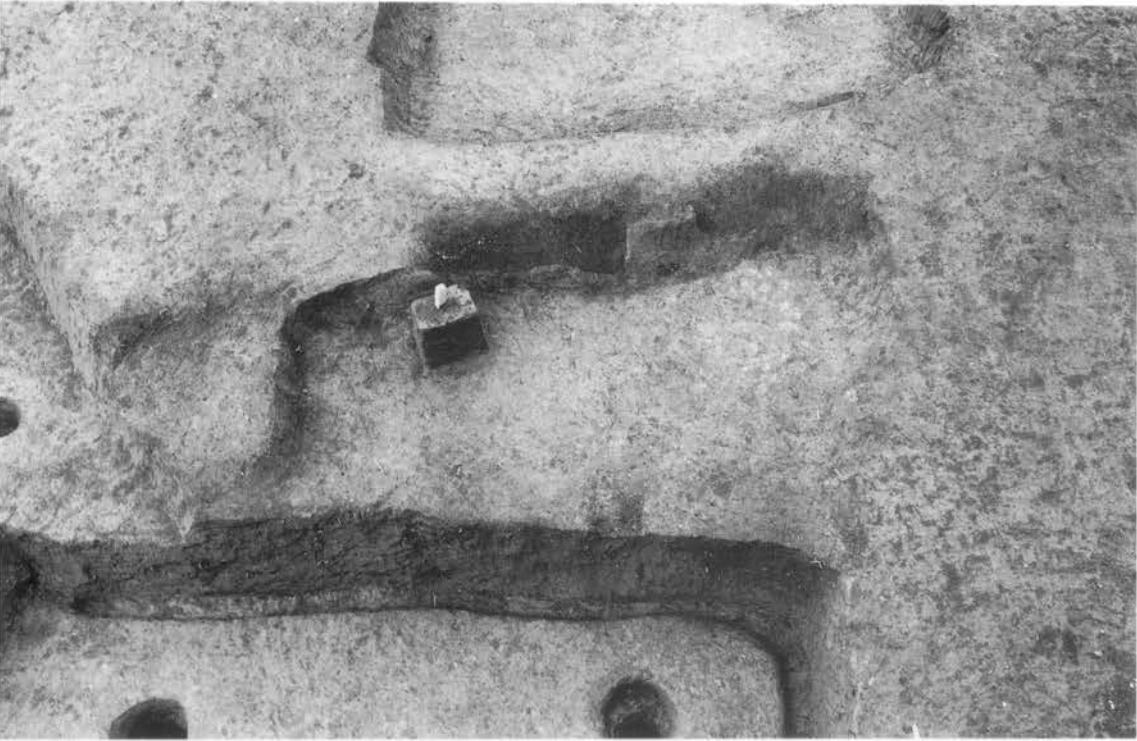
S I 16



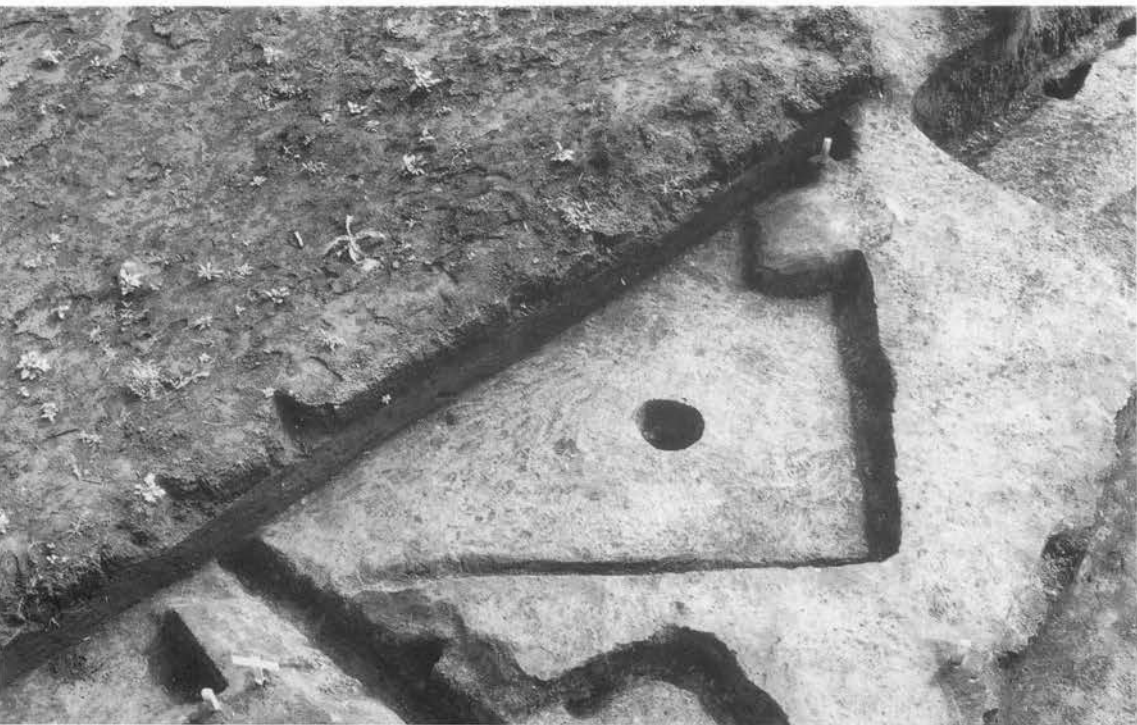
S I 17



S I 18



S I 19



S I 24

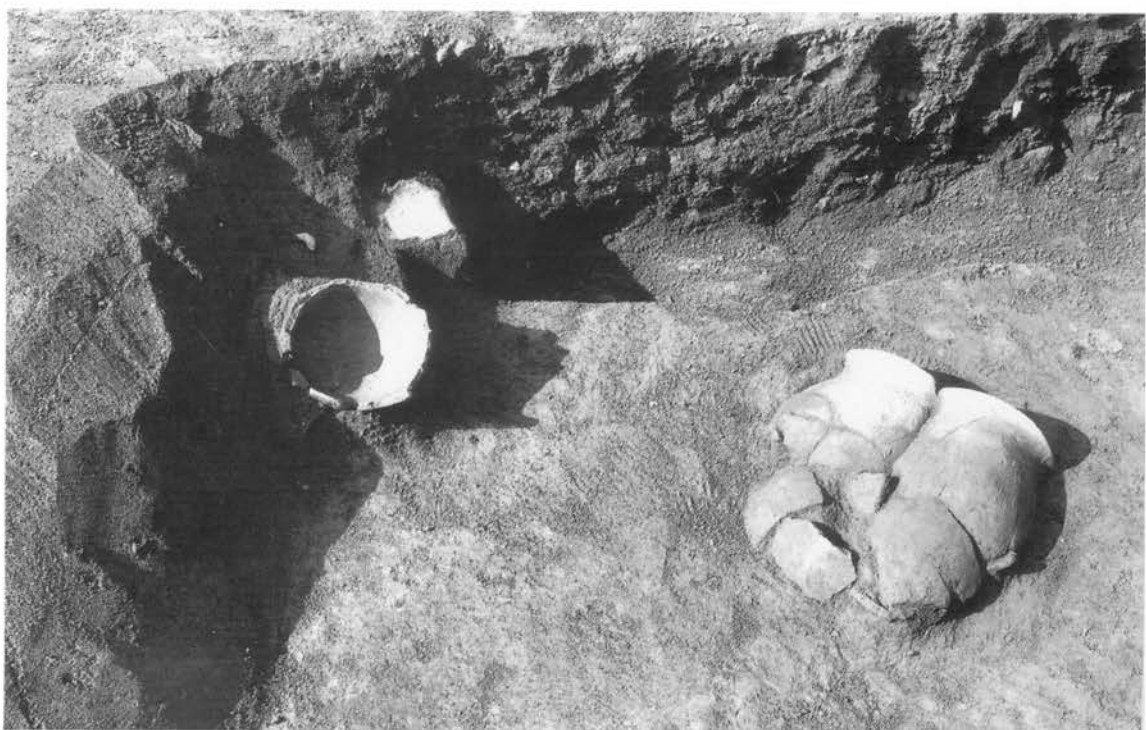
S I 24
出土遺物



S I 27



S I 27
出土遺物(1)





S I 27
出土遺物(2)



S I 31



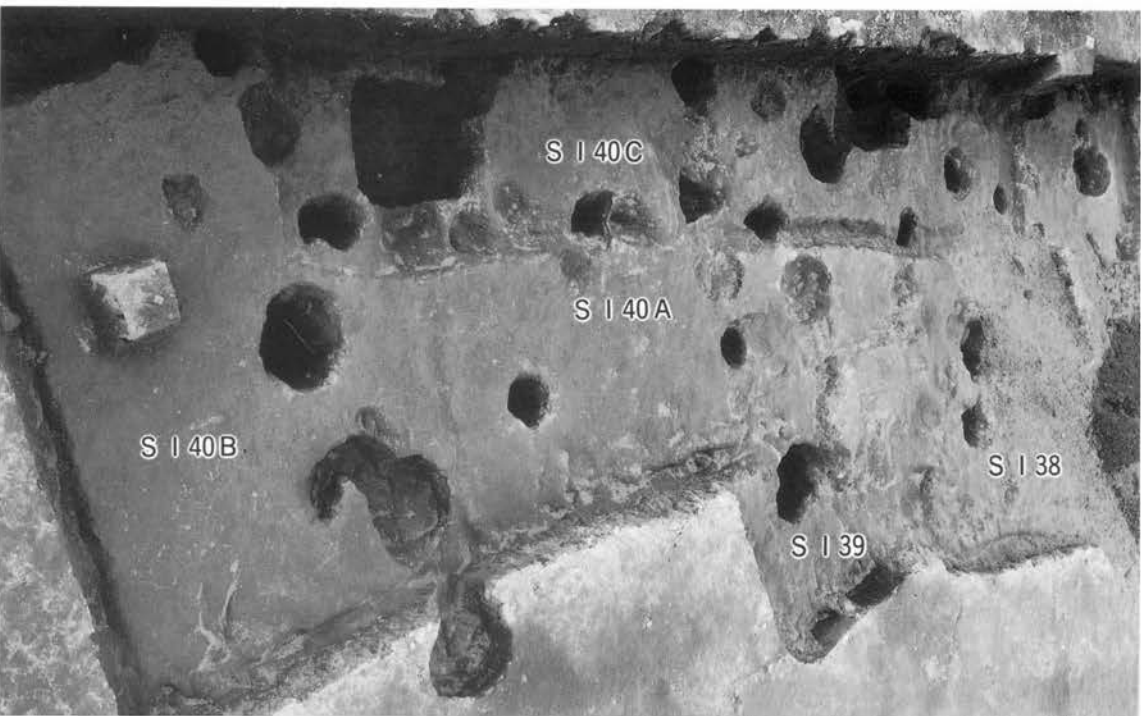
S I 32~S I 34



S I 36



S I 38



S I 38~S I 40C



S I 41



S I 42~S I 44



S I 42
出土遺物



S I 45・S I 46



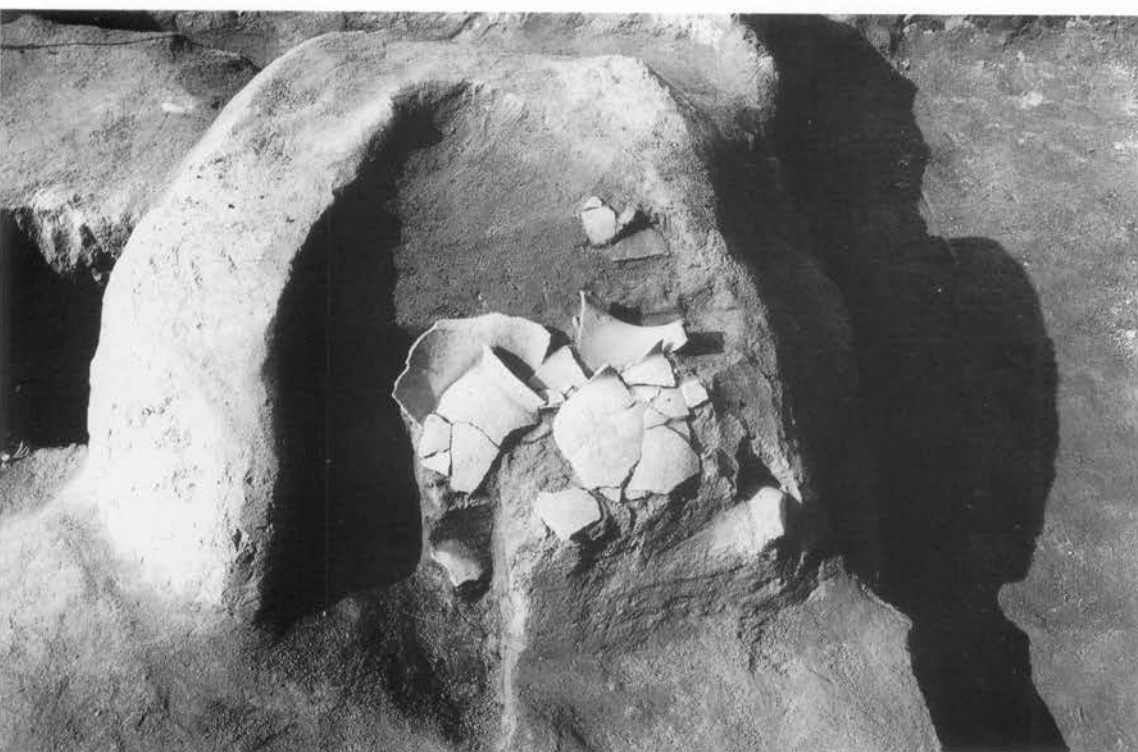
S I 47



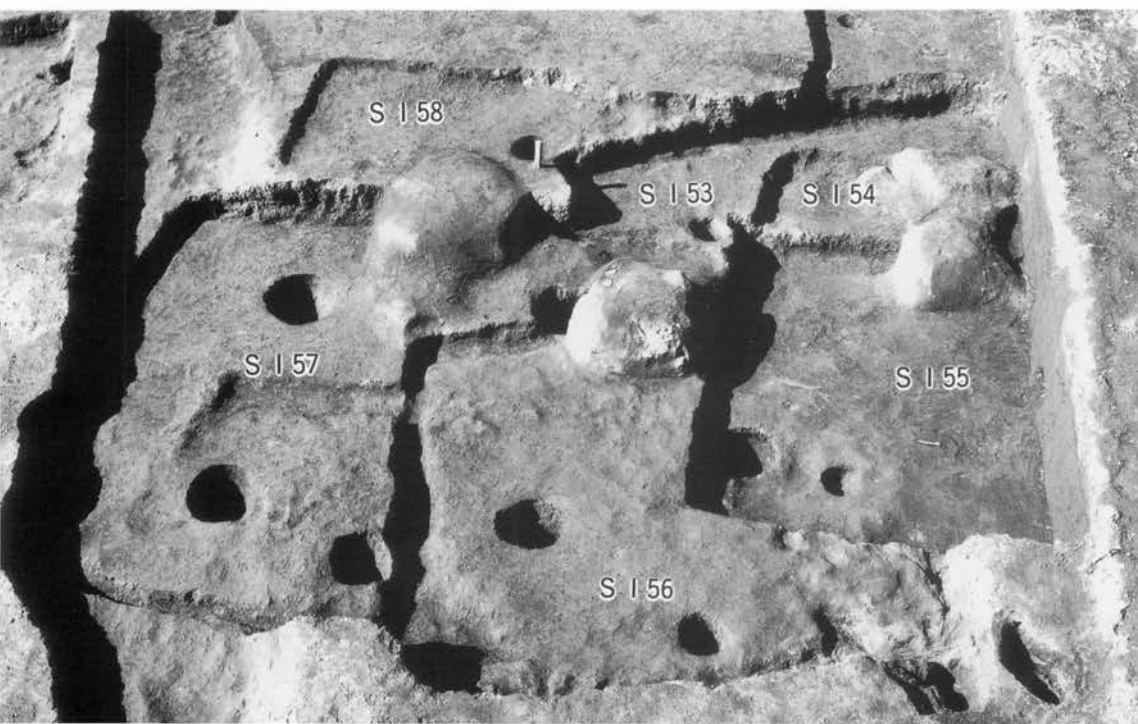
S I 48~S I 51



S I 55
出土遺物



S I 56
出土遺物



S I 53~S I 58



S I 59



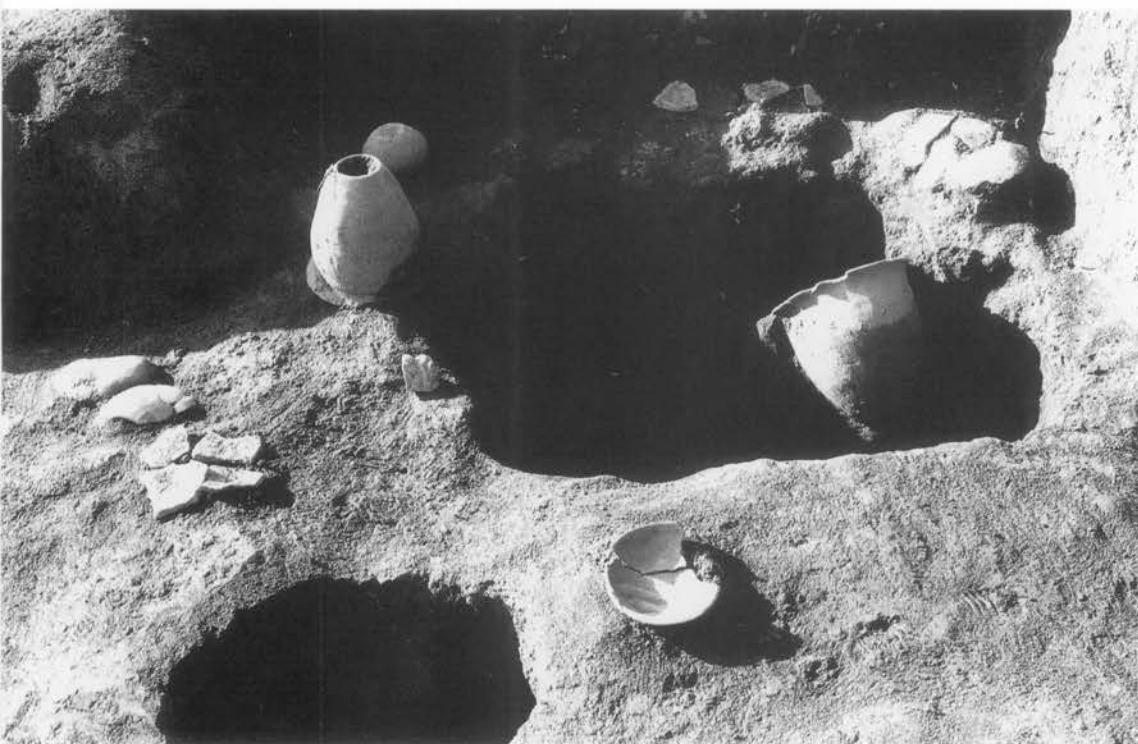
S I 59
出土遺物



S I 62



S I 63



S I 63
出土遺物



S I 64



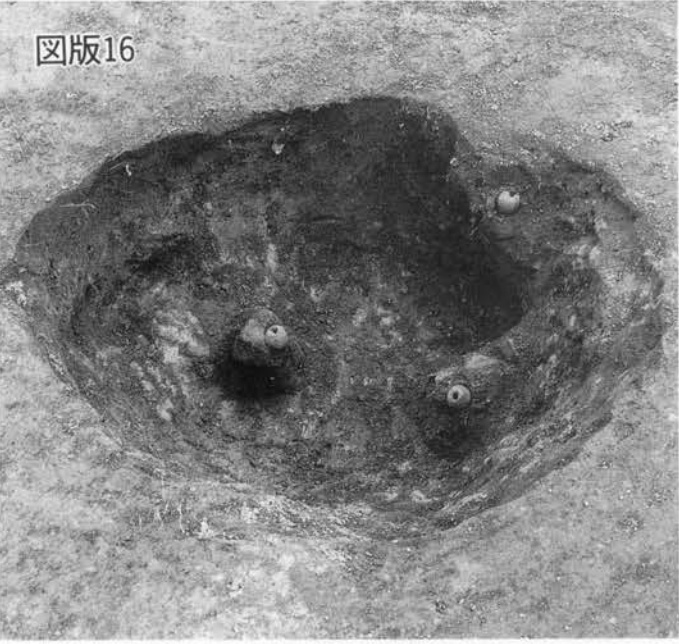
S I 65



SD 1 · SD 2
SD 5 · SD 8



SD 23



S K 9 出土遺物



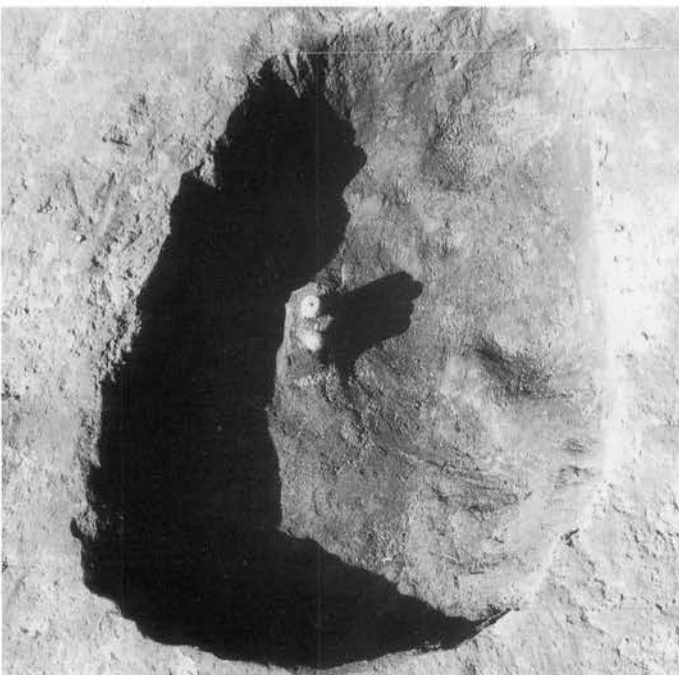
S K 10 出土遺物



S K 11 出土遺物



S K 15 出土遺物



S K 16 出土遺物



SI 1-5



SI 1-15



SI 3-2



SI 1-11



SI 1-16



SI 3-3



SI 1-18



SI 3-5



SI 1-12



SI 6-3



SI 7-12



SI 1-13



SI 1-14



SI 3-1



SI 7-14



SI 7-8



SI 8-4



SI 8-11



SI 7-9



SI 8-12



SI 8-1



SI 8-5



SI 8-13



SI 8-8



SI 8-15



SI 8-2



SI 8-9



SI 9-1



SI 8-3



SI 8-10



SI 9-2



S I 9-3



S I 10-11



S I 11-4



S I 10-1



S I 10-12



S I 12-2



S I 10-13



S I 10-6



S I 11-3



S I 12-3



S I 10-9



S I 12-1



S I 12-5



S I 10-10



S I 13-1



S I 13-2



S I 13-10



S I 15-1



S I 13-4



S I 14-1



S I 15-2



S I 13-5



S I 15-3



S I 13-6



S I 14-4



S I 15-4



S I 13-8



S I 14-5



S I 15-6



S I 13-9



S I 14-6



S I 15-7



S I 16-3



S I 19-6



S I 23-3



S I 17-1



S I 23-5



S I 17-4



S I 22-1



S I 24-1



S I 18-2



S I 22-2



S I 24-3



S I 18-3



S I 23-1



S I 24-4



S I 18-4



S I 24-5



S I 27-1



S I 27-9



S I 24-6



S I 27-10



S I 25-1



S I 27-2



S I 27-11



S I 25-2



S I 27-4



S I 27-12



S I 25-4



S I 27-7



S I 27-14



S I 26-3



S I 27-8



S I 27-15



S I 27-16



S I 28-1



S I 28-10



S I 32-4



S I 29-4



S I 32-5



S I 28-2



S I 29-5



S I 32-6



S I 28-7



S I 29-6



S I 32-7



S I 28-8



S I 32-2



S I 32-8



S I 28-9



S I 32-3



S I 32-9



S I 33-2



S I 36-1



S I 38-7



S I 33-3



S I 36-2



S I 38-8



S I 33-5



S I 37-1



S I 39-3



S I 33-6



S I 37-2



S I 39-4



S I 33-7



S I 11-2



S I 39-5



S I 34-4



S I 38-6



S I 40-3



S I 40-4



S I 42-3



S I 42-12



S I 41-3



S I 42-7



S I 45-3



S I 41-4



S I 42-8



S I 45-4



S I 42-9



S I 42-10



S I 42-1



S I 48-1



S I 42-2



S I 42-11



S I 48-4



S I 48-5



S I 49-1



S I 49-8



S I 48-6



S I 49-4



S I 49-10



S I 48-9



S I 49-5



S I 49-22



S I 48-10



S I 49-15



S I 48-11



S I 49-6



S I 50-2



S I 48-12



S I 49-7



S I 50-3



S I 50-5



S I 55-1



S I 56-1



S I 50-9



S I 55-2



S I 56-5



S I 58-2



S I 53-2



S I 55-3



S I 59-1



S I 53-3



S I 55-4



S I 54-3



S I 55-6



S I 59-2



S I 59-3



S I 59-8



S I 59-14



S I 59-4



S I 59-9



S I 59-16



S I 59-5



S I 59-10



S I 59-17



S I 59-6



S I 59-11



S I 59-18



S I 59-12



S I 59-19



S I 59-7



S I 59-13



S I 59-20



S I 59-21



S I 62-4



S I 63-5



S I 59-22



S I 62-3



S I 63-6



S I 60-4



S I 63-1



S I 61-1



S I 63-2



S I 63-7



S I 61-2



S I 63-8



S I 61-5



S I 63-4



S I 63-11



S I 63-12



S I 66-2



S I 63-9



S I 67-2



S I 63-10



S I 67-3



S I 64-2



S I 67-4



S I 65-1



SK 4-1



S I 64-3



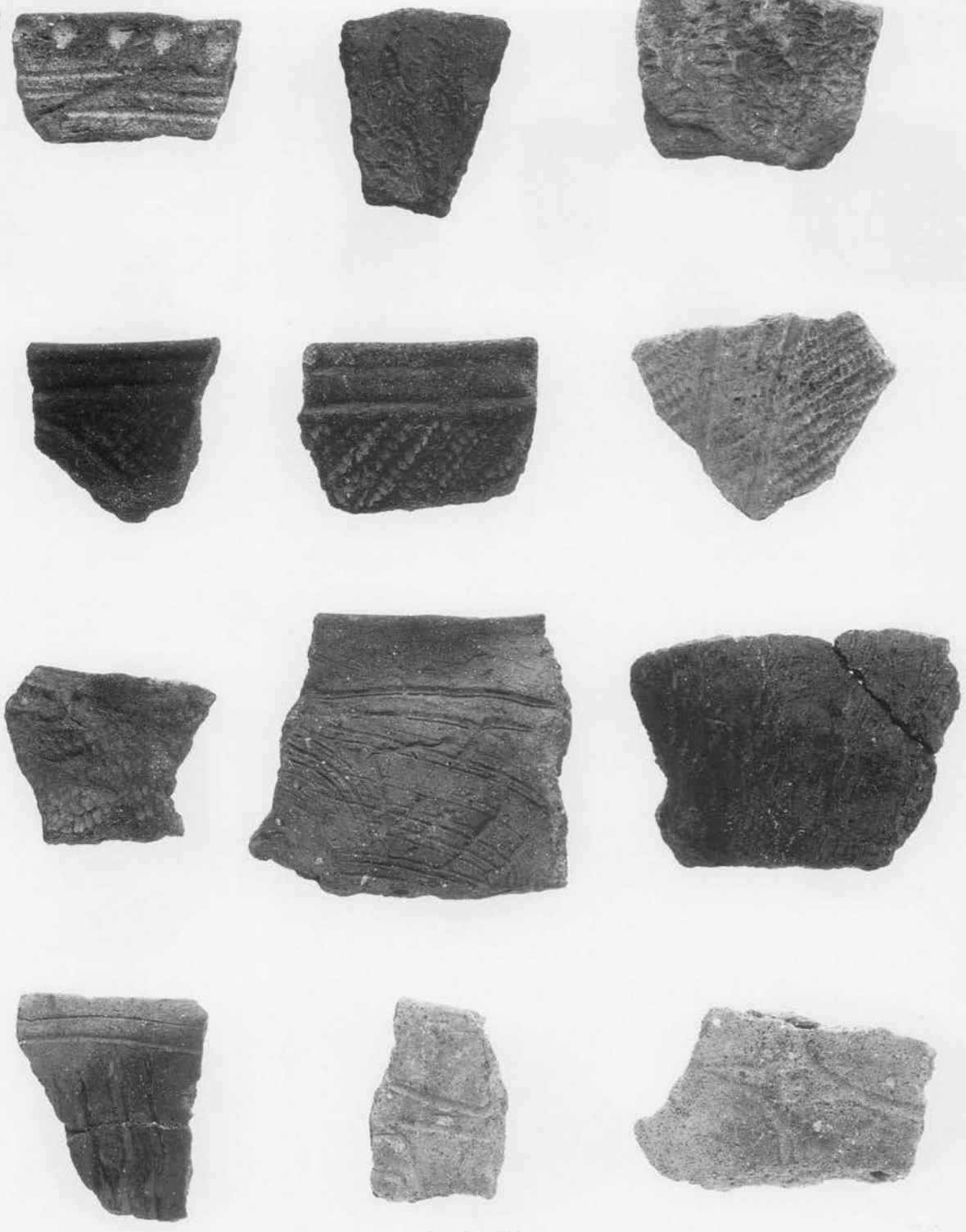
SK 11-1



旧石器・石鏃



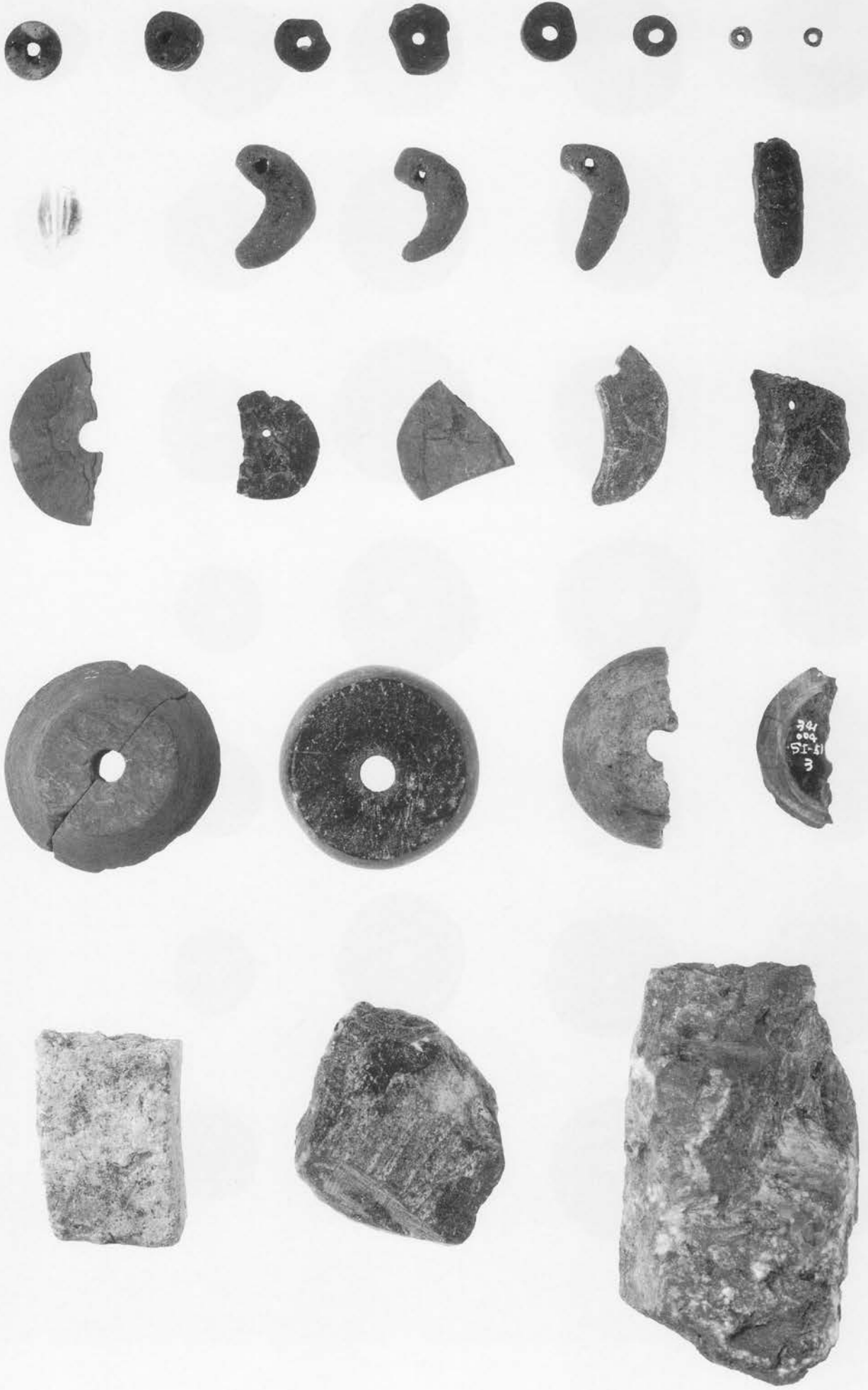
縄文石器



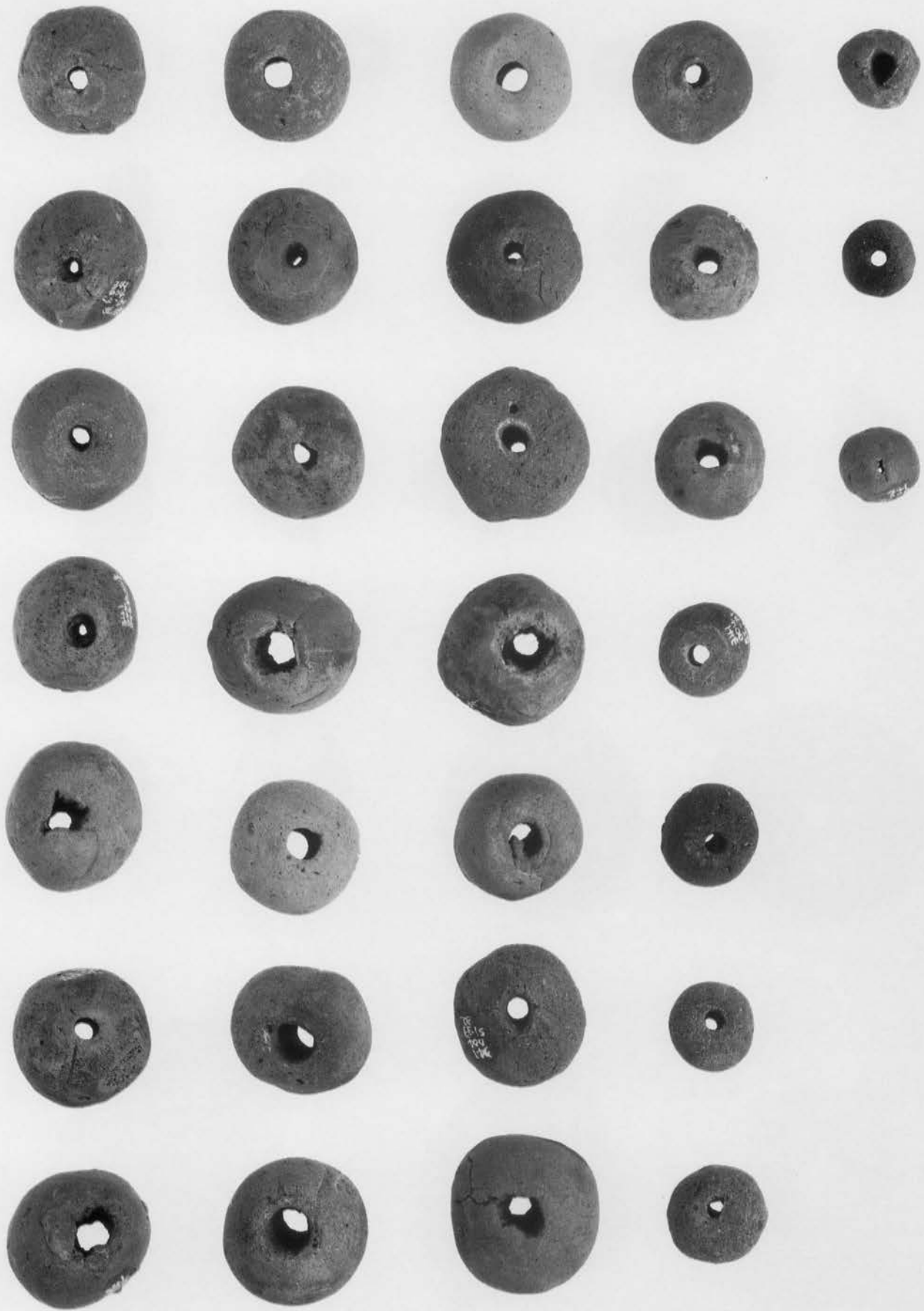
繩文土器



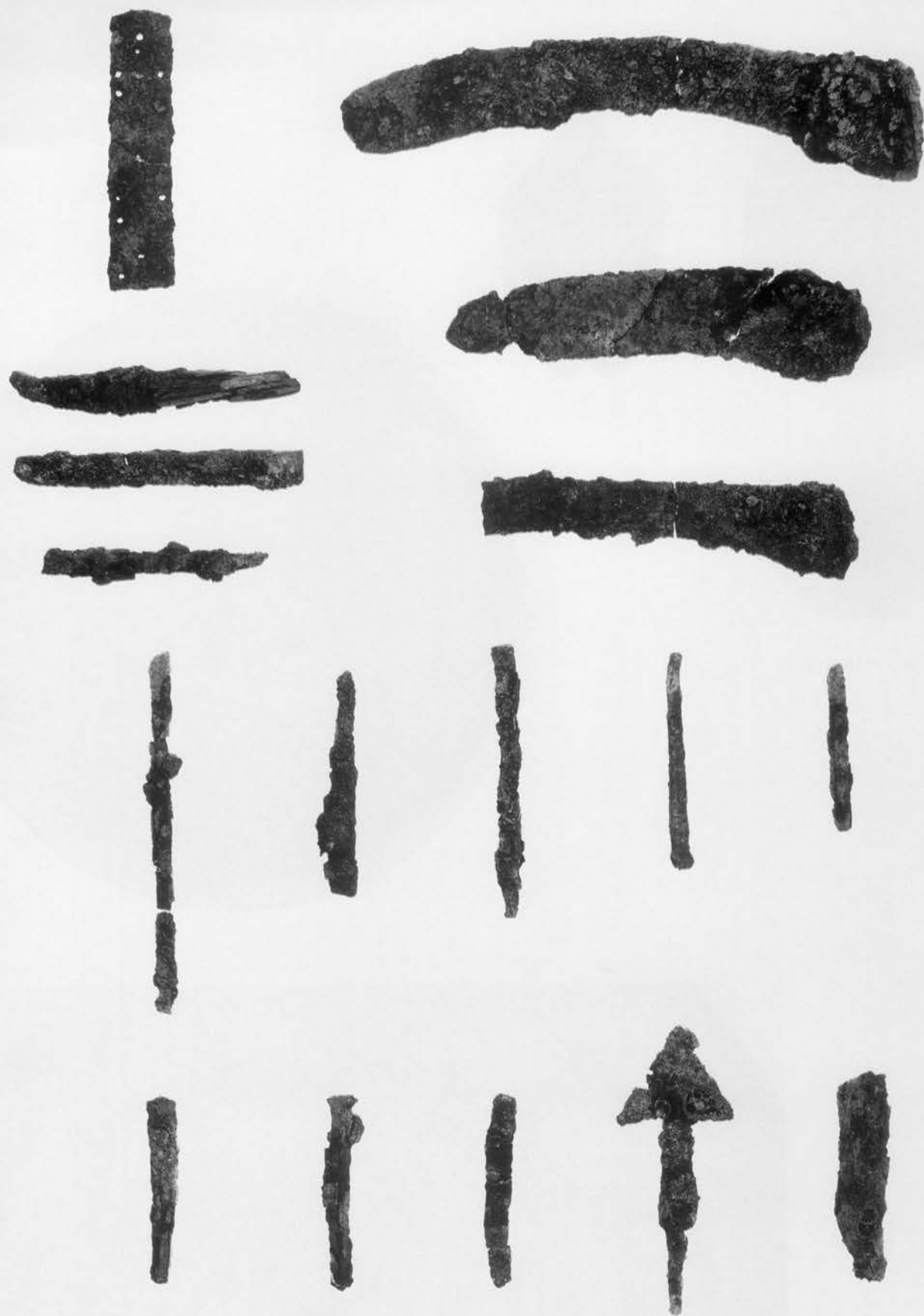
転用砥具



土器勾玉・石製品



土玉



鉄製品



SD 5-10 (原寸)

SK10-1 (原寸・拡大)



報 告 書 抄 録

| | |
|--------|---------------------------|
| ふりがな | しもふさまちなぎおおだいいせき |
| 書名 | 下総町名木大台遺跡 |
| 副書名 | 主要地方道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 |
| 巻次 | VI |
| シリーズ名 | 千葉県文化財センター調査報告 |
| シリーズ番号 | 第319集 |
| 編著者名 | 兩宮龍太郎 |
| 編集機関 | 財団法人 千葉県文化財センター |
| 所在地 | 〒284 千葉県四街道市鹿渡809-2 |
| 発行 | 西暦 1998年3月31日 |

| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード | | 北緯 ° ' " | 東経 ° ' " | 調査期間 | 調査面積 m ² | 調査原因 |
|--------------------------------|---|-----|------|-------------|-------------|-----------------------|------------------------|------|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| 名木大台 <small>なぎ おおだい</small> | かとりぐんしもふさまちなぎおおだいいせき 香取郡下総町名木字 大台1045ほか | 341 | 004 | 35° | 140° | 19870615～ | 180 | 道路建設 |
| | | | | 52' | 22' | 19870619 | 1,800 | |
| | | | | 31" | 56" | 19880601～ 19881104 | | |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|-------|----|--------------------------------------|--|---------------------------------|-------|
| 名木大台 | 集落 | 縄文 古墳～奈良 時代 鎌倉時代 中近世 | 陥穴 1基 堅穴住居 68軒 土坑 8基 土墳墓 1基 道路 2条 溝 16条 柵 2条 | 土師器・滑石製品・鉄器 土師器・土玉 和鏡 | 双鳥波濤鏡 |

千葉県文化財センター調査報告第319集

下総町名木大台遺跡

－主要地方道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書VI－

平成10年3月31日発行

| | | | |
|---|---|--------------|------------------------------------|
| 編 | 集 | 財団法人 | 千葉県文化財センター 四街道市鹿渡809-2 |
| 発 | 行 | 千葉県 | 県土木部 千葉市中央区市場町1-1 |
| 印 | 刷 | 財団法人 株式会社 | 千葉県文化財センター みつわ 千葉市美浜区新港213-5 |
